

**日本科学者会議東京支部
創立50周年記念**

JSA Tokyo 50
価値ある知の連鎖を
1966 - 2016

**日本科学者会議東京支部
個人会員活動資料集
28年間の活動のすべてがわかる
第1版（電子版）**

2017年12月9日

日本科学者会議
THE JAPAN SCIENTISTS' ASSOCIATION

東京支部個人会員世話人会
Tel / Fax : 03-3811-8281

1. 東京支部の個人会員の活動のあゆみと展望 i ~ vii
(『日本科学者会議創立50周年記念誌』2017.5.14発行より再掲)
 - * 東京支部の個人会員の活動のあゆみと展望
 - * 京浜地区学習会 一地域・市民と連携する開かれた知の連鎖を目指す一
 - * 日本科学者会議東京支部個人会員活動に関する主要文献
2. 個人会員ニュース総目次 1
1990.4.12発行 No.1 ~ 2017.12.10発行 No.115
 - * 28年間の個人会員の活動のサマリー
 - * 28年間の個人会員の活動のあゆみ（年表としても）
3. 個人会員ニュース『私からひと言』総編集版 22
1990.7.10発行 No.2 ~ 2017.12.10発行 No.115
全115号のうち77号に、延べ325編（299名）の“ひと言”
 - * 日本科学者会議（JSA）東京支部の個人会員の現場での生の声
 - * 28年間の日本と世界の変遷と科学者・技術者・専門家・市民の姿が
4. 個人会員フィールドワーク一覧 95
1992年8月 第1回 ~ 2017年10月8日 第66回
 - * 個人会員を含む専門家による案内と説明と講義で現場で学ぶ
 - * テーマと現場のマッピング・・・JSAにふさわしい課題を考える
個人会員のJSAならではの交流の場・・・他支部とも、市民とも

注1： 個人会員ニュースの全115号の全記事の合本は、日本科学者会議東京支部事務所に保管され、いつでも閲覧できます。

注2： 本資料集は、電子版発行です。東京支部のホームページ <http://jsa-tokyo.jp/> にて閲覧、DLできます。紙刷り版をご希望の方は世話人の河上茂（skawakami@kmail.palala.or.jp）電話：080-8828-7732）までお問い合わせ下さい。

東京支部の個人会員の活動のあゆみと展望

東京支部では、半数を超える分会に属さない個人会員の声を汲み上げ、支部活動に活かす努力と工夫を 1989 年から継続してきた。個人会員は、定年退職者や分会を組織することができない若手・中堅の研究者や専門家、常勤職を持たないポストクなどからなっている。JSA の活動は、職域分会を基礎単位として相互に連携しながら、個々の会員の専門性を活かして総合的な研究活動と運動を進めるのが基本であるが、分会に所属しない個人会員も、科学・技術の成果を市民のために活かすという JSA の大きな役割を担うべき資質と知見・経験を十分に持っている。個人会員は、職場での会員同士の直接の交流や共同研究のような活動が難しいことや経済的な条件はあるものの、例えば、個人会員の専門性と実力を活かした地域での市民との交流・連携を基盤とした新しい形の活動も重要であろう。東京支部が創立 50 周年を迎えた今、“開かれた知の連鎖”をさらに前進させるためにも個人会員の役割は大きい。28 年間におよぶ個人会員の活動を振り返り、現在の到達点を踏まえて、その将来を展望してみる。

表 1 東京支部個人会員活動の 28 年

1989	増加する個人会員についての常任幹事会での提起 個人会員ニュースの構想
1990	第 1 回個人会員交流会(3 月) 『個人会員ニュース』No.1(4 月) 第 1 回個人会員世話人会(6 月)
1991	第 1 会例会 「科学者運動の現在」(原善四郎会員)(10 月)
1992	第 1 回フィールドワーク「埼玉県長瀬の自然探訪」(8 月)
1994	個人会員より支部大会代議員(6 月)(1997 年から 個人会員 10 名につき 1 名の現行制度へ)
1998	東京支部 30 周年史に個人会員活動報告 この頃までに個人会員の活動が確立
2000	『個人会員ニュース』で個人会員活動 10 周年記念シリーズ
2004	この頃、個人会員活動の草創期からの貢献者の逝去続く ... 15 年を受け継ぐ節目の時期
2006	支部幹事会での個人会員活動の今後についての議論 世話人会との連携強化
2008	支部創立 40 周年の集いで個人会員活動、とりわけフィールドワークへの高い評価
2009	個人会員活動 20 周年・個人会員ニュース 80 号記念寄稿集
2010	常任幹事会での将来の地域分会も展望した活動の議論 全国大会での報告
2012	地域・市民連携の新しい活動をめざして 京浜地区学習会のスタート
2014	個人会員活動 25 周年 9 月:『個人会員ニュース』100 号
2016	『戦争法制と私』寄稿集の発行(2015 年 11 月初版、2016 年 7 月第 2 版)
2017	創立 50 周年記念『個人会員活動資料集』編纂(ニュース総目次、私からひと言総編集版など)

東京支部の個人会員の活動のあゆみ

個人会員活動の歴史を前ページの表 1 に掲げた。1989 年の準備から翌年 3 月の第 1 回個人会員交流会と 6 月の個人会員世話人会の発足に始まり、個人会員ニュースの発行と個

人会員フィールドワーク（以下、FW）などを軸として、困難を乗り越えて活動を続けてきた多くの方々の努力の跡がわかる。28年間の活動の発展を大まかにたどってみたい。

注：なお、本項では概要を述べることになる。詳しい28年間の記録としては、1) 個人会員ニュース総目次、2) 個人会員ニュース『私からひと言』総集編版、3) 個人会員フィールドワーク一覧を主要な掲載資料とした『日本科学者会議東京支部 個人会員活動記録集』を編纂した。東京支部のホームページにアップロードしてある。

草創期（1989～1992年） 個人会員が25%に達し、その活性化が要請される中で、初めてのアンケート調査から、個人会員世話人会が発足し、個人会員ニュース発行による交流の基盤ができ、研究例会や年会を兼ねた交流会、個人会員FWなどの活動の骨格ができた。

確立期（1993～1998年） 草創期の活動の充実が進み、個人会員の東京支部としての組織的な位置付けが議論され、その基礎である支部大会代議員の選出制度が確立した時期である。1993年の規約改正から選出方法の具体化、そして1998年に分会と同様の10名に1名の代議員が選出されるまでの長い過程での個人会員世話人を中心とする努力がなされた。

持続期（1999～2007年） 個人会員ニュースの定期発行などの交流の基盤とFWなどの個々の活動を維持することは簡単なことではない。世話人も固定化し、草創期からの特徴ある交流会や例会も開催が困難になる中で、世話人の献身的な努力によって活動が持続された。その成果が個人会員ニュースの誌面の充実やFWの広がりなどに表れた時期である。

充実期（2008～2011年） 持続期の反省も踏まえて、個人会員世話人会に頼りがちな活動全体を常任幹事会・幹事会との連携強化によって充実して行くようになった。個人会員や東京支部の枠を越え、関東・甲信地域の支部との連携がFWを中心に拡大した。個人会員ニュースにも全国各地から、また、会員外の専門家からの寄稿も増えて充実が図られた。

展開期（2012～2017年） 2011年の東日本大震災と福島原発超重大事故はJSAの活動を転換する大きな契機となった。社会的課題への科学者・専門家としての新たな形での取り組みはいうまでもないが、地域における市民との連帯と共同が実際的に要請されるようになった。個人会員の活動も例外ではありえない。充実期から萌芽が見られた個人会員ニュースや個人会員FWの充実は、量的に質的にも飛躍が期待されるようになった。それは、この50周年記念誌が主にカバーする、2008年に開催された東京支部40周年記念事業以降のこの10年の個人会員の活動の前進によるものである。

個人会員活動のこの10年 — 新しい展開

2008年からのこの10年の個人会員の活動の今日的意義を以下のように考えている。

- 1) 科学・技術に関心を持ちJSAの目的に賛同する市民との個人会員らしい連帯の強化
- 2) 職業、分野、年代、地域を問わず遍在する個人会員の特性を活かした活動の確立
- 3) 東京支部の重要な活動母体としての、分会活動とも連携した支部への貢献

これらは、市民との交流と、地域と連携した活動の拡充であり、個人会員の居住地における活動を単位とする将来的な地域分会の設立も視野に入れた方向性の模索でもある。これに対応するこの10年の個人会員の活動について具体的に言えば、1) 開かれた個人会員の活動を伝える個人会員ニュースの充実、2) 新しい時代の個人会員FWの企画と運営、そして3) 地域・市民との連携・共同に向けた地域学習会であろう。3) について本誌の「地域・市民」の項で京浜地区学習会として掲載されているので、本項では前の2つについて述べる。

個人会員ニュースの到達点 ― 個人会員の活動を東京支部全体へ、さらに全国へ 個人会員ニュースは、1990 年 4 月の創刊 No.1 から原則として季刊で、本年 3 月（50 周年記念式典）までの 28 年間で 112 号が発行されている。季刊の定時発行号以外に、No.80 別冊 80 号記念寄稿集（2009 年 9 月）、No.105 増刊号『戦争法制と私』寄稿集（初版：2015 年 11 月）および No.109 増刊号『戦争法制と私』寄稿集（第 2 版：2016 年 7 月）がある。

個人会員ニュースのこの 10 年の特徴は、東京支部の個人会員中心の執筆から、支部全体、他支部、そして会員以外の専門家からの寄稿が増え、特に巻頭解説では JSA らしい時宜を得たテーマを取り上げるようになったことである。開かれた個人会員活動のための重要なツールの一つにもなっている。また、上述の『戦争法制と私』寄稿集では、全国からの幅広い戦争法制に対する声が寄せられ、法案の反対、強行不当成立後は廃止に向けた運動と活動にも役立つものになっている。もちろん、『私からひと言』欄『ミニ・レビュー』欄などでの個人会員中心の交流記事も年々充実してきている。

21 世紀の日本は、平和・人権・健康・知性の先進国へ 戦争法制はいらない	
個人会員ニュース No.112	日本科学者会議
2017.3.10 発行	THE JAPAN SCIENTISTS' ASSOCIATION 東京支部
- 国際的に見た共謀罪法案の問題性 高山 佳奈子 1 - はじめまして、そして近況報告 田名部 誠一 3 - 私からひと言 ― その 67 4 - 新聞 島子さん、安孫子 誠也さん、座澤 美行さん、工藤 昌宏さん、吉田 裕さん - ミニ・レビュー ― その 41 6 - 望月衣子『武器輸出と日本企業』 関田 雄一 6 2017 年新参フィールドワーク報告 「熊本市移転問題の現場で学ぶ」に参加して 吉沢 杜二朗 7 「くせな人からのお知らせ」 2017 年春の個人会員フィールドワーク - まるごと上野公園を学ぶ ― 桜のもとで市民のための都市公園を考えよう	
日本国憲法は、思想及び良心の自由（第 19 条）、一切の表現の自由（第 21 条）を固く保障しています。また、刑法は、実際に起きた犯罪行為を罰することを大原則としています。安倍政権が、実際には起きていないことを「話し合い、計画」しただけで罪に問う、テロ準備罪と衣を替えただけの 4 度目の「共謀罪」成立を狙っています。憲法を頂点とする法体系に照らして罰されることはありません。さらに、国連国際刑事司法条約を「共謀罪」が必要なら「検察」としているのは、安倍政権一翼の牽強附会の欺瞞です。 市民を含めた広範な反対運動が正念場である今、国際刑法が専門の高山佳奈子京都大学教授に国際的な観点も含めた問題点についてご寄稿いただきました。（編集部）	
国際的に見た共謀罪法案の問題性 高山 佳奈子 政府は、これまでに何度も廃案となっている共謀罪を、「テロ準備罪」の呼び名のもとに新設する法案を提出すると報道されている。しかし、この立法は犯罪対策にとって不	

季刊通常号

個人会員ニュース No.109 増刊号

「戦争法制と私」寄稿集

第 2 版 刊行版

日本科学者会議東京支部
創立 50 周年記念

21 世紀の日本は、平和・人権・健康・知性の先進国へ
戦争法制はいらない

2016 年 7 月参院選の結果を超えて
オールジャパン どこでも、みんなで、廃止まで共闘



6.5 全国大学有志の会総決起行動
主催：史学部憲法研究会に反対する学生の方 協力：SEALS

日本科学者会議
THE JAPAN SCIENTISTS' ASSOCIATION
東京支部個人会員世話会
(2015.11.10 初版 発行)

(2016.6.22 ~ 7.7 第 2 版電子版発行・更新)
2016.7.20 刊行版発行

ISA Tokyo 50
価値ある知の遺産を
1966-2016

増刊号『戦争法制と私』寄稿集

個人会員 FW の到達点 ― 個人会員の活動の新しい展望を開く 全国モデルへ

個人会員 FW は、1992 年 8 月の埼玉県長瀬の自然探訪の第 1 回から、2017 年 4 月のまるごと上野公園を学ぶ ― 桜のもとで市民のための都市公園について考えよう ― まで 25 年間にわたり計 65 回を数えている。平均して年に 2.6 回の開催ということになる。表 2

表 2 フィールドワークのテーママップ

場所	地域	博物館など	歴史史跡	建物・建造物	研究所など	計
テーマ						
自然・科学・技術を知る	7	12		3	4	26
環境を守る	9	1		2	1	13
歴史と文化を知る	6	3	6	5		20
戦争と平和を考える	3	4	2	5	1	15
人々の関わりを知る	5	2	4	2		13
計	30	22	12	17	6	87

第 1 回（1992 年 8 月）長瀬の自然探訪
第 65 回（2017 年 4 月）上野公園をまるごと学ぶ
注：数字は回数（場所・テーマは 1 回で複数の場合あり。）



2017.4.2 上野公園をまるごと学ぶ FW

にそのテーマと場所を大括りにまとめてみた。専門分野、地域、年代にわたって遍在する個人会員の重層的な活動の一つとして、JSAらしい多様さとテーマ性が見られる。会員外の専門家も含む案内と解説がつき、見学・調査後に感想合評会が行われることも特筆すべきことである。参加者の交流と懇談の場としても重要なので、忘年会や食事交流会を併設することも多いが、ここでもJSAらしい食品や食文化にちなむ話題も楽しめるように心がけている。

25年という短くはない時を、多くの方々がリレーするようにして、初志を忘れず、しかし、その時々にはふさわしい形を工夫してきたことも、長く続いてきた大きな理由であろう。

この努力を受け継いだこともあり、2008年頃からのこの10年のFWには明らかな活動の前進が見られる。それは、参加者数の増加と層の拡がりに表れている。2007年から10年間の平均参加者数は22.2名となっているが、その前の9年間の13.0名から大幅に増えている。層的な拡がりでは、以前の個人会員世話人を含む個人会員FW常連組中心から、個人会員、東京支部の枠を超え、JSA会員以外の市民の参加も増加している。この前進は、自然に起きたものではなく、個人会員世話人である支部幹事が意識的に常任幹事会、幹事会の場で個人会員活動のあるべき姿を追求・模索しつつ報告を継続的に行うようになり、支部の正式機関と連携してきたことの成果であろう。東京支部の分会、首都圏を中心とする他県支部、そして友好団体などとの連携企画を幹事会の場でコンセンサスを得つつ準備・運営することも定着してきた。個人会員FWは、JSAが科学・技術を総合的に研究すべきテーマについて現場に出かけて具体的に調査・学習する場でもある。地域における市民との交流・連携を進めるための活動としてのポテンシャルも高い。

今後の新しい個人会員活動に向けて

以上、東京支部の個人会員活動の歴史と現状の到達点について概観したが、各項目での記述からもわかるように課題も少なくない。東京支部創立50周年を迎えた今、2019年には個人会員の活動も30周年を迎える。さらにその先の50周年（2039年）に向けた新たな飛躍が求められる今、現実も見据えたうえで課題を克服しつつ日々の活動を進めていくことが重要である。JSAは、研究者と専門家の集団である。しかし、専門別の学会とは異なるオープンさが求められる。すなわち科学・技術の成果を真に市民のために活かすという役割を果たすために、高度な研究内容でもわかりやすく説明し、分野横断、総合的な観点からその意義と位置づけを示すことが要請される。個人会員の多くはこのような要請に応えるポテンシャルを持っていよう。個人会員集団も、JSAと市民の共同による知の連鎖のスパイラルを絶え間なく作って行くことに貢献しなければならない。

京浜地区学習会とは

東京支部では、2010年頃から居住地における市民交流・地域連携の活動を進める基盤について、将来の地域分会の設立も視野に入れた可能性についての検討が本格化した、地域の活動に貢献している個人会員も少なくないことから、当時の事務局長と個人会員世話人会を中心に具体的な検討が開始された。翌年、2011年10月に横浜市で第2回JSA関東甲信越地区シンポジウムが開催され、東日本大震災と福島原発重大事故からの半年を市民の立場からも検証する議論が行われた。これを契機として、東京支部と神奈川支部の相談が進み、京浜地区（東京の城南地域と川崎市、横浜市）での地域・市民交流行事を企画することを両支部で合意した。そして、京浜地域に住むJSAの会員と市民にとって関心の高いテーマを取り上げること、市民が参加しやすいことにも留意して具体的な準備を進め、両支部共催での京浜地区学習会が生まれた。2012年10月を第1回として、これまで実施した3回の学習会について報告し、今後の地域・市民との連帯について展望する。

学習会から ―市民とともに地域のテーマ・課題を掘り下げる

第1回 JAL 不当解雇問題と空の旅の安全を考える

（2012年10月14日 大田区下丸子 参加者26名）

経営破綻からの再生過程の2010年12月、不当にも165名もの指名整理解雇が強行された。解雇された運行乗務員（パイロット）と客室乗務員（CA）は争議団を組織し、解雇撤回を勝ち取る闘いを羽田と蒲田地域を拠点として6年余続けている。学習会では、弁護団の講師が、経営破綻から整理解雇、そして2012年3月の東京地裁の不当判決にいたる経緯、労働法や企業再建に関わる法律と判例を踏まえた分析と逆転勝利への展望を述べた。パイロット原告団は、1985年の御巣鷹の悲劇以降の労組の取り組みが、重大事故の激減につながっていること、CA原告団は、CAの豊かな経験とスキルこそが、乗客の安心ひいては安全の源であることが報告された。現場で働く方々の総合的な労働環境の向上なしに、空の旅に安全の保証がないことをあらためて確認し、参加者で共有することができた。質疑応答では、JAL経営陣の不可思議とも言える対応と言動、民主的労組とそのメンバーを狙い撃ちにした攻撃の実態、上級審での逆転勝利を勝ち取るための議論が続いた。残念ながら2015年の最高裁の不当な上告棄却によって司法の場での救済されないことになってしまったが、現在も続く世界的にも例のない不当解雇撤回闘争について学んだことは、科学の成果を市民のために生かすJSAにとって、新しい形の活動の第一歩になった。

第2回 東京、神奈川の教科書問題の今を考える

（2013年7月28日 横浜市鶴見区 参加者31名）

「つくる会」系教科書関連の学習会が多いが、この学習会では、教科書問題を総合的に考えるために、東京と神奈川の5つの自治体（杉並区、大田区、川崎市、横浜市、藤沢市）での地域に即した運動と現状を学んだ。5地域に共通する問題として ① 首長の考えによる教育委員人事を含む強引な推進、② 現場に近い専門家の教科書調査・評価結果の無視、③ 採択のルール・慣例と手続きの恣意的な改変 が大きい。「つくる会」系からの回復を実現した杉並区の場合は、地域における市民の民主的な運動の積み重ねが決め手となった。

学習会には、京浜地区の九条の会、地域で活動されている女性、妥当な教科書をと願う運動を進める方など広範な市民が参加し、全国に広がってしまう危険性のある「つくる会」系教科書の採択を食い止めるための運動について、示唆に富んだ討論が行われた。

第 3 回 横浜市のカジノ誘致問題を学ぶ：アベノミクスの第 3 の矢が山下埠頭を狙っている！

（2015 年 4 月 29 日 横浜市中区 参加者 23 名）

安倍首相が、2014 年 5 月のシンガポール視察から「IR（Integrated Resort = 特定複合観光施設）は成長戦略の目玉になる」と言明する中で、林市長自ら前のめりに推進し、「臨海部の再生と観光振興、地域経済活性化など大きな効果が期待できる」と礼賛している。一方、市民からは、カジノが核となる計画を日本の海の玄関口である山下埠頭から解禁させるわけには行かないとの声が大きくなった。そこで、カジノ誘致問題に詳しい弁護士と市民運動の代表の方を講師に招いて学習会を開催した。講師陣は、選挙区が地元の菅官房長官は、パチンコ・ゲーム業界トップのセガ・サミー、交通インフラ・観光業の京浜急行のトップとともに林市長を強力に後押ししているカラクリ、カジノビジネスがもたらす地域の経済破綻と環境破壊、救いようのないギャンブル依存症の拡大などの本質的な問題を明らかにした。活発な質問や討論が交わされ、カジノ問題を総合的に考える充実したものとなった。

JSA の地域と市民の連携活動の今後に向けて

各地に点在する個人会員の居住地における活動の活性化の京浜地区における試みを紹介した。それは、まだ端緒についたばかりで、全国的にも例のない試みなので、評価を行うには時期尚早であろう。報告した結果からは、可能性も見えるが、地域にはそれぞれの条件と個性があり、地域と市民に開かれた活動の確立には課題も多い。試行錯誤を重ねながらも努力していかなければならない。また、学習会では、市民の方から「JSA としてこのテーマに今後どう取り組むのか」のチャレンジもあり、学習会が文字通りの“学ぶ”の枠を超えて、JSA が地域と市民の願いや真の要望を引出し、ますます錯綜する社会的な課題に取り組むことは、50 周年を機に「開かれた知の連鎖」を目指すことに他ならない。芽生えつつある新しい試みをあせらず、あわてず、確実に成長させたい。

日本科学者会議東京支部個人会員活動に関する主要文献

(注：本欄では、“日本科学者会議”は“JSA”と略称で記述した。)

- 1) JSA 東京支部個人会員世話人会「10年目を迎える東京支部個人会員の活動」『日本の科学者』**34** (3), 38-41 (1999)
- 2) JSA 東京支部個人会員世話人会「東京支部での個人会員の活動」JSA 東京支部編『30周年を迎えた東京支部』, p.35-39 (1998年5月)
- 3) JSA 東京支部個人会員世話人会「個人会員活動のこの10年—フィールドワークを中心に」JSA 東京支部編『40周年を迎えた東京支部 ～最近の10年～』, p.21-24 (2008年5月)
- 4) 河上茂「ポスターセッション JSA 東京支部個人会員の活動とフィールドワーク」JSA 第17回総合学術研究集会予稿集, p.350-351 (2008年5月).
- 5) JSA 東京支部個人会員世話人会『個人会員ニュース』No. 80 別冊『80号記念寄稿集』 (2009年9月).
- 6) 河上茂「個人会員の重層的な活動を活かすために —東京支部個人会員フィールドワークに見る新しい活動の可能性」JSA 第18回総合学術研究集会予稿集 (分科会「JSAの活動をいかに立て直すか」) p.354-355 (2010年5月 宮城).
- 7) JSA 東京支部個人会員世話人会編「個人会員ニュース」No. 88 別冊『私からひと言』全編集第1版 (2011年12月)
- 8) 河上茂「ポスターセッション JSA 東京支部 個人会員の活動の昨日, 今日, 明日」東京支部第16回東京科学シンポジウム (2011年12月)
- 9) 河上茂「初めての東京支部との共催による京浜地区学習会から～労働問題：日本航空不当解雇問題と空の旅の安全を考える～」『日本科学者会議神奈川支部通信』2012年12月号, pp.4-6 (2012年11月).
- 10) 河上茂「地域における市民との連携を目指す東京支部個人会員の新しい試み」『日本の科学者』**48** (1), 52-57 (2013)
- 11) 河上茂「ポスターセッション PS-07 JSA 東京支部個人会員の活動の歴史と新しい活動を模索して」JSA 第20回総合学術研究集会 (2014年9月 福岡)
- 12) 河上茂「25周年を目指す個人会員フィールドワーク—支部創立50周年：知の連鎖のスパイラルを—」JSA 東京支部第18回東京科学シンポジウム予稿集 (分科会11支部活動のいっそうの活性化をめざして) 116-117 (2015年11月)
- 13) 河上茂「地域と市民と連携する京浜地区学習会 —東京支部：開かれた知の連鎖を目指す—」JSA 東京支部第18回東京科学シンポジウム予稿集 (分科会11支部活動のいっそうの活性化をめざして) 120-121 (2015年11月)
- 14) JSA 東京支部個人会員世話人会編『戦争法制と私』(初版：個人会員ニュース No.105 増刊 (2015年11月) 第2版：個人会員ニュース No.109 増刊 (2016年7月))
- 15) 河上茂「ポスターセッション 東京支部：個人会員の活動の昨日、今日、明日 —支部創立50周年、個人会員活動25周年を超えて—」JSA 議第21回総合学術研究集会 (2016年9月 京都)
- 16) 河上茂「ポスターセッション JSA の21世紀の発展は、地域連携・市民共同で —東京支部個人会員の京浜地区学習会の試み—」JSA 第21回総合学術研究集会 (2016年9月 京都)
- 16) 河上茂「ポスターセッション JSA の21世紀の発展は、地域連携・市民共同で —東京支部個人会員の京浜地区学習会の試み—」JSA 第21回総合学術研究集会 (2016年9月 京都)
- 17) JSA 東京支部個人会員世話人会「東京支部の個人会員の活動のあゆみと展望」『日本科学者会議創立50周年記念誌』(2017年5月14日) pp72-75, pp98-99

個人会員ニュース総目次

- No.1 1990.4.18
p1 : 3/24「個人会員交流会」開催 15名参加、熱心な討議 山部 恵造
p2 : 個人会員アンケート集計結果
p3 : アインシュタイン — 安らかさの物理学 — 川口 裕正
p4 : 「個人会員交流会」での発言について 戸田 清
- No.2 1990.7.10
p1 : 個人会員ニュースの発行に寄せて 野中 郁江
p2 : 環境問題と階級・民族・地域 戸田 清（個人会員）
p3-4 : 【私の一言】 浜林 正夫さん、北田 ヒデ子さん、木下 安子さん、高橋 明士さん
- No.3 1990.10.8
p1 : 8総学に参加して 仲本 章夫（東京都立商科短期大学・哲学）
p2 : 【討論の広場】 「まちづくり構想」の外環部分に反対で陳情採択 高橋 明士（都市問題委員）
p3 : 【私の一言】 荻原 裕さん、川口 啓明さん、長田 良夫さん
- No.4 1991.1.10
p1 : 熱力学をどう教えるか 石本 真（北大名誉教授・生化学）
p2 : 【研究談話室】 割箸論議の目指すところ 荻原 裕（林野庁）
p3 : 科学講座「気候の温暖化を考える」に参加して 久田 達也
p4 : 「即位の礼・大嘗祭を考える集い」に参加して 川口 裕正（物理学）
- No.5 1991.3.8
p1 : 成長管理を放棄した東京大改造 標 博重（東京支部都市問題委員会）
p2 : 「個人会員と研究会活動～平沼研究企画部長に聞く～」
p3-4 : 【私の一言】 ～新入会員の方から～ 鴨川 孝司さん、永島 淳一さん
- No.6 1991.5.10
p1 : 米価談義の一視覚 重富 健一（東洋大学・農業経済論）
p2 : 【研究談話室】 バイオ・エシックスをめぐって 川口 啓明（科学ジャーナリスト・科学技術論）
p3 : 4/14「第2回個人会員交流会」開催 12名参加（川口 啓明）
p4 : 「個人会員ニュース」アンケートの結果
- No.7 1991.7.10
p1 : 不熟な「教師」の想い 北村道夫（歴史科学協議会全国委員）
p2 : 新刊紹介 米澤富美子『人生は夢へのチャレンジャー女性科学者として』 川口 裕正（物理学）
p3 : 【Information】 会員短信 4/14「第2回個人会員交流会」開催
- No.8 1991.9.7
p1 : 個人会員の役割について思う 北田ヒデ子（管理栄養士）
p2 : … わたしと東京教育大学、そして今 … 安部 恒三（埼玉大・明治学院大学非常勤講師）
p3 : 「原水爆禁止世界大会 科学者集会」に参加して 野中 郁江（明治大学非常勤講師）
p4 : <個人会員第1回例会のお知らせ>：報告「科学者運動の現在」 原善四郎氏
- No.9 1991.11.7
p1 : 富士山の見えなくなった地下鉄 渡辺 昂（山形大学教授）
p2 : 【会員からの便り】 個人会員の交流についての提案 湯川 和夫氏（東京支部参与）
p3 : 【世話人会より】 第1回例会（1991.10.5）からの報告 報告「科学者運動の現在」原善四郎氏 14名参加
p4 : 第6回東京科学シンポジウムプログラム
- No.10 1992.1.6
p1 : 日本科学者会議と私の課題 山崎 俊雄
p2-3 : 第6回東京科学シンポジウム 分科会3「地震・火山噴火と災害」に参加して（満川 常弘）
p4 : <個人会員第2回例会(2.29)のお知らせ>：報告1 浜林正夫氏「民主主義、その思想と制度」
報告2 湯川 和夫氏「思想としての憲法、制度としての憲法」

- No.11 1992.3.5
 p1 : 天皇制の現在 湯川 和夫（法政大学名誉教授・哲学）
 p2 : 【研究談話室】 最近の世界の激動に思うこと 中野 洋一（明治大学博士課程・アジア・アフリカ研究所員）
 p3 : 医療・薬業・栄養 関係へのみなさんへお知らせします 薬害としてのエイズ 片平冽彦（東京医科歯科大学）
 p4 : 第6回東京科学シンポジウムプログラム
- No.12 1992.5.7
 p1 : 近時雑感 関口 直甫（元東京天文台）
 p2 : 【研究談話室】 示村悦二郎著「自動制御とは何か」 山辺真人
 p3 : 【新刊紹介】 I. L. ローゼンタール著 池内 了訳『ビッグバン・ビッグバウンズー素粒子の宇宙像ー』
 平田 清一（高校教員・物理学）
 p4 : 第3回個人会員交流会（5/16）のお知らせ
- No.13 1992.8.6
 p1 : 脳死・臓器移植に思う 黒須 三恵（日本医科大学・法医学）
 p2 : 人間と地球の現在を考える ～～～第9回総合学術研究集会に向けて～～～ 大屋鐘吾（地域総合計画研究所）
 p3 : 意義深かった第3回個人会員交流会（文責）北田ヒデ子
- No.14 1992.11.8
 p1 : 国民のための環境基本法の制定を 藤田 敏夫（埼玉大学・気象学・環境科学）
 p2 : 原水爆禁止 92 世界大会と世界のヒバクシャたち 安部 愼三（化学・埼玉大・明治学院大学非常勤講師）
 p3 : ～～～東京支部個人会員第3回例会報告～～～（9/26）（平田 清一 記）
 古生物学からみた地球環境問題への寄与（報告：大森 昌衛氏）
 p4 : 個人会員の代議員選出権の具体的な方法（案）について 個人会員世話人会
- No.15 1993.2.8
 p1 : 専門は、と聞かれたら 宮村 光重（日本女子大・農業経済）
 p2 : 秩父路への誘い 中澤 市朗（秩父事件研究者）
 p3-5 : 個人会員代議員権についてのアンケート結果の検討とその後の経緯について 個人会員世話人会
- No.16 1993.5.8
 p1 : 教育の場に科学的精神を 川口 裕正（私塾経営・物理学）
 p2 : 【研究談話室】 科学の歴史をどう描くのか 高橋 智子（茨城大学・明治大学非常勤講師・科学史・科学論）
 p3 : 第四回個人会員交流会開かる・・・個人会員の活動の報告と意見交換
 報告：渡辺昂氏「Sustainable Development は環境問題の Key Word となり得るか」
 ～～～東京支部個人会員第3回例会報告～～～（平田 清一 記）
 p4 : 個人会員 第2回ハイキング（4/4 27 名参加） 秩父事件史跡巡りハイキングに想う 北田ヒデ子
- No.17 1993.8.8
 p1 : ささかな国際交流を目指して 中川 直哉（電気通信大学名誉教授・化学）
 p2 : 【研究談話室】 分子遺伝学の発展の提起する今日的課題 松山誠（国立研究所勤務・生化学）
 p3 : 「その後のチェルノブイリ」個人会員第4回例会報告（7/24）（安部 愼三 記）
 p4 : 東京支部大会での代議員選出権についての報告 個人会員世話人会
- No.18 1993.11.8
 p1 : 【資料紹介】 旧ソ連における核爆発による地下構造調査の概況 満川 常弘（経済学）
 p2 : 「非同盟運動の課題と国連のあり方」（報告：岡倉古志郎氏）個人会員例会第5回（9/18）報告 満川 常弘
 p3 : 【新入会員の声】 廣島 清志さん、吉田 義美さん
 支部大会代議員選出選挙の準備に関する報告 個人会員世話人会
- No.19 1994.2.8
 p1 : 個人会員のみなさん、支部代議員選挙への登録参加を！（選挙人登録用紙付き）
 p2 : 奥尻島沖の地震から 渡辺 昂（低温物理学・元北大教授）
 p3 : 東京下町散策参加記（深川江戸資料館と江東の文化を訪ねる歴史散歩(12/19)）（吉田 巖 記）
 p4 : 第5回個人会員交流会のお知らせ（5/14）（報告：広嶋 清志氏「世界の人口問題をめぐって」）

- No.20 1994.5.8
 p1 : ニュース第 20 号の発行を祝す 岩佐 茂（一橋大学・哲学）
 p2 : 【研究談話室】 アインシュタインの家系とボーアの家系 安孫子誠也（物理史学）
 p3 : 【新刊紹介】 『ホロコーストの科学 ---ナチの精神科医たち---』
 ベンノ・ミュラー=ヒル著 南光進一郎監訳 平田 清一
 p4 : 94 年度支部大会への個人会員代議員選挙の結果（選挙管理委員会発表）…7 名（次点 2 名）
 個人会員からの代議員数に関する支部規約の改正（案）について 個人会員世話人会
- No.21 1994.8.8
 p1 : 私たちに求められているもの 小林 和恵（弁護士）
 p2 : 第 5 回個人会員交流会ひらかれる！（5/14）個人会員の活動報告 代議員選挙経過報告（文責 平田）
 ～～～報告と討論「世界の人口問題をめぐって」～～～ 報告：広嶋 清志氏 コメント：宮川 実氏）
 p3 : 【参加報告】 第 4 回個人会員フィールドワーク（7/30-31）
 あの“足尾”が再び危ない！ 安部 恒三
 p4 : 支部大会とその後の経過についての報告 一個人会員からの代議員選出問題等についてー
- No.22 1994.11.8
 p1 : 戦後五十年に思う 佐藤 静夫（文学）
 p2 : ニューヨーク市民の食生活と病院の実態 北田ヒデ子（管理栄養士）
 p3 : ODA 援助の理念と現実について（報告：山縣 守氏）……個人会員第 6 回例会報告……（文責 平田）
 p4 : 【Information】 第 4 回個人会員フィールドワーク（7/30-31）「あの足尾が再び危ない」ビデオ完成
 来年度（第 29 回）支部大会への個人会員からの代議員選出について（10 名につき 1 名へ）
- No.23 1995.2.8
 p1 : 1995 年度支部大会への個人会員選出選挙人登録について 個人会員世話人会
 p2～3 : 東京支部での個人会員の活動（1990 年～1994 年）
 1994 年 11 月 11 日～13 日第 10 回総合学習研究集会ポスターセッションより
 個人会員からの支部大会への代議員選出選挙の取り組み（1992 年 5 月～1994 年 5 月）
- No.24 1995.5.8
 p1 : アフリカゾウから地球が見える 本谷 勲
 p2 : 阪神大震災!!－現代文明社会への警告をどう受け止めるのか？ 高木 史人（東京民間懇）
 p4 : 95 年度支部定期大会代議員決まる 15 名（新基準：選挙人名簿登録記載者 10 名につき 1 名） 4/26 開票
- No.25 1995.8.8
 p1 : 被曝 50 周年に思う 増田 善信（気象学）
 p2 : チョモランマ訪問記 野口 邦和（気象学）
 p3 : 第 6 回会員交流会〔報告〕（5/13）個人会員活動報告、代議員選挙結果報告、会員交流討論
 被曝 50 周年企画・個人会員第 5 回フィールドワーク（6/18）報告
 第五福竜丸展示館&東京都夢の島熱帯植物博物館
 p4 : 第 29 回東京支部定期大会参加代議員より寄せられた 50 字メッセージ
- No.26 1995.11.9
 p1 : 地球環境問題と会計制度 野中 郁江（会計学）
 p2 : 夏の沖縄に戦跡を見て 北田ヒデ子（管理栄養士）
 p3 : 【新入会員の声】
 菊池 頌子さん、神田 雅尚さん、朝倉 幹晴さん、吉田 喜一さん、金子 幸代さん、唐沢 英行さん
 p4 : チョモランマで放射能を測る（第 7 回例会報告（10/7））（満川 常弘 記）
- No.27 1996.2.8
 p1 : 1996 年度支部大会への個人会員選出選挙人登録について 個人会員世話人会
 p2 : 高速増速路「もんじゅ」の事故について 市川富士夫（明治大学講師・元日本原子力研究所研究員）
 p3-4 : 経過報告とアンケートのお願い 一個人会員からの代議員選出に関する規約改正の経緯と新改正案について
 個人会員世話人会

- No.28 1996.5.8
 p1 : 薬害エイズ「償い」の課題 片平 洸彦（東京医科大学・臨床薬理学・保険社会学）
 p2 : 個人会員代議員選出基準に関する支部規約改正（案）について 安部 恒三
 96 年度支部大会（5/18）代議員決まる 16 名（4/24 開票）
 p3-4 : 個人会員からの代議員選出に関するアンケートの集計結果 個人会員世話人会
- No.29 1996.8.8
 p1 : 8/1 原水爆禁止 1996 年世界大会・科学者集会（滋賀）に参加して 安部 恒三
 p2 : 第 7 回個人会員交流会（5/11：初の支部主催）報告
 記念講演 大森 昌衛氏「オーストラリア南部の旅 ― 動物進化の起源を訪ねて」
 p3 : 《温泉地学研究所》と《生命の星・地球博物館》を訪ねて
 個人会員第 6 回フィールドワーク報告（平田 清一 記）
 p4 : 第 30 回東京支部大会（5/18）参加代議員の感想
- No.30 1996.12.9
 p1 : セミパラチンスクを想う 野口 邦和（日本大学歯学部・放射化学）
 p2 : 大気汚染簡易測定器を活用して、大気汚染東京裁判の支援につながる住民による環境行政の改革を地域から起こそう 天谷 和夫（環境科学）
 p3 : 第 8 回個人会員例会〔報告〕～争点：高齢者福祉問題～（S.H. 記）
 報告：小川政亮氏 コメントーター：関口 直甫氏、野沢 保氏
- No.31 1997.2.8
 p1 : 個人会員のみなさんに支部代議員選挙への参加登録を訴えます。
 p2 : 高尾山に圏央道トンネルを掘ってはならない 河村重行（高尾山の自然を守る市民の会・環境教育）
 p3 : 【報告】第 7 回個人会員フィールドワークと忘年会（12/22）入間市博物館と小江戸・川越をみる 安部 恒三
- No.32 1997.5.8
 p1 : 動燃再処理工場の火災・爆発事故について 野口 邦和（日本大学・放射化学・放射線防護学）
 p2 : クローン羊、クローン狼、クローン豚 森川 和子
 p3 : 高尾山を世界遺産に 第 8 回個人会員フィールドワーク（4/20 16 名参加）（北田ヒデ子 記）
 p4 : 個人会員代議員選出に関する新基準（案）の成案について ―「支部大会あり方検討委員会」の検討を受けた第 4 回幹事会決定― 分会と同等に“10 名につき 1 名”（満川 常弘）
 97 年度支部大会代議員決まる 15 名
- No. 33 1997. 8. 8
 p1 : 沖縄県民とマーシャル島民の怒り 河井 智康（東京民間懇）
 p2 : 生命倫理からみた脳死・臓器移植問題 黒須 三恵（日本医大分会）
 p3 : 原水爆禁止 1997 年世界大会・科学者集会（8/2 横浜）全国各地から 180 名が集う（野口 邦和 記）
 p4 : 生涯現役の 21 世紀をめざして ―働く高齢者の権利の確立を― 柳沢正圀（東京大学助手身分確認提訴中）
 p5 : 第 31 回支部大会の参加者した代議員の感想
 p6 : 個人会員世話人会について（お知らせ） 参考：世話人は 北田、満川、川口、平田、野口、安部の 6 名
- No.34 1997.11.7
 p1 : B6-11 開発・配備の異様なスピード ―再編急ぐ米核戦略と新ガイドライン― 角田道生（埼玉支部代表幹事）
 p2 : 治療の一環としての病院給食に国境はない ―欧州病院給食実態調査に参加して―
 p3 : 『ガイドラインの見直しと日本国憲法』（報告：金子 勝氏）～第 9 回個人会員例会(10/18) (報告)～（S.H. 記）
 p4 : <個人会員からの代議員選出について> すべての個人会員の登録へ 個人会員世話人会あ
- No.35 1998.2.8
 p1 : <個人会員選挙人名簿作成用紙>（1998 年度支部大会向け）
 p2 : <個人会員からの代議員選出について>（選挙公示）
 「会費自動払込制度」についてのアンケート結果（と 口座開設と自動引き落とし手続きの連絡）
 財政部長 河野 秀宏
 p3 : 地球温暖化防止京都会議(COP3)・NGO 体験記 高木 史人
 p4 : 【報告】12 月 28 日、三溪園・薬膳の会 個人会員忘年会 8 名参加（安部 恒三）

- No.36 1998.5.8
 p1 : 98 年度支部大会代議員決まる 39 名（新基準により大幅増） 個人会員代議員選挙管理委員会
 <今回の代議員選挙について> 個人会員世話人会
 p2 : ケフィールについて 本谷 勲
 p4 : 個人会員世話人会から 世話人紹介と世話人会会合への誘い
- No.37 1998.8.8
 p1 : 所沢ダイオキシン問題 最近の動き 安部 恒三
 p2 : 京都支部で個人会員の活動始まる 東京支部個人会員世話人が支援
 ニュートリノが質量を持つ！？ 平田 清一（物理学）
 p3 : フィールドワーク（6/14）報告
 国立歴史民俗博物館に思う（北田ヒデ子） 国立歴史民俗博物館を訪ねて（北村 滯子）
 p4-5 : 第 32 回支部大会に出席した代議員の感想
 p6 : 【報告】第 8 回個人会員交流会（5/16） 科学ビデオ研究会作成のビデオ上映
 「日本科学者会議東京支部ニュース・パート 2」 「マーシャル報告」
- No.38 1998.11.8
 p1 : 約束をホゴにする新ガイドライン 河井 智康
 p2 : 遺伝子組換え食品、何が問題か 本谷 勲
 p3 : インド・パキスタンの核実験と核兵器廃絶 ～第 10 回部個人会員例会（9/12 10 名）報告～
 報告：中島篤之助氏
- No.39 1999.2.8
 p1 : <個人会員選挙人名簿作成用紙>（1999 年度支部大会向け）
 p2 : <個人会員からの代議員選挙について>（選挙公示）
 「交通博物館」と忘年会（12/6 10 名）でリフレッシュ（北田 記）
 p3 : 統計に見る非常勤問題 井本 三夫（大学問題委員会非常勤講師問題会議）
 p4 : 【図書紹介】『地球憲法第九条』著者 チャールズ M・オーバビー 翻訳 国弘 正雄 北田ヒデ子（個人会員）
- No.40 1999.5.8
 p1 : 新ガイドライン関連法案、衆院通過 危険性を訴えて参議院で廃案に！
 安部 恒三（世話人・東京平和委員会常任理事）
 p2 : あらためてビッグサイエンスを考える 大森 昌衛
 p3 : 1999 年度支部大会（5/22） 個人会員代議員選挙の結果報告 41 名
 p4 : 【図書紹介】加藤尚武著『バイオエシックスとはなにか 付＝対談・中川米造』 川口裕正（物理学）
- No.41 1999.8.8
 p1 : 原水爆禁止 1999 年世界大会・科学者集会（8/2 静岡）全国各地から 141 名が集う
 野口 邦和（科学者集会実行委員会事務局次長）
 p2 : 自給率向上でこそ日本の農業・健康が守れる 北田ヒデ子
 p3 : 個人会員フィールドワーク「宇宙科学研究所」見学会（7/20）（平田 清一 記）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 1】 金子 幸代さん、浜林 正夫さん
- No.42 1999.11.8
 p1 : 考えられないようなことが実際起こった 安部 恒三（個人会員世話人）
 p2 : 溪流の釣り 宮川清三郎（武蔵野分会）
 p3 : 雨が降っても風が吹いても自然が楽しいエコハウス ……自然エネルギー利用住宅に住んで 2 年間…
 第 11 回個人会員例会（10/3）報告（上記の報告は、高木史人氏）（平田 清一 記）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 2】 本間 玲子さん、中田 重厚さん
- No.43 2000.2.8
 p1 : <個人会員選挙人名簿作成用紙>（2000 年度支部大会向け）
 p2 : <個人会員からの代議員選挙について>（選挙公示）
 <個人会員忘年会>（12/26）報告 南麻布から斧町を通して恵比須へ 中華ランチと麦酒記念館 満川 常弘
 p3 : 支部個人会員活動開始 10 周年記念シリーズ 1 初期の活動を振り返って 川口裕正（個人会員世話人）
 憲法 9 条と自衛隊機墜落事故 一入間基地所属の T33A ジェット練習機、狭山の住宅地近くに墜落
 北田ヒデ子（狭山市）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 3】 増田 善信さん、吉埜 和雄さん

- No.44 2000.5.8
 p1 : 映画「科学者として訴えるもの」 満川常弘（経済学）
 p2 : 2000 年度支部大会（5/20） 個人会員代議員選挙の結果報告 40 名
 p3 : 個人会員の活動をささえているもの ～10 周年記念シリーズ 2～ 野中 郁江
 横須賀軍港と「記念館三笠」を見学して(03/26) ～東京支部個人会員と神奈川支部会員との交流会報告～
 （平田 清一 記）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 4】 平山 基生さん、赤壁 毅彦さん
- No.45 2000.8.8
 p1 : 原水爆禁止 2000 年世界大会・科学者集会（8/1 東京）について 報告
 トウパダキス氏(米国の化学者)の報告「核兵器会開発には協力できないー辞職して平和運動へー」
 科学者集会実行委員会事務局長 野口 邦和
 p2 : 研究会をつくろう（←このタイトルには二重の意味があります。） 渡辺 昇
 p3 : 東京支部個人会員と山梨支部会員との交流を兼ねたフィールドワーク（報告）（7/23）（平田 清一 記）
 考古博物館、サントリーワイナリー、東大宇宙線観測所、フラワーセンター
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 5】 天谷 和夫さん、吉田 巖さん
- No.46 2000.11.1
 p1 : 9/3 自衛隊統合演習強行を糾弾し 再び、石原都知事の退陣を要求する 安部 恒三（個人会員世話人）
 p2 : 地球温暖化の原因について 平田 清一
 p3 : 遺伝子組み換え食品の議論の枠組み ～10 月 21 日 個人会員と食糧政策委員会との共催後援会の報告～
 （個人会員世話人 北田ヒデ子）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 6】 北村 浩さん、木下 安子さん
- No.47 2001.2.9
 p1 : <個人会員選挙人名簿作成用紙>（2001 年度支部大会向け）
 p2 : <個人会員からの代議員選挙について>（選挙公示）
 p3 : 個人会員フィールドワーク（新年会）報告 ～～国会議事堂の化石見学～～～ （平田 清一記）
 「地球を歩く会」「知団研東京支部との共催行事（1/14 40 名近く参加）
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 7】 井野 隆一さん、安部 恒三さん
- No.48 2001.5.8
 p1 : 日本の恥さらし、新しい歴史・公民の教科書 浜林 正夫
 p2 : NBC（核・生物・化学兵器）対処へ 陸上自衛隊の研究本部を設置 安部 恒三
 p3 : ハンセン病資料館と多摩全生園の見学 東京支部と個人会員の合同交流会報告 北田ヒデ子
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 8】 瀧口 優さん、川口 裕正さん
- No.49 2001.8.8
 p1 : 原水爆禁止 2001 年世界大会・科学者集会が開催される（8/2 岐阜） 日本科学者会議事務局長 野口 邦和
 p2 : 文部科学省・次期学習指導要領解説の中の「科学」 吉埜 和雄（科学教育研究協議会）
 p3 : 【個人会員フィールドワークの報告】 葛西臨海水族館を見学して（7/20 10 名） 北村 浩
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 9】 松山 洋さん、本谷 勲さん
- No.50 2002.2.12
 p1 : 個人会員からの東京支部大会代議員の選挙について 2002 年度支部大会（6/1）向け選挙公示
 p2 : 21 世紀の新春に思う ―自然と人間にやさしい科学・技術の確立に― 大森 昌衛
 個人会員ニュース 50 号記念 寄稿
 p3 : 鷗外ゆかりの史跡を訪ねて ～～個人会員フィールドワーク 報告～～～（2001/12/25）
 忘年会 モンゴル料理店「シリングル」個人会員を超えて、女性、院生、一般の方含めて 29 名でにぎやかに
 井本 三夫・平田 清一
 p4 : 【シリーズ「私からひと言」その 10】 河上 茂さん、喜多 功さん
- No.51 2002.5.8
 p1 : 有事立法三法案の廃案まで、闘い抜こう！ 安部 恒三（個人会員世話人）
 p2 : 産直のモラルハザードとその抑止のために 野見山敏夫（東京農工大学農学部）
 p3 : 東京支部個人会員「春のフィールドワーク」報告 多摩六都科学館・江戸東京たてもの園（4/7 10 名）（KIT）
 p4 : 【個人会員の「近況・ご意見等」の紹介 選挙人登録の際のアンケート欄から（喜多）

- No.52 2002.9.8
 p1: 原水爆禁止 2002 年世界大会・科学者集会 (8/1 神戸) 報告 科学者集会実行委員会事務局次長 野口 邦和
 p2: ナシ族の村を訪ねて 北田ヒデ子
 p3: 慶応大学日吉キャンパスに残る戦争遺跡の見学 (個人会員フィールドワーク報告) (7/28 11 名) 喜多功
 p4: 【シリーズ「私からひと言」その 1 1】 武藤 徹さん
- No.53 2002.12.12
 p1: 石原都知事はなぜ人気があるのだろうか (AK)
 p2: 屋久島・種子島を訪ねて (平田 清一)
 p3: 秋のフィールドワーク報告 ～東京大空襲・戦災センター～ (10/13 7 名) (KIT)
 p4: 私からひと言 その 1 2 秋間 実さん、関井 友子さん
- No.54 2003.3.5
 p1: 小林多喜二展をひらいて 浜林 正夫
 p2: ヨーロッパ統合の意外な落とし穴 北村 浩
 p3: 個人会員フィールドワークと忘年会に参加して (12/22) 鈴木 忠義
 新宿近辺化石探検 (デパート、ホテルなどの石材に見る) 中華料理で忘年会
 p4: 私からひと言 その 1 3 山下 淳志郎さん、菊池 重秋さん
- No.55 2003.6.10
 p1: ぱじゃま 坂巻 幸雄
 p2: e-Japan 戦略を乗り越え、新たな人権を勝ち取るために 田中 克範
 p3-4: 私からひと言 その 1 4 小倉 正行さん、吉田 巖さん、副島 健義さん、宮村 光重さん
- No.56 2003.9.5
 p1: 原水爆禁止 2003 年世界大会・科学者集会 (8/2 名古屋) を終えて 浜田 盛久
 p2: 野生動物の医学 喜多 功
 p3: 〈参加報告〉個人会員フィールドワーク 神奈川県水産総合研究所と城ヶ島 (7/20 17 名) 満川 常弘
 新宿近辺化石探検 (デパート、ホテルなどの石材に見る) 中華料理で忘年会
 p4-5: 私からひと言 その 1 5 幡井 勉さん、松延 周平さん、辻村 定次さん、中島 明子さん、池田 眞規さん
 p6: 陸軍登戸研究所とは 秋の個人会員フィールドワークのための解説 安部 愼三 (個人会員世話人)
- No.57 2003.12.10
 p1: WTO と食糧問題 小倉 正行
 p2: オスタルギー・ブーム? 北村 浩
 p3: 陸軍登戸研究所の見学 秋の個人会員フィールドワーク (10/27) 菅沼 靖之 (東京農業大学大学院修士 2 年)
 p4-5: 私からひと言 その 1 6 野田 正穂さん、神田 昭夫さん、深沢 満さん、鈴木 信子さん、伊ヶ崎暁生さん
 p6: 陸軍登戸研究所とは
- No.58 2004.3.1
 p1: インドで考えたこと 北村 浩
 p2: 農家の庭先での対話から 神田 明夫
 p3: 個人会員フィールドワーク「北区を歩く」参加記 (12/27 10 名) (井本 三夫 記)
 p4-5: 私からひと言 その 1 7 田宮 兵衛さん、市川富士夫さん、高鷹 敦さん、三崎 和志さん、平田 清一さん

(注: No.59 より、冒頭に目次を作成したため様式が変わる。)

- No.59 2004.6.10
- ・「技術者倫理+α」のすすめ 菊地 重秋 1
 - ・中国古代史研究と出土竹簡 小嶋 茂稔 2
 - ・フィールドワーク報告【3 月筑波実験植物園】 河上 茂 3
 - ・私からひと言 — その 1 8 — 4
 - 河野 重策さん、小塚 恒夫さん、本田 浩邦さん、渡部 岳陽さん、東浦 康友さん
 - ・お知らせ 【7 月フィールドワーク】横浜港 — 交易の歴史を訪ねて — 6

No.60	2004.9.4	
・	地域での科学者会議の活動に関して 大屋 鐘吾	1
・	宇宙の第一世代星に迫る 青木 和光	2
・	追悼 北田 ヒデ子さん	3
・	フィールドワーク報告【7月 横浜開港資料館ほか】 北村 浩	4
・	私から一言 — その19 — 矢野 直さん、遠藤 浩良さん	6
No.61	2004.12.10	
・	支部活動の活性化をめざして 東京支部 事務局長 米田 貢	1
・	『資本論』を読んで思うこと 今宮 謙二	2
・	高尾山を守る運動に若い力が結集 橋本 良仁	3
・	私から一言 — その20 — 中村 方子さん、田中 昌一さん、鈴木 剛さん、河村 豊さん丸山 健人さん	4
・	世話人会より — 2004 年を振り返って —	6
No.62	2005.3.10	
・	スロー・ライフという生き方 北村 浩	1
・	持続可能社会への当面する課題のひとつ 平田 熙	2
・	2004 年 12 月 見学会から — ビールの話 — 河上 茂	3
・	私から一言 — その21 — 加藤 孝三郎さん、斉木 隆さん、千葉 燎郎さん、増田 正人さん、村瀬 千明さん	4
・	フィールドワークのお知らせ【3月27日 上野 国立科学博物館新館】	6
No.63	2005.6.10	
・	東京支部大会に参加して 田中 克範	1
・	「原子力の治外法権」を許していいのですか 今野 宏	2
・	2004 年 12 月 見学会から — ビールの話 — 河上 茂	3
・	私から一言 — その22 — 岸部 弘さん、木下 安子さん、新倉 修さん、羽鳥 謙三さん、山村 延郎さん	4
・	フィールドワークのお知らせ【7月17(日) 佐原 伊能忠敬記念館】	6
No.64	2005.9.10	
・	原水爆禁止 2005 年世界大会・科学者集会で感じたこと 北村 浩	1
・	災害問題と地学 羽鳥 謙三	2
・	伊能忠敬記念館見学記 — 7月フィールドワークから — 今野 宏	3
・	私から一言 — その23 — 相磯 富士雄さん、神田 雅尚さん、田坂 一朗さん、森川 和子さん、横山 和夫さん	4
・	<世話人会からのお知らせ> 個人会員 2005 年暮れのフィールドワークの予告 - 埼玉 川越 -	6
No.65	2005.12.10	
・	この1年、多くの方々と出会って 長田 好弘	1
・	会計研究者として再び足尾に行ってきました 野中 郁江	2
・	「九条かながわの会」発足のつどいに参加して 河上 茂	3
・	私から一言 — その24 — 阿部 哲二さん、大重 光太郎さん、角瀬 保雄さん、半谷 高久さん、干場 薫さん	4
・	<世話人会からのお知らせ> 川越の街 見学・忘年会（最終案内） — 小江戸・川越の歴史にひたって、2006 年への希望を語りましょう —	6
No.66	2006.3.10	
・	秋だけど「夏の学校」2005in 沖縄 ～沖縄に見る日本の戦後 60 年の実像～ 佐藤 克春	1
・	自然や社会の統一的理解を求めて 平田 清一	2
・	「九条かながわの会」発足のつどいに参加して 河上 茂	3

・私からひと言 ― その25 ―	4
大江 京子さん、唐澤 英行さん、河村 重行さん、田畑 康誉さん、横川 秀博さん	
・〈世話人会からのお知らせ〉 春のフィールドワークのご案内 ― 都心の戦争遺跡を巡る ―	6
No.67 2006.6.10	
・日本国憲法公布 60 周年の憲法記念日に思う 河上 茂	1
・J S A 創立 40 周年記念国際シンポジウムにたずさわって 北村 浩	2
・戦争遺跡を巡る個人会員フィールドワークに参加して 阿部 一雅	3
・私からひと言 ― その26 ―	4
伊藤 セツさん、小川 政亮さん、国府田 諭さん、山部 恵造さん、吉田 喜一さん	
・〈世話人会からのお知らせ〉 夏のフィールドワークのご案内 ― 靖国神社・遊就館 ―	6
No.68 2006.9.10	
・フィブリノゲン製剤の承認・販売は薬事法違反 ― 薬害C型肝炎事件における企業と国の責任 ―	
片平 洌彦	1
・sozial（社会的）とは何か 大重 光太郎	2
・靖国神社・遊就館フィールドワークに参加して 小澤 裕香	3
・私からひと言 ― その27 ―	4
伊藤 高弘さん、関口 直甫さん、南雲 和夫さん、牧 穂波さん、山辺 昌彦さん	
・〈世話人会からのお知らせ〉 秋のフィールドワーク -平和のための博物館：交流会と高麗博物館見学	6
No.69 2006.12.10	
・事故20年後のチェルノブイリ原発 安部 愼三	1
・欧州の街と近郊の楽しみ 河上 茂 大重 光太郎	2
・靖国神社・遊就館フィールドワークに参加して 小澤 裕香	3
・私からひと言 ― その28 ―	4
太田 さおりさん、郡司 良さん、佐藤 正知さん、道家 さん、平山 基生さん	
・【新企画：ミニ・レビュー】 ― その1 ―	
＜書評＞ 矢作弘『大店法とまちづくり』、岩波新書、2005 年 増田 正人	6
＜映画＞ 『時代を撃て・多喜二』 平田 清一	6
No.70 2007.3.10	
・御手洗ビジョンと財界人の驕り 米田 貢	1
・平和のための博物館 ― 市民ネットワーク運動と高麗博物館見学 ― 山辺 昌彦 安部 愼三	3
・私からひと言 ― その29 ―	4
荒井 成彦さん、古川原 明子さん、中川 直哉さん、長谷川 宏さん、宮城 晴耕さん	
・個人会員フィールドワーク報告 稲城・南山探索 多羅尾 光徳	6
・【新企画：ミニ・レビュー】 ― その2 ―	7
ステファニア・マウリチ 『1つの爆弾10人の人生』 石村 和弘	7
最近、ドキュメンタリー映画が面白い 喜多 功	7
・〈世話人会からのお知らせ〉 春のフィールドワーク ― 華麗なる花の色の世界に遊びませんか ―	8
No.71 2007.6.10	
・憲法改悪の発議を許さないために 長田 好弘	1
・身と心を癒し、人気上昇中の大深度非火山性温泉 宮崎哲郎（愛知支部）	3
・私からひと言 ― その30 ―	4
安孫子 誠也さん、姉齒 暁さん、石村和弘さん、須藤春夫さん、端山好和さん	
・個人会員フィールドワーク報告 稲城・南山探索 多羅尾 光徳	6
・【ミニ・レビュー】 ― その3 ―	
映画『よき人のためのソナタ』 小塚 恒夫	7
声明『博物館の危機をのりこえるために』日本学術会議 河上 茂	7
・〈世話人会からのお知らせ〉 夏のフィールドワーク -富岡製糸場見学と甘楽町散策 -	8
(台風4号のため秋へ延期)	

No.72	2007.9.10	
・ J S A の活動にもっと女性の参加を	池上 幸江	1
・ J S A と私	岩井 美好	3
・ 私からひと言 — その31 —		4
	尾崎 恭一さん、工藤 昌宏さん、久保田 義喜さん、遠山 千春さん、松井 安俊さん	
・ 個人会員フィールドワーク企画へのご参画・ご参加を	河上 茂	6
・ 【ミニ・レビュー】 — その4 —		
	フランス映画『スパニッシュ・アパートメント』 牧 穂波	7
	『木造漁船 第五福竜丸はいかにして甦ったか』 文祥堂フォーラム(2007.7.25)から 山川 賢次	7
・ 秋のフィールドワーク — 富岡製糸場見学と甘楽町散策 —		8
No.73	2007.12.10	
・ 地震災害にあった柏崎刈羽原発は再起可能か	安部 愼三	1
・ 個人会員ニュース 随想欄へのご投稿を — この3年間の記事を振り返って — 個人会員世話人会		3
・ 私からひと言 — その32 —		4
	石田 頼房さん、小河 孝さん、標 博重さん、杉浦 公一さん、峰岸 純夫さん	
・ 個人会員フィールドワーク報告 秋の一日 綿引 礼子		6
・ 【ミニ・レビュー】 — その5 —		
	あるひとつの平和憲法論『生涯助っ人』 河上 茂	7
・ <世話人会からのお知らせ> — 2007 年忘年行事 — 六義園とモンゴル料理 —		8
No.74	2008.3.10	
・ 初体験、1 カ月の選挙候補者活動（八王子市長選）	橋本 良仁	1
・ 温暖化問題と「反温暖化論」	増田 善信	3
・ 私からひと言 — その32b —		4
	井本 三夫さん、五十子 満大さん、江川 友治さん、長沼 仁さん、安富 六郎さん	
・ 個人会員フィールドワーク報告 六義園散策とモンゴル料理で 2007 年を締めくくる	米田 貢	6
・ 【ミニ・レビュー】 — その6 —		
	多田富雄『わたしのリハビリ闘争』—最弱者の生存権は守られたか— 真野 響子	7
・ <世話人会からのお知らせ> 2008 年春のフィールドワーク — 秩父事件と困民党の跡の春を訪ねて —		8
No.75	2008.6.10	
・ 東京支部創立 40 周年によせて — 個人会員、そして私 —	河上 茂	1
	付【再録引用】個人会員活動のこの 10 年 — フィールドワークを中心に — 個人会員世話人会	
・ Lyon : レジスタンスの街	宗倉 哲	3
・ 私からひと言 — その33 —		4
	大塚 正幸さん、小野塚 知二さん、添島 幸雄さん、玉川 寛治さん、野澤 保さん	
・ 個人会員フィールドワーク報告： 秩父事件と困民党の跡の春を訪ねて	山城屋 せき	6
・ 【ミニ・レビュー】 — その7 —		
	謝花直美『証言沖縄「集団自決」—慶良間諸島で何が起きたか』岩波新書(2008 年) 南雲 和夫	7
・ <世話人会からのお知らせ> 2008 年夏のフィールドワーク		
	— 横須賀を見て “7・13 全国大集会” も体験しましょう —	8
No.76	2008.9.10	
・ 東京の自治体と市民の今 — 狛江市と横田に見る —		1
	狛江市： 弱い立場の人に住みよい街は、すべての人にも快適な街 増田 善信	
	横田： 米軍横田基地の現在 南雲 和夫	
・ 経済学と尺度	金子 貞吉	3
・ 私からひと言 — その34 —		4
	秋谷 治人さん、大森 昌衛さん、小森 長生さん、宗倉 哲さん、三原 實さん	
・ 個人会員フィールドワーク報告： 神奈川県 米軍基地問題 — 米原子力空母の横須賀母港化阻止を—		
	石田 頼房	6

・【ミニ・レビュー】 — その 8 —	
戦争請負業「KBR（ケログ・ブラウン&ルート）社」とは何者か	
堤未果『ルポ貧困大国アメリカ』によせて 河上 茂	7
・＜世話人会からのお知らせ＞ 2008 年秋のフィールドワーク	
— 忍野村針糞純林を勉強して、交流会も楽しみましょう —	8
No.77 2008.12.10	
・米大統領選挙と変化のゆくえ 増田 正人	1
・益川、小林両博士のノーベル物理学賞受賞によせて 澤田 昭二	3
・私からひと言 — その 35 —	4
浦田 一郎さん、川瀬 清さん、進藤 兵さん、日野川 静枝さん、四元 忠博さん	
・個人会員フィールドワーク報告：	
忍野村・山中湖村 ^{はりもみ} 純林・交流会に参加して 小塚 恒夫	6
・【ミニ・レビュー】 — その 9 —	
NHKテレビ「みんなのうた」展覧会で逢った女の子 三上 まき	7
・＜世話人会からのお知らせ＞ 暮の個人会員フィールドワーク と 忘年交流会	
— 多摩動物公園昆虫館で蝶の魅力にせまる —	8
No.78 2009.3.10	
・イスラエルのガザ攻撃・侵攻の非道を繰り返えさせないために 河上 茂	1
・沈みゆく農山村の再生を求めて — 孤島からの叫び — 本間 慎	3
・私からひと言 — その 36 —	4
臧野 秀文さん、佐藤 乙丸さん、舘野 淳さん、鶴田 満彦さん、本間 喜久子さん	
・個人会員フィールドワーク報告： 多摩動物公園蝶のFWと 2008 年忘年交流会	
初めてフィールドワークに参加して 河野 美貴子	6
・【ミニ・レビュー】 — その 10 —	
思春期の心の揺らぎと『西の魔女が死んだ』 松本 アイ子	7
・＜世話人会からのお知らせ＞ 春の個人会員フィールドワーク	
— 埼玉支部との交流 東松山と吉見百穴を歩く —	8
No.79 2009.6.10	
・労働法制の改悪がもたらした雇用破壊の究極状況を考える 塚田 浩	1
— ハローワークでの出会い…ポストク問題と派遣問題は無関係か —	
・一老会員の繰り言 — 科学者会議創立の頃の思い出 — 大森 昌衛	3
・私からひと言 — その 37 —	4
大山 光さん、榊原 道夫さん、疋田 哲也さん、古川 範康さん、満川 常弘さん	
・個人会員フィールドワーク報告	
春のフィールドワーク「東松山と吉見百穴を歩く」 北村 浩	6
・【ミニ・レビュー】 — その 11 —	
デジタルカメラに思う 和泉 宏之介	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
— 世話人会への誘い、80 号記念寄稿のお願い、鶴彬の映画のお勧め —	8
No.80 2009.9.10	
・都議選後の政治情勢 佐久間 英俊	1
・一今年の原水爆禁止世界大会・長崎はどうだったか 安部 愷三	3
・私からひと言 — その 38 —	4
小野塚 春吉さん、野口 邦和さん、村山 裕さん、横田 茂永さん、吉木 健さん	
・【ミニ・レビュー】 — その 12 —	
『やさしい離乳食 — はじめて出あうおかあさんの味 —』（あかちゃんとママ社 2009 年）池上 保子	6
・＜世話人会からのお知らせ＞	
— 2009 年秋のフィールドワークのご案内 — おまちかね「高尾山の今を研究する」	8

No.80 別 2009.9.10 別冊 80 号記念寄稿集

個人会員ニュース 80 号記念号寄稿集について 個人会員世話人会	1
目次	2
東京支部代表幹事から	
・私の戦争・戦後体験から 池上 幸江	3
・衣川清子准教授の地位確認等請求事件について 長田 好弘	4
～権利への攻撃はつねに人格攻撃からはじまる～	
「私から一言」へのエール	
・「私からの一言」を毎号楽しみにしています 俣野 景彦	5
・個人会員ニュース 80 号に寄せて 増澤 誠一	5
東京支部個人会員活動はどうして始まった ― そして今後に向けて ―	
・祝ニュース 80 号 ― 新たな飛躍を期待します 菅 進	6
・東京支部「個人会員組織」のはじまりについて 山部 恵造	7
・個人会員が過半数となった現状からの発展に向けて 山川 賢次	8
他支部・分会から	
・運営交付金と賃金カット 山梨支部 竹内 智	9
・個人会員の活動に期待 高尾分会 橋本 良仁	9
個人会員の最近の活動から	
・国際科学技術史学会参加報告 我孫子 誠也	10
・教員免許更新講習参加報告 J. H. 生	10
・砂川闘争・砂川裁判闘争の同窓会 玉川 寛治	11
個人会員世話人から	
・個人会員の輪がひろがることを願って 平田 清一	12
・私と JSA、そして個人会員活動をお手伝いして 河上 茂	12
JSA 全国から	
・光り輝く JSA の復活をめざして JSA 全国事務局長 米田 貢	13
【付録】東京支部個人会員フィールドワークの記録（一覧）	14

No.81 2009.12.10

・オリンピック招致に反対する	
－ オリンピック精神に立ち戻るスポーツ振興を望む立場から － 姉齒 暁	1
・国際交渉とは ― 日米核密約に思う ― 河上 茂	3
・私から一言 ― その 39 ―	4
明石 博行さん、小原 秀雄さん、久野 勝治さん、穂積 弘一さん、山岡 寛人さん	
・個人会員フィールドワーク報告	
秋のフィールドワーク「高尾山の今を研究する」 八木 絹	6
・【ミニ・レビュー】 ― その 13 ―	
映画『鶴彬 こころの軌跡』 安孫子 誠也	7
・＜世話会からのお知らせ＞ 暮の個人会員フィールドワーク と 忘年交流会	
― 第五福竜丸と東京大空襲・戦災資料センターで学ぶ ―	8

No.82 2010.3.10

・人類の緊急課題は COP16 へ	
COP15 に参加して ― 地球温暖化防止の今後を展望する 橋本 良仁	1
・2 年目のオバマ政権と支持率の低下 増田 正人	3
・私から一言 ― その 40 ―	4
伊豫 軍記さん、小山 博司さん、寺田 博之さん、真鍋 和裕さん、吉田 満さん	
・個人会員フィールドワーク報告	
暮のフィールドワーク「第五福竜丸と東京大空襲・戦災資料センターで学ぶ」	
井本 三夫、阿部 一雅	6
・【ミニ・レビュー】 ― その 14 ―	
福本和夫『カラクリ技術史話』 小金澤 鋼一	7

・ <世話人会からのお知らせ> 2010 年春の個人会員フィールドワーク ー 桜の花のもと、小石川植物園で学ぶ ー	8
No.83 2010.6.10	
・ 人類の緊急課題、2010 年 N P T 再検討会議に参加して 増田 善信	1
・ 地上波アナログ放送停止と東京スカイツリーをめぐる問題 田中 克範	3
・ 私から一言 ー その 4 1 ー 田中 隆さん、成田 延雄さん、平田 熙さん、兵頭 圭介さん、山田 直利さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ー その 1 5 ー 『風の花 青いケシ紀行』（山下順子著 西田書店 2009 年 2 月） 岩科 司	6
・ 個人会員フィールドワーク報告 2010 年春のフィールドワーク ー桜の花のもと、小石川植物園で学ぶ ー 本間 慎	7
・ <世話人会からのお知らせ> 2010 年秋のフィールドワーク <予告> ー 初秋の下仁田で地学を勉強しましょうー	8
No.84 2010.9.10	
・ 8 月 6 日、リバモアの平和集会に参加して 日野川 静枝	1
・ 私から一言 ー その 4 2 ー 上坪 陽さん、木本忠昭さん、田代真樹さん、原 英二さん、吉田充夫さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ー その 1 6 ー 映画「アルゼンチンタンゴ 伝説のマエストロたち」から 河上 茂	6
・ 【特別寄稿】 スペインを旅して ーガウディとピカソとドン・キホーテの国 ー 増澤 誠一	7
・ <世話人会より> ー編集後記に代えて ー ー 菅政権に思う / ー 18 総学(宮城)で個人会員の活動を報告します。	8
No.85 2010.12.10	
・ 気候変動問題と生物多様性問題の「相互作用」と科学者の役割 佐川 清隆	1
・ 小学校・中学校・高校の理科教育が大きく変わる！ 左巻 建男 ー『RikaTan（理科の探検）』誌の編集長をしながら思うこと ー	3
・ 私から一言 ー その 4 2 ー 小林 善亮さん、土屋 十圀さん、浜林 正夫さん、日高 三郎さん、森田 靖子さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ー その 1 7 ー ルイザ・メイ・オルコット『仕事』 衣川 清子 ー「ディーセント・ワーク」を求めた 150 年前の女性たちに学ぶ ー	6
・ 個人会員フィールドワーク（FW）報告 2010 年秋：下仁田・妙義山で地学を学ぶフィールドワーク 米田 貢	7
・ <個人会員世話人会より> ー 編集後記に代えて ー ー 2011 年に向かって、1911 年から百年 ー	8
No.86 2011.3.10	
・ 築地市場を、なぜ、汚染地へ！？ーでたらめ石原都政と対決してー 坂巻 幸雄	1
・ 水害と河川計画 土屋 十圀	3
・ 私から一言 ー その 4 3 ー 鈴木信男さん、堤九十生さん、本間 慎さん、武藤 徹さん、森永茂生さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ー その 1 8 ー 筑豊映画三昧 ー「インシテミル」「雷桜」「ふたたび」ー 山村 延郎	6
・ 個人会員フィールドワーク（FW）報告：2010 年暮の FW 小金澤 鋼一 キューバを丸ごと勉強しましょう ー映画と音楽とお話しと料理で、2011 年も展望してー 小金澤 鋼一	7
・ <世話人会からのお知らせ> ー2011 年春のフィールドワークのご案内ー 「築地市場移転問題の現場で学ぶ」	8

No.87 2011.6.10

・「社会の在り方」を問いかける東日本大震災 丸山 重威一 坂巻 幸雄	1
・福島原発事故の真実 安部 恒三	3
・私から一言 — その44 —	4
北村 実さん、小池 盛明さん、坂元 忠芳さん、兵藤 友博さん、吉松 正秀さん	
・【ミニ・レビュー】 — その19 —	
小室直樹『日本いまだ近代国家に非ず～国民のための法と政治と民主主義～』 松村 比奈子	6
・個人会員フィールドワーク報告：2011 年初夏 築地市場移転問題を学ぶ 多羅尾 光徳	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
『フィールドワークの企画にご協力下さい。』題の現場で学ぶ	8

No.88 2011.11.10

・「原子力」の本質と脱原発の課題 — 半年たつての東北から — 栗野 宏	1
・マグマに溶けている水を量る 浜田 盛久	3
・私から一言 — その45 —	4
江指隆年さん、笹野武則さん、繁野義雄さん、田村佳子さん、吉田傑俊さん	
・これからの個人会員フィールドワークについて	6
・【ミニ・レビュー】 — その20 —	
若桑みどり『フィレンツェ』 — チョンピの反乱における現代社会との共通性 河上 茂	7
・＜世話人会からのお知らせ＞ 2011 年忘年行事	
— 江戸東京博物館から両国の街とお昼ちゃんこ —	8

No.89 2012.1.10

・2009 年～2011 年の巻頭展望記事抄録（巻頭企画ができなかった代替再掲 編集子からのお詫び）	1
・沖縄で考えたこと 石田 周	3
・私から一言 — その46 —	4
有馬 泰紘さん、今宮 謙二さん、小沢 隆一さん、北村 浩さん、塩田 公子さん	
・【ミニ・レビュー】 — その21 —	
不適格教師の文化祭 その1 『煙突屋ペロー』 ジョニーH ときどき 足田 哲也	6
・個人会員フィールドワーク報告：2011 年忘年行事	
— 江戸東京博物館から両国の街とお昼ちゃんこ — 中嶋 孝子	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
— 2012 年の年頭にあって / — 個人会員フィールドワーク 2012 年の予定	8

No.90 2012.3.10

・日本経済の再建をどう実現するのか 米田 貢	1
・“忘れるのをじっと待っている人達もいる” ベン・シャーンからの警告のメッセージ 松本 アイ子	3
・私から一言 — その47 —	4
岩佐 茂さん、浦田 賢治さん、友寄 英隆さん、平塚 真樹さん、三上 満さん	
・【ミニ・レビュー】 — その21b —	
ひろしま・安芸高田神楽 第一回東京公演 から — 躍動感あふれる地域文化の魅力 — 河上 茂	6
・個人会員フィールドワーク報告：2011 年深秋	
— 甲府で再生可能エネルギーの体験学習と甲府散策 — 水野谷 守男	7
・【予告】2012 年 10 月：50 回記念 佐渡の大フィールドワーク	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
— 2012 年初夏の個人会員フィールドワーク案内 —	8

No.91 2012.6.10

・除染から見えるこの世の不条理 椿 淳一郎	1
・私と、空間と、時間と 田村 明美	3
・私から一言 — その48 —	4
菊地 隆男さん、中島 良一さん、西村 一郎さん、濱口 晴彦さん、真嶋 麻子さん	

・【ミニ・レビュー】ー その22 ー	
『Q&A 共通番号ここが問題 ー 解体される社会保障 仕分けられる国民』 田中 克範	6
・個人会員フィールドワーク報告：2012 年初夏	
ー或る学生が城ヶ島と出会って 松本 親	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
2012 年秋の50回記念個人会員フィールドワーク案内	8
ー佐渡の自然と文化の中で新しいエネルギーと環境について学びましょうー	
No.92 2012.9.10	
・日本の縮図 佐渡島 本間 慎	1
・グアテマラのオリンピック・メダル 真嶋 麻子	3
・私から一言 ー その49 ー	4
赤壁 毅彦さん、岡田 原史さん、島田 陽子さん、本間 一郎さん、吉田 昭治さん	
・【ミニ・レビュー】ー その23 ー	
本庄陸男『白い壁』 島貫 恒子	6
・2012 年夏『さよなら原発 10 万人集会』報告	
原発に不満充満・十七万、そこでトマトは訴える 疋田 哲也	7
・＜世話人会からのお知らせ＞：2012 年暮の忘年個人会員フィールドワーク案内	
ー 城北大空襲を学び、平和と 2013 年への飛躍を語る ー	8
No.93 2012.12.10	
・オバマ大統領再選後の米国経済 増田 正人	1
・改正労働契約法と若手研究者 多羅尾 光徳	3
・私から一言 ー その50 ー	4
喜多 功さん、中島 園恵さん、中村 邦光さん、方違 重治さん、山岡 暁さん	
・【ミニ・レビュー】ー その24 ー	
井上文夫著『時をつなぐ航跡』 河上 茂	6
・個人会員フィールドワーク（2012 年秋 50回記念佐渡）報告	
佐渡で地学と伝統文化、自然エネルギーと健康な食文化を学ぶ 田中 史子	7
・＜世話人会から＞	
ー 新しい個人会員の活動の試みから 2013 年に向けてー	8
No.94 2013.3.10	
・集团的自衛権と全米ライフル協会 松村 比奈子	1
・日本の職業教育はどこに行く 中嶋 俊一	3
・私から一言 ー その51 ー	4
瀬戸 昌之さん、滝澤 昭義さん、永井 博さん、廣嶋 清志さん、本庄 十喜さん	
・【ミニ・レビュー】ー その25 ー	
竹崎 孜著『貧困にあえぐ国ニッポンと貧困をなくした国スウェーデン』 片平 洸彦	6
・個人会員フィールドワーク報告：2012 暮（小森香子さんの城北大空襲のお話と王子中華）	
詩の朗読で語り継ぐ東京大空襲 米田 梢	7
・＜世話人会から＞	
ー 個人会員フィールドワーク 2013 年初夏のご案内 ー	8
No.95 2013.6.10	
・地方国立大学の今 ー山形大学にみるー 栗野 宏	1
・憲法集会 2013 からの報告 編集子（文責：河上茂）	3
・私から一言 ー その52 ー	4
池上 保子さん、内田 恵子さん、梶原 渉さん、神谷 敬さん、鮫島 敏昭さん	
・【ミニ・レビュー】ー その26 ー	
劇団俳優座公演「月光の海 ギタラ」 中村 芳子	6
・個人会員フィールドワーク報告：2013 年初夏	
台東九条の会の方にご案内いただき、もうひとつの浅草 井本 三夫	7

・ <世話人会からのお知らせ> 東京支部・神奈川支部共催第2回京浜地区学習会のご案内 東京、神奈川の教科書問題の今を考える ― 次代を担う若者のために ―	8
No.96 2013.9.10	
・ アベノミクス・余命2年 金子 貞吉	1
・ JSAとともに成長した1年 山崎 真理子	3
・ 私からひと言 ― その53 ― 浦野 さとみさん、小川 潔さん、佐々木 隆爾さん、森 陽子さん、渡邊 章さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ― その27 ― 『巨人、大鵬、卵焼き 私の履歴書』 小林 紀和	6
・ 第2回京浜地区学習会(教科書問題)報告に代えて 安倍政権の進める「教育再生」について考える 河上 茂	7
・ <世話人会からのお知らせ> 個人会員フィールドワーク 2013 年秋のご案内 横田基地で学ぶ東京の基地問題	8
No.97 2013.12.10	
・ 再生可能エネルギー普及の展望と課題 橋本 良仁	1
・ 国立大学はどこへ行く ― 地方の工学系大学の視座から ― 田牧 純一	3
・ 私からひと言 ― その54 ― 長内 史子さん、田中 均さん、根木山 幸夫さん、平野 忠さん、比留川 洋さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ― その28 ― 『高卒5年どう生き、これからどう生きるのか 若者たちが今<大人になる>とは』 喜多 功	6
・ 個人会員フィールドワーク報告： 2013 年秋 横田基地で東京の基地問題を考える 高橋 利昌	7
・ <世話人会からのお知らせ> 個人会員フィールドワーク 2014 年新春のご案内 “谷根千”を歩き、学ぶ	8
No.98 2014.3.10	
・ 戦争する国への暴走と正面から対抗する運動を 松永 光司	1
・ 「心理学的にはどうなの？」 峰尾 菜生子	3
・ ミニコラム 山田 洋次監督のまなざし ― 「小さいうち」ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞によせて ―	3
・ 私からひと言 ― その55 ― 伊藤 有三さん、中嶋 久人さん、松村 比奈子さん、三笠 俊哉さん、山本 尊仁さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ― その29 ― 『普天間は、米軍接收の非道を68年間訴え続ける 青年劇場「普天間」 河上 茂	6
・ 個人会員フィールドワーク報告： 2013 年秋 谷根千フィールドワークを案内して 権上 かおる	7
・ <世話人会からのお知らせ> 個人会員フィールドワーク 2014 年初夏 栃木支部の方と今の 足尾を学ぶ	8
No.99 2014.6.10	
・ 労働時間制度など安倍「雇用改革」をめぐる攻防 井上 久	1
・ ヴェルディ『ナブッコ』とリソルジメント運動 安孫子 誠也	3
・ 私からひと言 ― その56 ― 北川和彦さん、小池 信太郎さん、土田 稔さん、平野 義尚さん、山本 厚生さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 ― その30 ― 安達 辰雄著『原発・環境問題と企業責任 ―環境経営学の課題』 多羅尾 光徳	6
・ 個人会員フィールドワーク報告： 2014 年初夏 現在進行形の足尾銅山鉱毒事件と田中正造の遺志 小林 幹夫	7
・ <世話人会からのお知らせ> これからの個人会員の活動について...お知らせとお願い	8

No.100 2014.9.10

・『個人会員ニュース』100号発行を記念して 長田 好弘	1
・東京五輪バブルを考える - 資産インフレ、過大な公共事業、そして - 山村 延郎	2
・学習会の講師を紹介していただけませんか 石山 修	4
・【ミニ・レビュー】 - その31 -	
『花子とアン』からこぼれたもの 衣川 清子	5
・私から一言 - その57 -	6
荒井 成彦さん、菊地 重秋さん、小西 祐司さん、櫻井 良堅さん、田中 克範さん	
・〈世話人会からのお知らせ〉 2014年秋のフィールドワーク案内	
我孫子で大正デモクラシーの跡と手賀沼の自然を訪ねる	8

No.101 2014.12.10

・新基地建設を許さぬ「オール沖縄」が姿を現した 亀山 統一	1
・知らないことは観えないこと 竹内 憲一	3
・私から一言 - その58 -	4
奥村 義治さん、島崎 隆さん、西田 滋さん、吉田 万里さん、米田 梢さん	
・【ミニ・レビュー】 - その31b -	
メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』 柴田 和宏	6
・個人会員フィールドワーク報告： 2014年秋	
現我孫子で大正デモクラシーの跡と手賀沼の自然を訪ねる 2014年9月28日(日) 山田 和弘	7
・〈世話人会から〉 2014年暮の忘年個人会員フィールドワークのご案内	
- JSA事務所膝元の神社・教会と歴史を学ぶ -	8

No.102 2015.3.10

・大学・研究機関における軍学共同の本格化にNoを！ 浜田 盛久	1
・学校ができて女の子も勉強ができるようになった！ - ネパールの学校訪問 - 松本 アイ子	3
・私から一言 - その59 -	4
青水 司さん、秋津 貴城さん、亀井 伸治さん、川田 奈々絵さん、張替 泰子さん	
・【ミニ・レビュー】 - その32 -	
矢部 武『60歳からの生き方再設計』 増澤 誠一	6
・個人会員フィールドワーク報告： 2014年暮忘年	
- JSA事務所膝元の神社・教会と歴史を学ぶ - 西村 明生	7
・〈世話人会からのお知らせ〉	
- 第3回京浜地区学習会のご案内 / - 2015年初夏のフィールドワークの開催予告	8

No.103 2015.6.10

・2015年日米ガイドラインのジレンマ 不戦の憲法を活かす民衆に機会到来 浦田 賢治	1
・高尾山の自然をまもる会の活動を振り返って 橋本 良仁	3
・私から一言 - その60 -	4
斉木 隆さん、高根 勝啓さん、鴫田 亮一さん、真野 茂郷さん、吉森 弘子さん	
・【ミニ・レビュー】 - その33 -	
米田佐代子、大日向純夫、山科三郎『ジェンダー視点から戦後史を読む』 池上 幸江	6
・第3回京浜地区学習会（横浜市のカジノ誘致問題）報告 河上 茂	7
・〈世話人会からのお知らせ〉	
- 個人会員のみなさまからのご要望について / - 今後のフィールドワークについて	8

No.104 2015.9.10

・JAL 不当解雇撤回闘争のいま 森 陽子	1
・東京支部で育てられた私と東京の院生の震災・原発問題での取り組み 佐川 清	3
・私から一言 - その61 -	4
河上 茂さん、衣川 清子さん、久野 勝治さん、高橋 利昌さん	
・【ミニ・レビュー】 - その35 -	
映画「沖縄 うりずんの雨」Okinawa: The Afterburn 島貫 恒子	6

・ 横浜市教育委員会の教科書採択会議 2015 年からの報告 京浜地区学習会事務局	7
・ <世話人会からのお知らせ> : 2015 年秋のフィールドワーク 明治大学平和教育登戸研究所資料館見学と講演	8
No.105 2015.11.10 増刊号 「戦争法制と私」寄稿集 (初版) (すべての目次は、No.109 第2版に含まれるので、割愛)	
No.106 2015.12.10	
・ 留保利益課税の提案 醍醐 聰	1
・ ふるさとの田舎から - 祖母が語ってくれた南房総空襲 - 衣川 清子	3
・ 私からひと言 - その62 - 秋保 親成さん、須藤 恵美さん、所 康弘さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 - その36 - 映画『フリーダム・ライターズ』 笠原 えりな	6
・ 2015 年秋個人会員フィールドワーク報告 平和教育登戸研究所資料館で戦争と科学研究について学ぶ 小松 明美	7
・ <世話人会からのお知らせ> : 2016 年新春のフィールドワーク 女たちの戦争と平和資料館で戦時性暴力について考える	8
No.107 2016.3.10	
・ パリ協定は温暖化対策の第一歩 橋本 良仁	1
・ 学生に新聞購読を勧める 山岡 暁ふるさとの田舎から - 祖母が語ってくれた南房総空襲 - 衣川 清子	3
・ 私からひと言 - その63 - 佐藤 克春さん、白神 優理子さん、兵頭 淳史さん、古城 利明さん、渡邊 伸一さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 - その37 - 『福島への帰還を進める日本政府の4つの誤り - 隠される放射線障害と健康に生きる権利 -』 小柴 信子	6
・ 2016 年新春個人会員フィールドワーク報告 アクティブ・ミュージアム wam 女たちの戦争と平和資料館 山城屋 せき	7
・ <世話人会からのお知らせ> 東京支部創立50周年記念事業 個人会員関連の取り組みについて	8
No.108 2015.6.10	
・ 閣議決定で抜本の変質が狙われている日本の科学・技術と学術 野村 康秀	1
・ 我が地域を考える 渡辺 顕治	3
・ 私からひと言 - その64 - 上野 哲さん、木村 宣夫さん、白波瀬 輝夫さん、田井 勝さん、中嶋 雅登さん	4
・ 【ミニ・レビュー】 - その38 - 『Lenin Museo (レーニン博物館)』 宗倉 哲	6
・ 2016 年春個人会員フィールドワーク報告 : 2016 年春 伊豆大島で自然と災害、歴史と文化をまるごと学んだ二日間 土方 直史	7
・ <世話人会からのお知らせ> - 2016 年秋の個人会員フィールドワークの予告 / - 「戦争法制と私」寄稿集 第2版発行について	8

— 2016年7月参院選の結果を超えて勝利するために —	2016年7月20日 個人会員世話人会	i
(再録) 個人会員ニュース105号増刊号『戦争法制と私』寄稿集(初版)発行にあたって	2015年11月10日 個人会員世話人会	ii

目次	iii
----	-----

【I】特別寄稿

安保法制と軍事研究、そして科学者の社会的責任 広渡 清吾	2
付：初版寄稿 参議院平和安保法制に関する特別委員会地方公聴会での意見表明	

【II】寄稿

1. 飯田 克平 平和・戦争と私 【新寄稿】	8
2. 池上 幸江 父の戦争体験から戦争法制を考える 【新寄稿】	9
付：初版寄稿 戦争法制と私	
3. 伊藤 セツ 安保法制(戦争法制)と私(2)	
— 八王子市民運動の中でそして研究テーマとの関連で —	11
付：初版寄稿 戦争法制と私	
— 第14回JSA女性シンポ、希望のSEALDs、そして市民として —	
4. 伊藤 宏之 立憲主義と日本外交 【新寄稿】	15
5. 井本 三夫 政府間の争いを抑える人民のグローバリズムを(初版)	16
6. 内野 光子 疑惑の宝庫、東京オリンピックをなぜ中止できないのか	18
付：初版寄稿 研究者は、今	
7. 浦田 賢治 行動による表現：軍学共同に抗議する 【新寄稿】	21
8. 亀山 統一 戦争法制と大学、沖縄 【初版更新版】	23
9. 河上 茂 2016年6月19日 沖縄の県民大会の会場から	25
付：初版寄稿 戦争へ向かう歴史を繰り返してはならない	
10. 北村 実 戦争法制と私 【初版更新版】	27
11. 衣川 清子 ふるさとの田舎から - 祖母が語ってくれた南房総空襲 - 【新掲載】	29
12. 後藤 仁敏 戦争法制と私：九条の会運動の中で【新寄稿】	30
13. 小松 明美 平和教育登戸研究所資料館で戦争法を考える (初版)	31
14. 笹野 武則 憲法をねじ曲げる主張には断固として反論を【新寄稿】	32
15. 佐藤 和宏 安倍政権の打倒しか答えはない - いま、「戦争法制と私」をもう一度	33
付：初版寄稿 「戦争法制と私」とはいかなる意味か？	
16. 田牧 純一 戦争法制と北海道民の苦悩 【初版更新版】	36
17. 椿 淳一郎 退職科学者と地域活動家のコラボ (初版)	38
18. 中嶋 俊一 憲法9条との出会いと教育 【新寄稿】	39
19. 丹生 淳郷 戦争法と私 【新寄稿】	40
20. 野村 光司 私は憲法の伝道師になりたい 【新寄稿】	41
21. 本間 慎 戦争法制と私 -1950年、学生としての「私」の活動から- 【新寄稿】	42
22. 真嶋 麻子 国際関係学の視点から (初版)	43
23. 増澤 誠一 「戦争法制と私」寄稿集 初版 発行後に行動したこと	44
付：初版寄稿 戦争法制と私 - 考えたこと、行動したこと -	
24. 松尾 一郎 戦争法制、医学研究の観点から【新寄稿】	48
25. 松本アイ子 日本の民主主義を若者達とともに	49
付：初版寄稿 私たちはあの国会前の記憶を薄れさせない	
26. 森 陽子 航空労働者としての私と戦争(2)	51
付：初版寄稿 航空労働者としての私と戦争	
27. 山田 朗 「戦争法制」とこれからの兵器体系 【初版更新版】	54
28. 米田 貢 「戦争をする国・日本」の危険をいかに若者に伝えるのか	55
付：初版寄稿 闘いはここから - 躍る安倍政権を圧倒的な国民世論で孤立させよう -	

【III】資料

(寄稿関連資料)

寄稿 4 関連資料-1 ジョン・ロック『統治論』から見た立憲主義と日本国憲法	60
寄稿 4 関連資料-2 外交文書にみる日本の戦後世界	63
寄稿 15 関連資料 ポスター「戦争したくなくてふるえる DEMO」(8.15 札幌大通り公園)	65
寄稿 16 関連資料 ポスター「自衛隊員と家族・恋人のための安保法案緊急相談」	66
(2015年9月12日 主催：自衛官の人権弁護団・北海道)	

(記録資料)

【資料1】9月18日参院特別委戦争法案強行採決以降の主な出来事(2016.6.22現在)	67
【資料2】日本科学者会議東京支部常任幹事会声明(2015.6.8)	69
- 安倍内閣の「戦争法案」に断固反対する -	
【資料3】沖縄県議会意見書(2015.8.31)	70
日本国憲法を守り「安全保障関連法案」の廃案を求める意見書	
【資料4】国際連合人権理事会における翁長沖縄県知事の訴え(2015.9.22)	71
【資料5】日本科学者会議常任幹事会声明(2015.9.13)	72
- 安倍内閣安保法案(戦争法案)の廃案こそ国民の声 -	
【資料6】安全保障関連法に反対する学者の会抗議声明(2015.9.20)	73
- 参議院特別委員会の抜き打ち強行採決・本会議成立強行に抗議する -	
【資料7】九条科学者の会事務局長声明(2015.10.1)	74
- 安全保障関連法の廃止に向け今こそ科学者の共同のたたかいを！ -	
【資料8】自由と平和のための京大有志の会声明書(2015.7.2発足の声明)	75
【資料9】九条の会アピール「憲法9条を守るために新たな飛躍を」(2015.11.13)	76
【資料10】安保法制廃止をめざすスポーツと体育の会 よびかけ(2016.1.21)	77
【資料11】日本科学者会議第47回定期大会・大会決議(2016.5.29)	78
1)立憲主義に背反し違憲である安全保障法の廃止を求めます。「辺野古基地」建設策動に抗議します。	
2)平和のための学問・教育を破壊する軍事研究に反対し、高等教育機関予算の抜本的増額を求めます。	
3)原発事故から教訓を得て、原発の再稼働に反対し、「持続可能な社会の創造」を支援します。	
【資料12】安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合	
2016年7月参院選 野党4党の政策に対する市民連合の要望書(2016.6.7)	80
【資料13】元海兵隊員による残虐な蛮行を糾弾！被害者を追悼し、沖縄から海兵隊の撤退を求める県民大会	
決議(2016.6.19)	82
【資料14】2016年7月参議院議員選挙の結果を超えて - 市民運動からのアピール)	83
・安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合 参議院選挙の結果に関する見解(2016.7.11)	
・九条の会：戦争法廃止、改憲阻止へ決意新たに - 参院選の結果について(2016.7.11)	
・戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会アピール 参議院選挙の結果を踏まえての闘いの決意(2016.7.11)	

No.110 2016.9.10

・人間らしい生活を求め、奮闘する首都圏青年ユニオン 山田 真吾	1
・日本科学者会議に今思うこと 松尾 一郎	3
・私から一言 - その65 -	4
赤壁 毅彦 さん、坂本 宏 さん、深澤 満 さん、藤谷 正太 さん、吉田 満 さん	
・【ミニ・レビュー】 - その39 -	
エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』 平田 清一	6
・原水爆禁止世界大会2016 科学者集会 in 横須賀から	
核無き世界を目指して - 横須賀から世界へ、世界から横須賀へ - 河上 茂	7
・＜世話人会からのお知らせ＞	
2016年秋の個人会員フィールドワーク：	
- 佐倉・国立歴史民俗博物館を訪ね、日本近代史を学ぶ -	8

No.111 2016.12.10

・トランプノミクスの正体 宮崎 礼二	1
・近況報告 - 大学キャンパスの都心回帰を考えてみる 増田 正人	3
・私から一言 - その66 -	4
木本 忠昭 さん、小塚 恒夫 さん、小西 一雄 さん、田宮 兵衛 さん、森田 満夫 さん	
・【ミニ・レビュー】 - その40 -	
森住 卓『沖縄戦 最後の証言 おじい・おばあが米軍基地建設に反対する理由』から 河上 茂	6
・2016年秋個人会員フィールドワーク報告	
佐倉・国立歴史民俗博物館を訪ね、日本近代史を学ぶ 宗倉 哲	7
・＜世話人会からのお知らせ＞ 2017年新春の個人会員フィールドワークのご案内	
-築地市場で働く人々の状況と思いを学び、新年会で語り合おう -	8

No.112 2017.3.10

・国際的に見た共謀罪法案の問題性 高山 佳奈子	1
・はじめまして、そして近況報告 田名部 誠一	3
・私からひと言 - その67 -	4
朝岡 晶子さん、安孫子 誠也さん、唐澤 英行さん、工藤 昌宏さん、吉田 裕さん	
・【ミニ・レビュー】 - その41 -	
望月衣塑子『武器輸出と日本企業』 隅田 雄一	6
・2017年新春個人会員フィールドワーク報告	
「築地市場移転問題の現場で学ぶ」に参加して 吉沢 壮二郎	7
・〈世話人会からのお知らせ〉 2017年春の個人会員フィールドワークのご案内	
まるごと上野公園を学ぶ - 桜のもとで市民のための都市公園を考えよう -	8

No.113 2017.6.10

・カストロ後のキューバ 鶴田 満	1
・レッドページからビキニ水爆実験、そして「日科」の創立へ 増田 善信	3
・私からひと言 - その68 -	4
五十子 満大さん、尾崎 恭一さん、浦田 一郎さん、疋田 哲也さん、松井 安俊さん	
・【ミニ・レビュー】 - その42 -	
矢沢久雄『プログラムはなぜ動くのか』（第2版） 今枝 暁子	6
・2017年春個人会員フィールドワーク報告	
「上野公園をまるごと学び、守りましょう」に参加して 小西 辰男	7
・〈世話人会からのお知らせ〉	
- 今、井上ひさしに学ぶ in 鎌倉 [予告]	8
- 東京支部50周年記念事業 個人会員活動記録集の発行	8

No.114 2017.9.10

・築地市場の移転問題——最近の動きと批判 坂巻 幸雄	1
・「核のゴミ」問題の旺盛な議論を 立石 雅昭	3
・私からひと言 - その69 -	4
小沢 隆一さん、宗倉 哲さん、中島 良一さん、室井 清さん、吉田 充夫さん	
・ミニ・レビュー - その43 -	
映画『静かなる情熱』とエミリ・ディキンソン 吉田 要	6
・レポート	
日本学術会議「軍事的安全保障研究に関する声明」その後の反響 多羅尾 光徳	7
・〈世話人会からのお知らせ〉 2017年秋のフィールドワーク・学習会のご案内	
今、井上ひさしに学ぶ in 鎌倉	8

No.115 2017.12.10

・COP23 ボン の結果と今後の動き 歌川 学	1
・ICRP 公衆被ばく線量限度「1 mSv/年」について 小野塚 春吉	3
・私からひと言 - その70 -	4
荒井 育恵さん、井原 聡さん、土井 誠さん、前川 雄司さん、森脇 靖子さん	
・ミニ・レビュー - その44 -	
井上ひさし『コメの話』 - 古くて新しいコメの話 松永 光司	6
・2017年秋フィールドワーク報告	
「今、井上ひさしに学ぶ in 鎌倉、市民、文学」に参加して 本間 喜久子	7
・〈世話人会からのお知らせ [予告]〉 2018年新春のフィールドワーク・学習会	
国立天文台で天文学の今を学ぶ	8

日本科学者会議東京支部個人会員ニュース「私からひと言」全編集版

「私からひと言」一覧（目次）

（No.2 (1990 年 7 月) から No.18 (1993 年 11 月) まで「私の一言」「新入会員の声」として随時掲載）

私の一言： No.2 1990.7.10	浜林 正夫さん、北田 ヒデ子さん、木下 安子さん、高橋 明士さん	24
私の一言： No.3 1990.10.8	荻原 裕さん、川口 啓明さん、長田 良夫さん	24
新入会員の声： No.5 1991.3.8	鴨川 孝司さん、永島 淳一さん	25
新入会員の声： No.18 1993.11.8	廣島 清志さん、吉田 義美さん	25

（No.19 (1994 年 2 月) から No.25 (1995 年 8 月) までは掲載がありません。）

新入会員の声： No.26 1995.11.9	菊池 頌子さん、神田 雅尚さん、朝倉 幹晴さん、吉田 喜一さん、金子 幸代さん、 唐沢 英行さん	24
-------------------------	---	----

（No.27 (1996 年 2 月) から No.40 (1999 年 5 月) までは掲載がありません。）

（No.41 (1999 年 8 月) から「私からひと言」としてシリーズ化されました）

その 1: No.41 1999.8.8	金子 幸代さん、浜林 正夫さん	26
その 2: No.42 1999.11.8	本間 玲子さん、中田 重厚さん	27
その 3: No.43 2000.2.8	増田 善信さん、吉埜 和雄さん	27
その 4: No.44 2000.5.8	平山 基生さん、赤壁 毅彦さん	27
その 5: No.45 2000.8.8	天谷 和夫さん、吉田 巖さん	28
その 6: No.46 2000.11.1	北村 浩さん、木下 安子さん	28
その 7: No.47 2001.2.9	井野 隆一さん、安部 恒三さん	28
その 8: No.48 2001.5.8	瀧口 優さん、川口 裕正さん	29
その 9: No.49 2001.8.8	松山 洋さん、本谷 勲さん	29
その 10: No.50 2002.2.12	河上 茂さん、喜多 功さん	29

（No.51 (2002.5.8) では「私からひと言」を掲載していません）

その 11: No.52 2002.9.8	武藤 徹さん	30
その 12: No.53 2002.12.12	秋間 実さん、関井 友子さん	30
その 13: No.54 2003.3.5	山下 淳志郎さん、菊池 重秋さん	31
その 14: No.55 2003.6.10	小倉 正行さん、吉田 巖さん、副島 健義さん、宮村 光重さん	31
その 15: No.56 2003.9.5	幡井 勉さん、松延 周平さん、辻村 定次さん、中島 明子さん、池田 真規さん	32
その 16: No.57 2003.12.10	野田 正穂さん、神田 昭夫さん、深沢 満さん、鈴木 信子さん、伊ヶ崎暁生さん	33
その 17: No.58 2004.3.1	田宮 兵衛さん、市川富士夫さん、高鷹 敦さん、三崎 和志さん、平田 清一さん	34
その 18: No.59 2004.6.10	河野 重榮さん、小塚 恒夫さん、本田 浩邦さん、渡部 岳陽さん、東浦 康友さん	35
その 19: No.60 2004.9.4	矢野 直さん、遠藤 浩良さん	36
その 20: No.61 2004.12.10	中村 方子さん、田中 昌一さん、鈴木 剛さん、河村 豊さん、丸山 健人さん	36
その 21: No.62 2005.3.10	加藤幸三郎さん、斉木 隆さん、千葉 燎郎さん、増田 正人さん、村瀬 千明 さん	37
その 22: No.63 2005.6.10	岸部 弘さん、木下 安子さん、新倉 修さん、羽鳥 謙三さん、山村 延郎さん	38
その 23: No.64 2005.9.10	相磯富士雄さん、神田 雅尚さん、田坂 一朗さん、森川 和子さん、横山 和夫さん	39
その 24: No.65 2005.12.10	阿部 哲二さん、大重光太郎さん、角瀬 保雄さん、半谷 高久さん、干場 薫さん	40
その 25: No.66 2006.3.10	大江 京子さん、唐澤 英行さん、河村 重行さん、田畑 康誉さん、横川 秀博さん	41
その 26: No.67 2006.6.10	伊藤 セツさん、小川 政亮さん、国府田 諭さん、山部 恵造さん、吉田 喜一さん	42
その 27: No.68 2006.9.10	伊藤 高弘さん、関口 直甫さん、南雲 和夫さん、牧 穂波さん、山辺 昌彦さん	43
その 28: No.69 2006.12.10	太田 さおりさん、郡司 良さん、佐藤 正知さん、道家 達将さん、平山 基生さん	44
その 29: No.70 2007.3.10	荒井 成彦さん、古川原 明子さん、中川 直哉さん、長谷川 宏さん、宮城 晴耕さん	45
その 30: No.71 2007.6.10	安孫子誠也さん、姉齒 暁さん、石村 和弘さん、須藤 春夫さん、端山 好和さん	46
その 31: No.72 2007.9.10	尾崎 恭一さん、工藤 昌宏さん、久保田 義喜さん、遠山 千春さん、松井 安俊さん	47
その 32: No.73 2007.12.10	石田 頼房さん、小河 孝さん、標博 重さん、杉浦 公一さん、峰岸 純夫さん	48
その 33: No.74 2008.3.10	井本 三夫さん、五十子満大さん、江川 友治さん、長沼 仁さん、安富 六郎さん	49
その 33b: No.75 2008.6.10	大塚 正幸さん、小野塚知二さん、添島 幸雄さん、玉川 寛治さん、野澤 保さん	51
その 34: No.76 2008.9.10	秋谷 治人さん、大森 昌衛さん、小森 長生さん、宗倉 哲さん、三原 實さん	52

その 35 :	No.77	2008.12.10	浦田 一郎さん、川瀬 清さん、進藤 兵さん、日野川 静枝さん、四元 忠博さん	53
その 36 :	No.78	2009.3.10	藏野 秀文さん、佐藤 乙丸さん、館野 淳さん、鶴田 満彦さん、本間 喜久子さん	54
その 37 :	No.79	2009.6.10	大山 光さん、榊原 道夫さん、疋田 哲也さん、古川 範康さん、満川 常弘さん	55
その 38 :	No.80	2009.9.10	小野塚春吉さん、野口 邦和さん、村山 裕さん、横田 茂永さん、吉木 健さん	56
その 39 :	No.81	2009.12.10	明石 博行さん、小原 秀雄さん、久野 勝治さん、穂積 弘一さん、山岡 寛人さん	57
その 40 :	No.82	2010.3.10	伊豫 軍記さん、小山 博司さん、寺田 博之さん、真鍋 和裕さん、吉田 満さん	58
その 41 :	No.83	2010.6.10	田中 隆さん、成田 延雄さん、平田 熙さん、兵頭 圭介さん、山田 直利さん	60
その 42 :	No.84	2010.9.10	上坪 陽さん、木本 忠昭さん、田代 真樹さん、原 英二さん、吉田 充夫さん	61
その 42b :	No.85	2010.12.10	小林 善亮さん、土屋 十囀さん、浜林 正夫さん、日高 三郎さん、森田 靖子さん	62
その 43 :	No.86	2011.3.10	鈴木 信男さん、堤 九十生さん、本間 慎さん、武藤 徹さん、森永 茂生さん	63
その 44 :	No.87	2011.6.10	北村 実さん、小池 盛明さん、坂元 忠芳さん、兵藤 友博さん、吉松 正秀さん	64
その 45 :	No.88	2011.11.10	江指 隆年さん、笹野 武則さん、繁野 義雄さん、田村 佳子さん、吉田 傑俊さん	65
その 46 :	No.89	2012.1.10	有馬 泰紘さん、今宮 謙二さん、小沢 隆一さん、北村 浩さん、塩田 公子さん	67
その 47 :	No.90	2012.3.10	岩佐 茂さん、浦田 賢治さん、友寄 英隆さん、平塚 真樹さん、三上 満さん	68
その 48 :	No.91	2012.6.10	菊地 隆男さん、中島 良一さん、西村 一郎さん、濱口 晴彦さん、真嶋 麻子さん	69
その 49 :	No.92	2012.9.10	赤壁 毅彦さん、岡田 原史さん、島田 陽子さん、本間 一郎さん、吉田 昭治さん	70
その 50 :	No.93	2012.12.10	喜多 功さん、中島 園恵さん、中村 邦光さん、方達 重治さん、山岡 暁さん	71
その 51 :	No.94	2013.3.10	瀬戸 昌之さん、滝澤 昭義さん、永井 博さん、廣嶋 清志さん、本庄 十喜さん	72
その 52 :	No.95	2013.6.10	池上 保子さん、内田 恵子さん、梶原 渉さん、神谷 敬さん、鮫島 俊昭さん	73
その 53 :	No.96	2013.9.10	浦野 さとみさん、小川 潔さん、佐々木 隆爾さん、森 陽子さん、渡邊 章さん	74
その 54 :	No.97	2013.12.10	長内 史子さん、田中 均さん、根本山 幸夫さん、平野 忠さん、比留川 洋さん	76
その 55 :	No.98	2014.3.10	池田 有三さん、中嶋 久人さん、松村 比奈子さん、三笠 俊哉さん、山本 尊仁さん	77
その 56 :	No.99	2014.6.10	北川 和彦さん、小池 信太郎さん、土田 稔さん、平野 義尚さん、山本 厚生さん	78
その 57 :	No.100	2014.9.10	荒井 成彦さん、菊地 重秋さん、小西 祐司さん、櫻井 良堅さん、田中克範さん	79
その 58 :	No.101	2014.12.10	奥村 義治さん、島崎 隆さん、西田 滋さん、吉田 万里さん、米田 梢さん	80
その 59 :	No.102	2015.3.10	青水 司さん、秋津 貴城さん、亀井 伸治さん、川田 奈々絵さん、張替 泰子さん	81
その 60 :	No.103	2015.6.10	斉木 隆さん、高根 勝啓さん、鍋田 亮一さん、真野 茂郷さん、吉森 弘子さん	82
その 61 :	No.104	2015.9.10	河上 茂さん、衣川 清子さん、久野 勝治さん、高橋 利昌さん	83
(No.105 は、増刊号 「私からひと言」 の掲載なし)				
その 62 :	No.106	2015.12.10	秋保 親成さん、須藤 恵美さん、所 康弘さん	85
その 63 :	No.107	2016.3.10	佐藤 克春さん、白神 優理子さん、兵頭 淳史さん、古城 利明さん、渡邊 伸一さん	85
その 64 :	No.108	2015.6.10	上野 哲さん、木村 宣夫さん、白波瀬 輝夫さん、田井 勝さん、中嶋 雅登さん	86
(No.109 は、増刊号 「私からひと言」 の掲載なし)				
その 65 :	No.110	2016.9.10	赤壁 毅彦さん、坂本 宏さん、深澤 満さん、藤谷 正太さん、吉田 満さん	87
その 66 :	No.111	2016.12.10	木本 忠昭さん、小塚 恒夫さん、小西 一雄さん、田宮 兵衛さん、森田 満夫さん	89
その 67 :	No.112	2017.3.10	朝岡 晶子さん、安孫子 誠也さん、唐澤 英行さん、工藤 昌宏さん、吉田 裕さん	90
その 68 :	No.113	2017.6.10	五十子 満大さん、尾崎 恭一さん、浦田 一郎さん、疋田 哲也さん、松井 安俊さん	91
その 69 :	No.114	2017.9.10	小沢 隆一さん、宗倉 哲さん、中島 良一さん、室井 清さん、吉田 充夫さん	92
その 70 :	No.115	2017.12.10	荒井 育恵さん、井原 聰さん、土井 誠さん、前川 雄司さん、森脇 靖子さん	93

日本科学者会議東京支部個人会員ニュース「私からひと言」全編集版

- * No.2 (1990 年 7 月) から No.18 (1993 年 11 月) まで「私の一言」「新入会員の声」として随時掲載
- * No.41 (1999 年 8 月)から「私からひと言」としてシリーズ化
- * 2017 年 3 月の 50 周年記念式典までに発行された No.112(2017 年 3 月)まで収録

私の一言：個人会員ニュース No.2 1990.7.10 発行

浜林 正夫さん

日々是多忙

一橋大学を定年で退職して千葉県八千代市にある八千代国際大学へうつってから一年余になります。定年退職といっても別の大学にうつただけですから、かえって忙しくなりました。片道 2 時間半の遠距離通勤で、持ちコマ数は 3 コマと少ない方ですが、往復 5 時間で 2 日通うと、くたびれます。あと 1 日は中央大学文学部へ非常勤で出かけ、土、日曜などは講演やいろいろな団体の会議でたいていふさがるので、週休一日もなかなかとれません。しかしまあこれだけの日程をなんとか無事にこなしていけるのは元気な証拠と思っています。健康の方は五十肩もギックリ腰も高血圧もなく、心配なのはふとりすぎだけ。今年は国際歴史学会でスペインへいくつもりです。(はまばやし まさお)

北田 ヒデ子さん

「平和の波」を津津浦浦に

第一回原水爆禁止世界大会に、埼玉県代表団の一員として参加してから今年、被爆 45 年を迎えた。

手作りのポスター、はじめての街頭募金。市民運動となった原水爆禁止運動に親の賛同を得られた喜び。被爆者の家に泊まって夜のふけるのも忘れて語りあかした世界大会の熱気。

それらは、命の尊さと、平和を守る大切さを、感動と共に教えてくれ、働く礎となった。

世界各地に反核平和運動が広がり、今「平和の波」の成功に胸を熱くしているこの頃です。

(きただ ひでこ)

木下 安子さん

看護問題

病院入院費一日あたり米国 360 ドル・英国 140 ドルに対し、高度医療では先端に行く日本は 60 ドルと極端に低い。原因は人員の極度の切り詰めと労働条件の劣悪さによっている。殊に看護婦は超過密なスケジュールをこなし、人間的な生活時間を持てないでいる。検査や処置に追われ、本来の生活行動援助ははぶかれ家族負担となっていく。看護婦の需要は高いがその養成に公共的努力が弱く、大学課程の養成機関はごく僅かである。ある厚生省のOBが、医療は看護婦問題から崩壊すると語る。緊急に国民の理解と協力に対策をたてなければならぬ。

(きのした やすこ)

高橋 明士さん

都市問題委員として

外環道路の建設に反対する住民運動をやっています。

科学者会議の方々には、この道路の大泉区間（練馬区）で、環境アセスメントが行われた際に大変お世話になりました。その後、環境問題委員会に時々、参加させて貰っていましたが、都市問題委員会の再開とともにメンバーになりました。

道路問題に関わることから、環境や都市の在り方というように関心がひろがり、科学者でも専門家でもありませんが、会員となって勉強しているところです。

本職は業界新聞の記者。三多摩に住民の手による情報ネットワークをつくろうと『多摩新報』を月 1 回発行してきましたが、志は大きかったものの、商売気に欠け 100 号で廃刊。都市問題委員会の大屋鍾吾委員長から「ヒマができたろう」と声をかけられたのがウンのつき。委員会の雑務係を引き受けましたが、ずるずるといきそう、暗い気持ちになっているところです。

(たかはし あきのり)

私の一言：個人会員ニュース No.3 1990.10.8 発行

荻原 裕さん

北海道からの便り

北海道の田舎町に移り住み半年になりますが、過疎の実態を否応なしに体験させられています。その筆頭は、出版物が手に入らないこと。町には書店はなく、30 キロ離れた街でも注文すれば一月かかる。充実しているとの噂の図書館も今一つ。かと言って東京の知人に頼むにも電話代が……。自称「科学者崩れ」の私の研究意欲も削がれてしまいそうです。けれども、町の九割を占める森に目を転ずれば、そこには多くの野生動物。夏にはクマタカとクマガラの巣を見ることができ、自然指向派の私を満足させてくれます。都会の情報にとらわれず、澄んだ目で自然のなりわいを見つめるには最適な町なのかもしれません。こんなことを考えつつ山ばかりを歩いている毎日です。(おぎわら ひろし)

川口 啓明さん

「科学フリーター」として

私は自称「科学フリーター」と名のついていて雑多なことにかかわっているのだが、最近は環境問題での話を求められることが多い。そこで、地球環境問題から、MAB 計画、現代科学技術の特徴などを話すのだが、とりあえず最後は「パパラギ」の話だ。環境問題は「パパラギ」的悲喜劇の典型みたいなもので、現代社会を崩壊させなければ解決の道なんてないと、私自身は思っている（聴衆に良識派の多そうな場合は、社会の「崩壊」でなく「根本的な変革」と言い換えるが）。さてそこで、社会を崩壊させることができるかどうかだが、東欧の最近の事例などの分析を、こういう観点からアカデミックな社会学者に期待したいのだが、どうなのであろうか？

(かわぐち ひろあき)

長田 良夫さん

個人会員の声

民間企業P社の研究開発部門で働く者です。私の職場には、もう一人個人会員がいますが、職場では分会活動的なことはほとんど不可能です。J S Aの会員になって、はじめはみんな、分会活動をつうじてのJ S Aの意義を身につけるのが普通なのですが、私の場合はそれが無く、入会后三年目で、もう退会しようと思ったときに、民間企業の会員の集まりができました(1979年3月3日第一回東京民間懇)。個人会員どうしの交流の場としての「個人会員ニュース」に、大いに期待しています。

(ながた よしお)

新入会員の声：個人会員ニュース No.5 1991.3.8 発行

鴨川 孝司さん

豊肥本線の鉄橋流出、現地調査に参加して

「科学者でなくても科学者会議に入ることは出来るんだから入りなさい」という有難い山口孝先生のお誘いを受け、会員となりましたホヤホヤの者です。一昨年結成したナショナルセンター全労連の役員をしていて、社会科学の理論なしには羅針盤を失った船のように、どこに向かうのか判らなくなる運動にたずさわっているし、日頃、大勢の先生に御支援願っているものですから、まったく縁がないという訳ではないと思っています。

いろんな分野のことを知る機会にしたいと思っていますのでよろしくお願いします。

先日、全労連の調査団の一員として、九州の豊肥本線の現地調査に参加してきました。昨年7月2日、一時間に600ミリをこえる豪雨によって三つの鉄橋が流出したのをはじめ、築堤の崩壊、線路の流出などによって豊肥本線は寸断されました。

「あの鉄橋が流されたといっても誰も信用しませんでした」、「植林した杉が根こそぎ流されてくるのは本当に恐ろしいものでした」と地元の人も語っていましたが、現場にたって倒れた橋桁を目前にしても信じられない洪水の恐ろしさです。

もっと恐ろしいと思ったのは、鉄橋の流出を格好の理由として、赤字の豊肥本線を廃線にしようというJR九州の悪知恵でした。幸い住民の運動で復旧は決まりましたが、まだ、廃線となる危険は残っています。運動の流れをどう作るか、これは科学の世界ではないのですが、喜びを発見することもあるのです。

(かもがわ たかじ・全国労働組合総連合役員)

永島 淳一さん

「やりたいこと、いっぱいあります。よろしく。」

はじめまして、大学生生活協同組合連合会(東京都中野区)で常務理事・学生委員長をしている永島淳一と言います。岩手大学の工学部に所属している学生ですが、大学入学時から生協運動にかかわり現在に至っています。

科学者会議との出会いは岩手大にいた頃、学内連帯とし協力したことが始まりだと思います。大学審議会法案反対やSSDⅢ代表派遣のとりくみ等が思い出にあります。実は、昨年こちらにきてから科学者会議編集の「大

学の平和学習」の執筆と、第8回総合学術研究集会での報告といったチャンスを戴きまして、集会のレセプションのおり、薦められる(おだてられる)ままに個人会員になってしまいました。「どう考えても俺は科学者じゃないよな」という素朴な疑問もありましたが、「どうぞ、どうぞ」と言われたので何か見つかる嬉しいという気持ちで入会しました。という訳で、どうぞ宜しくお願いします。

個人会員になってやりたいと思っているのは、自分のキャパシティを広げたい、科学することを学びたい、沢山のひとと知り合いになりたい、大学生協の運動や自分のやっていることを広げていきたい、といったところです。(欲張りですね)。今、興味があるのは「協同組合と基本的価値」と、「子供の権利条約」についてです。公私問わず、連絡とか戴けるととっても嬉しいです。

(ながしま じゅんいち・大学生協連学生委員長)

新入会員の声：個人会員ニュース No.18 1993.11.8 発行

廣島 清志さん

国立研究所の現状

総定員法による国立研究所の定員削減は、研究課題の再検討もなく自動的に行われる。

定員を確保するためには大蔵省や総務庁が納得する新たな研究課題を抱え込まなければならない。その結果、定員の減少は避けられたとしてもその代わりに新たな研究課題だけが増える。また、コンピュータは研究者各人の研究の必須条件となり、ますます高度な利用が必要とされているが、小さい研究所では専門の人を置くと経験年数に応じた処遇ができないので、その整備に当たる人員は確保できないし、外注すれば莫大な予算を要する。研究者が片手間にやらざるを得ず、世の中の進歩にしだいに取り残されていく。真綿で首を締められているように感じる国立研究所の状況である。

(ひろしま きよし・厚生省人口問題研究所・人口学)

吉田 義美さん

病院給食の有料化阻止を

政府は、来年4月の診療報酬改定で、病院給食を保険から外そうとしています。色々な計算方法がありますが、給食料1日1,400円×30日約4万2千円、室料その他包帯や注射器等の医療器材も保険から外して患者負担にする計画がなされています。外来で病院にかかっても、これからは窓口でかなりの額を支払わなければならないようになります。医療政策の改悪を阻止させる国民医療改善1,000万署名に協力をお願いします。

(よしだ よしみ・東京女子医大病院・調理師)

* No.19 (1994年2月) から No.25 (1995年8月) まで
は掲載がありません。

新入会員の声：個人会員ニュース No.26 1995.11.9 発行

菊池 頌子さん

現場の労働者ですから、「科学者」の言葉には程遠い存

在で、私の入会する団体ではないと思っていました。今回、社会医学研究会で指導を頂いています先生から薬害問題についての世話人の依頼があり、推薦を受けて入会をさせて頂きました。公衆衛生も国の行革の波を受け、保健所の半減化を中心に最悪の事態を迎えています。是非とも研究に携わっている先生方のご援助を受け、健康科学の面から公衆衛生の再構築を図りたいと思います。

(きくち しょうこ・公衆衛生)

神田 雅尚さん

資本論と哲学の研究会をそれぞれ少人数で行ってきました。しかし生かす場がなかったので、このたび入会しました。

今後は、「歴史の中の経営労務論」「民主的歳入歳出のあり方としての財務論」などを研究したいと思っています。

期待していることは、いっしょに研究できる仲間がほしいということです。

(かんだ まさあき)

朝倉 幹晴さん

大気汚染による喘息と車社会の関係、薬害エイズなど、人命を脅かす公害薬害に強い憤りをおぼえる。研究者でないが生物教師として市民として科学を学び、公害薬害反対運動に役立てて行きたい。

(あさくら みきはる)

吉田 喜一さん

以前から入会したいと思っていましたが、推薦人になっていただける方が周りにおらず、今回十総学で会員になることができました。

専門は機械力学・工作機械ですが技術論、技術史、技術教育論に興味・関心が移っています。機械学会、精密工学会でそちらの方の活動も行っております。職場あてに連絡をお願いします。

(よしだ きいち・都立航空工業高等専門学校機械工学科
〒116 荒川区南千住 8 の 52 の 1 Tel. 3301-0145)

金子 幸代さん

森鷗外研究を専門とし、神奈川県立外国語短大の専任講師となって 6 年目を迎えた本年 4 月に突然解雇され、県人事委員会と横浜地裁に免職処分取り消しの訴訟をしています。民主的な大学作りをしてきた女性を排除しようと、課題も知らせないで決議し、県教育委員会も事実調査を行わないまま 1 週間で辞令を出した不当な解雇です。解雇撤回の署名活動を行っていますので支援をお願いする次第です。

(かねこ さちよ・日本文学)

唐沢 英行さん

ニコンで多地点TV会議などのシステムの仕事をしています。海部先生とは、高校生の頃に雑誌で知り合い、アマチュア天文研究会を作って観測をしていました。今でもその会は、「月、惑星研究会」として日本でもレベルの高い研究会となっています。十総学の講演会を機に入会させていただきました。地球環境問題や原発の安全性問題について関心をもっていますので、よろしくお願い致します。

(からさわ ひでゆき)

* No.27 (1996 年 2 月) から No.40 (1999 年 5 月) までは掲載がありません。

* No.41 (1999 年 8 月) から「私からひと言」としてシリーズ化されました。

その 1: 個人会員ニュース No.41 1999.8.8 発行

金子 幸代さん

不当解雇撤回へのご支援いただきまして誠にありがとうございます。いつも励まされ心強く、本当にありがとうございました。存じております。

6 月 8 日、解雇理由作りに起こされた「セクハラ」名誉毀損裁判は、一審で認められた証拠に一切ふれずに、「セクハラを認めるに足る的確な証拠がない」と断定する不当な逆転敗訴判決が出、最高裁に上告してたたかうことになりました。セクハラ裁判で有名な角田由紀子弁護士にも加わってもらい、上告理由書の作成にとりかかっています。足をつかって証言や証拠を集めていくねばりつよさが必要だと痛感しました。

現在、不当解雇撤回裁判の方は、7 月 8 日に一回目の本人尋問が終わったところです。

「英知を結集して今度こそ勝利を」と、気をひきしめて準備を進めています。9 月 14 日、11 月 25 日の原告本人尋問を成功させ、教壇復帰を勝ち取るために傍聴支援をお願いします。

(かねこ さちよ)

浜林 正夫さん

一橋大学を定年退職後、千葉県八千代市にある八千代国際大学(昨年から秀明大学と校名変更)につとめていましたが、昨年 3 月にこれも退職し、その後、非常勤で週 1 回通っていましたが、それもこの 5 月でやめました。それは非常勤を委嘱するのに契約書への署名捺印を要求し、しかもその内容が創立者の意思や建学の精神を尊重せよとか、法人の経営に口を出すとか、法人の名誉を傷つけるなどか、契約書というより誓約書のようなものだったので、署名捺印を拒否したためです。

私はそれでさっぱりしたのですが、同じころに助教が 1 名解雇されました。理由はたいへんあいまいですが、裏口入学があるなどといって大学の名誉を傷つけたということのようです。これから裁判をおこすことになるでしょう。秀明大学は特にひどいワンマン体制なのですが、どこの大学でも管理体制が厳しくなってきました。おたがいがんばりましょう。

(はまばやし まさお)

その2： 個人会員ニュース No.42 1999.11.8 発行

本間 玲子さん

日頃気にかかっていること、関係ある者の一人として、責任を感じているものに、国立感染症研究所（旧予研）の「移転問題」がある。大会の席上ではきまって、JSAとして討議するよう強く要請されてきた問題である。

一方、感染研では、この発言がたび重ねられるために、JSAから離れた気分になっている会員が少なくない。

すでに常任幹事会からは、本問題に熱心に対応してきた一役員の不幸な逝去のあったこと、また現状では討議することの意義などについて異論があった旨の説明がなされてきた。たしかに、JSA内部に混乱を持ち込む危険性が考えられる上に、得られる成果が期待できない、との判断もある。しかし、なおも集会の度にJSAとして討議すべきという要請が繰り返されている現状を思うと、このままでは会員相互間の亀裂を深める結果を招きかねないとの危惧を抱く。平行線に終わることも十分考えられようが、一度はJSAとして討議の場を設けた方が良いのではないだろうか。（ほんま れいこ・元国立予研）

中田 重厚さん

先日、ブライアン君というアメリカの一青年とたまたま話をする機会があり、先の国会で成立した諸悪法について私に聞いてきました。「こんど成立した国旗・国歌法案についてあなたはどうかお考えですか。日本の national anthem の KIMIGAYO とはどういう意味なのでしょう。」そこで私はこう答えました。「KIMIGAYO の KIMI とは天皇のことで、歌詞の意味は天皇の世が末永く続くということです」といい、すかさず、つぎのことをつけ加えました。「この歌の意味からすると、天皇がすべて（all）であり、私たち国民はゼロ（無）（nothing）に等しいということなのです。」彼は、なるほどというようにうなずいて聞いていました。

一連の会話のやりとりの最後に、ブライアン君はつぎのように言いました。「私たちアメリカ人は、子供の頃から自国の国旗には慣れ親しんできました。」“I think that you Japanese, also, have sung the national anthem “KIMIGAYO” over and over again since childhood. Do you know it by heart?” そこで、私はちょっと間を置いてからつぎのように答えました。“No, I don't know it by heart. I forgot it thoroughly.” 彼は声を立てて笑い、私もクッククッと笑いました。彼との会話を通じて、改めて事の重大さに気付かされた次第です。

（なかた しげあつ）

その3： 個人会員ニュース No.43 2000.2.8 発行

増田 善信さん

吉野川の可動堰計画の是非を問う住民投票は、反対票が9割を超して大きく成功した。建設省は「150年に一度の洪水に耐えるため」という98年7月の建設審議委員会の答申を根拠にしており、一方、反対側は「現堰の補修、堤防の補強、上流の山林の保護や水害保護林の整備など総合的・合理的治水対策で十分」という。この両方に科学者が関与し、それぞれ、科学的な根拠を与えてい

る。これをどう考えたらいいのであろう。

一般に、審議会に出る科学者は「名の通った」学会のボスであり、反対運動などに参加しているのは「無名」の科学者である。しかし、長良川河口堰にしても、諫早湾干拓事業にしても、反対運動をおさえて強行した事業は、「お抱え」科学者の言明と違った結果が出ている。学会のボスなどの「お墨つき」がいかに大きな罪悪をもたらしていることか。

日本科学者会議の会員は学会内でこのような科学者を厳しく糾弾すべきだし、学会外ではもっと積極的に「無名の科学者」として住民運動に参加すべきであろう。そのことが科学者会議の権威を高め、ひいては科学者会議の活性化につながるであろう。（ますだ よしのぶ）

吉埜 和雄さん

都立高校で物理を教えています。科学者ではないので断っていましたが、魅力ある推めと、打算もあって入りました。

打算1. 私は科学教育研究協議会（科教協）に参加し、自然科学をすべての子どもたちのものにしたいと、仲間と一緒に研究を続けてきています。自然科学教育は大変厳しい状況です。科教協の研究・運動にぜひ科学者会議の多くの方々に参加していただきたいと思っています。そのつて。

打算2. 私は今、科教協責任編集の『理科教育』という月刊誌の編集代表をしています。編集委員は小中高校の教員です。編集方針は「自然科学をすべての国民のものにする」ために、＜実践から学ぶこと＞、＜科学史から学ぶこと＞、＜自然科学から学ぶこと＞です。科学者会議の方々に是非読者になっていただきたい。また、自然科学の研究を目指す若い人々にも、是非進めていただきたい。さらに、研究されている専門分野に関わって、あるいは大学教育に関わって、是非ご執筆をしていただきたい、と願っています。（よしの かずお）

その4： 個人会員ニュース No.44 2000.5.8 発行

平山 基生さん

財団法人・文部省指定学術研究機関政治経済研究所沖縄研究室長をやっています。合わせて、ユーラシア研究所（旧ソビエト研究所）事務局長も兼務。

今、必死でやっているのは、沖縄サミット初日に地元2紙に和英両文で「米軍基地NO」の意見広告を出す運動です。なにせ、諸費用をいれて一千万円近くかかるので、どうやって賛同金を頂くか。呼びかけ人は約160人で、「那覇軍港、普天間基地の県内移設に反対する沖縄県民会議」代表、那覇市のヘリ基地反対協代表をはじめ、各地の市民運動の方がた、全労連議長、詩人その他、学者・文化人、社民党・共産党国会議員、県議会、市議会議員などが超党派で結集しています。内外1,000人を超すジャーナリストが結集するこの機会に、「名護に、沖縄に、日本に基地はいらない」の声を全世界に伝え、米軍基地も戦争もない21世紀を迎えるために、科学者会議のみなさんのご協力を心から訴えます。（ひらやま もとお）

赤壁 毅彦さん

日比谷線脱線衝突事故から約 1 ケ月、鉄道事故調査検討会の走行実験により、原因は解明される方向に大きく動き出した。いくつもの条件が重なった（競合した）結果、車輪がせり上がったとのことで、まことに事故原因は一筋縄ではない。

私の職場にも、日々、様々な事故品が原因調査のために送られてくる。2〜3 枚の「証拠写真」だけで、本ボシを上げることも多いが、手をかえ品をかえての調査の末、原因がいくつも出てくることもある。そして、なぜかわしいのが、自社責任と下請責任によるものだ。

一つ一つの故障原因の他に、自社責任と下請責任による故障が多発する、構造的要因の解析も大切である。その要因もいろいろであるが、納期・部品調達・技能伝承・品質チェック・・・などの問題があり、体質改善が必要である。（あかかべ たけひこ）

その 5：個人会員ニュース No.45 2000.8.8 発行

天谷 和夫さん

美濃部革新都政の時代、科学者会議の会員であったために公害監視委員会委員になり様々な問題に係わった。都民参加の都政のシンボルであった委員会であったが、私の体験からみると、その趣旨は十分に生かされなかった。それは ① いわゆる光化学スモッグの重症被害の原因究明、② 簡易測定法を利用した都民参加の大気汚染測定、③ 亜硫酸ガス測定器の管理ミスの問題 で公害監視委員の専門家として提案したことが受け入れられないまま 2 期 4 年の任期で不当な条件を押し付けられ辞めさせられたことである。そのため、国や自治体の大気汚染行政は後退を続け、1997 年参議院環境特別委員会の公聴会で公述したような様々な問題が生じている。遅くなりましたが、当時果たせなかった責任を果たすため、上に述べた未解決の問題をふたたび具体的に取り上げ、行き詰まった日本の政治を市民の意見や提案が生かせる市民参加の行政をつくっていく突破口としたい。皆様の協力をお願いします。（あまや かずお）

吉田 巖さん

V 研（科学ビデオ研究会・略称）のビデオサロンはすでに“ウイルス”（生物学総合談話会と共催）と“宇宙”を主題に 2 回開催した。参加者は主題関連の研究者、他分野の研究者そして多彩な職業の一般の方たち。このような顔ぶれから当然、主題についての認識や関心は様ではない。V・S の特徴は開催テーマの分野の研究者から、ホットな情報を得られること。映像資料という「メディアの特徴」から、報告や討論の理解を助けられて、楽しく一定の共通認識と、多角的な問題意識を得られることにあると考えている。専門性の異なる人々による幅広い討論や問題提起は、主題への新たな関心を生む。この法則的な関係を“科学を国民のものに”という J S A の基本課題の実践と、新しく会員を迎える契機としていけないだろうか・・・ そんな期待がふくらんでいる。この他、V 研では分会や班の活動に有効利用できるさまざまな映像リストの作成をめざしている。

皆さんのご協力を！（よしだ いわお）

その 6：個人会員ニュース No.46 2000.11.1 発行

北村 浩さん

私と科学者会議との関係は、現在「日本の科学者」の編集委員をしているということが中心になっています。できるだけ読み易く、なおかつ内容のある雑誌にしていきたいと日々努力しております。今後ともご意見、ご批判等をよろしくお願いいたします。

私の専門についてですが、主に現代政治思想と平和研究です。平和研究では、最近の「日本の科学者」に書きましたように、ドイツの戦後意識や戦争責任の問題を中心に勉強しています。また、東京支部にもご協力いただいている「平和資料センター」への募金活動との関係から、力を入れています。

現代政治思想に関しては、英語圏やドイツ語圏の新しい動向に注目しています。特に最近では様々な論争や論点があり、目が離せません。とりわけ民主主義をめぐる論議について興味をもっています。機会があれば、それについてご紹介できれば、と思います。

（きたむら ひろし）

木下 安子さん

看護技術と医療事故

毎日のように医療過誤が報道され、またかと無念な思いに駆られます。医療先進国で高度医療が発展しながら、それに伴う職員の増員や質の確保については、後進国なみの状態です。看護職員は、未だに中学卒業を基礎とする 2 年養成の准看護婦免許を与えています。しかも超過密な医療現場では誰もが同様の責任を果たさなければならぬのです。最近になって看護基礎教育を四年制大学に切り替えることが進み、本年 80 校を越えました。しかしこれ以上は増やせないのではとささやかれています。修士・博士課程はさらに酷しい状況です。国民の命を護る科学技術がこれほど軽視され、その上、高齢社会への対応で介護福祉士やホームヘルパーが誕生するや、看護が担うべき業務も介護へ委譲の方向が考えられています。住民の医療に向けられる眼が厳しくなっているこの時こそ、住民とともに看護の充実をはかる運動が進められなければならないと考えます。（きのした やすこ）

その 7：個人会員ニュース No.47 2001.2.9 発行

井野 隆一さん

科学者会議の創設以来加入し、かつては専攻の分野を中心に、かなり熱心にいろいろの行動に参加してきました。しかし、最近は寄る年波に勝てず、遠出の行動が億劫になってきたので、失礼しつつ、「日本科学者」の読者だけの会員になって、申し訳なく思っています。そのなかで、科学者会議の運動が各分野の若い方々によって担われていることを、うれしく思っています。

私は、数年まえにライフワークとして、日本農業の戦後史の著作をまとめましたが、世紀の転換点に立ってそれを補完する新著をいま準備中です。それと同時に、地元で、地域の革新懇などに力を入れています。科学者会議も革新懇のように、地域で定期的な集いをもち、地

域の問題を語り合う場ができれば、私たちのような老人も参加できるのに、と思っています。

(いの りゅういち・農業問題研究者)

安部 愼三さん

大学紛争のときに院生として動いていましたが、非常勤講師になってしばらく経つと、ただ「日本の科学者」だけが送られてきて、たまに的違いの誘いがあるだけの会員になっていました。院生のときに JSA のおもしろさは体験していましたから、「個人会員」としての活動の呼びかけがあったときには、行ってみておもしろくなかったら JSA そのものもやめてしまおう、と思っていました。

それほどおもしろかったわけではなかったのですが、そのうち個人会員世話人になり、支部の常任幹事をやり、全国にも顔を出しています。少しでも良いと思われる行動には賛意を表するものですから、原水協、平和委員会、革新懇、非核政府の会、原発運動 3 団体、自治研、非常勤講師組合、などなどたいへん。専門の研究会の世話人、4 校での講師も。活動が多様だから飽きないけれど、収入の低さに憤りを感じています。

(あべ けんどう・化学・植物色素)

その 8 : 個人会員ニュース No.48 2001.5.8 発行

瀧口 優さん

「平和の文化をきずく会」

2000 年は「平和の文化国際年」、2001 年から 2010 年は「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際 10 年」で、いづれも国連が 21 世紀を視野に入れて決議したものです。私たちは 2000 年の 1 月に「平和の文化をきずく会（以下「きずく会」）を設立し、国連やユネスコの運動に協力しながら、この日本においても「平和の文化」を実現するために努力しています。私はその事務局を担当しています。

3 月に東京・世田谷の区民会館で「きずく会」についての話をさせていただき、日本科学者会議へのお誘いを受けました。いったいどんな会なのかあまり考えもせず、雑誌「日本の科学者」を読みながら、自分なりのイメージをつくりました。現在は白梅学園短期大学で英語を教え、新英語教育研究会、教育科学研究会、日本平和学会などのメンバーでもあります。日々忙しさに追われていますが、「科学者」にふさわしい研究や実践に心掛けたいと思っていますので、よろしくお願いします。

(たきぐち まさる)

川口 裕正さん

日本では、戦前・戦中のファシズムと科学の関係についてきちんとした考察がなされていないように思います。特に数学と自然科学について、数学と自然科学はファシズムと無関係と思っているかのようなふしがあります。J・オルフ＝ナータン編「第三帝国下の科学」（法政大学出版局、1996 年）を読むと、ドイツのナチズム時代に数学界と物理学界がナチによってどのように攻撃されたかが書かれています。アインシュタインの相対性理論が激しく攻撃されました。また、この本では、この時代に数学者や物理学者がどのような行動をとったかが述べられ

ています。ファシズムは真理と真実を憎悪します。私たちは、科学的真理と人間としての真実をファシズムから守りたいと思います。（かわぐち ひろまさ・物理学）

その 9 : 個人会員ニュース No.49 2001.8.8 発行

松山 洋さん

皆さん、はじめまして。この度日本科学者会議に入会させていただくことになりました松山と申します。私が本会に入会しようと思ったのは、学部時代に科学者会議編集の「研究の世界」を読んだことにあります。特に、「タコツボ型の研究の問題」「市民の一人としての科学者」「科学者の社会的責任」などの主張は、他の学会にはない独自性を感じました。

私の研究テーマは「現代における福祉国家の再構築」です。昨今のネオ・リベラリズムの席卷とその下での若年層の個人主義化の動向を念頭に置いたとき、日本の将来において新たな福祉国家の構築はいろいろな困難に直面するだろうと考えるからです。特に、新たな福祉国家を支えるエートスの創出・維持の可能性について思想的に検討していきたいと考えています。目下、A・スミス、J・ロールズ、R・ドゥオーキン、T・ネーゲルといった欧米の政治思想に注目しています。

自分の研究と社会との接点を念頭に置きつつ、今後とも研究に励みたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

(まつやま ひろし・中央大学大学院法学研究科博士前期課程)

本谷 勲さん

世の中は「循環型社会」を目指すことになっている。その主役はリサイクルである。アルミや鉄の缶は優等生あつかいだ。それだけではない。実際は似て非なる方向を向いていても、循環型社会指向という看板さえ掲げれば許容されるという風潮がすでにある。建前が本音の隠微に使われることがまかり通る日本の社会のつねではあるが。

誰もが承知のように、日本は食糧の大半を輸入している。これを有効に利用し、廃棄物も堆肥化したり、バイオガス化すれば、循環型には合致するだろう。しかし、食糧に含まれる窒素、リンなどの無機物を循環させる現実的な技術はまだない。これらの無機物は日本の国土に蓄積する。湖沼、河川、沿海における毎年ように発生する赤潮は、一部は輸入食糧に由来する無機物汚染によると言われる。窒素、リンなどの増加が土壌中の微生物群集の組成に影響し、マツタケが減少していると説く人もいる。

循環型社会の実にの注目したい。

(もとたに いさお・環境問題研究者)

その 10 : 個人会員ニュース No.50 2002.2.12 発行

河上 茂さん

大企業の技術者として 30 年近く仕事を続けている。事業企画から現場でのトラブル処理、若手技術者の育成にいたる会社での本務に加え、国内外の学会・協会活動

を含む産業界の科学・技術活動の全てに関わっている。繁忙を極める身で分析のいとまはないが、日本の科学者・技術者の今日的課題を肌で感じることができる。大勢を要約すれば、

一企業の社会的責任感覚が失われている 政府と企業が長年続けて来た、特に経済的な強者追従・弱者圧迫の累積が、彼ら自らの手足すら縛り、解決策を見出せない。
一研究者・技術者が展望を持ち得ない 迷走する科学・技術政策と企業の猫の目のような技術施策のゆえに、狭隘な自己実現に走るか、命令追従・自己防衛にいそしむ。

一生活者、市民の立場に立ち得ない 専門知識集団の一員として、家庭と地域と社会に貢献すべきところ、自らの生活空間と絶縁されて濡れ落ち葉化している。

劣悪な環境にいる日本の研究者・技術者、そして教育者ではあるが、その蘇生と復権と前進の手がかりと道具を我が手にし、行動する。それが J S A の場であろう。伊能忠敬は、年齢 50 歳から 25 年かけて百年の使用に耐える地図を作った。蠅螂の斧であろうとも、希望はまだある。環境的にも個人的にも未来は決してゼロではないと思っている。

(かわかみ しげる ・ 計測・制御技術者)

喜多 功さん

30 年余り岐阜支部に所属してそこそこの活動をしてきましたが、1 年前に停年を迎えて退職し、この 12 月にふるさとの東京へ戻ってきました。11 月の東京科学シンポジウムに参加して、この地域に起こっているさまざまな問題を知ることができたことは幸運でした。

40 年ぶりの東京暮らしで先ず気になったのは、毎日吸っている空気の汚れです。中野坂上（青梅街道と環状六号の交差点）という交通量の多い所でもあり、住んでいる人たちは仕方がないと思って我慢しているのでしょうか、ぼくには耐えられません。これまで大気汚染のことをあまり深刻に考えたことがなかったけれども、今や自分の切実な問題となり、関係の本を読んだり、地域の人たちの集まりで話し合ったりしています。

専門は獣医学で、主として大型野生獣（カモシカ、シカ、クマなど）を相手にしてきました。仲間づくりが当面の最大の課題です。いろいろな所に顔を出して知り合いをつくっていきたいと思っています。

(きた いさお・獣医学)

その 11：個人会員ニュース No.52 2002.9.8 発行

武藤 徹さん

わたしは、JSA の会員であった故芝田進午さんの後を受けて、予研＝感染研裁判の会の会長に選出されました。その縁で、今回入会をお願いし、認められた新人です。

この裁判は、一審では、原告の主張が認められず、敗訴しましたが、高裁では、科学裁判と位置付け、可能な資料は全部出して審理しようという姿勢なので、心強く思っています。

わたしは、東京帝大理学部数学科出身なので、情報公

開法で入手した資料を分析して被控訴人の主張の誤りを、論破しているところです。

被控訴人は、わたしの使った資料は塵埃が混入したものだのですが、もし、塵埃が混入するようなお粗末な実験を行っていたのだとすれば、国立研究所としての権威は丸つぶれになってしまいます。

この裁判では、わたしが発明した確率方眼紙が、役に立っています。

機会があればご紹介します。 (むとう とおる)

その 12：個人会員ニュース No.53 2002.12.12 発行

秋間 実さん

ここ数年（と思います）、東京支部大会で「支部参与」にご推挙いただき、恐縮しています。近況報告をさせていただきます。

74 才で。脚力は衰えましたが、頭・かっこう・口のほかにほとくに悪いところはありません。たまには上京（！）して、例えば東京支部大会に代議員として参加したりしますが、だいたいは逗子の家にいて（妻にはうとうとしいことでしょう）、ものを読んだり書いたりしています。

読んでいるのは、おもに、ナチス時代および旧「東ドイツ」時代の政治と哲学の緊張関係をめぐる内外の文献です。並行して、ドイツ語の本を翻訳しています。去年の秋に出したエンゲルス『反デューリング論』上・下（新日本出版社）は、思いもかけずに最近の『日本の科学者』11 月号の「本」のページで 稲生 勝さんがていねいに紹介・推薦してくださいました。たいへん嬉しくありがたく存じました。いまは、50 年以上も前の学生時代に感激して読んだ「首尾一貫した経験主義者」シュリック（いわゆるウィーン学団の中心人物）の主著『一般認識論』第 2 版（1925 年）。および、物理科学史の或る小さな普及書（2002 年）に取り組んでいます。出版社は未定。

翻訳はきらいではなく、この仕事でならまだいくらかは世の中のお役に立てるかもしれません。

(あきま みのる)

関井 友子さん

「アディクションにアディクト」

ジェンダー的視点から研究を行っているが、最近の関心はアディクション（嗜癖）である。アディクションとはアルコールや薬物依存症、摂食障害（過食・拒食）が代表的であるが、ギャンブルや買い物、sex などにはまってしまうこと、夢中になり、依存してしまうことだ。また、単にモノやコトだけでなく、人間関係そのものの嗜癖を共依存という。これらは一般に「こころの病」などと呼ばれるが、病気なのかどうかは判断し難いし、こころを扱う専門家でも対処が困難なものだ。私のアディクションとの出会いは、アルコール依存症男性のジェンダー的特徴という問題意識からだった。アル症は男性の病だ。同じアディクションでも摂食障害の大部分は女性である。つまり、病にも“男向き”“女向き”がある。このような現象は社会的要素抜きでは解釈や対処ができない。しかも、アディクションは現代的自我そのものの裏

返しなのである。アル症者が断酒を目標にチャレンジし挫折していく姿は、常に新しい社会に適応するために自己改革や目標設定する現代人そのものだといえ、アディクションは不断に変化する社会が生み出す必然的病理だといえる。アディクションは現代社会の写し鏡なのである。
(せきい ともこ・社会学)

その13：個人会員ニュース No.54 2003.3.5 発行

山下 淳志郎さん

真に自由な人間宣言

私達はこれまで我が国の首相がその地位に就けば必ず太平洋彼方の国へお伺い詣でをするのを見てきた。我が国の政治を司る最高責任者にとり先ず第一に大切なのは御主人様に好かれることであり、自分の国の国民の事ではないようである。だが今のK氏は殊の外御主人様に取り入っている。一昨年ニューヨーク貿易センタービル・テロ事件に関し、ブッシュが、「悪の枢軸」、「ならず者」、「戦争だ」と暴言を発すれば、待ってましたとばかりに同調、自衛隊の派遣、遂にはイージス艦の派遣など御主人に対する奴隷根性を露にし、更に新年早々靖国神社参拝の厚顔ぶりを示す彼、「自分が奴隷であるという意識を拒み」、傲慢にも主人であると思い込む今、「十全の奴隷制を発揮」(竹内 好)して愛国心教育を叫び、小学校から始まった一連の教育改革を遂に研究の自由を剥奪する企業への従属を意図した大学の法人化へと進め、国民の奴隷化を進めようとしている。「他人を奴隷化するために真に自由な人間を使用することは不可能である」(H. ノーマン)。私達は断固奴隷化に反対する。そのため奴隷化に使用されない真に自由な人間で在り続けることを宣言する。

(やました じゅんしろう・哲学・社会思想史)

菊池 重秋さん

東京工業大学・火曜日ゼミでは「技術者倫理」研究会を設けています。この会では、技術者倫理に関わるテーマで講演していただいたり、本の学習などを行っています。教材整備の意味もあり、映像資料の視聴なども行っていますが、昨年の日本では、「企業倫理(経営倫理)」や技術者倫理と関連ありそうな事故・事件が頻発しましたから、新しい映像資料候補がテレビを通じて手に入りました。(ノーベル賞受賞の明るい話題も録画しました!) 私個人としては、この会の世話人をしながら、大学非常勤講師組合と二足のわらじを履く感じで、少しずつ勉強しています。また、毎日のように新聞各社HP掲載の記事(無料)を見て、参考資料やヒントにしています。その中で思ったことですが、「研究者(科学者)倫理」や「アカデミック・ハラスメント」(セクハラと職場いびりの大学版)の分野も、日本では、技術者倫理と同様に未発達に見えます。私としては、明るいオープンな日本社会を実現するために、「カギ括弧」で括ったような分野を高等教育でも取り入れて欲しいと思っています。

(きくち しげあき・科学技術史)

その14：個人会員ニュース No.55 2003.6.10 発行

小倉 正行さん

私の職場でもある国会では、有事法制及び個人情報保護法案とともに食品安全基本法案及び食品衛生法改正案などの食品安全性にかかわる重要法案が十数本提出され、食品安全国会とも言える様相を示しています。1995年の食品衛生法改悪案がわずか3時間の審議(参議院)で成立されてしまった苦い経験がある中で、どれだけ充実した審議ができるのかが、私の関心事でありました。幸いなことに、各党とも食品安全基本法案に真剣に取り組み、審議時間は基本法案だけでも衆議院で18時間に及びました。また、私がこれまで系統的に追求してきた輸入食品検査の空洞化問題にも各野党とも訴求し、輸入食品の検査体制の強化を求めたことは、今後の展望をひらくうえで重要だと受け止めています。それに対して、厚生労働大臣が、検査所における食品衛生監視員の人員及び体制の抜本的強化に後ろ向きの姿勢に終始したことは、厳しく問われなければならないし、食品安全国会の全貌について、改めて総括しなければならないと感じている今日この頃です。
(おぐら まさゆき)

吉田 巖さん

情報化時代の呼称に反して、私たちが本当に必要とする情報の提起—とりわけ映像は極めて少ない。例えばJSA会員の諸活動のように社会的、歴史的に伝えられるべき映像情報などがそれだ。となると、これは自分たちで発信していくしかない。

JSAの特徴は、会員が社会発展の動向を鋭敏にみとおす感性をもって「多様な分野」の研究や社会的活動に関わっていることだと思う。このようなJSAの特徴は、明日をどう展望しようかと思い悩んでいる若者たち、あるいはさまざまな分野で、特定の勢力の奉仕者に仕立て上げようとする圧力がつよめられている現状のもとでは、極めて貴重なものだ。

そこでJSA会員のそうした姿や活動をビジュアルに伝えたり、一方、さまざまな映像資料を介して、交流や活動をさらに探求していく・・・、そんな情報展開が必要ではないか。そのための話し合い、交流をはかりたいので是非気楽に声をかけて下さい。(よしだ いわお・V研)

副島 健義さん

今年4月13日は記念すべき日になった。合併するのかしないのかを決める住民投票で反対が19,825、賛成が5,962と実に76.88%の圧倒的多数で和光市民は合併ノーの結論を出したのである。

2年前の4月、四市(埼玉県和光市、朝霞市、志木市、新座市)の合併のための法定協議会が発足して以来まる2年、合併問題を考える市民の会に参加する団体・個人は合併の市民生活への影響をつぶさに分析・検討し、その内容を市民に知らせてきた。

今回の住民運動の圧巻は、住民投票が告示された4月4日から投票日の4月13日までの10日間であった。県議選と同時に行われた運動で、宣伝カーやハンドマイクによる合併反対を呼びかける宣伝が連日行われた。特に投票日当日の宣伝ができたことは、今後の住民運動の自由

の拡大にとってきわめて貴重なものである。
(そえじま たけよし・元大阪府立大学・四市合併と和光
のまちづくりを考える市民の会)

宮村 光重さん

**藪から棒に、狼藉働くならず者
提灯持ちで、昏昏叫く、狐の群**

本当に気に入らない世の中が続いている。

2001 年春の森内閣の体たらく、上擦った青年将校まがいの小泉登場、呆れ果てる程の高支持率、靖国参拝、死んだ方が増しな位の熱帯夜。そして、9・11 テロ。

これだって、イラク攻めのための捏っつけじゃないのか。ドイツあたりでは、専らの話と聞く。当時から臭かったのは、テロ実行犯の特定が、あまりにも早く出来たことだ。

戦後半世紀もたって、もうちょっとは真面な世の中を期待したし、目指しだっただのに、情けない。今は、不敬罪こそ無いものの、女房は、小生の出掛けに、いつも窘める。外では下手なことは言わないのよ。どこで誰れがきいてて、刺されるか分からないからね。

苦しい、酷い、というが、いいんじゃないの、自分たちで選んでいるんだから。これも女房の言だ。日本人の特性の名解答かもしれない。(みやむら みつしげ)

その 1 5: 個人会員ニュース No.56 2003.9.10 発行

幡井 勉さん

21 世紀医療に漢方が採用されてから 30 年以上は経過していると思われるが、医学教育にそれが欠けたまま今日に至っている。最近全国大学の医学部や医科大学 80 校のうち、60~70 校で何らかの形で医学生への漢方教育が行われ出した。文科省はようやく重い腰を上げて、薬物教育のなかで漢方の教育をしてもよろしいという指導をするようになった。

私は 1999 年『日本の科学者』誌上で、健康保険で漢方薬の使用を認めながら、医学教育をしていないのは怠慢ではないかという点を指摘しておいた。渥美和彦氏らとともに代替療法の普及に声を上げている者の一員として体系化された世界の伝統医学が車の両輪として医療の場にもっともっと登場すべきではないかと考えているものである。

1999 年 10 月号に代替療法についての特集を組まれた編集者に敬意を表するとともに、この問題についてさらなる議論を展開していく機会を日本科学者会議でつくって下さることを期待している。(はたい べん)

松延 周平さん

官から民へ

容器リサイクル法にしても家電リサイクル法にしても経済産業省が主になって立案し、消費者すなわち市民には後で知らされる。官僚と国会議員とで話され法案が決められる。国民即ち市民はおきざり、なおざりにされ、無視されている。自民党政府ではいつまでも経団連大企業が経済産業省等省庁に癒着し、官僚と議員とがなあなあで、官僚のいいなりになっている。何をしても国会議員は官僚や企業の課長以上を呼び付けて話を聞くとい

う。何で自分で勉強をしないのか、そういう事をする暇がないのだろうか。一度国会議員の一日の後をつけ回してみたいものです。まるで今のリサイクル法は経済産業省主体じゃないですか？ これで良いのでしょうか。自民党政権を変えないと駄目だと思う。変えなければ、いつまでも官僚政治が続くし、企業と官僚がくっついてから、結局企業が国会議員を自由に操っていることになるのではないだろうか。小生にはそう思えてくる。野党連合して自民党を倒す以外にはないと思う。相変わらず永田町は前の通りで、何も変わらない。中村敦夫に依ると猿山の猿と同じに見える。選挙が終わったらどの猿山に行こうか、子分猿はどの猿の親分につこうか、又、親分猿はどの猿を子分にしようか、とそればかり。又、猿達はどの協会又企業から政治献金を貰おうか、あつせん利得を得ようか、付け届けを貰おうか、そでの下を貰おうかとしか考えていない。いつになったら政治は変わるのか？ 即ち官から民へ、民が主役の政治になるのだろうか、といつも思っている。

(まつのぶ しゅうへい)

辻村 定次さん

私は現在、建設関係の研究所の専従をしています。団体会員と個人会員の会員制です。東京支部の個人会員を対象としたニュースの発行や交流の機会づくりはなかなかよい企画ですね。実は私たちも個人会員としての日常的交流をどうするか悩んでいます。よいヒントを得た気がしています。

私は科学者でもなく、特に研究者でもないのですが、ある人の紹介で日本科学者会議の会員になりました。目的は建設関係の情報を得たいことと、学者や研究者とのつながりができることを期待したからです。でも、今のところ、機関紙にざっと目を通すだけの付き合いです。機関紙の内容は余りにも幅広く専門的で、私の興味を引く記事は多くありません。そのうち年会費の請求書が送られてきました。継続するかどうか躊躇していたら、それを見透かすように個人会員ニュースへの原稿依頼がきました。その後、私は会費を振り込みました。個人会員交流の重要性をあらためて認識させられました。

(つじむら さだじ)

中島 明子さん

ホームレスの人々への居住支援

私はこの 10 年余、住宅を失った人々への支援にかかわっている。東京山谷の“ふるさと会”に入り、当初はあてにならないボランティアとして入り、少しずつ研究を行うようになった。しかし、この分野で多様な NPO が活動し、昨年には「ホームレス自立支援法」が通るなど、激しく動く情勢に対して。「研究者として」どのようなかわりをもつかは、常に悩みである。実践活動と研究は、どちらかを行えばどちらかが疎かになる。今年の建築学会大会でもまちづくりにおける研究者と建築家のかかわりをテーマに議論されるが、現場と研究者のかかわりという課題を、現代において改めて探る必要があるのだろう。

私は居住学の立場から、ホームレスの人々への支援における居住支援に力点をおいているが、増加している家

を失って人々への支援における居住支援に力点を置いているが、増加している家を失った人々への支援には限界がある。「ホームレス」状態にならない対策こそが重要であり、冷酷な構造改革路線を転換する必要性を痛感している。
(なかじま あきこ・和洋女子大学家政学部生活環境学科)

池田 眞規さん

ソ連崩壊後の憲法9条論の新展開

冷戦時代の9条論における国側の反論は、「急迫不正の侵略に対する防衛措置を憲法は禁止していない」であった。侵略行為を予想できない冷戦後の東アジアの状況のもとでの国側の反論は、米国の軍事行動を支援する地球規模の国際貢献である。

我々の対応は、政治課題として登場してきた東アジア共同体、つまり地域集団安全保障構想である。日本に求められているのは、日本の安全を東アジアの集団安全保障体制に参加して、これにゆだねるのか、米国との同盟に安全を依存するかを選択である。

前者の選択は憲法前文の趣旨に合致し、武力によらない紛争解決機構をめざすものであると考える。現に進行中の6ヶ国協議会の行方は他人事ではなく、日本の将来がかかっているのだから、何らかの行動をとりたいと思います。
(いけだ まさのり・弁護士)

その16: 個人会員ニュース No.57 2003.12.10 発行

野田 正穂さん

法政大学に在職中は、日本の金融や証券の問題を研究し、教授していた。ところが、1980年代に、たまたま居住地近くの狭山丘陵の開発問題にとり組むようになり、開発の主体が西武鉄道であったこともあって、本来の研究課題のほか、西武鉄道をはじめとする日本の私鉄の研究にも関心を向けるようになった。

そして大学を停年で退職した後は、変化が激しく「生き馬の目を抜く」ような金融や証券の問題はしだいに手に負えなくなり、最近ではもっぱら日本の私鉄の歴史と経営問題にとり組んでいる。西武鉄道の成立と展開についての論文も十指に近くなったので、近く一本にまとめる準備をしている。

それと同時に、狭山丘陵との付き合いは今も続いており、財団法人トトロの森の理事として自然の保護に微力をつくしている。それにつけても、日本の科学者に時たまの都市問題や環境問題の論文は参考になることが多く、今後も大いに期待したいと思う。

(のだ まさほ・経済学)

神田 昭夫さん

思い出

私が日本科学者会議に入ったのは1972年頃ですが、科学者運動には熱心ではなかった。しかし、水田土壌のカドミなど重金属汚染が社会的に大きな問題になり、職場の会員が中心となって会津に調査に行くというので、私の田舎を宿代わりにして日橋川下流の農業用水の取水や田んぼの土壌調査に加わった。また、多摩ニュータウン建設が始まった頃、八王子地区は相当酪農が盛んであっ

たので、その見学会にも誘っていただいた。

ところで、私は会計をやらされていたので、毎月会費の徴収に研究室を回り、専門を越えて多くの研究者と知り合いになった。また98年には「日科」東京支部の幹事をしていた旧友で農工大のSさんの要請で、「大学における技術職員の現状と役割について」報告してほしいとの話があり、何人か集まって議論したことを覚えている。現在は、我孫子周辺に在住する農学関係者でつくる日科東葛グループの学習会や合宿に参加しており、なんとか会員としての面目を保っている。
(かんだ あきお)

深沢 満さん

無題

私が会員になったのは、勤務先の会社が「日本で初の本格的M&A」等と取りざたされた渦中であって、労組が経営分析と学習会の講師を依頼した方から勧められたことをきっかけとしています。

日頃は、「日本の科学者」「支部つうしん」「個人会員ニュース」にざっと目を通して興味ある催しに参加し、日常に埋没してしまわないような活力源を得ようとしている程度の『会員』です。そんな私の所へ、世話人から9月下旬に原稿依頼の電話があり、とまどいながらも「内容は問わず400字程度と言うし、一ヶ月半も余裕があるから何とかできるだろう」と引き受けました。実はその時、私は北陸地方へ現場出張中で、その後北海道での現場もあり、いずれも異常天候のため予定より延び延びになってしまい、11月中旬に入ろうとするつい先日帰宅した次第です。

仕事から、地方や離島などへ出向くこともあり、珍しい風景などに出会うことも多いのですが、まずは写真を紹介して報告を終わります。リュウキュウ



’98年末訪れた奄美大島、笠利町宇宿漁港(空港のすぐ北)の遊歩道にて

アサギマダラ北限の生息地における冬場の様子は、雨が降り、気温が下がると羽を閉じ、少し陽が当たると羽を広げていました。カラーだといいいのですが・・・。
(ふかざわ みつる・国際航業(株)海洋エンジニアリング部)

鈴木 信子さん

私は、今まで、送られてくる「日本の科学者」を読むだけの会員でした。今年春退職後、3つの企画に参加させていただきました。JSAが一層身近に感じられ親しみがわいてきました。「五十嵐寿さんの話を聞く会」では、少数意見を発することがきっかけとなって状況が変化していく原理を学びました。また、「第11回女性研究者・技術者全国シンポジウム」では困難に直面している女性が、周囲から励まされ、エネルギーを発して前進している事を感じました。

夏のフィールドワーク(城ヶ島と神奈川県水産総合研究所)は、新しい発見がたくさんあって、本当に楽しかったです。最先端の栽培漁業が実は不効率であること、自然力の大きさの中で獲り方を工夫する、育てる漁法の方がはるかに優位であることなど目から鱗でした。ヒラメが稚魚の時もっていた浮袋を捨てて成魚になり、海底に沈む話なども楽しかったです。このような企画には、今後も是非参加したいと思っています。ありがとうございます

いました。

(すずき のぶこ)

伊ヶ崎 暁生さん

日本の大学と憲法9条

今期から東京支部に富山支部から転籍してきました。一昨年まで8年間、富山国際大学で教職課程を担当しておりましたが、JSAには創立以来参加し、90年代に入り、科学者の権利問題委員会で『科学者の権利と地位』（資料と解説 95年）などの編集に当たり、現在も「科学者・技術者の権利・地位宣言」（仮称）作成のワーキンググループに属しています。なお大学院生や若手研究者が意欲的に研究し、論文に取り組めるように『ガイドブック研究の世界』（98年）の続編を編集中です。

10月25日、旧陸軍登戸研究所跡のフィールドワークに参加させていただきましたが、3年前訪れた中国ハルビンの「731部隊」陳列館での深刻な印象と結びつき、この研究所跡が憲法9条のもと明治大学のキャンパスになっており、このようなフィールドワークのできることの意義を考えさせられた貴重な1日でした。

(いがさき あきお)

その17: 個人会員ニュース No.58 2004.3.10 発行

田宮 兵衛さん

技術の進歩?

バーミアンにあった大きな磨崖仏が爆破された。イスラム原理主義者集団タリバーンによるとのことである。イスラム教は偶像崇拝を禁ずる宗教であるそうだ。大仏像を作ったのは仏教徒であることは間違いない。彼の地の占拠者が仏教徒からイスラム教に代わったのは何時のことであったかは知らない。大仏の足元で暮らす、または通り過ぎるイスラム教徒は、磨崖仏を長らくけしからん存在と思っていたのであろうが、簡単には破壊できなかった。爆破が成功した背景には、爆発物の強化とその普及という技術の進歩がある。

技術の進歩の不正な産物には、環境ホルモンのような目的外の副作用が予測できない化合物、日本だけでも年間一万人犠牲者を必要とした自動車、廃棄物の処理ができない原子力発電所、等々いくらでも上げられる。広辞苑によると「技術」は「科学の応用」であるそうだが。そう単純に割り切るわけにはいかないであろう。

(たみや ひょうえ・お茶の水女子大学・自然地理学)

市川 富士夫さん

昭和一桁へのメッセージ

我々の息子よりも若い人達が迷彩服を着て装甲車に乗ってイラクに派遣されている。イラクの平和と経済発展のためだという。

昭和の初期に日本が中国やアジアを侵略したときも、表向きは平和と経済であった。そのために我々は貴重な青春時代を戦争により損なわれたのである。ある者は戦死し、ある者は空襲で全てを失い、また栄養失調で結核となり。勤労働員と軍事教練のために満足な勉強もせず卒業し、虱の除去のために占領軍の兵隊に頭からDDT（殺虫剤）の粉末をかけられた。沖縄や広島・長崎の実態を知るにつけ、平和の大切さを身をもって感じている

のは我々昭和一桁に共通している。このような状況になるまでには、例えば国民精神総動員というような教育や宣伝により慣らされてきた日々があった。

自衛隊の今回のイラク派遣は、戦後の我々の反省の枠を大きくはみだした出来事である。我々が経験してきた事を若い人達に伝えることが、今、昭和一桁の役目ではないだろうか。

(いちかわ ふじお・元日本原子力研究所)

高鷹 敦さん

東京の教育はどうなる?

今、東京の教育破壊が進んでいます

ここ2、3年で教員の勤務時間が改悪され、4時退勤が5時になりました。長期休業中も勤務日になって、自宅での研修が認められなくなったり、民間の教育研究団体での研修が認められない例なども出てきています。

さらに今年から現任校8年までだった教員の異動を3～6年にし、校長の権限を強化させました。「性教育」への不当な介入は全都の「週案」提出の強制にまで発展し、教育内容まで監視しようとしています。卒業式、入学式における「国家」「国旗」の扱いも従わない教員は処分するとしています。

教員以外の学校勤務職員もどんどん削られ、葛飾区などでは用務主事は各校に1人配置になっていますが、その上今度は「事務主事を警察庁に派遣させる」なんて、何を考えているのでしょうか。

さらに来年度予算原案で教職員定数も削減しようとしています。そもそも文部科学省が少人数学級の希望調査をしたところ、都は区市町村や現場の声も聞かずに「該当なし」と回答していたのです。埼玉などでは、来年度から全県で小学校1年生が35人学級になるというのに。

科学教育研究協議会に属している私としてもう一つ許せないことは、教員が教科書の執筆することどころか出版社に意見を言うことさえ「禁止する」ということです。

(こうたか あつし)

三崎 和志さん

雑感

都立短期大学の夜間部（晴海キャンパス）では半期、美学を教えています。

戦時下で高校を終えられなかったが、昨年、正式に高校を卒業し、その《ご褒美》（彼女の言葉）で短期大学に入学されたという女性がいます。他にも20代から50代くらいまで、多くの社会人が学んでいます。高校時代、暴力事件を起こしたために好きな野球を続けられなくなり、自暴自棄になっていったンドロップ・アウトした青年が魚河岸で働きながら通ってきています。

この大学は公立大学のはたすべき役割のひとつを確実に遂行していると思います。それはトップ・エリートの人材の輩出というのとは違います。（目下の都立大の新構想なるものでは、晴海キャンパスは法科大学院にするという考えのようです）。夜だから、学費が安いから、都心にあるからという条件が揃っている。高等教育へのアクセスの可能性を広い層に広げています。これは例えば名声を高めることで学生を集める経営上の必要がある私立大学とはちがう、公立大学が担うべき重要な使命だと思う

のです。

(みさき かずし)

平田 清一さん

高校の理科の教員で、主に物理を教えています。最近関心を持っていることに階層性と環境問題があります。

物質の世界から生物の世界を経て高度な脳の機能である心の世界へと広範な自然には階層性があることがわかってきました。これを強調した階層的な自然観は現代の自然観の重要なひとつと言えないのでしょうか。科学の各フロンティアで研究が進められていますが、全体を貫く柱のひとつである階層性を更に調べていきたいと思っています。

もう一つの環境問題も多岐にわたっています。個々の現象もきちんとチェックする必要がありますが、同時に環境問題に対する基本的な考え方も重要ではないかと思っています。理科を教えながらこれらを追求し、少しずつでも教育に活かせたらと思っています。

また、個人会員の世話人もさせて頂いております。皆でフィールドワークなどの企画などを行っています。個人会員の活動を活発にするためにも世話人会への要望や意見、あるいは世話人会への参加をお待ちしています。

(ひらた せいいち)

その18: 個人会員ニュース No.59 2004.6.10 発行

河野 重榮さん

昨年旧制大学卒業 50 周年を迎えた。3 年前に大学の授業も終わったので、三十三観音めぐりをしている。先日東松山市の坂東十一番安楽寺を参拝し、吉見百穴を見て『原爆の図 丸木美術館』に足を伸ばした。

この美術館には丸木位里・丸木俊夫妻が 1950 年から 1982 年の 32 年間に共同製作した原爆図全 14 部が収められている。(第 15 部「長崎」は長崎にある)。併せて「南京大虐殺」「アウシュビッツ」「水俣」「沖縄戦」の大壁画も見る事ができる。世界の旅や童話シリーズにみられる優しい絵を描かれている夫妻が、原爆の図 14 部を始めとする、これらの大壁画を描かれた心情が身にひしひしと迫ってくる。

拙文を書いている最中に、イラク人質事件のマスコミ報道があった。国の施策に関係・関心のある人々はまずもって、丸木美術館に足を運んで丸木夫妻の心情を汲んでから憲法 9 条にしろ、自衛隊問題にしろ、景気動向にしろ・・・・・・を論じて欲しい。

(丸木美術館は、東上線 東松山駅東口より市内循環バス 25 分「浄空院入口」下車 5 分毎日 5 回 日祝運休)

(かわの しげひで)

小塚 恒夫 さん

憲法記念日を前にして

今、私達が日本国憲法を身近に感じる第二段階ではないかと思う。

最初は勿論、憲法は制定された時であり、何度も改憲が叫ばれたが、現実身をもって感じだした今がその時期にあたっている。

今では、その動きが不気味にも思える。

若い時、かつて京都府知事であった蜷川虎三さんが、

府の建物に「憲法を暮らしの中に生かそう」と書いた幟を下げたのを知り、当時は「あたりまえのことではないか」と思っていたのですが、現在ではその言葉がなんと貴重なものであったかを今になって知らされます。

憲法 9 条で「戦争の放棄」というのがありながら今は現実に自衛隊が人道支援という名目で全土が戦闘地域のイラクに派遣されている。

テレビの映像では、自衛隊員が給水車に水を入れているところしか映らず、国民もそれを人道援助と思いこむ。しかし、もっと多くの日本人がボランティアである危険なイラクで現地の人々を助けていることを巨大なマスメディアは報道しない。

今一度、私達は日本国憲法を読み直して、そこに書かれていることに、今どれだけ外れた政治が行われているかを知り、これから私達は憲法を行動の指針として活動していかなければならないと思うこの頃です。

(こづか つねお)

本田 浩邦さん

最近、講義で考えること

10 年ほど前、プレゼンテーション用のソフトが普及し始めたころ、講義で使ったら、学生が、「先生、そのデータ、フロッピーで下さい」と言ってきた。データのコピーがあれば板書しなくてもよいというのだ。結局、プリントしたものを配布することにした。

その後、携帯電話が広がり、学生が授業中に着信音を鳴らしたり、メールを打ち始めたりすることなどが問題となったが、いまや時代は一歩進んで、学生たちは携帯で板書を撮影している。実際、すでにだまって音声を録音されている場合さえあるだろうから、今更そのことを問題にしてもはじまらない。しかし授業へ来て、メールで遊んで、たまに顔をあげて板書を携帯カメラで写して帰っていくこうした学生をどう考えたものか。

授業中、学生に注意を集中させることは、いよいよ難しくなりつつある。デジタル化と情報化の中で、話の筋をつかんだり要約したりする力が落ちていくのだ。

(ほんだ くにひろ・獨協大学経済学部・アメリカ経済論)

渡部 岳陽さん

皆様はじめまして。JSA 東京支部個人会員の渡部岳陽と申します。昨年上京するまでは、宮城支部に所属していました。生まれも育ちも宮城県の生粋の「宮城っ子」です。職場は農林水産省の農林水産政策研究所*)というところで、2004 年度から大転換する米政策に対する地域の対応について研究しております。東京に来る前は大学院生をしており、「自由」に研究をしていましたが、「政府機関」に所属する研究員となった今、そうはいってられない状況になりました。これまでどちらかといえば「政策批判」的視点から研究を進めていた自分としては、なかなか難しいものがあります。ただ、こうした「批判的視点」は研究を進める大きなエネルギーですので、今後も維持していきたいと考えています。まだまだ JSA 会員としても研究者としても未熟者ですが、よろしく願いいたします。

*) <http://www.primaff.affrc.go.jp/>

(わたなべ たかあき)

東浦 康友さん

私は大阪市立大学理学部から地方公務員試験上級職林業に合格して北海道立林業試験場研究職員を 26 年半勤め、東京薬科大学生命科学部に移り生態学研究室を立ち上げました。北海道の林業は本州以南とは異なり、スギやヒノキではなく、トドマツやカラマツ、広葉樹などヨーロッパや北アメリカと共通点があります。このことから北海道林試を創ってきた先輩方はヨーロッパや北アメリカの学術雑誌を図書に多数そろえてきました。研究のフィールドは北海道有林という 60 万 ha もの実践の場がありました。このような研究環境は得難いもので、実践からの要請を理論的に考察しながら研究を進めることができましたように思います。全国の都道府県には必ず公設の試験研究機関があり、その研究機関で世界レベルの研究が出来るようになることが行政に科学の目を備える上でも、住民が科学を手にする上でも重要なことだと思います。国立の研究機関でも、公設の研究機関でも、研究職員が期限付き雇用になっていく現状を危惧しています。

(ひがしうら やすとも・森林昆虫生態学・東京薬科大学生命科学部)

その 19: 個人会員ニュース No.60 2004.9.10 発行

矢野 直さん

一核兵器実験に反対した集会へ

戦後、詳しくは 1955 年頃でしたが、アメリカは核兵器の大気圏内のテストを続けました。当時の日本国内の気象研究者は、その結果が気候に好ましくない影響を与える可能性があると考え、気象学会をあげて実験の強行に強く反対したものでした。

アメリカは我々の反対を完全に無視し、そのテストの規模を更に拡大し、更に核融合によるいわゆる水素爆弾のテストをビキニ環礁で強行しました。このテストの結果は当然のことですが全地球上の大気圏にデブリを拡散させることになりました。当時、危険区域外で操行していた日本の福龍丸事件に犠牲者を出したこともよく知られています。デブリの地球大気中の拡散は成層圏にまでひろがり、学会が警告していたように全地球上の大気にひろがりました。

気象研究者のこの警告は、そのごの大気圏内でのテストを無条件に禁止する国際協定を結ばせる一つの契機ともなりました。

(やの なおし)

遠藤 浩良さん

遠藤浩良と申します。会員暦はもう何十年になるでしょうか。古希で停年退職した大学の先生稼業ですら 40 年以上にわたり、その後既に 3 年余たっているのですから、学生時代から数えたら・・・？

もちろん無病息災とはまいりませんで、人並みに高血圧症、高尿酸血症、前立腺肥大症、それに結腸癌切除予後観察中ですが、幸い現在は“四病息災”といったらよいのでしょうか至極元気しております。

それで、国民の保健・医療・福祉に奉仕できるよう不断の生涯研修を怠らない全国の薬剤師が、何時でも何処でも、自分のパソコンで最新の情報を得、それにより地域住民の皆さんに対し真のヘルス・プロフェッショナル

として有効な活動ができるようお手伝いをすべく、e-learning の教育プログラムを提供する特定非営利活動法人 (NPO)「医療教育研究所」(<http://www.ime.or.jp>)を設立し、その理事長として張り切っています。

(えんどう ひろよし・帝京大学・前日本社会薬学会会長)

その 20: 個人会員ニュース No.61 2004.12.10 発行

中村 方子さん

私も一言

昼夜開学 (給料は一人分) の大学に 48 年間勤務して、2001 年 3 月に定年退職しました。

しかし定年を待ち受けていたかのように居住地の 260 戸の管理組合理事長の仕事が舞い込み、さらに講演や原稿の依頼の断りきれない分が結構重く、その上、国立大学法人化のプロセスをだまっていっていることができなくて、多忙な日々が続きました。そのような中で、2003 年 6 月には心房細動に見舞われ、救急救命病院で電気ショックによって三途の川岸から連れ戻していただき、2003 年 8 月には心臓の手術を受けました。

今一番取り組まなければならないと思っているのは、核兵器が地球上から廃絶される日が、一日も早く実現することを願っての行動です。

さらに、研究者として培われてきた感性と、知性を生かしながら自然探求の小さな一端にでも光を当てることができれば幸いだと思っています。(なかむら まさこ)

田中 昌一さん

捕鯨問題と地球温暖化

私が小さかった頃子供の雑誌で、日本の捕鯨船団が南氷洋に出漁し国威を発揚したという記事を見たことがある。戦後食糧増産の一翼を担って船団が再び南氷洋に出漁し、捕鯨オリンピックで各国と競い合ったが、やがて獲り過ぎがたたって鯨の数が著しく減り、1982 年には国際捕鯨委員会で、商業捕鯨の全面禁漁が議決されてしまった。委員会で科学者は繰返し捕獲削減を強く勧告していたが、捕鯨業界の反対でなかなか実現せず、結局業界は自分で自分の首を絞めることになった。最近になってようやく鯨の増加の兆候が見えてきた。

ここで二酸化炭素排出規制の京都議定書のことが思い出される。今年の異常気象などを見ていると大きな不安に駆られる。科学者の警告にもかかわらず、産業界からの反発で排出規制がなかなか進まない。鯨がいなくなっても、我々が全て飢え死にするわけではない。しかし地球温暖化は全世界の人々の生存に関わる。排出された CO₂ を回収するのは困難で、鯨のように時間が解決してくれることもない。我々は鯨の教訓に学ぶべきである。

(たなか しょういち・元東京大学海洋研究所・水産資源学)

鈴木 剛さん

私の現職は末尾にあるとおりですが、日本共産党本部で科学技術・原子力分野を担当しています。もともとは名古屋大学で素粒子論を学びオーバードクターをやっていたのですが、96 年総選挙の後に党職員・国会秘書になり、吉井英勝議員、塩川鉄也議員のもとで科学技術・原子力など

を担当し、現在にいたっています。

いま、原子力委員会で原子力長計の改定論議が行われています。その焦点は核燃料サイクルの合理性・是非です。背景には、電力自由化とも関連した再処理等のコスト問題とともに、国民世論があります。「もんじゅ」、東海再処理施設、JCO、美浜など一連の事故、あるいは動燃のビデオ隠し、東電原発損傷隠し、バックエンドコスト試算隠しなど一連の事件によって、原発・核燃料サイクルに対する国民的な不安と不信が広がっています。

この国民の不安・不信にこたえた戦後半世紀の原子力開発の総括が、今求められていると感じています。

(すずき つよし・日本共産党中央委員会学術・文化委員会事務局)

河村 豊 さん

個人会員ですが、所属は東京高専です。正式な名称は、独立行政法人国立高等専門学校機構東京工業高等専門学校です。

長い非常勤講師生活の後に、昨2003年4月に同校の教授として着任しました。大学院博士課程を満期退学後、1989年に東京理科大の非常勤講師となった時から計算すると、非常勤講師暦は13年ほどです。その間、出版社に週4日勤務したり、出版社を退社後に博士論文執筆を始め、2001年によく博士（学術）号を得ることができたり（テーマは、戦時期日本の物理学者動員に関わるもの）と、それなりの紆余曲折を経験しました。

東京高専に着任した年の12月、独法化への動きに対しても静かだったわが校で、過半数代表者選出問題を巡って、教職員有志による動きが活発になり、私がその事務を引き受けることになりました。最終的には副代表という肩書きで使用者側（校長）との交渉も行いました。この活動で、多くの教職員の方と高専を巡る課題などについて議論することができたのは収穫でした。

(かわむら ゆたか・東京高専・一般科目)

丸山 健人 さん

戦争はイヤだ！

「私からひと言」と問われれば、「戦争はイヤだ！」といたい。台風や地震のような自然現象ではなくて、戦争は人間世界で起こされる現象。人間の智慧で防ぎましょう。

戦争に不安を感じている人たちにまず求められるのは、「戦争はイヤだ！」の意思表示をすること。戦争はイヤだ！という人たちがこんなに多くいることを知れば、元気が出てくることでしょう。

(まるやま たけと・気象学者・つくば市非核平和都市宣言元発起人・九条の会賛同者)

その21：個人会員ニュース No.62 2005.3.10 発行

加藤 幸三郎 さん

北京短見

昨年11月晩秋の北京を訪れた。空港到着後、直ちに盧溝橋と改築予定の「中国人民抗日戦争記念館」に向う。オリンピック準備の高速道路から近くなり、城楼や民家の改築が盛んなのも、観光地向けか、月の名所盧溝橋の橋上も歩き憎い石畳になっていた。ただ、この記念館の

入口天井に「八つの鐘」（＝八路軍の意）が吊るされており、再度みる（37年の事変勃発）のパノラマも心に重かった。二年前に学術交流を試みた北京大学国際関係学院を訪れ、移転・新築の「陳瑞鴻楼」なるモダンで瀟洒な研究棟を見、日本との教育政策の差異を実感した。中国社会科学院日本研究所の訪問も実現、孫新副所長、高洪政治研究室主任らと巧みな日本語で意見交換ができた。有沢広巳文庫も旧蔵されている研究室は、1924年に段祺瑞政権の支配下にあった「北京市文化財」で、「清朝資料センター」の建物や旧人民大学の碑も残されていた。中国国务院の「シンクタンク」という、これらの研究機関の若い40歳台の研究者たちの「中国の未来像」を聞くと、幅広く柔軟なスケールの大きさに圧倒され、私の不勉強のみならず、「日中関係のあり方」について深刻な反省を迫られたといっても過言ではない。

(かとう こうざぶろう・近現代日本経済史・元専修大学)

斉木 隆 さん

私の専門はもともと発酵学（応用微生物学）で、エタノール（アルコール）発酵もこれに含まれる。エタノール C_2H_5OH は致酔性があり、殺菌力があり、化学溶剤、化粧品、薬品、食品工業用（防腐剤）など用途が広い。さらに最近注目を集めているのは CO_2 放出の面でニュートラルという評価の、燃料用途エタノールである。1980年頃から、コーン（米国）や、サトウキビ（ブラジル）のような農産物から製造されるエタノールが自動車用燃料として大量に使用されてきた。人間の食糧と拮抗せず、大量に存在する未利用の農産廃棄物や木質などセルロース系原料からもエタノール製造が、技術的には可能であることは知られていた。これが工業的に安価に、かつエネルギー収支の面でもプラスになるような新規技術の開発が21世紀の大きな技術開発課題の一つであると考え、60代後半になった研究者としての最後のエネルギーを注いでいるところである。

(さいき たかし・応用微生物学、(社)アルコール協会)

千葉 僚郎 さん

今年は1945年の戦争終結から60周年になる。私はたまたま8月15日が誕生日で、満24歳のその日に北海道の陸軍飛行場で終戦を迎えた。前日までは米軍の上陸用舟艇に体当たりする特攻訓練に明け暮れていたのだが、時速100km程度の複葉練習機（通称赤トンボ）に爆薬を装填して突っ込むという、敵の火器の装備に対しておよそ成功の見込みのない愚劣な戦法だった。その頃の日本軍部はそんな姑息な戦法以外にとるべき手段をすべて失い、戦闘能力を喪失していたのである。

当時の日本軍の戦法を愚劣と述べたが、愚劣なのは本来「戦争」という人間社会の行為それ自体であって、第二次世界大戦の惨禍の反省に立脚して、戦争とその手段としての武力の放棄を宣言した「日本国憲法」の優れた先見性は、日本国民の世界に誇るべき選択だったといっ

て良い。最近その誇るべき立場を捨てて、日本を「戦争する国」にしようとする「改憲」論が横行しているが、それこそ人間社会の進歩に逆行する愚劣な企てだと言わなければならない。

(ちば あきお・農業経済学・元北海学園大学)

増田 正人さん

大学院生のときに、科学者会議に加わり、法政大学に就職してからずっと個人会員で過ごしてきた。既に、僕の就職時には大学に分会はなく、分会の再開を求められても、予想される事務作業の繁忙さから、この間ずっと躊躇してきた。必要なときに活動に参加する個人会員という形態は、それなりにいごちがいいからであった。

とはいえ、そうともいつていられない状況になってきた。日本社会の上から下まで、数年前ならありえないことが平気で起こり、功利的で軽薄な「正義」の信者が大手を振って歩いている。他方で、熱くはなれない学生たちの、現状に対する不満と悲観が渦巻いている。今年、ゼミで「グローバリゼーション」をテーマにしたこともあり、昨年の東京支部主催のシンポジウム「国際平和と日本国憲法」に学生達を誘ってみた。参加した者の中から、他大学の院生たちと交流する中で、新入会員も生まれた。どこまでできるかわからないが、今年中に分会を再建し、人の輪を広げていこうと考えている。

(ますだ まさと・世界経済論・法政大学)

村瀬 千明さん

最近思うこと

「日本の科学者」の新年号特集は「日本の技術は大丈夫か」であった。現在の日本企業の中で無理な人員削減が進行し、熟練技術が伝承されず、一方では事故が多発している。かつて日本はモノ作りの高い技術を誇っていたが、現在では惨憺たるありさまになってしまった。一方新聞などによると、将来の社会の担い手になる若者に就職できない者の数が増加し、就職できても派遣労働者であったりして、若者たちは希望を失いつつある。収入が少ないから、当然貯金ゼロの人たちが増加し、その割合は20%に達し、これは戦後の昭和30年代と同じだそう。かつて有効であったシステムがあちこちで行き詰まり、混乱が現れ、不安が増加している。若者から高齢者までみんなが苦しんでいる。日本はこれからどうなっていくのであろうか。長い目で見れば、高度な資本主義社会から社会主義社会へという大転換の中の一局面にいるのだろうが、それにしても、先が見えないのは不安感を増すことこのうえない。

私は一昨年に定年退職した一物理学研究者であるが、「この不安感」を解消してくれる流れが今年は生まれることを新年にあたり強く期待したい。(むらせ ちあき)

その22: 個人会員ニュース No.63 2005.6.10 発行

岸部 弘さん

新会員です、よろしく

定年を前にしてここ10年ちかく、東京学習会議の資本論講座を受講しながら地域で市民運動を手がけ始めました。この中で「なぜ、現代とそしてその変革を勉強する場がないのだろうか?」という疑問がいつしか頭をもたげ、脳裏から離れなくなってきました。つまり、地域の運動に取り組む上で役立つ理論が欲しい。別の言い方をすると、資本主義下での変革について普通の人たちにも理解でき取り組める階段となる考え方や理論を学びたいという考えです。そして、周りの人たちと話し合っていると「そう思うが・・・」で、それ以上に発展しにくいのです。そし

て、昨年11月、今宮先生のお勧めもあって京都での15回総合学術研究集会に参加、そこで、同じ方向を見つめている方たちに出会え、嬉しくて会員になりました。いま、町田を拠点に、日本の現実と変革を考える経済学の勉強会を立ち上げつつあります。今後、相談したいこと・力になっていただきたい事が多くありますが、よろしくおねがいします。(きしべ ひろし・伊勢原市在住)

木下 安子さん

新潟で女の学長が生まれた新潟青陵大学 —東京を離れて—

社会保障学者で新潟出身の佐藤進先生からのお勧めで、「おいしいお米」の産地、新潟へ赴任、初代学長として昨年3月までの5年間を過ごしました。女子教育では家政や保育などの伝統のある学校で、大学になってからは男女共学です。新潟地震にもめげず、今年、看護・福祉の学科から2回生が無事に巣立ちました。「新潟水俣病」に取り組む民医連活動。「一坪地主」方式で出来た特別養護老人ホーム『穂波の里』等、地域に根ざす活発な活動を実習やボランティア活動などを通じて学び、卒業生は看護・福祉の現場で、在校生は忙しい授業や実習の合間に被災地のボランティア活動に、元気で頑張っています。新潟地震に際して、全国より暖かいご支援を頂き、ありがとうございました。(きのした やすこ・看護学)

新倉 修さん

人権強化のための国連改革を>

政府は安保理事会の常任理事国入りを目指している。国連事務総長の国連改革レポートは、貧困・恐怖からの自由など、古典的な問題が世界的規模では依然として今日的な問題だと鋭く指摘している。日本では職場の自由が少ない。これを、ここ4年来、毎夏、ジュネーブの国連人権小委員会で訴えてきた。ところが人権擁護法案には本気で人権侵害を「撲滅」しようという気概すら感じられない。それどころか、委員について国籍条項を設けよという意見すらあり、領域という地理的概念の中をどこまでも自分たちのエスニシティや文化で純化したいという「先祖返りのナショナリズム」が顔を出してくる。19世紀的なナショナリズムを振りかざして、日本は国際社会で何をやろうとしているのか、という疑問が隣近所からわき上がることがわからないのであろうか。しかし、国連改革の眼目のひとつは人権の国際連帯を強化することにある。科学者にとって人権問題は人ごとではない。

(にいくら おさむ・法律・青山学院大学)

羽鳥 謙三さん

尼崎列車事故に思う

今回の尼崎事故は明らかな人災である。70キロ制限のカーブを108キロで乗り切ろうとした背景に、私鉄路線と競合するJR西日本の体質があった。だが危険は西日本だけではない。猛スピードは全国当たり前になっている。時速200キロを超す上越新幹線が中越地震で脱線したのは記憶に新しい。これが転覆大惨事にならなかったのは奇跡である。日本は地震国だ。いつどこで直下型地震が起きても不思議はない。新幹線網をよぎる活断層は何十箇所もある。そういう箇所の速度は100キロ以下の

徐行運転にするべきだろう。当然所要時間は余計にかかる。だがそれが何であろう。急ぎの用事は電話もあればファックスもメールもある。まずそれらで予告して、直接顔を合わせるのとはそれからでも済むようにビジネス界の慣行を考え直す。せっかく長寿命になったのに不慮の災厄で打ち消すことはない。スピードを落とした方が省エネにもなる。地球だって長生きできる。

(はとり けんぞう・地質学)

山村 延郎 さん

最近思うこと

欧州の金融規制や金融行政を研究しています。もともとは、九州大学大学院でドイツ近代の銀行史を研究し、ベルリンで銀行経営論と保険論を学び、大学助手・非常勤講師を経て、四年前に省庁再編を受けてできた官職に就きました。

法案準備には、英米だけでなく、欧州の金融制度の網羅的な調査研究が欠かせません。でも国際金融ばかりで、非英語圏(特に欧州)の現代金融制度を網羅的に研究している学者が日本に少ないのは困ります。しかたないので、私の専門はドイツなのですが、最近はフランス語も勉強して、フランスの金融制度も調査しています。今年は「日本におけるドイツ年」ですから、ドイツについては、将来の後継者が増えるきっかけになるのではないかと期待しています。

任期付職員なので、あと一年程度でどこかに転職するか帰郷します。論文博士の制度が廃止されると聞くので、大学院に再入学(復学?)したほうがいいのでしょうか。制度の変わり目の文系大学院中退者としては、困惑しますね。移行規定又は救済規定の設置を望みます。

(やまむら のぶお・金融制度論・柏市在住)

その23: 個人会員ニュース No.64 2005.9.10 発行

相磯 富士雄 さん

何を書こうかなと考えているうちに、8月15日を迎えてしまいました。戦後60年目という節目の日です。最近まで、テレビでは歴史認識問題、靖国問題、教科書問題、憲法九条問題など個々の情報、論議が紹介されていました。また一昨年イラクでの日本人ボランティア等の人質に対し異質な日本人として排除する言動が激しく、強い違和感を感じました。そして今回の8月15日のNHKによる特別番組「日本の、これから」、テーマは「じっくり話そう・アジアの中の日本」です。市民の視線と感覚で話しあうということでしたが、「国」の立場からの目線での主張で強くリードされていました。それは、コメンテーターの町村外相、桜井よしこの国家観でした。憲法9条を改悪する国家観を日本人の心に内面化する作業と思えてなりません。インターネットで対応した聴視者のうちの若年齢層に賛同者が多いのに驚きました。作為も感じました。参加したアジアの留学生はどう感じたか。不快感で気分が悪くなり、途中から他チャンネルに変えてしまいました。理論的側面からばかりでなく、感情、感覚レベルにまでふみこんで考えをまとめることの必要性を痛感しました。

(あいそ ふじお・公衆衛生学)

神田 雅尚 さん

埼玉都民です。通勤は大体一時間半くらいです。チョット遠いと思います。東京圏・大阪圏・福岡圏だけが日本ではないと思います。「日本全国どこに住んでも仕事があり、まあまあの暮らしができ、うさぎ小屋といわれない住居に住め、食料も自国の分くらいは自国で調達し、幼少の時期や働けなくなった時期には暮らしに困らない」そんな郷土を創りたいと思います。

ハシコイ人も後からついていく人も人生を謳歌し、自分を確立できる生活の余裕が必要だと思います。自然と人間の共存も大事です。

満遍なく郷土を利用してほしいと思います。そんな政治をしてもらいたいものです。

たまに科学者会議の個人会員の行事に出させていただくとホッとした安堵感を味わいます。ありがとうございます。

(かんだ まさたか・公務員の労務管理)

田坂 一朗さん

極東ロシア紀行

8月初めに極東ロシアの二都市を初めて訪問した。極東ロシアの政治・行政の中心であるハバロフスクと貿易・商業そして軍港のウラジオストクである。極東ロシアは地理的にはアジアの一部である。ハバロフスクは美しい静かな町であった。市街地のはずれに位置する公園からはアムール川を望むことができる。この川に繋がる松花江に望む中国のハルピンが思い出される。これに比べてウラジオストクは些か雑然として賑やかな町である。現在、ロシアもいわゆるBRICsの一員として経済の発展が期待されている。この経済発展のインフラとしての法制度、知財システムの現状はいかなものであろうか。ロシアには現在、約1,000人の弁理士が活動している。極東には8人の弁理士が活動していると聞いた。やはり多くはモスクワやサンクトペテルスブルグに集中し、極東は過疎地である。そんな極東ロシアでも、若い新興のビジネスマンの間では新しい動きが始まっていることを肌で感じる事ができた。

(たさか かずあき・知的財産)

森川 和子さん

最近思うこと

昨年3月まで東京農工大学の分会に所属しておりました。定年退官と同時に個人会員のお仲間に入れていただきました。よろしくお願いいたします。

人生の折り返し点を過ぎて、ふと前だけを見て走っていた若い頃を思い出します。生まれた子供の顔を覗き込んで、「この幸せは何ものにもたとえられない」と感激した日々。光を感じて首を動かしていたしぐさ。無心にお乳を飲みながら、じっと私の顔を眺めていたあの眼差しと、責任の重さは今も忘れられません。初めて笑った、寝返りを打った、這った、立ち上がった、歩いた、トイレを教えた、一人でパジャマのボタンを留めた・・・そんな子供の成長を今静かに振り返っています。

そして子供がたどってきた道を、今静かに逆にたどっていく人がいます。今までできた排泄ができなくなり、汚物を前に途方にくれている、家具を伝わりながら恐る

恐る歩く、床を這う、もう「ここでいい」と動かなくなる、洋服のボタンを留めるのをめんどくさがる、もう「寝る」の連続、ベッドから「またね」と手を振る。人は次第に赤子に帰っていきます。

今は「施設に行きさえすれば必ず会える」と思っているけれど、きっとそれともかなわない日が来ることを覚悟して、幼子に感じたあの慈しみの心を、年老いた人に感じているこの頃です。

(もりかわ かずこ・微生物生態学・調布市在住)

横山 和夫 さん

近況

定年退職後 2 年、学園都市から一步離れたつくばの農村にどっぷりと浸かっています。ささやかな家庭農果樹園(?)で、完全無農薬・有機栽培を徹底すべく悪戦苦闘の毎日です。茨城保健生協つくば支部で「宅老所」のお手伝いをしていますが、仲間のひとりが 9 条科学者の会アピール賛同者であることを発見、やあやあということで科学者会議としての活動も、と話が始まりましたがどうなることやら。とりあえず「9 条の会つくば」の発足(10 月 1 日)へ向けて世話人に名を連ねています。

中国語のサークルを始めました。今のところメンバーは全員 60 代以上ということで、一回り以上若い先生(中国人の女性)を困らせながらも楽しく進んでいます。教壇に立つ身であった私にとって今さらながらも新しい発見があります。「一般の生徒としての立場に身を置く(自分の専門からできるだけ離れた、しかし興味がある分野で)」は、現役のみなさんへのおすすめです。

(よこやま かずお・プラズマ物理学)

その 2 4: 個人会員ニュース No.65 2005.12.10 発行

阿部 哲二さん

薬害イレッサ訴訟に取り組んでいます。イレッサは、2002 年 7 月、わずか半年の審査で世界に先駆けて承認された肺がん用の抗がん剤。副作用のない夢のクスリなどといわれ、多くのがん患者がわらをもすがり思いで飛びつきましたが、3 年弱で 600 人以上が間質性肺炎等の副作用で亡くなっています。輸入販売したのはアストラゼネカ社。この間 500 億近くを売り上げながら、謝罪はありません。どうせ末期のがん患者だから、そんな声が聞こえてきます。承認後、世界で行われた 4 つの臨床試験では、抗がん剤に必要な延命効果は確認されませんでした。EU では承認申請が取下げられ、アメリカでは新規患者への投与が禁止されました。しかし、日本では東洋人に効きそうだと、その使用が継続されています。抗がん剤の承認、販売のあり方、日本の科学の水準、がん患者の生命の重さが問われる訴訟です。

(あべ てつじ・薬害イレッサ東日本弁護団事務局長)

大重 光太郎さん

専門はドイツ労使関係です。現在、獨協大学外国語学部でドイツ語とドイツの経済・社会事情を教えております。JSA には本年春に入会しましたが、正確に言うと再入会になります。大学院時代に入会しましたが、留学とともに幽霊会員となったようです。今回、東京支部事務

局の旧知の Y 先生から改めて入会を勧められました。勤務地・居住地とも埼玉だというと、「関係ない」とのお返事。少しためらっていると、「そういえば君は以前、会員だったよね? だったら未払いの会費がだいぶ溜まっているはずだけど...」などという怪しげな展開になりかけたので、慌てて「新規」入会をさせていただきました。(ということで会計担当の方、未払い分は帳消しにしてくださいね。) ほぼ 10 年ぶりに手にする『日本の科学者』は新鮮でした。多忙を理由に、なかなか「研究者運動」に関わっていない自分ですが、専門分野を超えた運動はしっかりと広がっているのだということを実感させられています。

(おおしげ こうたろう・ドイツ労使関係・産業社会学・埼玉県越谷市在住)

角瀬 保雄さん

私は JSA 創立以来の会員の一人で、JSA では長年全国と東京支部の会計監査を勤めてきました。2003 年 3 月、それまで 42 年間勤めてきた法政大学を定年退職し、第二の人生として、現在は NPO 法人「非営利・協同総合研究所のちとくらし」の仕事をしております。こうしたなかで新に参加した医療経済学会は社会保障、社会福祉、医療経営という社会科学畑の研究者と医師、看護師など医療・介護の専門家による産学協力の学会で、日本学術会議では経済政策部門に所属しています。私なりのこれまでの経験を強みに生かし、最後の花を咲かせようと頑張っているところです。

さらに地域では医療生協の支部長として協同組合運動の実践にも従事しているという、多忙な日々を送っています。しかしこのところ肉体的、精神的限界を痛感しています。毎年のように新しい病気で入院したり、幾種類もの専門医にかかったりして、幕引きの時期もそう遠いことではないとの自覚を強めてきています。

JSA について思うことは、非営利・協同や社会的企業など現代的な新しい分野の研究に取り組む若い人が増えてほしいということです。

(かくらい やすお・企業会計・企業経営論・非営利・協同論/医療経済・経営論・調布市在住)

半谷 高久さん

84 歳を過ぎ数多の成人病を友とし、まさに棺桶に足を半分突っ込んでいる身だが、家族に見守られながら、しばしばひと時を若い学生時代に返った気持で自然の神秘の謎解きを楽しむ。オパーリンの「生命の起源」に感激し、無機物から生物の誕生を確信し、その信念は今も崩れないが、困ったことが起こる。というのは、自分では計算できないが、自然のままに原子から生命が合成される確率は著しく小さいとのことである。一回しか起こらぬことはどんなに確率が小さくても絶対に起こらないとは言えないが、確率的奇跡を信じて生命の起源を納得することには疑問がある。そこで私は物質は進化することを求め続けるという私が提起した幻想的な Shanie の仮説を基礎にして、生命の誕生の現実的可能性を解釈しようと思っている。しかしこの私の幻想的仮説はオーソドックスな自然科学にとって見れば確かに異端と言えよう。異端と奇跡のどちらが科学的か? 奇跡は確率計算の間違

いか？科学的とはどういうことか？などの議論を学生時代に戻って日々楽しんでいる。幸いにも『Shanie の仮説を提起します。遊びと思って真理か幻想かを愉しんで下さい』と題する拙稿を総合人間学研究会のニュースレターNO.13(2004)に採用していただいた。もし、お暇があれば老人の愉しみに御参加下さい。歓迎します。(連絡先：〒206-0013 多摩市桜ヶ丘 2-37-5)

(はんや たかひさ・社会地球化学・元都立大学・多摩市在住)

干場 薫さん

最近読んだ本から

私はドイツ近代哲学を専攻していますが、最近、首相の靖国参拝問題をきっかけに日本古代史関係の本を何冊か読みました。その中の一書に「現実の人間を神として祭ることは、日本の原始信仰にはない」とあり、やはり思ったとおりだと思いました。人が死ぬと「仏になる」という俗信はありますが、「神になる」という信仰はなかったはずだと思っていたからです。

靖国神社はもともと明治時代にできた新しい神社であり、日本の伝統文化には属していません。よく靖国神社参拝を日本の習俗であるかのように、正当化しようとする意見がありますが、全く関係のない神社だということがこの点からも明らかになったと思います。

靖国神社は日本軍国主義の象徴的存在であるのみならず、カミ信仰という点から見てもおかしい神社です。こういう神社への参拝は止めてもらいたいと思っています。(ほしば かおる・哲学・一橋大学)

その25：個人会員ニュース No.66 2006.3.10 発行

大江 京子さん

いよいよ結審—東京大気公害裁判

東京大気汚染公害裁判は、自動車排ガスにより喘息などに罹患した患者らが原告となり国、東京都、トヨタ等自動車メーカー7社を訴えている裁判です。自動車排ガスによる大気汚染問題は解決されてはいません。東京に住む誰もが明日被害者になるかもしれないという現状に変わりはありません。原告たちの目指すものは、自動車排ガス公害の根絶と被害者救済制度の制定です。「子供たちに、きれいな空気を返そう。」「ぜん息になって働けず、お金がなくて病院汚染にもいけないという悲劇は、自分たちだけでたくさん。」原告たちはその思いでこれまで10年間の裁判を闘ってきました。裁判は、今年、結審、来年判決の予定です。どうか皆さん、100万人署名へのご協力をはじめ、一層のご支援の程宜しくお願い致します。(おおえ きょうこ・弁護士・東京東部法律事務所)

唐澤 英行さん

41年間勤めた精密光学機器メーカーを定年退職後4年9カ月になります。“退職後はお暇でしょう”といろんな所から声がかかり引き受けすぎて、今では大忙しの毎日です。科学者会議へは、第10回総合学術研究集会の頃からかかりましたが、何のお手伝いも出来ず心苦しく思っております。手を広げすぎて専門と呼べるものもないのですが、何か記入するときは、「映像情報」と書いていま

す。最近はデジタルビデオ、デジタルカメラで撮っています。映像が人々にあたえるものは計り知れないものがあります。特にインターネットが一般家庭にも普及した現在、その力はいっそう大きなものです。撮影したものは、CD、DVDに保存していますが体の自由が利くうちに整理してまとめなければと考えています。一部をHPで紹介しておりますのでお訪ね下さい。

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/karasawa/>

(からさわ ひでゆき・映像情報・品川区在住)

河村 重行さん

定年退職すると科学者会議をやめる人もいますが、私は逆に入会しました。その頃から地球サミットでブラジルに行ったり、東京支部の常幹をやったり、自然保全運動(特に高尾山)をしたり、高校生や大学生に性教育の授業を始めたりしました。

私の専門は、今は性科学ですが、高校在職の31年間の担当授業は生物でした。退職前の10年間と退職後の15年間は性教育に従事してきました。そんな関係である新聞の読者からの性の電話相談をかれこれ15年間続けており、今それをまとめて出版の準備をしています。

現在は、なんとか個人会員にとどまっています。なんとかというのは年金生活ですし、体調をくずし、8年ほど前には肺アスペルギルス症を病み手術をしたからです。数年前からは腰痛と息切れがするようになり、外出歩行が苦になるようになりました。そんなわけで最近では退会しようと思うようになりました。

人間は一生のうちに健康な時期と非健康な時期があります。健康とは長く立っていても、長く歩いても苦痛を感じない状態だと思います。

(かわむら しげゆき・清瀬市在住)

田畑 康誉さん

あなたの知らない世界 — 躁うつ病

人生のさまざまな問題点が集中してあらわれ、わたしは動けなくなった。

民主主義の闘士を気取るナマイキ大学生だったわたしは、忙しさとストレスの中で1996年に病気をむかえることになった。気持の重さと焦燥感の中で休養をした。二年ほどして回復したと思い、修士課程に入学し、調子にのった。が、いろいろなことに挟まれ、2000年の春、再びぼっきりと折れた。そして修士課程を這い出るように修了した。しかし、ここからが本当の地獄だった。

躁状態があらわれ、暴力、ギャンブル、浪費、その他の問題をひきおこしまくった。そうした行動のあとには深刻な鬱状態になり、自殺未遂も繰り返した。依存症(アルコール、その他)、パニック障害の症状などもあらわれて、大変な目にあつた。なによりも自分の感情と行動がコントロールできなかったのはつらく、長期的には精神的にも身体的にも経済的にも追い込まれた。こうした鬱状態は一般には「考えすぎ」とか「まじめすぎる」とか受け取られ、躁状態の場合には「あの人にもああいふところがあつたんだ」というイメージで片付けられる。が、精神疾患の多くはそういうものではない。性格はどうであって疲労やストレスの蓄積、その他の条件が重なれば、だれでも罹ってしまう。しかしそこに人間の真実が

みえるというのが長く思った人間の感想である。
(たばた やすたか・憲法 国家論)

横川 秀博さん

都立高校の現場から

私は、都立高校に27年間勤めてきた数学担当の教員で、現在定時制に勤務しています。かつて、自由な雰囲気の中で教育が行えてきた時代もありましたが、現在の教育現場は、市場原理・競争主義が持ち込まれ、あらゆる場面で個性化・特色化が強調され、差別化が図られてきています。教職員への締め付けも強められ、「日の丸・君が代」の強制では、この2年間で300名以上の教職員が起立しなかったということだけで処分を受けています。私自身も生徒が立たなかったというだけで、指導不足として都教委から「指導」という「処分」を受けました。さらに今後、生徒への強制が強められようとしています。4月からは、経営支援センターが都内6カ所にもうけられ、日常的に都立高校を「支援」の名目で一括管理、巡回しながら現場を監視する体制がつけられようとしています。生徒たちの状況は、長期の不登校生徒が増え、そうした生徒では学力低下が著しく、また経済的に困難な家庭の生徒が急増しており、その一方でそうした子たちを受け入れてきた定時制が統廃合され、学習機会が奪われつつあるという問題があります。また、生徒たちの就職問題も深刻で、教育現場の枠では解決出来ない課題がたくさんあるというのが現実です。

(よこかわ ひでひろ 高校教育 松戸市在住)

その26: 個人会員ニュース No.67 2006.6.10 発行

伊藤 セツさん

大学院を出て大学の常勤教員になってから38年になる。18年前に去った二つ目の職場はついに「首都大学東京」に飲み込まれて姿を消した。今の職場では、大学院生教育（博士の生産）と大学院の運営に責任をもつことが私の主な仕事となっている。

外部競争資金の導入、科研費への応募は年中行事で私も旗を振る役であるが、COE（応募をしても当たったことはない）や、『魅力ある大学院教育』イニシアチブ等の応募（これもすでに選考漏れの経験がある）にも歩調をあわせなくてはならない。私の大学の学部は「現代GP」を多く当てているが、設立20年という歴史の浅い大学院は、さらに研究系と教育系への選別の追い討ちの嵐に巻き込まれようとしている。

次から次と、迎え撃たなければならないことが起こるが、こういう時こそ教師は、学生・院生・同僚の職員にも希望を語る存在であることを忘れたくない。また自分の研究を進めると同時に、後継者を育てなければ大学の教師とはいえない。大学をめぐる昨今の「人為的災害」の中にあっても、それをするのでなければ何のために大学の教師をしているのかわからないと私は思っている。

(いとう セツ・社会政策/生活経営/女性論・八王子市在住)

小川 政亮さん

老人は死ぬに死ねない

今の時勢を見ると、とても「死ぬに死ねない」。

思い返して見ると、かつて絶対主義天皇制下の日本は、不戦条約（日本も1928年8月署名）にもかかわらず、1931年9月、中国東北部を侵略、以来、戦域を拡大し、太平洋戦争へと発展し、敗戦となって終わった。

この多年の侵略戦争の犠牲者は、日本人310万人、アジア・太平洋各国では2000万人といわれる。日本人にとって忘れられないのは、アメリカによる広島、長崎への人道法、国際法違反の原子爆弾攻撃や、一夜にして10万人の生命を奪った東京大空襲を始めとする各地の都市攻撃である。

こういう多年の戦争への痛切な反省から生まれたのが私たちの民主・平和・人権の日本国憲法である。それは前文の最初に「日本国民は・・・政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」と明確に述べている。

そしてこの宣言を担保するために憲法本文第9条1項と一切の戦力を持たず、交戦権も放棄するとした第2項がある。

今、この第2項を削除し、さらに教育基本法を改正して愛国心を明記しようなどというのは、現実の日本政府の動きを見れば、アメリカ軍の費用は気前よく出す国家、アメリカに従属し、アメリカの為に戦う国家、本当の国民主権と言えない国家のためにつくせ、ということんでもないことになるわけである。

このような憲法、教育基本法の改正、その実、改悪の動きに伴って、社会保障改悪の動きも、とりわけ1983年以降急であり、ことに老人の権利剥奪に急であるように感じられる。

「老人は死ぬに死ねない」のである。

(おがわ まさあき・社会保障法・練馬区在住)

国府田 諭さん

いわゆるストリート・ライブを街で見かけると、つい立ち止まってしまう。私が好きなのは、ジャズ・フュージョン系で余りうるさくないもの。アコースティックな「歌もの」と違って余り見かけないが、仕事や市民活動で山手線内外を歩くと、時々はお出会う。

ストリートライブも、音量、場所、聴衆の多さなどによっては迷惑な存在で、警察の介入もあったりして大変らしい。しかし私の好きな音楽ジャンルでは、音量も聴衆数も控えめだからそういう事態は見たことがない。

演奏家、とくに管楽器の人は、ストリートでの苦労より日々の練習場所の確保が（音大等に通っていれば別だが）大変そうだ。学校卒業後、東京に出てきてアルバイトをしながら頑張っている人が結構多い。自宅はもちろん近所の公園でも苦情が出て練習できないので、遠くの広い公園とかカラオケボックスとかに行くという。彼らの生活像は、いま問題の社会保障不安や格差社会など別次元のようだ。現実には繋がっているのだが...

最近一番のお勧めは、新宿南口で毎月やっている The Love & Peace Jam というアルトサックス中心の4〜5人。名称に特段の意味はなく社会的な訴えもないが、ス

タンダードから日本の歌謡曲まで幅広い選曲で落ち着いたジャズが聴け、癒される。

(こうだ さとし・環境交通論・NPO 法人環境自治体
会議環境政策研究所)

山部 恵造さん

長期的で広い視野を持って

書棚の「科学者会議」ファイルに「東京支部個人会員ニュース No.1 (1990.4.18)」がありました。当時、定年・退官を迎える会員が増え、個人会員の組織化が真剣に議論され、第1回の個人会員交流会が開かれた記録です。書いたのは私、支部の組織担当でした。今回世話人の喜多さんから投稿を求められて思い出し、実に感慨深いものがあります。「日本の科学者」編集委員を下りた後、心不全をやったため、ここ数年は只の会員です。

しかし今ほどJSAの活発な活動・組織強化が求められている時はありません。ところが、以前、研究の発展を妨害する政府・財界の施策に反対をと、入会を勧めたら「私にとって研究の最大の障害はそういう活動をする事だ」といわれたことがありました。いや・・・、こういう心理はJSAの活動の中でもあることでしょう。しかしそれは余りにも、視野も狭く近視眼的です。全体の学問・文化、科学・技術の発展の為にはいうまでもなく、個人として振り返ってみても、友人・知人いや自分の子どもから尋ねられた時に、ごまかさずに語れる研究者人生であるためにはそんなことであってはならないと思います。

(やまべ けいぞう・金属学/技術論・武蔵野市在住)

吉田 喜一さん

高等専門学校(略称高専)ってご存じでしょうか。年末・年始のNHKアイデア対決高専ロボットコンテストをご覧になった方はいらっしゃるでしょうか。競技委員として実況中継アナウンサーの後にいますのでさがしてください。写真を送らないといけませんね。

3月までは東京都立航空工業高等専門学校・機械工学科(荒川区にあります)に所属していました。4月1日から品川にある兄弟校・東京都立工業高等専門学校と統合されて、現在の私の所属は東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科になりました。八王子にある国立東京工業高等専門学校ともよく間違われます。旧校名も新校名もなかなか一回では正確に読めません。

高専は中学卒業後5年間の『一貫教育』を行う、実践的技術者養成機関として1962年に設立されました。今はさらに2年間の専攻科も設置されています。いろいろ問題はありますが、現在では真の『技術教育』をできる機関と自負しています。

東京都は高校、大学だけでなく高専の『改革』、それも実状を無視した強引な『改革』を押しつけてきます。高専統合だけでなく、独立行政法人化も強行しようとしています。55校ある国立高専はすでに独法化されています。今年が都立高専の正念場です。

(よしだ きいち・機械工学)

伊藤 高弘さん

近況報告

2006年の3月、41年間の大学教員生活を終え、定年退職。それ以前の勤務を含めて48年間は月並みの表現だが長いようで短い歳月であった。昨年の11月12日、新日本スポーツ連盟創立40周年記念講演を依頼される。12月17日、大学の研究室で小生のために最終講義とパーティーを設定してくれた。今年の6月には関係する4民間教育研究団体共催の場で主として研究の軌跡について講演。

7月には、日本教育政策学会大会に1日だけ参加。News-letterに寄稿。スポーツ9条の会で、『ナチス第3帝国とサッカー』(現代書館)、『鉤十字の下でのサッカー』(Campus Verlag, Frankfurt / New York, 2005)のコメントおよびドイツを訪問した研究者の現地報告会の実施。日科の個人会員、実質は機関誌会員だったが、とりあえずは継続している。40年間は教育、スポーツの全国組織の仕事を勤めてきたので、退職数年前から準備して分野と地域別の仕事の一端を担っている。憲法9条-スポーツ9条の会、9条の会・小平、小平革新懇各世話人、小平平和のための戦争展よびかけ人など。

(いとう たかひろ・スポーツ政策/運動史・
元武蔵野美術大学・小平市在住)

関口 直甫さん

最近、靖国神社問題がクローズアップされて、私も多くの方々のご意見に接する機会が多くなったが、その中で少し気になる点がある。次のような点について触れたご意見がほとんどない、ということである。つまり諸外国には、過去の戦争による戦死者・犠牲者を追悼し慰霊を行う施設は、ほとんど全部、ある特定の一つの戦争についての犠牲者のみを対象とし、複数の戦争に跨るような慰霊施設というものはない、という事実である。ワシントンのアーリントン墓地は私の知っている唯一の例外であるが、これは一種の福祉施設なのであって、自分の墓がもてない貧しい兵士のために墓地を提供するもので、本人または遺族の申し込みによって埋葬される。申し出のないものは埋葬しない。なぜ外国には複数の戦争に跨る慰霊施設がないか。これは紙面の都合上、ここに論ずる余地がないが、日本人は外国の常識に逆らうことを平然と押し通そうとしていることに問題がある。

(せきぐち なおすけ・天文学・府中市在住)

南雲 和夫さん

今年、科学者会議に再入会しました「旧新人」です。みなさんよろしく願います。

私は大学時代から沖縄問題に関心を持ち、修士課程では沖縄の労働法制史に関する論文を執筆しました。その後、博士後期課程を退学してはや10年目ですが、なかなか専任教員の公募に引っかからず、1コマ1ヶ月2~3万円の報酬で苦闘する日々を送っています。

— こう書くとし暗いですが、大学で学生たちと接するのはいい勉強になります。ゼミ合宿などで見られる発想や行動に、思わず「これが若さか!」と感嘆すること

もしばしば。もっともその後の「後始末」は、やはり「保護者」であるこちらの責任ですが・・・。

若者たちとの出会いを体験できるのは、やはり教育者としての一つの「醍醐味」だと感じるのは私だけでしょうか？新たな出会いの場を求めて、科学者会議の活動にも参加していきたいと思います。

(なぐも かずお・社会政策/政治学)

牧 穂波さん

私は97年に外国語大学を出て、外国語に携わる仕事がしたいと思ってきた。新卒で入った会社で、「外国語を使った営業事務」などの仕事はしたが、外国語そのものを訳す「翻訳業」には就くことができなかった。社会人を経て大学院に進み、修士を終えて再び就職をしなくてはいけない立場になったとき、悩んでしまった。どのような仕事が自分には向いているのか・・・と。5ヶ月ほど不安定な時期を過ごしていたとき、派遣会社から「韓国企業での韓国語の翻訳業」を紹介され、思いがけないルートで私は「翻訳業」に就くことができた。(ただし正社員ではない。)

こうして翻訳業に就き2年経ち、1年前から、派遣先での翻訳の仕事以外に、民間の翻訳会社に登録して個別に翻訳の仕事をももらうこともある。その場合に、登録できる条件として、「実務経験としての翻訳経験が〇年以上」というのが多い。さらに半年前からは自身で翻訳を承るサイトを立ち上げ、ダイレクトに注文を受けるようになった。私が翻訳した文章を、何より客が喜んでくれたときほど嬉しいことはない。今、「翻訳」で給料をもらえるようになったのも、2年前に派遣会社から企業での翻訳の仕事を紹介してもらったおかげである。「派遣社員」は不安定で正社員よりマイナスな面が多い。ただ、私のような例もあるのだ、ということを書かせていただいた。

(まき ほなみ・朝鮮史)

山辺 昌彦さん

私は、今年の3月に停年で退職するまで、京都の立命館大学国際平和ミュージアムで学芸員の仕事をしてきました。その関係で、平和博物館のあり方、博物館の戦争展示に関心を持ってきました。退職後はふるさとの東京に戻ってきました。科学者会議の籍は京都に移さず、東京支部の個人会員のままでしたが、雑誌を読むぐらいで、ほとんど活動に参加できませんでした。今は職ではないのですが、東京大空襲・戦災資料センターに主任研究員として関わっています。センターの中に戦争災害研究室を立ち上げ、東京などの空襲や戦闘による、子ども・女性をはじめとする一般市民を中心とする戦争被害を研究対象にしています。ここでは、戦争災害の記憶を記録化してきた歴史とともに、博物館の展示などを通じて記憶を継承してきた歴史をも明らかにしようとしています。この研究成果を東京大空襲・戦災資料センターの展示の充実にも生かしていきたいと考えています。

(やまべ まさひこ・日本近現代史)

太田 さおりさん

最近思うこと

次男は小2の時にいじめにあった。仲よしだった友達にいじわるをされるようになり程なく、そのいやがらせは数人へと増えた。先生の注意のいかにもなく、次男のストレスは、朝に吐き気をもよおすまじになった。問題はなかなか解決できなかった。学校を休み休み通い、進級時にクラス分けとなりやっと解消されたのだが、その後しばらくはびくびくとおびえながら通学し、最近になってやっと、当時のことを語れるようになった。いじめはいかに深く人の心を傷つけてしまうのか、私の力が足りずに本当にかわいそうなことをしてしまったと思う。

当時、学校や周囲の人から受けたアドバイス？は、「言い返す言葉が挑発的だ」「デリケートな子」「テレビゲームの話についていけないから話が合わない」「いじめている子供も少し前は違う子供にいじめられていた本当はよい子」と、いじめられる側に責任をつきつけるような厳しいものだった。結局親の私は、子供のそばで、時を待つことしかできなかった。今後成長し、中学生になってまたいじめにあった時、親はどう関われるのだろうか。いじめに気づくことさえないのかもしれないと思うとぞっとする。

いじめは、解消を待つのではなく芽のうちに摘み取らなくては繰り返すものだと思う。親や当事者だけでなくすべての大人が、いじめに対する拒否の姿勢をしめさなければ、解決の糸口はつかめない。

(おおた さおり・食料経済学)

郡司 良さん

わが国科学映画界の大先輩おふたりが、最近あいついで亡くなりました。ミクロの鬼といわれた小林米作さんと粘菌撮影の第一人者樋口源一郎さんです。どちらも100歳をこえる長寿でした。

おふたりに共通していたのは、いずれも顕微鏡による微速度撮影に工夫をこらしたことです。小林さんは生体内の細胞の挙動を記録することに執念をもやして、結核菌とマクロファージ(食細胞)のたたかいを劇的に表現した「ミクロの世界」で世界の医学界をあっといわせました。個体発生を映像化した「生命誕生」も名作です。

樋口さんは微速度撮影の特長を生かして、「細胞性粘菌の行動と分化」などで、土壌中の粘菌が“森を駆けめぐる”ような映像を記録して知られています。

もちろん、それぞれの分野の研究者との共同作業による成果ではありますが、日本の科学映画の独自の高さを世界に知らせたパイオニアでした。

しかし、このごろはこれらの作品を見るのがなかなかできない。こうした名作を集めて、できればJSAに科学映画ライブラリーをつくれれば、というのがいまのわたしの夢です。

(ぐんじ りょう・科学映画・川崎市在住)

佐藤 正知さん

大学を定年後、5年間の非常勤講師生活も終って3年近くになる。この間、研究室の若い同僚のご好意で机を

置かせてもらい、院生のゼミや卒研生の合宿旅行などに参加して現在に至った。おかげさまでボケ防止になって、ありがたいことと感謝している。

そのなかで感じるのは、現在の教員の研究以外の仕事、私どもが多忙をばやっていた頃と比べても、さらにますます忙しくなっていることである。一例だけあげると、少子化時代に学生を集めるために、学部と大学院をあわせ年に十数回も、いろんな種類の入試をしなければならない。そのたびに多くの教員が問題作成、面接、採点などの仕事に動員され、貴重な日曜日もつぶされることになる。しかも、そうやって集められた新入生の学力は年々低下しているということだ。どの大学も大同小異らしく、他大学で勤務していた旧友と会って「俺たち良いときに定年になったな」となぐさめ合ったりする始末である。

九条科学者の会や職場単位の九条の会などが結成されているが、現役の教員、研究者の参加が意外とすすまないう状況があるようだ。その背景には、研究もままならないほど仕事に振り回されている現状があるのではないかと考えさせられる昨今である。

(さとう まさとも・物理学・大田区在住)

道家 達将さん

幸いに私は、今日まで人に向けて弾丸を撃つことなく生きて来ました。1945年8月、私は16歳の少年兵として、絶対主義的な上官の命令に従って、「敵」を殺す実弾射撃訓練を行っていました。しかし、太平洋戦争が終り、日本国憲法制定により海外で戦争をすることがなくなりました。この戦争では日本軍は多数の外国人、さらには日本人を殺しました。また日本の、子供を含む多数の人びとが殺されました。戦争はなくさなくてはなりません。

8月6日の朝、私は広島市南方20kmの小山の上で原爆に遭いました。強烈な閃光と爆風。気がつくと古鷹山の向う側の青空中に、灰色の入道雲がむっくり立ち上がり、膨れ上りつつありました。その下は地獄でした。約3週間後、私は広島市街に入りました。まさに焼野原で人影はまばらでした。同じ頃、雨の夜に広島を列車で通った人びとは「街いっぱい無数の人間大のリン光を見た」と言っています。被爆者は今も苦しんでいます。日本人の多くは、米国の原爆投下を非難し、米国人の多くは「パールハーバーを忘れるな」と言います。

戦争は悪の権化です。現日本国憲法とりわけ第9条は、戦争をなくすための人類の宝です。日本が世界に誇れる先進的な宝です。この第9条を改悪するのは悪魔の行為です。(どうけ たつまさ・科学史・世田谷区在住)

平山 基生さん

米軍基地をなくす組織作りを

11月19日投票の沖縄県知事選を4日後に控えて、今、私は、沖縄にいる。糸数けいこ候補が、当選しているかどうかは、この原稿が掲載される時には、既に結果が判明しているわけである。結果がどうであれ、日本の米軍基地数の40%、基地面積の75%を占める沖縄米軍基地を、このままにしておくわけにはいかない。今計画されている米軍再編は、沖縄と本土の米軍基地が一体のものである

ことを示した。さらに、米軍再編は、自衛隊と米軍の共同作戦を行うことを企図している。これは平和憲法が禁じる集団的自衛権の行使そのものである。従って、米軍再編は、改憲の先取りでもある。戦後61年。米軍基地をなくすには、どうしても、個人加盟の全国連合組織の力が必要である。もちろん沖縄県に大きな組織を作る必要があり、また、基地所在都道府県だけでなく、全都道府県に組織が必要である。3兆円と言われる米軍再編費日本負担は、全国民の血税なのだから。日本科学者会議もその組織作りに力を貸して欲しいものである。沖縄・日本から米軍基地をなくす草の根運動運営委員会委員長としてお願いでもある。

(ひらやま もとお・国際政治・渋谷区在住)

その29: 個人会員ニュース No.70 2007.3.10 発行

荒井 成彦さん

ヒトの「なわばり」

動物には、それぞれ「なわばり」というものがある。一頭(匹)だけで「なわばり」を形成する生物種もあれば、群れで生息する生物種もある。では、ヒトには「なわばり」はあるのだろうか。

ヒトは社会化し、人間になった。私は、人間の「なわばり」は、自然と、そして人間との関係で、「安心して暮らせる居場所」が「なわばり」であるととらえている。その「なわばり」は、自然や人間との関係で、人生の歴史のなかで創られるものだ。「どんな自然環境の場所に暮らすか」ということはもちろんだが、社会的存在としての人間は、同時に「どんな社会的な『居場所』を創り得るか」が、他の動物とは決定的に異なる点である。

いま「新自由主義」に走り続けている自公政権のもとでの人々の苦しみは、学生たちの受験競争、若者・壮年の人々の働き場の不安、高齢者の福祉・医療の不安など、すべてこの「安心できる居場所の破壊」のもとたらず結果ではないだろうか。

(あらい なりひこ・昆虫生理学・人間論・国分寺市在住)

古川原 明子さん

雑感

年明けて関東では晴天続き、乾燥が日増しにきつく、インフルエンザの流行が気になる季節となった。澄み渡る秋晴れよりも、冬の青空に圧倒されるのは、雪国育ちのゆえか。雪国の情景といえば、灰色の空、田を埋め尽くす白い広がり。まばゆい日光には縁がなく、そこは白銀というより、ただ広がるくすんだ白色なのである。そのような風景に馴染んだ身には、この雲ひとつない青空は心地よさよりも、むしろ居心地の悪さの原因となる。あまりにも明るく、分かりやすい何かを目前に突きつけられている感覚に似ているようだ。懐疑的な姿勢を意識せざるをえない職業病、あるいは逆にこのように素直でない性質が私をこの道に追いやったのか(他に許される場所がないからという職業選択の理由はさほど珍しくないと思うのだが)。しかし、居心地の悪さの対象は永遠の憧れでの対象でもある。正しいものは美しい? 濃淡ある様々な白に囲まれた冬景色の中で、「どれが本当の白なの

だろう」と考えるのも楽しいけれども、晴れ晴れとした道筋を見定めたくもある。論ずべき筋を見出せずに、いたずらに注を増やして覆い隠そうとする私に例えられては、いずれの冬景色も喜ぶまい。

(こがわら あきこ・刑事法)

中川 直哉さん

80 代の研究

JSA 会員には定年後も研究を続けておられる方が多い。私も僅かな時間だが、道楽として楽しんでいる。家族からは「ワークホリックだよ、もういい加減に」の声もある。やめられないのは背中を押す二つの力を感じているからである。

ひとつは 10 年前、内蒙古大学で機器分析の概要を説明したら、「この大学には赤外も質量分光も NMR も無い、あるのは pH 計だけだ、どうしてこれで近代化学がやれるのか。」といわれた。「では pH 計で近代化学をやしましょう」といってしまった 2、3 年後からある研究室にお邪魔して金属イオン濃厚溶液の pH 値の測定をつづけている。100 年も前の研究題目だが興味はつきない。もうひとつの背中の力は親しかった先輩の面影である。民科や JSA 会員だった I 氏も T 氏も 70 代、80 代で突然亡くなるその日まで一人で実験や計算に勤しんでおられたし、その先輩の N 氏は病床で手も口も動けぬ状態で新しい知識や考え方の吸収に懸命であった。ふと 60 数年前の寮の隣の席で学徒出陣の入隊直前の文系の友人が積み上げた本を一心不乱に身じろぎもせず読んでいる姿と重なって見えた。(ながわ なおや・化学・町田市在住)

長谷川 宏さん

2005 年 4 月、「首都大学東京」発足と同時に、10 年間つとめた東京都立大学を離れ私大に移りました。

私は、政治的活動・発言でも有名なノーム・チョムスキーという言語学者の理論に基づいてことばの研究をしています。

その私にとって、チョムスキーの最新論文で、英語の再帰代名詞に関する私の論文に言及があったことはちょっとしたニュースでした。(実は自分から論文をお送りして「売り込んだ」のですが。)

この 4 月にはノルウェーで開催される国際学会で研究発表を行う予定です。

というわけで、それなりに充実した日々を送っていますが、都立大の最後の 1、2 年、教職員組合の委員として、石原都政の横暴とたたかったころの怒り、悔しい思いを忘れることはできません。来る都知事選に何とか「反石原統一候補」を擁立することはできないのか、気をしている毎日です。

(はせがわ ひろし・言語学・英語学・専修大学・川崎市在住)

宮城 晴耕さん

東京教育大学大学院修士のときに科学者会議の一員となってから、すでに 36 年の歳月がたっていました。博士課程修了と同時に母校が廃学となり、何とか都立高校地学教員の職を得て現在に至っています。

大学時代は、火成岩の Sr 同位体比の研究を主にやって

いました。高校に就職してからはしばらく専門の研究活動から遠ざかっていたのですが、これではいけないと気づき、あるときから地学団体研究会の仲間と一緒に丹沢山地に隣接する足柄層群の調査をするようになりました。仲間と野外調査をやることで職場のストレス解消にも役立っています。こうした研究の場があったからこそ、教育破壊と、教員締め付けが横行する職場で何とかへこたれずやってこられたのではないかと思います。

足柄層群の調査は 10 年ほど続き論文を出して終了しました。一連の論文の中で、野外調査のデータから伊豆半島衝突説は成立しないという結論を引き出しました。現在はこの成果を土台に箱根火山発生の謎に取り組んでいます。ますます面白くなりそうです。

(みやぎ せいこう・岩石学・都立豊多摩高・世田谷区在住)

その 30: 個人会員ニュース No.71 2007.6.10 発行

安孫子 誠也さん

ブッシュ政権の温暖化隠し

2007 年 1 月 31 日の毎日新聞夕刊第 1 面に、「ブッシュ政権“温暖化隠し”学者に圧力」という見出しの記事がみられた。それによると、米民間団体「憂慮する科学者同盟 (UCS)」などが行った調査結果が、下院政府改革委員会の公聴会で報告されたという。報告内容は、約 300 人の政府関係機関の気象学者のうち、46% が「気候変動」「地球温暖化」という言葉を削除するよう圧力を受けたことがあると回答し、43% が研究の科学的意味づけが変わってしまう内容の変更を強いられていた、というのである。

科学研究結果に政治が介入したという事件は、これまでもナチスドイツのアーリア科学や、スターリン体制下ソ連のルイセンコ遺伝学説などがあった。今回のブッシュ政権アメリカの温暖化隠しも、それに類する事件といえよう。

私は、地球温暖化説を否定する学者を何人か知っている。また、2007 年 3 月の日本物理学会で開催された温暖化現象をめぐるシンポジウムでも、温暖化の確実性について気象学者たちの間でコンセンサスが得られていない旨の発言が相次いだ。しかしながら、このようなコンセンサスの欠如とは、実は上述のブッシュ政権による政治的圧力の下に形成されたものに他ならないと思うのである。

(あびこ せいや・物理学史・聖隷クリストファー大学・西東京市在住)

姉齒 暁さん

医療が受けられず、苦痛を耐え、病院の門をくぐったところで気を失う大腸がんの患者。時給 100 円ほどで外国に出稼ぎに行く若者たち。

一見、どこの国かと目を疑うこの描写は、何を隠そう自分の国だ。毎日新聞社会部編『縦並び社会 貧富はこうして作られる』にはこうした現状が次々と展開する。

この本の数ページが読者の意識調査と寄せられた反響に割かれている。「大学生をエリートと非エリートに分ける」ことの正当性を支持する割合が 4 割近くに上り、地方の町村が衰退していくのは「仕方ない」と答えるもの

がやはり3割強・・・税金を免除されている無職の20代後半の青年は、「社会保険料が払えないのなら医療を受ける資格はない。」と、貧困のどん底で死にゆく相手を切り捨てる。攻撃できる「同族」である弱い相手が報復的にすぎなくなり、政府のスローガンがそのまま自分自身の言葉となり、現状をひたすら受け入れ、あきらめさせられる・・・こうして「むしゃくしゃするから戦争をしよう！」の声の有権者の二割を占め、憲法第九条が解体される。そんなシナリオが脳裏に浮かんでくる。背筋が寒い。どうやらいつか会った亡霊が出てきたようだ。
(あねは あき・経済学・駒沢大学・世田谷区在住)

石村 和弘さん

2007年5月14日、「国民投票法」が参院本会議で「憲法改正」を目指す自民、公明の賛成多数で可決・成立しました。1945年8月15日、アジアを侵略し戦争を遂行した日本は敗戦しました。1946年11月3日、帝国憲法を改正し日本国憲法を公布しました。日本国憲法九条は「戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認」を宣言しています。

5月15日、東京新聞に「憲法をめぐる18、19歳の声」－憲法と聞いてなにを連想しますか－の問いの答に「核兵器廃絶」とありました、私も同じく答えます。日本国憲法は広島・長崎への原爆投下・核戦争の体験をも踏まえてつくられたものだと思います。核兵器が2万7千発も存在し「核兵器を使うこともある」と宣言し新型核兵器を開発している国があり、核兵器拡散が進行する可能性が存在している今日は、まさに「核戦争の危険性を内蔵した時代」です。

今の時代ほど「戦争の放棄」を掲げる日本憲法を世界に呼びかける必要があるときはないと思います。日本国憲法に基づいた外交があれば、世界の平和及び核兵器廃絶の道は大きく開かれることは間違いありません。

今日、日本政府の基本方針は、日本はアメリカの核兵器の力により「日本の安全」を守る、米国との軍事同盟の中で生き延びることにあります。この軍事同盟を発展させるために「憲法改正」を安倍首相は考えています。

早ければ2011年の秋、「憲法改正」国民投票が実施されます。18歳以上の有権者の過半数以上が「憲法九条守る」、「憲法を守る」を投票場に行って意思表示をするところまで運動をすすめなくてはならないと思います。これから4年間、一日一日なにをなすべきかを考えています。

1946年の憲法公布後の日本の平和運動とその中で生まれた原水爆禁止運動が蓄積した知恵と力を今日の状況に合わせて発展させれば、安倍首相の「憲法改正」の野望を止めることができます。これからすすめられる憲法守れの運動の中で、反核・平和運動は内容が豊かになり大きく発展すると思います。楽しい・すばらしい運動をしましょう。
(いしむら かずひろ・原水爆禁止東京協議会)

須藤 春夫さん

問題多い放送法改正

放送法改正案が今国会に上程されている。改正のねらいは、関西テレビ制作「発掘！あるある大辞典Ⅱ」の番組ねつ造問題をきっかけに、再発防止と称して政府（総務省）の放送への介入を正当化しようとするものであり、「護送船団」と揶揄される民放資本の所有規制を緩和し

て、「通信と放送の融合」時代に適合的なメディアの自由競争と新たな市場創出への道を拓こうとするものである。NHKの受信料支払義務化は見送られたが、次回改正では必ず出てこよう。

93年のテレビ朝日「椿発言事件」を契機に、政府の放送への介入は一挙に進み、放送局が不祥事や番組面で問題を起こすたびにトップが国会や総務省に呼び出される事態が頻発している。改正案はこれに法的根拠を与えるもので、成立させてはならない。

現行放送法では、番組の編集にあたって政治的公平性の確保、事実の報道、多角的論点の提示などを定めている。総務省が、これらの準則に適合しているか否かを判断するとしているのも問題である。国際的に見るなら、情報通信分野の行政や司法的判断は、政府から独立した規制監督機関（行政委員会方式）が担っている国がほとんどで、日本のように、総務省による独任制行政機関方式は世界の「非常識」といえる。放送の自由を実現するためには、まずこの改善から手をつけるべきだ。

(すどう はるお・メディア論・法政大学社会学部)

端山 好和さん

「日本は個人を尊重しすぎたので、日本人は人権メタボリック症候群になる」と言ったのは伊吹文化相だ。実態は先進国の中で日本ほど人権を尊重しない国はない。

「慰安婦」に謝罪せず、「南京事件」を認めず、旧満州に捨てた残留孤児に人間らしい生き方を閉ざす。アジアでは唯一「難民条約」を批准したが、難民を受け入れない。人権尊重のふりをして国連非常任理事国になり、国連で不人気な「戦争国家」アメリカを支持するためだろう。人権を何かの手段に使うとは正に人権に対する冒涇である。

生活保護費から「高齢加算」を奪われる老人、「母子加算」を奪われる母と子、働く場所と人間らしい生活を奪われる若者、健康保険証を奪われる病人が「人権メタボリック症候群」になる心配はない。「人権失調症」こそ心配だ。

また、個人の立場を尊重しすぎたから「公共の精神」を養うと言ったのも伊吹文化相だが、人権を奪われて「個」を確立できないまま「公共の精神」を弄べば、「全体主義」に陥ることは必定。健全なる「公共の精神」は確たる「個」に宿すことを知らねばならない。平和憲法と奪われた教育基本法を死守せねばならない所以である。
(はやま よしかず・地質学・町田市在住)

その31: 個人会員ニュース No.72 2007.9.10 発行

尾崎 恭一さん

無過失医療事故への補償

二十数年前に医療系大学の講義をもちはじめ、生命倫理も専攻するようになり、本会議の生命倫理研究委員会発足に参加させて頂くことにもなりました。

最近、思いもよらず表題の倫理的意義を考えることになりました。医療事故に限らず、加害責任の不明な被害は、かつては不運とあきらめるだけで、身内等の私的援助があれば不幸中の幸いでした。憲法上の社会的生存権

も、文化的最低限度の生活保障だけで、それを越えた補償は考えられませんでした。

今日、責任をとるべき加害者がいないとしても、被害者に責任がないのに重大な負担を引き受けさせるのは不合理との声におされ、きわめて甚小ながらも公的補償が徐々に実現しつつあります。その本格的な制度化にとって、この声の倫理的根拠等を明らかにすることも、力になるのではないのでしょうか。

その根拠として期待されるのは、憲法の権利保障理念の個人の尊厳や世界人権宣言の人間の尊厳という理念でしょう。尊厳性の意味を基本にすえたロールズ等の問題意識を幸福追求権に連結する論理を明らかにし、この問題の解明に繋がられればと考えています。

(おざき きょういち・哲学・倫理学・埼玉学園大学・国分寺市在住)

工藤 昌宏さん

科学も技術も驚くほど進歩し、そのおかげで生活も便利になっているのに、生活が豊かになったとか、幸せになっているという感覚がないばかりか、むしろその逆の方向に向かっているのでは、と思うことがあります。科学や技術の目覚ましい進歩とは対照的に、頻発する戦争、企業不祥事、悲惨な事件、事故、そして経済社会での格差、貧困という暗部を見ると、暗澹たる気持ちになってしまいます。人間を幸せにすることよりも、不幸にすることのほうが目立っているせいか、人間社会は前進しているのかどうか、ふと考え込んでしまいます。そこで諸科学がどのように生活の豊かさや幸せに結びついているのか、検証することも重要だと思います。日本科学者会議の会員になって随分と立つのに、今頃になってこんなことを考えています。『日本の科学者』は、この問題を考える心強い支えであり、楽しみでもあります。そこでまずは、今後もじっくりと『日本の科学者』を読みながら勉強します。

(くどう まさひろ・経済学・東京工科大学・八王子市在住)

久保田 義喜さん

食パターンの変化とバイオエタノール生産

所得水準が向上すると食生活が変化していくことはよく知られている。産業革命が進展していく中、西欧諸国では労働者が重労働に対応してより高いカロリー摂取を求め肉類の消費を増やしていった。日本においては第二次大戦後、魚肉から、鶏肉へ、さらに豚肉・牛肉へと嗜好を変化させていったことも周知のことである。いま世界の食料貿易に大きな変動をもたらしている中国の飼料穀物の大量買入れは中国の人々の肉消費の増加がその背景にあるといつてよいだろう。

もともと中国は豚肉消費の伝統をもつ国だったが、このところの経済成長によって肉の消費が飛躍的に増加している。これまでは、その飼料を国内で生産されたもので賄ってきた。それがこのところアメリカからとうもろこしなどの飼料穀物を大量に輸入するようになったのである。こうした動きは、かつてわが国が高度成長期に辿った道である。中国は日本の過ちを繰り返すようなことはしないと思うが気になる点である。

その点で肉を食べないインドではこうした食生活の急激な変化は起こらないと思われる。けれども、牛乳をより多く生産したいこの国にとっては飼料の確保は決して対岸の事態と決め込むことも出来ないであろう。アメリカで現在進行しているバイオエタノール生産ブームは地球環境という面から見れば好ましいとしても食料問題からすると疑問であり、土地の効率的利用の面からも望ましいとはいえない。穀物原料のバイオエタノール生産ではなく未利用資源の利用開発を進めるとともに砂糖きび原料のエタノール生産などを推奨すべきではないかと考える。

(くぼた よしき・農業経済学・インド協同組合論)

遠山 千春さん

環境汚染と毒性学研究

環境や食品に含まれる重金属(カドミウムやメチル水銀)、ダイオキシンや環境ホルモンなどの化学物質の安全性について、毒性学という学問分野で研究を始めて四半世紀が過ぎました。公害・薬害において、対策が後手に回り、被害が広がった事例は枚挙にいとまがありませんが、被害を未然に防ぐため、適切な科学的根拠を示したいと思って仕事をしています。

最近、ダイオキシン類や環境ホルモン問題は騒擾であり、無駄な社会的投資であったというネガティブ・キャンペーンがなされています。しかし、社会的な関心と運動があったからこそ、無法なゴミ焼却も激減し、環境汚染も改善したと言えるでしょう。

日常生活における様々な場面で、「環境」を意識した行動を取る人々が増えたことは、環境科学に立脚した活動の成果だと思います。

(とおやま ちはる・毒性学・つくば市在住)

松井 安俊さん

エコという言葉

いつの頃からか、やたらに「エコ」が氾濫している。商品名もそうだが、たとえば「それってかなりエコじゃないですか」なんて言うのもそうだ。「エコ」はエコロジーの略で、別にどうと言うこともないようだが、エコロジー(ecology か、ecological のどっちか)にしても、脈絡から違和感を感じることもある。生産や消費、つまり人為が生態系へのインパクトを少なくする働きを持つと言うことで使われるのが普通だと思うが、ときにはそういうムードをもつものにまで使われるケースがある。そのあたりまでは、まあいいのでしょうか。しかし、最近では、ちょっと気をつけていないと、実は本音はエコノミーのはじめの2文字だけ取っているんじゃないかと疑いたくなるものもあって、うかうかしてはいられない。リサイクルの実行やバイオエタノール製造でのエネルギー消費問題などを別にしても。

(まつい やすとし・環境科学・元産総研・八王子市在住)

その32: 個人会員ニュース No.73 2007.12.10 発行

石田 頼房さん

独居老人の地域活動

定年退職して7年余、独居老人になって丸6年です。

書斎以外での専門分野の勉強といえ、月 1 回、某大学の部屋を借りて開かれる都市史・計画史分野若手研究者の研究交流会に、先輩と呼ばれていることぐらいです。

そんなわけで、地域での様々な活動に重点が移っています。里山愛護会は専門分野とも少し関係がありますが、実態は週 1 回ぐらい、午前中一杯小さな里山の維持管理、シイタケ栽培、炭焼きなどの労働をして昼酒を飲んで終わるという楽しい会です。近くの小・中学生の自然観察活動も受け入れています。昨年秋に結成された青葉台地域の九条の会では、駅頭宣伝活動と勉強会をそれぞれ月 1 回やっています。この秋の大きな地域活動は、米軍ジェット機が横浜市青葉区の住宅地に墜落して 30 年という集会に実行委員長として取り組み、三つの区役所等で写真展を開き、あちこちで駅頭宣伝をし、9 月 29 日の集会は 300 人を超える人が集まり大成功でした。

地域活動では大先輩の妻が残してくれた人脈にも助けられて、独居老人は地域での生活にソフトランディングしたようです。

(いしだ よりふさ・都市農村計画・都市地域政策史)

小河 孝さん

長年住み慣れたつくば・東京を離れ、「風林火山」で一躍有名になった？長野県の真田に居をかまえて 2 年半が過ぎました。

自宅の横には、障害者グループホームが 2 か所と障害者が自立して住んでいる家が 2 軒あります。また、近くに農作業を通じて障害者とともに活動する NPO 法人「野辺をわたる風のように」があり、その活動にも参加しています。

ここでの活動は、コメ、トマト、ホウレンソウ、ヒマワリなどを栽培し、若干の収入をえています。さらに大切な活動として、月 1 回ひらく障害者との交流会（うどんとソバの会、春の山菜・秋のキノコ採り、暮れのもちつき会など）があります。

地域のひと達が、交流会の場で障害者と食べたり・飲んだりともに楽しむことで、自然な形で互いに気持ちに通じ合う第一歩となります。目下、「障害者との共生」を日常生活のなかで体感する日々を過ごしています。

(おがわ たかし・獣医疫学・長野県上田市在住)

標 博重さん

公害が環境＝エコに吸収されてはならない。

最近は何多の公害企業や公害行政がエコを冠に使っていますがどれもとがめません。なんとなく公害企業や公害行政が免罪されかねない雰囲気が見られます。しかし、公害と環境は一体ですが異質なものです。公害には被害者、対象がひと、自然、地域であり、被害という事実をもたらします。エコを標榜する自動車産業、築地市場の東京都など枚挙にいとまがありません。環境配慮は 2 つの理念を複合実践しなければなりません。まずは公害をださない。過去の公害責任をはたす。2 つにはより優れた環境を創出する。エコ自動車を作ることで公害責任を過去の物とすることは許されません。東京大気裁判和解につけても強く感じていることを一言。

(しめぎ ひろしげ・公害環境住民運動)

杉浦 公一さん

労働組合の専従として、今思うこと

労働組合の専従の仕事に就いて、25 年程になります。今、人間らしく生き、働くために、この仕事が益々重要になっていると実感しています。私の属する全厚生労働組合（厚生労働省の旧厚生省の労働組合）でも、次々に提起される待ったなしの課題に日々、仲間と議論しながら立ち向かっています。国立試験研究機関の独立行政法人の諸課題は、研究及び労働環境に弊害を及ぼしています。その上政府は、すべての独立行政法人を一方的に見直して、年末までに「整理合理化計画」を決めようとしています。とにかく、まともな理屈が取らない世界です。

直面する最大の課題は、社会保険庁「改革」です。最も伝えたいことは、社会保険庁「改革」が、社会保険行政を解体し、民営化しようとしている点です。職員の雇用は、国鉄「分割・民営化」と同様な仕組みがつくられています。社会保険庁バッシングのねらいを明らかにする上で、研究者や弁護士の方々と共同作業が不可欠です。本来、労働組合運動と民主的な科学者運動は、「平和と民主主義」「労働者の権利擁護」「社会の進歩と発展」のために、スムラムを組む親しい関係にあると思います。引き続き、社会が提起する諸問題を前向きに解決するために、労働運動の持ち場でがんばりたいと思います。

(すぎうら こういち・労働組合運動・横浜市在住)

峰岸 純夫さん

地域の歴史を掘り起こすボランティア活動

東京都日野市の東部にある百草山は、多摩丘陵の一角に位置し、ここは平安末～鎌倉期に真慈悲寺という丘陵霊場が立地したところである。この霊場の歴史と、その後の展開を明らかにしようという動きが市民の間から持ち上がり、日野市郷土資料館が音頭とりをしてボランティアを募集して調査活動が昨年度から始まり、各人が課題を持って熱心に活動し始めた。吾妻鏡その他の知られている資料を収集・分析し、考古学的遺物、仏像の阿弥陀如来などや中世瓦、経筒、板碑などの調査を行い、遺跡地の発掘調査に参加する。関東地方の類似の遺跡を訪ね、資料収集を行ったりした。さらに、真慈悲寺が廃絶した後にこの地域が霊場としての性格を残しつつ、近世の寺院松連寺に転化して真慈悲寺の遺産をどのように引き継いでいったかということも徹底的に調査した。その成果が、日野市新撰組のふるさと歴史館を会場に、9 月 23 日から 12 月 16 日まで郷土資料館の企画展示として行われ、その解説は、ボランティアの方々が交代で受け持っている。私もボランティアの一員として、また助言者として参加しているが、地域の歴史を住民の手で明らかにしようとする試みとして注目に値すると思う。

(みねぎし すみお・日本中世史・日野市在住)

その 33: 個人会員ニュース No.74 2008.3.10 発行

井本 三夫さん

旧「社会主義国」とは何だったのか

ソ連などは社会主義でなかったと云われる。では何だったのか。学問的に答えてくれる本は、極めて少ない。

P. チャトパディヤイ著、大谷禎之介ほか訳『ソ連国家資

本主義論』大月書店 1999 年は、『資本論』などマルクスの原典の見地から、国際的な討論を踏まえてこれに答えてくれる。「所有は生産関係の法的表現であって、独立の範疇と見るのは形而上学的幻想である」とマルクスはいう。したがって国家所有であっても、生産関係が変わらなければ、社会主義どころか国家資本主義に過ぎない。ソ連で起こったのがそれであったことが、ソ連国内の詳細な史実によって実証されている。又マルクスが資本主義発達の後に可能なものとして示した「アソシエーション」とは逆の、後進性にこそ崩壊の原因があったことが示される。但しこの本は、19 世紀的言い回しの原典の生硬な訳文が多く、読みづらい。また国際環境との関連や歴史的立場の論議がない。同じ立場の大谷禎之介・大西広・山口正之編『ソ連の「社会主義」とは何だったか』大月書店 1996 年と読み合わせ、自分で整理し直して見ると解ってくる。

今日「社会主義をめざす国々」とされているものも、植民地・半植民地から解放された「途上国」の一党独裁である。ソ連のような崩壊はしないにしても、国家資本主義の生産関係以上のものが期待できるかどうか。日々国際ニュースを見ながら、考えさせられるこの頃である。

(いもと みつお・近代史・科学論)

五十子 満大さん

私の記憶から

私たち家族は伯父の世話で、1941 年の冬、瀋陽の中心街でソ連軍に接収されたホテルにたどり着きひっそりと身を寄せた。近くの鉄嶺で商業学校教員の 40 才の父は前年 8 月召集され、そのままシベリヤ送り。春とは名ばかり凍てついた大地。突然、馬車の轍の音とともに異様な臭い。好奇の眼で通りを見おろす。山になった荷台にシートを掛け延々と続く馬車の列。あっー白足袋、5 才半ばの脳裏を貫いた。棒きれのような足にしっかり着いている。「見てはいけません」の母の厳しい声で窓から離れた。静かな外は何事もなかったように人が歩き、日が差している。開拓団の人達だと後で聞いた。氷解けを待っていたのか何度も続いた。焼き付いた残像はなかなか消えない。朝鮮戦争の時、毎日報道される戦線の動き、さながらゲームを見ているかのようであったが、そこで起きていることは容易に想像され、「人間は行き着くところまで行かないとダメだ」と一人思った。しかし、安保闘争の頃から憲法 9 条を自覚するようになり、憲法が保障するように一人一人声を出し、これをしっかり実行させれば、人間の過ちの多くは防げると確信し、今はいる。

(いらこ みつひろ・物理学・日野市在住)

江川 友治さん

「民科」創設のころ

「民科」とは、「民主主義科学者協会」の略称である。この会が創設されたのは、終戦の翌年（1946 年）の 1 月である。民科の綱領には“科学の創造と普及によって、民主主義日本を再建する”とあった。私は 1917 年に生まれ、1945 年に復員復職したが、この会のことを知り、ためらうことなく参加した。

民科が創設された頃は、敗戦直後の混乱期で、食料事情が悪く、私は職場の寮で、米軍放出のトウモロコシの

粉とアonzのジャムだけの飢餓と栄養失調の毎日を送った。今からは想像もできないような時代であったが、私たちは意気軒昂たるところがあった。

民科の会員は、その後、日本学術会議（1949 年 1 月発足）の中でも、活発に活動した。私は 1981 年から 1991 年までの 10 年間、会員をつとめたので、例えば「脳死をめぐる討論」など、さまざまな思い出があるが、紙数の関係で割愛せざるを得ない。

(えがわ ともし・土壌学・練馬区在住)

長沼 仁さん

私の出発点

仕事をつくっては海外へ出かけるようになって 20 数年。最初は隣の中国からでした。まだ人民服が一般的で外国人というだけで人が集まってきた時代です。もとの歴史好きとカルチャーショックから翌年には上海の大学の門をたたいていました。書物を読んで想像した地がここには実際にあると興奮して、南船北馬と旅をしていた頃が今も忘れられません。勿論 1 ヶ月の旅費が 5 千円もあれば充分だったから出来たことですが。さて 2 年くらいたった頃に忘れられない出来事がありました。徐州駅で乗車券をやっと手に入れ（当時は数時間並ばなければ乗車券を購入できません）、駅前の階段で疲れ果てて座っていると、1 人の大柄な若い青年が近づいてきました。「お前はどこから来た！」横柄に話しかけてきたのです。「日本だ！」という、いきなり着ていた T シャツをまくりあげて拳で胸をバチと叩き「日本人、ふざけるな！まけないぞ！日本人・・・」とツバを吐き私をにらんで去っていったのです。衝撃的でした。意味もわからず悪意をぶつけられたのは初めてでした。何故と冷静に考えればわからないことはないのですが、とにかく彼の感情が私のなかで波紋のように幾重にも拡がっていったのです。戦後の高度成長期にぬくぬくと育った頭でっかちの青年にはありがちな話かもしれませんが、国内の鏡では映らない「日本」というものが自分の顔に確かにあることを知った体験でした。

(ながぬま ひとし・平和学・練馬区在住)

安富 六郎さん

科学者会議の発足以来の「日本の科学者」の古参会員であるのみで、投稿もせず、科学者会議になにも貢献してこなかったことに不甲斐無さを感じています。幸いにも、その時代、時代の科学者として大切な多くの事を学べたことに感謝しています。現在も毎月の雑誌には一応目を通してありますが、年のせいか、高度な内容について行けないものも多くなりました。私の専門は農業工学でしたので、農業関係の論文、とくに公害問題、環境保護など、先進的な情報を得ることが出来たと思っています。最近では医療や天文関係にも興味があります。

昨年 11 月の「日本の科学者」に終末期医療問題が特集されていました。これを知人の専門家に見せたところ、大変興味をもたれ、科学者会議のあることを初めて知ったと言っていました。この雑誌を読んで貰えるように、もっと広く PR すれば講読者、会員が増えると感じた次第です。今後のますますの会議の発展と皆様のご活躍をお祈りいたします。（やすとみ ろくろう・農業工学・元東京農工大学）

大塚 正幸さん

青い地球と哲学の芽生え

月探査衛星「かぐや」が送ってきた映像に感動を覚えます。荒涼とした月の砂漠に、水を湛えて青い「満地球」が浮かぶ映像が届く科学技術の進歩に目を見張りました。宇宙から始めて見る小さな地球は、美しくも傷つきやすい姿でした。46億年の歴史の最後に登壇したヒト属が、自ら作りだした「文明」の利便に流され、「経済」の暴走を制御できずに、この天体を汚し傷つけています。近年のIT（情報技術）に基づく客観的で正確なRS（リモートセンシング）と、変化量の解析値は、海・陸・気象に関する危機を発し続けています。変化の一部は限界値を超えて非可逆的な負のスパイラルに陥り、効果的な抑制の時期をすでに逸したとの悲観説もあります。狭い地上でヒトは今も、利権や宗教や国益のため愚かな争いに没頭して「絶滅危惧種」を道づれに、一瞬の栄華の幕引を待っているのかも知れません。

自然科学の進歩に比べて、社会科学の遅れは顕著ですが、自然科学も研究の目的を誤れば、ヒトを絶滅に導きます。社会と自然を統制する哲学の復権が今ほど待たれるときはないでしょう。自由競争が経済の根幹とのまやかしが蔓延する社会で、票と金のために汲々とする世襲議員の施策からは、政治の理念と哲学の一切が失われ、ヒトは生きる目的を見失っています。お茶の間に伝わる宇宙飛行士の体感が、人々の世界観を蘇らせ、瀕死の地球を救う哲学の芽生えに繋がることを期待したいものです。

日本科学者会議が科学者の理念形成に役に立つことを望みます。

（おおつか まさゆき・土木工学・地形情報・杉並区在住）

小野塚 知二さん

過半数代表者になって

JSA 会員、ことに理工農系の方の多くは、国公立の大学や研究機関で働いた経験があるでしょう。国公立の機関で働いていた者が公務員から、諸種の労働法がすべて適用される百パーセントの労働者になったのは、法人化のもたらした変化のかなり大きな部分を占めると考えています。わたしは、今年2月はじめに東京大学本郷事業場の教職員過半数代表者に選ばれて、そのことを痛感しました。服務規律は就業規則に表現されるようになり、労働者はその作成・変更について意見を言うことができます。また、労働者は三六協定など諸種の協定の締結当事者となったため、潜在的には交渉力はむしろ強くなっているともいえます。むしろ、公務員時代には諸種の法、条例、規則で一律に決められていたのと比べると法人ごとの相違が発生するようになりましたから、労働者側の力量も試されます。労使双方が変化に慣れてはいないため、健全な労使関係を築くには課題も残されています。法人化という「災難」を受け止めて、前向きに良好な労働環境を作るのは今後の仕事です。わたくしども代表団のこの間の活動についてはホームページ（<http://www.e.u-tokyo.ac.jp/~onozukat/wr>）をご覧ください。（おのづか ともし・西洋経済史）

添島 幸雄さん

私の願望

この10年間、私はNPO法人建築ネットワークセンターの活動に参加し、住まいの問題について考えてきた。国の構造改革や市場主義の政策で、住宅難民といわれる人々や低質住宅に居住を余儀なくされている人が増えている。地震による災害も続発している。現代社会においては、安心して住み続けられる住まい（住居）は、人間生活の基盤であり、社会福祉を増進する要であると私は考える。

戦後にできた公営住宅法（1951年）は、住宅困窮者に対して低家賃の公営住宅を供給し、健康で文化的な生活を営むことができるようにすることを国の責務であるとした。その後格差社会や持ち家政策の進行の中で法改正を繰り返し、今日、住宅市場や都市開発市場の拡大をねらった大手建設業や財界の意向を反映した、住生活基本法（2006年）ができ、憲法25条の「生存権の保障」は曖昧にされている。

フランスでは、一昨年住居権法が確立し今年4月より施行、「適正で独立した住居」を自らの手段で獲得できない者にたいして国がその権利を保障することにした。わが国でも、個別の住まいの問題で地域社会が結びつき、福祉・医療そしてまちづくりなどとも連携した、生活者が中心となった住居権法の確立をめざして「9条の会」のような運動が全国的に発展していったら素晴らしいと思う。（そえじま ゆきお・建築・西東京市在住）

玉川 寛治さん

細井和喜蔵が『女工哀史』の中で描いた「東京モスリン紡織株式会社」の改名会社「大東紡織株式会社」で繊維技術者として37年間働き、60才で定年退職してから14年となります。現存する羊毛紡織会社では日本で一番古い会社です。1960年代、スクラップアンドビルドの奔流のなかで、貴重な紡績機械が次々に破砕されていきました。細いモスリン用の毛糸を紡績した梳毛ミュール精紡機は日本には1台も残っていません。

日本資本主義の発達に大きな役割を果たした繊維機械を産業遺産として保存することが重要だと痛感し、産業考古学会に入会し活動しています。今は、①島津斉彬の時代に薩摩藩が製造した、力織機とイーライ・ホイットニーの繰綿機の復元、②日本のシルクロードに残る蚕糸業産業遺産の調査を進めています。

残存している繊維機械に関する情報をお知らせ下さい。

（たまがわ かんじ・産業考古学会長）

野澤 保さん

人類は滅びるか

今から70年ほど前、私は田舎の中学生だった。中学に若い新任教師が来た。講義がとても面白かった。「かつて朝日新聞が懸賞論文募集をした。題は“人類は何で滅びるか”当選は“微生物”だった」。“人類滅亡の微生物説”は当時流行した。

さて、人間ほど科学を創造発達させた生物は有機生命体発生以来35億年の間に類例がない。それが何で滅びるのか？ 私は人類も滅亡すると信じている。熱心な仏教

徒だった祖母に育てられたせいだろうか。生者必滅・会者常離ということはしっかりと脳にプリントされている。仏典にある生者は人間個人のことであって、人類種全体を包括的にいうのではないとある友人が教えてくれた。

近頃、世間では理由も動機も理解できない殺人がマスコミを賑わせている。真実詳細はわからない。IT というコミュニケーション手段がかかわっていることが多い。私には、人類を滅亡させるのは人類が生んだ科学であるという信念が心の裡に生まれつつある。人口 1 億 2 千万の日本でケータイの保有は 9 千万を超えるという。今の小学生では 90% という。小学生はバーチャル世界という仮想の海に浮かぶ微生物なのだろうか。永田町界隈の怪物たちのバーチャル劇場も、我が身に火の粉が降りかかるまでは彼岸の火事であった。今やバーチャル情報は私の周囲を埋め尽くしそうである。バーチャルと真実との区別がつかない子供や大人があふれかえっている。私自身も怪しい。たまにはバーチャル世界に妥協していつわりのひとときを楽しみたいという気が起きることがある。危ない、危ない。

(のぞわ たもつ・地質学・無門福祉会理事長・愛知県豊田市在住)

その 3 4: 個人会員ニュース No.76 2008.9.10 発行

秋谷 治人さん

日の丸君が代強制と、相次ぐ地方交通線の廃止と

自治省主導の“公営交通再建計画”によって、1970 年代は都市の路面電車が急激に廃止された。1980 年代に入ると国鉄の分割・民営化論が台頭し、実施に移される中で地方交通線の別運賃策定・廃止・減便が行われた。都市と地方を問わず、私鉄の廃止・人減らし合理化は今も続いている。最近も鹿島鉄道、栗原田園鉄道、岐阜周辺の名鉄線などが地図から消えた。足を失うということは観光地やビジネス拠点としてのダメージは計り知れない。が、もっと大きいのは地域に住む人々の学習権や生存権を脅かしコミュニティの崩壊へと直結することである。日本がこうして独立採算・近代化・規制緩和などを掲げて公共交通のネットワークを破壊しているとき、世界の大勢は“交通権”の確保は国と地域にとっての必要経費という判断となり、路面電車の体質改善・軽快電車の開発等が急ピッチである。いったん廃線としたローカル線の再生もある。やはり、安全に、安価に、環境負荷にも配慮して---という“交通権”の概念は究極的には民主主義の 1 つの課題であろう。

私は 33 年間都立高校で働いてきた。学校は知識や技術や経験を習得する場で、生徒にも教職員にも保護者にも憲法や教育基本法の諸権利は保障されなければならないと思う。都教委の日の丸君が代強制・管理強化は、民主主義の害であるべき公教育の基盤を蝕んでいる。教育現場の一員として将来を危惧せざるをえないが、民主主義の根幹問題という点で“交通権”と繋がっていく。半年後の定年、今、頑張らねばと思う。

(あきや はると・数学教諭・都立六郷工科高校)

大森 昌衛さん

第四紀学の提案

一昨年若い人達に助けられて、イギリスのウェールズ地方の山を歩き、産業革命を契機に 19 世紀の近代地質学が成立した雰囲気を感じてきた。最近世界各地で自然災害が多発し、地球温暖化がグローバルな課題となっているため、改めて地球史における第四紀という地質年代の意味を考えさせられている。

第四紀は長い地球の年代から見れば、わずか二百万年程の短い年数に過ぎないが、人類文化が発達し現在の多彩な民族と生活環境が形成されてきた年代である。自然に恵まれた人類が逆に自然を人類の欲望に応じて、さまざまに変革する技術を創造してきた。

かつて私が学術会議の会員であったときに、当時の第四部内に第四紀地質学研究連絡委員会の設置を提案して実現した。しかし第四紀学の内容は自然・人文・社会の諸科学に関連するもので、当時の副会長世話担当として対応すべきであった。今こそ第四紀学の総合的な構成を検討すべきで、日本科学者会議の活動は第四紀学の成立に寄与するものである。卒寿を前にして足・腰を痛め会合に出席できず、戦力にならない筆者の夢を述べる機会を与えられたことを感謝する。

(おおもり まさえ・地質学)

小森 長生さん

宇宙から地球を見つめ直す

私の専門は「惑星地質学」である。わが国ではまだなじみがうすいが、しだいに仲間もふえつつある。惑星地質学とは、地球上の地質学の手法を土台にして、他の惑星の性質を調べようとする学問である。これは、太陽系、ひいては宇宙全体の起源と進化を解くうえで重要な分野でもある。近年の惑星探査の進展にともなう、月や火星など、地球型惑星とよばれる仲間の惑星の実態が、おどろくほどくわしくわかってきた。それぞれの惑星はみな個性があって面白いが、このことから、地球の独自性もひときわ目立ってきたのである。ほどよい温度と濃さの大気と、液体の水をもち、生命に満ちあふれたわれらの星「地球」。こんなすばらしい天体は、宇宙広しといえども、そんなにざらにあるものではなさそうだ。地球を大切にしなければ、という気持ちは、外の世界から見つめ直すことによって、いっそう強まってくるのだ。

(こもり ちょうせい・惑星地質学・小平市在住)

宗倉 哲さん

私の勤務先は、欧州に本部を置く IT 系の多国籍製造企業の日本支社です。日本をはじめとするアジア地域の新技術や、各企業で開発中の部品の調査を行い、欧米など他地域の同僚らとともに、比較検討し、部品の採用あるいは共同開発の採否について助言を行うことが業務です。私は、大学院（修士）は、応用物理専攻で、最初に入った企業から、当時の工業技術院に派遣され、太陽電池や液晶テレビの基礎技術である、薄膜シリコンの研究開発をおこない、その後、液晶テレビ、強誘電体メモリー、MEMS (Micro Electro-Mechanical Systems) デバイスなどの開発にたずさわって、米系半導体製造装置メーカーを経て現在の会社に至りました。曲折はありましたが、

これまでやってきたことが今の仕事に役立っているように思います。

日ごろ感じることは、日本の技術が優れているのに、企業の担当者の情報発信力が欧米に比べて劣っていることです。大企業では、欧米に比べて遜色ないように思いますが、中堅企業などではむずかしいようです。優れた技術なのに日本の市場だけで満足してしまっているケースもあり、歯がゆい思いをすることがあります。その一方、その辺の事情について承知している外国人が増えてきており、日本の担当者が語る話に一生懸命耳を傾けてくれます。結論的には技術力が何より大切ということになりますが、情報発信力がもっとあったらいいと思います。（むねくら さとる・応用物理・横浜市在住）

三原 實さん

私は、中・高校生時代は蝶に夢中な少年でしたが、就職したのは、国立予防衛生研究所（現・国立感染症研究所）で、衛生害虫には定年まで付合い、更に6年後の1995年に全ての勤めを辞めました。

職が無くなり毎日暇なことから、近くに在る、市の緑地保存指定の森林公園へ散歩に行き、少年時代に会った蝶と出会うと、再び蝶観察の魅力に引かれるようになりました。そこで、家から公園付近一帯を観察地域とし、一巡のコースを定め（約5.5km）、毎日午前中に一回歩くバタフライウォッチングを始めました。具体的には、コースを歩きながら蝶を見つけ、種類名と数を記録します。日々の記録を年単位で積み重ねると、この地域に棲む蝶の種類、年間の発生状況等、蝶の様々な生活や消長を知ることが出来ます。このウォッチングを始めたのは2002年春からで、2008年8月11日で2,044日目となります。今までの記録から、生息確認した蝶は5科44種、2002～2006年の調査全頭数30,167、この間に最も数が多いのはモンシロチョウ10,995頭、など等、蝶の興味ある資料が得られています。

10年間のデータが集まったら纏める予定で、毎日健康維持もかねて歩いています。（興味のある方は042-712-1434へ連絡ください）

（みはら みのる・衛生昆虫学・相模原市在住）

その35：個人会員ニュース No.77 2008.12.10 発行

浦田 一郎さん

「従軍慰安婦」の記念碑と自衛隊

9月に沖縄の宮古島を夫婦で旅行した。私はスノーケル、妻は宮古上布が目的であった。出かける数日前に、宮古島に「従軍慰安婦」の記念碑ができたという新聞記事を読んだ。そこで行ってみようと、タクシーの運転手に頼んだ。運転手は近くまで行ったが、見つけられなかった。そこで、自衛隊の基地が近くにあったので、運転手はそこで尋ねてみるという。そんなことをすると、嫌がられるかなと心配した。運転手が尋ねている様子を、私はタクシーの中から見ていた。運転手は背が低く、色が黒い。守衛の自衛官は背が高く、色が白い。ヤマトンチューがウチナンチューを軍事支配している光景のように、私には見えた。

結局分からず、地元の人に教えてもらって記念碑に行

くことができた。碑文によると、「慰安施設」は宮古島だけでも13、沖縄全体では約180あったという。そうすると、日本軍が支配していたアジア・太平洋全体では莫大な数に上るであろう。とてつもない性暴力である。「従軍慰安婦」の存在は承知していたが、規模を知ること大事だと思った。

戦後自衛隊という軍事組織を持つのであれば、戦争の反省が前提になるはずである。自衛官は本当は「従軍慰安婦」の記念碑の存在を知っているべきであろう。この軍事組織はどのようなものになっているのであろうか。

（うらた いちろう・憲法学・明治大学・国分寺市在住）

川瀬 清さん

納得した終末

私は5年前に冠状動脈の閉塞が発見されて以来2回、微細な金網（ステント）を動脈管にはめこむ処置をしました。一回目はステンレス製で、これは時に再狭窄の恐れがあり、3年後、別部位の狭窄には、免疫抑制剤を表面に塗った新承認のステントを使いました。ところがそれは、「血管が、塗布された薬剤を異物と見て、新たな血栓を作る」可能性あり、従って、抗血小板剤を飲み続ける必要ありという、新治療方針が出されました。

新方法が開発され、実行してみると新たな欠陥が発見され、新提案が出る。自動車製造や家畜への適用ならこれで好くても、「医療」の場合はどうなのでしょう。種々考えた末、取敢えず得た纏めは、(1) 新治療法の開発にあつて、医療従事者は患者志向に徹し、介入不可避な資本の暴力には敢然と立ち向かう。(2) 患者が医師に「金を払う・治してくれ」という商取引的発想からは、進展を望めない。(3) 患者も含め関係者一同が新知見を求めて共同し、次世代のため、人類の共通財産を作る、と考える……こうなれば、古い治療法を受けてしまっても、新文化建設の礎石に成っているとの使命感・安心感を得ることが出来ます。大正生まれの私も、静かな終末が可能らしいです。

（かわせ きよし・薬史学・伝統医学・日本薬史学会・横浜市在住）

進藤 兵さん

都留文科大学の公立大学法人化

私の専門は政治学（東京都政論など）で、JSA 会員となつて20年弱ですが、「大企業での勤務に疑問を感じていた時、きょうだいの不幸と老親の病気をきっかけに長男が郷里に戻り、転職して新しい仕事を始めた」という事情で、07年4月に東京北区に住まいを戻し、新たに都留文科大学の社会学科で新設科目「現代社会論」を担当し始めました。その都留文大は、09年4月の公立大学法人化を控え、大波に翻弄される小船のような状況にあります。本学は、都留市が設置する市立大学で、これまで学内の全ての公職は教授会で選出するという民主主義を確立しており、法人化後に新設される学内理事職2名も教授会の意向を反映して理事長予定者（地元出身の財界人）が任命する旨を、市が設置した法人化準備委員会の最終報告書で確認していました。ところが、今春着任した現学長（学外者、法人化後は副理事長の予定）が、学長選で自分を担いだ「側近」教授を、教授会の議を経ず

に学内理事職に秘かに推薦し、理事長予定者が公に任命してしまったため、教授会が紛糾し、学長が一時「病欠」するなどの事態になっています(08年11月現在)。背景には、市長や事務局長予定者(元文科省官僚、前大阪教育大学事務局長)らの「教授会自治嫌い」=トップダウン型経営志向があります。教授会メンバーの大半はいま、「自治」を守るべく粘り強く闘っています。私たちに、みなさまのご支援をお願いいたします。

(しんどう ひょう・政治学・都留文科大学)

日野川 静枝さん

科学者・技術者という職業

今年の秋は、いつにもまして息苦しい。80年代前後の大学民主化運動の時代に生き、それなりに人類の明るい未来像を心に秘めていたから…。夢が破れたと言って済ますことはできない。現状に至る過程には、汲み取るべき、学ばなければならない歴史の教訓が沢山あるはず。

いま、科学者・技術者という職業について考えてみよう。社会的分業として存在しているこれら職業には、好奇心の塊でなければ務まらない特性も付随していよう。しかしその好奇心だけで未知の分野に突進してもよいものだろうか。否であろう。歴史の主体は科学者・技術者にあるのではない。科学者・技術者は、歴史の主体に働きかけ、科学や技術の現状・可能性を示すと同時に、彼らから新たな課題を汲み取ることをしてきただろうか。いま一度、職業的使命を考えてみよう。

科学を人類の知的遺産と位置づけ、存在する限り、歴史に生きたいと念じている。

(ひのかわ しずえ・科学史・技術史・拓殖大学・文京区在住)

四元 忠博さん

ナショナル・トラスト運動について一言。ナショナル・トラスト運動は純粋な民間運動だ。私が初めてイギリスを訪ねた1980年代初頭、トラストの会員数はほぼ100万人だったが、今では360万人を超えている。所有面積は国土の約1.5%、海岸線は全海岸線の23%だ。イギリスの田舎は美しい。ロンドンをはじめ都市近郊は緑に包まれている。これがナショナル・トラスト運動をはじめ民間運動の力によるものであることを決して忘れてはならない。ところで数年前、私はトラストの海岸線の破壊に気づいた。トラストの所有地は法律によって譲渡不能とされている。だから破壊されるはずがない。ただ外部からの自然破壊の影響は免れまい。たとえば海岸線の破壊がそれである。我が国の海岸線のすさまじさは言うまでもないが、トラストの海岸線の現状については、拙著『ナショナル・トラストへの招待』に詳しい。私たちにとって自然保護、そして国土を守ることは喫緊の義務だ。しかし工業化と都市化は止むまい。こういうなかで私はナショナル・トラスト運動を軸にしつつ、政府・行政と民間部門との役割をもっと深く考えようと思っている。

(よつもと ただひろ・the Benefactor, the National Trust・元埼玉大学・さいたま市在住)

藏野 秀文さん

介護の現場

30歳の頃、理化学機器の営業の仕事に行き詰まっていた私は、これから需要の多くなる業界は何か、と考えた。そこで思い浮かんだのが高齢者を対象とした仕事であり、選択したのは何となくイメージしやすかった介護の仕事であった。そんな不純な(?)動機で福祉の世界に飛び込んだのが9年前になる。

最初は、全く違った領域の仕事に対して不安を抱きつつも、「食事、入浴、排泄の介助を黙々とこなせばよいのだろう」という単純な考えでもあった。しかし現実のプロとしての視点は複雑で、介護の基本である食事や入浴、排泄の介助でも一人一人の状態の変化に配慮し、常に家族や他の専門職との連携を行う必要がある。また身体的な援助だけではなく精神的な援助にも係わる必要があるため、求められる知識も幅が広い。

求められることが多い割に介護現場の職員の社会的地位と賃金は低いのが現実であり、人手不足は深刻だ。不況のため職を失った方々に福祉分野にきてもらう構想もあるが、専門性についてしっかりとした育成を行った上、一定の収入が見込めないと定着は望めない。いつまでも介護現場にボランティア精神を求めていると介護の担い手はいなくなる。

(くらの ひでふみ・社会福祉学・船橋市在住)

佐藤 乙丸さん

何か一言といわれて、日本科学者会議の発足総会に出席したことを思い出しました。東大生産技術研究所の数十ある研究部門の一つ、放射性同位元素工学部門の助手で、放射性同位元素実験室の取扱主任者に任ぜられ、自ら水中放射能の計測法の実験を行っていた頃のことです。

さて、2006年8月広島で、ウラン兵器禁止を求める国際連合の第3回国際会議が開かれ、その論文集が2008年春に出版され、その中で、イタリアのナノ病理学者からウラン元素特有の毒性が明らかにされました。すなわち、劣化ウラン弾が戦車に衝突すると3千~6千度の高温に達し、数十ナノメートル(=10⁻⁹m)以下のセラミック状の超微粒子となって飛散し、体内に入ると自由に動き廻り細胞内にまで入り込んで細胞の機能を破壊する。同時に高温にさらされた鉄などの元素も同じ様に超微粒子となって細胞核に入りこんで沈着し損傷を与えるという事である。この学者は広島原爆後の黒い雨も超微粒子の塵ではないのかと言っているが、黒い雨の中に核分裂生成物である¹³⁷Csが含まれている事実から、間違いなくウランや鉄の超微粒子の塊であると思い、元素分析も可能な電子顕微鏡で調べるよう手配中です。

(さとう おとまる・放射性同位元素工学・青梅市在住)

館野 淳さん

専門分野は原子力だが、大学でエネルギー問題にまで範囲を広げて教えたせいもあって、エネルギー問題、特に「人はどれだけエネルギーが必要か」という問いに大変関心を持っている。「湯水のような」化石燃料の消費に代表される、エネルギーの浪費の愚を指摘する人は多い。

しかし、それではどれだけ消費すれば、必要かつ十分なのだろうか。その判断基準はなにか。周知のように、自然科学の対象は「物質、エネルギー、情報」である。社会科学や人文科学においても、物質という客観的基盤を重視する考え方（唯物論）がある。それならば、エネルギーや情報という客観的对象に対しても、同じようにこれらを重視すべきではないか。とはいえ、何をどのように考えたらいのやら。少し根を詰めて資料をよんでみると目がかすんでくるこのごろでは、陳腐な言葉だが「日暮れて道遠し」である。どなたか、同じような興味をお持ちの方で、議論の相手になっていただく方がいないだろうか。

（たての じゅん ・ 化学・原子力 ・ 三鷹市在住）

鶴田 満彦さん

キューバ革命 50 年

大学在職中にキューバ人国費留学生の指導を 7-8 年かけて担当したことが一つの機縁となって、日本キューバ友好協会の仕事のお手伝いをするようになってから 5 年になる。

今年、キューバは、革命勝利 50 周年を迎えた。50 年前、キューバで反米・反独裁の革命が勝利したと聞いたときは、その数年前のグアテマラと同じように、米国の介入・侵攻によって崩壊させられるのではないかと危惧したが、1961 年の米国 CIA の傭兵軍による侵攻を撃退し、62 年以來の米国の厳しい経済封鎖にも耐え、90 年前後のソ連・東欧の体制転換による危機をものいいで、革命 50 年を祝したことには、深い感慨を覚える。しかも、かつては中南米の孤児だったキューバが、ベネズエラ、ボリビア、エクアドル、ニカラグアなどとともに、対米自立・社会主義志向の多数派の一員になっているのだ。

キューバは、いまだ社会主義をめざす発展途上国であり、1 人あたりの GDP は日本の 1/10 にも及ばないが、「誰をも見捨てない」という社会の安全・安定の点ではどの先進国にもまさっているように思う。昨年キューバは、3 つの大きなハリケーンに襲われ、数十万人が住居を失ったが、政府の応急措置と友人・知人の相互扶助により、現在はホームレスは一人もいないという。米国発の金融危機で「派遣切り」が続出し、職（食）も住居もない大量のホームレスを生んでいる日本とは対照的である。キューバに関心をお持ちの方は、わが協会の HP をぜひご覧ください。

（つるた みつひこ ・ 経済学 ・ 日本キューバ友好協会
理事長 ・ 元中央大学）

本間 喜久子さん

トゥイーの日記とベトナム訪問

最近、「トゥイーの日記」ダン・トゥイー・チャム（訳高橋和泉、経済界、2008）を読んだ。1970 年、戦闘が激しかった南ベトナム中部グアンガイ省で、若いアメリカ兵がベトナム語の日記を手にする。彼は、どうしてもそれを「処分」することができず、35 年後に家族の元に届けた。それは、医師として志願して南ベトナムに赴いたハノイ出身の若い女医トゥイーの日記だった。彼女は、1970 年にアメリカ兵に撃たれて 27 才の生涯を閉じる。あるページに彼女は書いている。「ズンが死んだ。アメリカ兵に

捕まって、その場で殺された。・・・この小さな日記帳に、いったい、いつまでこんな血なまぐさいページが書き連ねられるのか。でも、トゥイー、書き続けなさい」。そして、まるで詩のように綴られた日記は、35 年後の 2005 年にベトナムで出版され、50 万人が号泣したという。

私は昨年 9 月、トゥイーが医師としてベトナム戦争を生き、そして死んだグアンガイ省の南、ビンディン省、フーカットの母子健康調査に同行させてもらった。フーカットは、かつて大きな米軍基地があり、枯葉剤のタンクが置かれていた「ホットスポット」である。

国の解放のために大きな犠牲を払った人々がいたことなど忘れたかのように、その後、世界は金欲に走り、そして破綻した。トゥイーは、今の私たちに大きなものを残してくれたと感じる。

（ほんま きくこ ・ 薬学・衛生化学）

その 37: 人会員ニュース No.79 2009.6.10 発行

大山 光さん

インタビュー経験

最近、ある歴史的な事実に興味をもって、50 年以上まえのことを調べようとした。

断片的な事実を伝えるドキュメント資料が見つかったが、「もう少し知りたい」という気持ちから、いろいろな伝を頼って、数名の方にインタビューを試みた。

最初、手紙などで趣旨を伝え、質問項目をあらかじめ連絡することで、おおむね快くインタビューに応じてくれた。実際に会ってインタビューすると、質問以外にいろいろな関連した話が飛び出してきて有益だった。しかし、インタビューは大変難しい。

最初、「この程度のことかわかれば・・・」と項目を準備していても、実際にそのお答えをいただくと、更に詳しく質問したいことが出てくるのだが、インタビューを終えて整理しておくともう少し突っ込んで聞いておけばよかったと思うことが出てくる。意外な答えが返ってくると、すぐに適切な次の質問を出すというのはなかなか難しい。よい質問をしていれば、更に豊富な詳細を引き出すことができるかも知れないのだ。逆に、聴いた結果を、別の事実資料で確認すると思いついて語っていた内容が思い違いであることもある。

インタビューというオーラルヒストリー手法で事実を推認することは、期待に満ちた実証作業であると痛感した。（おおやま ひかる・知的財産権論・府中市在住）

榊原 道夫さん

JSA40周年記念に起きた奇蹟

2008 年 4 月、東京支部は 40 周年記念祝賀会を、一橋大学で開催した。すでに定年退職した私は、居住地域の町田市周辺の会員の集まり、町田科学フォーラムに参加している。年何回かの集まりが楽しみである。そんな時、40 周年記念集に投稿の呼びかけがあった。私は、1988 年、支部事務局長の頃、三宅島の米軍艦載機夜間離着陸訓練基地（NLP）建設反対運動、これを科学者の特性を生かし、それぞれの専門的立場から解明する事を経験した。バードアイランドとして天然記念物のアカコッコの保護、

地質学的には活火山島、三宅島の自然は東洋のガラパゴスとも言われている。日本科学者会議、日本鳥学会、日本地質学会、日本環境学会、日本生態学会、など多くの学協会が一堂に会して、学術シンポジウム「三宅島の自然と環境」を開催した事、科学者会議らしさを最も発揮した取り組みではなからうか。このような記事を寄稿した。その様なわけで、記念祝賀会の席で上記の事を披露しました。所が吃驚！私の報告直後、若者が私の所に来て、私小さい時、お父さんと一緒にNLP反対三宅島大会に参加した事を思い出したと。2008年4月、東大博士課程進学院生会員のほやほや藤倉哲郎君との出会い。人生なんと素晴らしい贈り物。科学者会議の会員でよかった。

(さかきばら みちお・物理学)

【参考資料】40周年を迎えた東京支部、2008年4月 日本科学者会議東京支部・JSA東京支部つうしんNo.249 1988.7.10・同 No.487 2008.5.10

疋田 哲也さん

ジョニーカムバック訴訟

(人間を自由にする基礎科学教育実践者の復活裁判)

1980 年から都内公立中学校で理科教諭をしてきた私は、生徒たちからジョニーの愛称で呼ばれ、「理科教育」では「互いの考えを尊重しあう柔軟な発想から科学的思考力を伸ばし、必然性の洞察を深めていく基礎科学教育」、「性教育」では「自他の性を尊重する中で、自己の意思決定をし、よりよい人間関係を作っていくこと」、「音楽」「演劇」「スポーツ」「生徒会自治活動」では「自分にあった自己表現をみつけること」を目標にしてきた。しかし、このような「自己決定・自己主張できる人間を育成する」教育活動を排除し、教育現場を上意下達化したい都教委は、2004 年 2 月末に、私が「教員として不適格」という理由をこじつけ、無理やり「分限免職」にした。第 10 回公判(東京地裁 527 号法廷・5 月 27 日(水)午後 1 時半)では、被告都教委の不当性と犯罪性を訴えるために元保護者が証人に立つ。その後の公判予定は、6 月 22 日(月)午前 10 時(元校長・教頭・都管理主事)・8 月 17 日(水)午後 1 時半(原告本人)すべて 528 号法廷証人尋問。「人間を自由にする基礎科学教育」復活のために是非傍聴に来てください。

(ひきた てつや・疋田教諭分限免職取消訴訟原告)

古川 範康さん

裁判員制度に思う

裁判員制度が始まった。トクヴィル(1805-59)は陪審制を「実用的知性と政治的良識を教える学校」といった。トクヴィルが陪審制を書いたからおよそ 200 年、ようやく日本でも実施されることになった(一度、戦前にもあったが)。ただし、トクヴィルは、刑事裁判における陪審より民事裁判における陪審に重きを置いているようだ。日常生活のなかでのトラブルを裁くことは身近なことゆえ、当事者の立場になって考えやすいからだろう。両方の立場に立って見て「平等、公平」という法原理を学べるからである。また、権利や法とは何かを学べる機会でもある、という。

裁判員制度は一定の刑事事件に限られ民事事件はないが、トクヴィルのいう、市民が裁判にまったく関与せず、政治的支配者にまかせてしまうなら、「真に人民主権が実現しているとはいいがたい」状態という。その意味で、陪審制の困難さにもかかわらずトクヴィルは人民主権実現への第一歩としてその重要性を考えていた。

わが国の裁判員制度を、人民主権実現への第一歩と捕らえればまた違った側面からこの制度を考えることができるのではないと思う。多様な他者と裁判を通じて出会い、自己変革ができる場として考えうるのではないだろうか。(ふるかわ のりやす・憲法学)

満川 常弘さん

個人会員の取り組み開始 20 周年を思う

いま僕の目の前に、1997 年 4 月 3 日に開催された「幻の座談会」の未公開記録(30 ページ超)がある。座談会は任意に開催されたもの。中心テーマは、どうして東京支部において個人会員の“組織化”、活動の活性化がなされるようになったのか、その歴史的経過を証言してもらおうというものだ。出席者は 3 名。あいいうえお順・当時の分会名だが、岩佐茂(一橋大学分会)、川口裕正(個人会員世話人・故人)、菅進(船舶技術研究所分会)である。コーディネーターは僕。

その結果、明らかになった 2 つだけを紹介する。1) 第 1 回目の個人会員交流会が開催されたのは 1990 年 3 月であるが、しかしそれには「前史」があって、1989 年 11 月か 12 月の常任幹事会での岩佐さんの発議を出発点としていたこと。2) 『個人会員ニュース』を発行しようという話は、それ以前から、菅さんと、当時支部事務局員をされていた八木純子さんとで話されていたこと、等々。こうして僕は、今年を「20 周年」だと認識している。来年、取り組みの開始を記念して、大きな催しを開いてはどうかと思っている昨今だ。

(みつかわ つねひろ・経済学)

その 38: 人会員ニュース No.80 2009.9.10 発行

小野塚 春吉さん

魚の汚染問題

長年勤めた東京都の研究所を 2004 年 3 月に定年退職したのち、JSA の先輩が役員を務める財団法人の研究所に籍をおかせていただき、週末は茨城県の「笠間クラインガルテン」(滞在型市民農園)で野菜づくりをして過ごしています。

東京都の研究所にいたとき、魚に含まれる PCB や水銀の分析、コメに含まれるカドミウムの検査などを行っていた関係で、有害物質による食品汚染問題が今も気になり、研究課題ともなっています。その中の一つである魚の汚染問題について、所属する JSA 公害環境問題研究委員会と日本環境学会に提起したところ、プロジェクトを立ち上げて汚染の実態と問題点を検討することになり、JSA 研究基金にも応募したところ助成が認められました。調査検討を進めるなかで、メチル水銀およびダイオキシン類による汚染が特に深刻であることがわかりました。成果は「報告書」として来年 2 月頃公表の予定です。

汚染が深刻な割に全体的に関心が薄く、行政の対応も遅

れている。というのが現在の感想です。『日本の科学者』にも特集企画をお願いしているので、掲載されましたらご覧いただけたらと思います。

(おのづか はるきち・環境化学・財団法人政治経済研究所)

野口 邦和さん

大学院修士課程 1 年の時に日本科学者会議に入会してから 32 年経つ。自然科学・社会科学・人文科学の人びととの交流を通じて自らの専門性が広く深くなったこと、自らの専門性を社会変革に役立てることの重要性を学んだこと、そして何よりも多くの仲間に出会えたことに対して、科学者会議に深く感謝している。科学者会議なくして現在の自分はおそらくなかったらと思う。全国常任幹事・全国事務局次長・全国事務局長を務め、現在もエネルギー・原子力問題研究委員長と社会的活動部員を務めているが、何故かこれまで支部役員を務めた経験がない。全国の役員を無事に務めあげた暁には、支部のためにもなにがしかの貢献をしなければならないと思う。しかし、科学者会議のせいではないにしても、非常に忙しい毎日だ。高経年化とともに忙しくなっている気がする。

(のぐち くにかず・放射線科学・日本大学)

村山 裕さん

弁護士会で子どもの権利委員会への所属が長いことから、子どもをめぐる法制の動向にも敏感になる。裁判員裁判が始まって、少年事件も家裁が刑事処分相当として検察官送致（逆送）をすると、刑事裁判となって対象となる。少年法の 2000 年改正以来、逆送事件は確実に増えている。少年事件の裁判員裁判でも、家庭裁判所で調査した、少年の生い立ちや資質、家族・生活環境などに関する社会記録が検討されることになるが、これを、少年のプライバシーや匿名性を確保しながら、裁判員に分かって貰えるように審理する方法の制度的準備は十分ではない。少年に相応しい刑事手続を用意するという観点が制度設計には窺えない。最近、憲法改正の国民投票法の投票年齢を 18 歳以上とすることとの関係で、民法の成年年齢の引下げを「是」とする法制審の報告書が出された。連動して少年法の少年年齢の引下げ論も起こりそうである。「子ども・若者育成支援推進法」を作ったので、「子ども」の領域を狭めて「自己責任」を迫及しても構わないということなのだろうか。政権交代があると、この動きが加速しそうな状況なのが、最近の悩みである。

(むらやま ゆたか・弁護士・東京中央法律事務所)

横田 茂永さん

独り言

最近、農家の後継者以外の人達による就農がちょっとしたブームとしてマスコミにもよく取り上げられている。必ずしも楽ではない農業経営に、農家以外の人達が入ってくるのはなぜなのだろうか。

他にもいろいろな理由があるだろうが、農業という仕事、土を実際にいじることが好きだからという意見をこのような就農者から聞いたことがある。労働はモノやサービスを生産する過程であると同時に、ある種の“サービス”を消費している過程と捉えることができるのかもしれない。8 時間労働であったとしても、1 日の 3 分の

1、起きている間の 2 分の 1 近くを労働時間が占めていることになるのだから、労働から受ける“サービス”はレジャー以上に大きな意味を持っているといえる。

仕事柄、労働を生産過程としてしか捉えないことが多いわけであるが、現実の人間活動の中では生産と消費が同時に進行しているという視点を研究に取り入れていくことも考えていく必要があるのだろう。

(よこた しげなが・農業経済学・JA 総合研究所)

吉木 健さん

古希をとうに過ぎて

かつて四国から瀬戸内海への SO₂ 公害の広がり、その固定化で化学肥料とした企業を引退して十数年。その後たまたまつれあいが勤めていた大学の図書館職員の夫が JSA 会員の教員の関係で、JSA 会員に薦められて会員となる。その偶然が次の必然を準備し？、教員が所属している NGO 環境教育研究会に参加。会の毎月 3 時間の報告会では（8 月で 105 回）、地球温暖化の現状報告等の一般報告や、ISO のプラスチック環境ガイドの提案者として殆ど毎年国際会議の報告等を行ってきた。この NGO は近々、市民・教師・学生向けの「環境リテラシー」の新装改訂版を準備している。大言壮語の類だが、私の 21 世紀のテーマは「環境」と「平和」。一方の平和の実践は絵画。オバマ大統領はプラハで核廃絶を訴え、他方で戦場をイラクからアフガニスタンへとシフトしており、眼が離せない。私にとっての「眼」は戦争・紛争の犠牲の無辜の民、特に苦しみ、悲しむ子どもたちの隻眼が主テーマである。一昨年、イラク、アフリカのシリーズ「眼」の個展を開催。現在「ガザの眼」を描いている。

私からひと言が近況報告になってしまったが、個展などの作品のブログを最後に紹介させて戴ければ望外の喜びである。

[<http://kenyoshiki.cocolog-nifty.com/blog/> 又は Google の“ガザの眼 シリーズ「眼」”を検索]

(よしき けん・プラスチック環境・船橋市在住)

その 3 9：個人会員ニュース No.81 2009.12.10 発行

明石 博行さん

新保守革命の挫折と構造改革戦略の興亡

日本の新保守主義・新自由主義的な構造改革は、橋本政権時に、企業改革と相まって本格的に推進され始めた。小渕内閣、森内閣を経て、小泉政権下で保守化はさらに深化した。その遺産を受けて安倍内閣は、新保守革命の本格的な推進を図った。だが、政権投げ出しでその試みは挫折し、福田政権、麻生政権のもとで新保守改革の勢いは急速に衰えた。

2009 年夏の選挙を経て、自民党政治は終焉した。新たに発足した民主党中心の鳩山政権は、新しい構造改革戦略を推進しつつある。その評価にはいまだ少し時間が必要だが、かつての革新派の構造改革の復活・展開という性格が、そこには認められる。

新保守改革戦略と新構造改革戦略との攻防はまだ続く。けれども、新保守改革の時代は基本的に終わった。全面的な小選挙区制にならないかぎり、日本の政治は三大政党の時代へと移行してゆくであろう。21 世紀にふさわし

い変革を推進してゆける時代に、ようやくあったのだと思う。
(あかし ひろゆき・駒澤大学)

小原 秀雄さん

年寄りのイヤ味話

私は、この小論に盛りこみたい現代の科学に対する批判が余りに多く、何十枚の用紙を費やしたあげく降参した。最も難しかったのは、現代の科学の性格などの表現である。

私の親友たち科学者は、相次いで故人となった。彼らとの討論ができなくなった。

若い時には、科学のありかたに肯定的であり、科学の進歩と社会のありかたとが共に良い方向に向かうと信じていた。社会のありかたをどう見るかは難しい点があるが、少なくとも科学の進歩と技術の発展とは確かだと思う。ただし進歩発展がある方向にか、少なくとも偏在していると思える。今は手放しで「現代」科学の進歩と技術発展とを喜ぶ気にはならない。また最近特に自然科学と自然とのすき間に目が向いている。この自分の考え方が、年齢と共にゆがんでいるとは思う。主流的な現代の科学、少なくとも生物に関する科学（生物を対象としているのか、生物「体」の物質を対象としているかのちがいがあ）が、「生き物」学と生物科学とに分かれているといった事態を指摘する友人もいる。だから自分だけがゆがんだ見方をしているとは思えない。欠落しているのは、進化観といいたい。ところがこれも遺伝研究などにワイ小化している。

それやこれやで、孤老のイヤ味話となり果てた。お許し下さい。
(おばら ひでお・動物学)

久野 勝治さん

10月11日に私は個人会員の集いで高尾山巡りに参加した。高尾山は1,000種類を超える高等植物が見られるなど自然の宝庫となっている。私は、東京農工大学で職員組合の活動の一環で20年余り毎年ムササビ等自然観察会を開催してきた。参加者は20名以上で学外からの参加もあった。

さて圏央道は、今から30年以上前、昭和51年に発表された国土庁の第3次首都圏基本計画の中で「広域多核都市複合体の形成と周辺地域の広域的都市圏育成」のため、「拠点交通体系の重点項目」として発表され、その後昭和57年には東京都長期計画にも盛り込まれた。モータリゼーション見直しの機運が強まる中それに抗するが如く、近年になって建設は強行され、高尾山にも北麓に中央道と連結するジャンクション建設のため大きなトンネルが開けられていた。崩れやすい岩質からなる高尾山への影響は計り知れない。一旦破壊されたら戻ることのない自然や文化遺産を守ることは後世に対する私たちの責任である。
(くの かつじ・環境化学)

穂積 弘一さん

最近の政権交代を機に、旧政権の負の遺産は変えなければいけないと思うが、新政権の人氣や変革の波に乗って、変えてはいけないことも変えられてしまう事を恐れている。特に、太平洋戦争の経験・反省に基づいて成立したと考えて良い憲法9条は変えてはいけないものである

るが、多数の原理で、日本を「普通の国」とする変革が起こらないと言う保障はないと思う。この様なことは絶対に許してはいけないが、どうすれば良いか今の所私には分らない。

昨年3月、太平洋戦争中、私が2歳の時に23歳で西部ニューギニアにおいて戦死した叔父のことを調べる必要があり、それまで良く知らなかった戦死の状況を調べた。悲惨な戦いの状況を改めて知り、勝算無き戦争を始めた指導者に憤りを感じた。

最近、その様な戦争の時代に、平和主義、反戦を貫いた水野広徳、安藤正楽、狩野亨吉等の存在を知った。彼らの「思想」は自らの経験、思索に基づいて考え抜いて到達したものであり、平和実現の確かな礎となるものであると思った。憲法9条の存続を確かなものするためには日本の安全保障と戦争放棄を矛盾なく両立させる知恵が必要だと思う。その答えを求めて、「平和学」を勉強してみようと思っている。

(ほづみ こういち・高速空気力学・調布市在住)

山岡 寛人さん

食料自給率50%の生活をめざして

中等教育学校の教育現場を定年退職してから5年がたちました。在職中に打ち込んだ環境教育の帰結として、自らの生き方に、食料とエネルギー資源の自給を課しました。私のこの問題意識は、『環境問題入門』（旬報社、2005年）という中学生向きの本で詳しく述べました。ぜひご覧ください。さて、定年退職後の生活ですので、体力的に100%をめざすのは不可能です。現実的な目標として50%にしました。フィールドは、千葉県館山市にしました。

1年目は、泥岩の岩盤を鍬で少しずつ崩して土を作ることに追われました。山からかき出した落葉、青草、調理屑などで作った堆肥、農家からいただいた粃殻や稲藁も鋤きこみました。ホームセンターで購入した鶏糞も投入しました。今ではふかふかした畑の土になりました。野菜はほぼ自給できています。今年はわずかな農地を借りて、麦作（小麦）と稲作（もち米）を始めました。それぞれ、90kgほど収穫できました。

タンパク質源の確保として、鶏あるいは兎の飼育が新たな課題になってきました。

(やまおか ひろと・環境教育・理科教育)

その40：個人会員ニュース No.82 2010.3.10 発行

伊豫 軍記さん

マケドニアとEU市場

私は昨年8月に、ヨーロッパ東部の新興小国マケドニアにおける果実と野菜流通の変容について把握するために友人と二人で調査に行った。早朝6時半、まだ暗闇の中の首都スコピエの中央卸売市場に、現地の農協全国連職員に連れられて行った。門を入ったそこは何の建物もなくただの広場で、近郊からの農家が持ち込んだ2トン～10トン車がトマト、キュウリ、ネクタリン等を積んだまま列をなして、地元の仲買人や小売商と相対取引の交渉を行っていた。商品規格は不統一であったがドイツ向けとする商品は3階級の仕分けがなされていた。市内

には雑貨青果商、グリーンマーケット（農産物直売所）、トルコ系スーパーマーケット、ショッピングセンター等があるが、次第に海外からの輸入物との販売競争が強まっていた。その他の東欧諸国をレンタカーで巡ってみると先進ヨーロッパ地域からの高速道路網が着々と整備され多くのトラックも走っている。

ヨーロッパ東南部に位置するマケドニアでは、多様な青果物が生産されビニールハウスも見られる。EU競争市場の中で今後どのような展開を見せるのか興味津々である。（いよ ぐんき・農業経済学・町田市在住）

小山 博司さん

「子ども達に、遅しさが見受けられない」

放課後の学童達の居場所作りとして、教室、体育館、校庭を利用して、様々なスポーツや昔遊び等が行われており、私は自分の都合の良い日を使って「サッカー教室」と「ものづくり教室」を2~3校で行っている。いずれも年間を通しての計画もあるが、基本的には、子供達が自分自身で遊びを考えだせる様にといい思いがあり、特にサッカーについては、成長発達段階に対応した体の動きができる様に考え、寧ろ技術的な事ばかりになり勝ちな所を、ネバリ強さや、しなやかさが求められる方向に持って行こうとして、時にはゲーム方式を取り入れたり異年齢ゴチャマゼ方式をとっているが、最近では子供達にもそうした意図が漸くつたわってきたようである。又工作教室の方も、年間計画はあっても、基本は今日自分は何をつくるかという事を考える事から始まるので、当初は戸惑いを見せていた子等も、常連組を含め、各々独自の物を作り出してくれている。しかしこれ等の子達は極めて少ない部類に属し、大半は非常に多忙で遊ぶ時間も少なく、朝食抜きの子も多く、午後にはもう体力の余力なしと見られる子もいる。特に男子に遅しさが見られない。地域を見ているとそう思えてならない。

（こやま ひろし・技術哲学・創造性開発）

寺田 博之さん

人生の進路

世の中すべて評価の風潮の中、筆者も過去数年大学等の認証評価に携わってきました。私が関わった高等工業専門学校分野は大学評価学位授与機構（以下、機構と言う）が一手に引き受けていました。評価は、機構が定める11の基準に従って行われます。

評価作業の一環で行われる澁刺とした学生らとの面談は心とむひと時でした。

評価基準の一つに「教育の成果」というものがあり、学校の教育目標に沿って教育が行われその延長上に学生が就職あるいは進学しているかどうかを評価するものです。学生の所属する学科と就職先のベクトルが違っていると当然評価は低くなります。

高専の年代は高校から一般大学の教養課程に当たりますが、これを自らの過去に照らして考えると、私の場合は思春期を境に随分と人生観も変わっていったように思います。中学のころ得意であった理数系が高校の頃には不振になり、むしろ文系科目に強く惹かれその方面に進みたいと思うようになっていました。もっとも、「そんな分野じゃ飯が食えないよ」との母の一言で、私の進路は

決まってしまったのですが...

「高専に入学したからにはすべての生徒がその路線に従って学業を修得しその延長線を進むことを制度として求める」と言うのは、人生今なお迷える仔(老)羊状態から脱却できないでいる私にとっては喉に引っかかった小骨のように思えたものでした。

（てらだ ひろゆき・安全工学・破壊力学・稲城市在住）

真鍋 和裕さん

最近の「農業ビジネス」の話題で思うこと

最近では食や農業に関する話題がビジネス紙や経済紙も含め、マスコミで多く取り上げられる様になり、また様々な業種からの農業ビジネスへの参入も見られ、話題的にはちょっとした「農業ビジネスバブル」です。

仕事柄新しい担い手や新たな取り組みをする農業の現場を見ていますが、成功した例から失敗した例まで様々です。農業以外の異業種から参入したものの、事業計画通りに行かずに撤退したという例も数多くありました。

農業は第二次、第三次産業と比較して利益率が低く、設備投資の回収に長い時間が掛かり、収入は天候や相場に大きく左右されるといったリスクも大変大きい、しかしながら私たち人間が生きていく上で最も大切なものを生み出していく基幹的な産業です。

今、疲弊している農業の現場を見ると、異業種との連携は必要であると感じています。ただし、農業に参入する企業各社は、100年とは言わないまでも20年、30年の計を持った責任のある参入が必要です。また農業の現場に近い立場の私たちは異業種の正しい参入を導くようなパイプ役になることが重要だと思っています。

（まなべ かずひろ・天敵微生物学・肥科学・JSA食糧問題研究委員会）

吉田 満さん

科学技術で人間を解放し個性を全面発達させる“揺りかご”作りを

経済社会において技術とは、人間が労働する際に手段と活動様式を合目的的に組合せて社会的富を生産するための手段体系を為すものであろう。

富の生産とは、労働力が自然あるいは人工の外的対象に労働手段を用いて働きかけ対象を変化させたもの、すなわち目的に合った形質と量をもつ対象を作り出すことである。我々の生きている資本主義社会では次の生産関係のもとで商品を作り出すこと、すなわち元となる労働力とその手段と対象は前もってそれらを出資・購入した出資者の所有物で、労働の結果、生産された商品も出資資本家に帰属するという所有関係、法的な関係にある。

そこで利潤を追究し資本増殖のために際限なく生産を行うのが資本主義的な生産様式で、筆者がそれを実感し理解したのは定年を迎えて「資本論」を読み、かつ半自営半ボランティア（ミニ経営）の生活を始めてからであった。

大学では応用物理を学び、コンピュータ開発とシステム構築サービスで30余年、自身と家族の生活のために労働力を売り働いてきた。定年退職で漸く“鳥のように自由な”時間が持てた。専門は変わり、以前からやっていたミニ菜園と有機肥料づくり、麴や味噌、ヨーグルトなどの

醸造に微生物を利用制御するための室を自作して、趣味と実益を兼ねて活動している。こうした健康づくりや環境向上の分野で科学技術を適用、研究・開発して“楽しく美味しく美しく”社会的富の生産、“産業の揺りかご”作りができないものか。

(よしだ みつる・有用微生物技術・所沢市在住)

その4 1: 個人会員ニュース No.83 2010.6.10 発行

田中 隆さん

20年

あのとき、国際国家になったことを背景に小選挙区制への動きが本格化した。これが、政治改革を序曲とする国家改造のはじまりだった。

あのとき、湾岸戦争を契機に「国際貢献論」が高まった。ブッシュ・ドクトリンへの加担と参戦を引き起こし、外征国家への道の第一歩だった。

あのとき、冷戦の終結を機にグローバリゼーションが世界を覆った。市場原理主義の跳梁跋扈を引き起こし、世界とこの国に格差と貧困を撒き散らした元凶だった。

あれから20年、さまざまな運動や事件を通じて対峙してきたものは、ほとんどすべてがこうした道筋に集約されている。

そしていま、市場原理主義の末路は白日のもとにあらわになり、ブッシュ・ドクトリンの破綻も明らかになった。ふたたび登場した国会改革・選挙制度改革の叫びをよそに、「モデル」とされるかの国では二大政党制と小選挙区制が断罪されるに至っている。

「とき」は確かに無駄に流れてはいない。だが、その「とき」が、どれだけの犠牲と痛苦を伴っていたことか。

その「とき」の展開のなかで、耳順の歳を迎えることになった。老いとともに往くことになる次の20年が、少しは和らいだ「とき」であることを切に願う。

(たなか たかし・弁護士)

成田 延雄さん

生きること

昔の話になりますが、太平洋戦争も末期、昭和20年(1945年)になって3月10日の東京大空襲を含めた東京の各地へのアメリカ空軍のB29爆撃機による連日のように無差別爆撃がありました。東京の多摩地区にも中島飛行機、日立航空機等の軍需工場があったので、4月になってH村にも爆弾投下があり、市内でも被害を受け死亡者がでました。

旧家の土蔵が被爆した時、救援に駆けつけた人々が破壊された土蔵のなかで赤ちゃんの泣き声が聞こえ、皆で探索した結果、1人の男の赤ちゃんが救助されました。

奇跡的に助けられた男の赤ちゃんは、敗戦後の厳しかった復興の時期を無事に生き抜き、戦後65年経った現在、H市の町会長を勤めるまでに成長されました。

戦争中に生かされた赤ちゃんの命は、戦後に社会に貢献できる人に成長できました。

人間は生きていれば無限の可能性をもって成長できるものであり、戦争中に多くの人々が未来の無限の可能性を奪われて死んでいった事実は、戦争は絶対にしてはならないと人々に訴えています。戦争中に青春を過ごした軍国少年として、その体験を話すことで憲法9条を守る運

動に少しでも役に立てばと考えています。

(なりた のぶお・機械安全・東村山市在住)

平田 熙さん

松戸市における生ゴミ資源化運動

松戸市(人口48万人)においては現在、市焼却ゴミの3分の1から4分の1を“生ゴミ”が占めており、それをストップさせて、エネルギー～家畜飼料・堆肥化等のリサイクル資源へ転換させてゆく事は、地球温暖化スピードを遅らせるためにも不可欠な課題・・・と、住民有志が数年前から運動を続けています。その一つとして、この3月の市議会・財政経済政策委員会へ、＜小中学校・給食残渣の資源化を求める請願＞を提出しましたが、残念ながら採択されませんでした。

全国的にも、「生ごみリサイクル交流会～生ゴミは宝だ!」が毎夏に開催され、今年は、8月23日(月)に早稲田大学国際会議場で第18回が開催されることになっています。昨年第17回(09年8月)の発表事例を以下、紹介しましょう。

全体会

- 1) 地球温暖化防止に向けて環境の里づくりが進む---自然エネルギーの活用、森林の保全、土づくりセンター
- 2) 食品残渣のリキッドフィード(醗酵液状エサ)での養豚---“食品ループ”実現

分科会

- 1) 「生ゴミは燃やさない!!」ごみ減量と循環型社会の構築
- 2) 「臭いを出さない生ゴミ堆肥づくり」
- 3) 「堆肥育ちが美味しい---共同農園でいきいき」
- 4) 「都会の生ゴミ どうする?---ここまでとりついた」(ひらた ひろし・土壌肥科学・元農工大・松戸市在住)

兵頭 圭介さん

「脅し」をともしなわなない健康教育を

仏教やキリスト教では、「地獄絵」によって信徒教育を行っていたようだ。これでもかと思われに残酷でおぞましい絵や彫刻により地獄の恐ろしさを見せて「信仰を守らないとこんな目にあうぞ」と宗教の規範に従うように仕向ける手法である。

健康教育もしばしばこの手法をとっていることに気付かされる。「タバコをすうと癌になるぞ」「肥りすぎると生活習慣病になるぞ」など、いくつでもあげられる。癌が不治の病であった時代や、心筋梗塞の発作がほぼ100%死につながっていた時代ではこの手法も有効であった。癌医療や循環器医療の技術が向上して、癌や心筋梗塞の発作が100%つながることがなくなってくると、こうした手法も「脅し」が効かなくなってくる。

自分は健康に関する分野で学生に講義をする時には、極力「脅し」の手法は使わないようにしている。「タバコを吸うと癌になるぞ」と教えるよりも、「タバコをやめるとこんなにいいことがあるよ」という教え方を心掛けている。もっとも、完全メタボ体型の自分が健康のことを講義してもあまり説得力がないかもしれない。むしろ自分自身が「不摂生をするとこんなにかっこ悪い体型になるぞ」という「脅し」の教材になっているのかもしれない・・・。

(ひょうどう けいすけ・保健体育・大東文化大・中野区在住)

山田 直利さん

80代になっても研究を

1965年の創立大会に参加したときの高揚した雰囲気
が忘れられず、その後約半世紀にわたってJSAの会員で
あり続けている。毎月「日本の科学者」で他分野の科学
の動向を知り、九条の会にも進んで参加したが、実際
には「維持会員」といったところであろうか。

私が国立の研究所（現在の産総研）を定年でやめてか
ら20年が経つ。定年後約10年間は資源関係のコンサル
タント会社に勤めた。そこでは国内の温泉・地熱開発の
調査から海外の地下資源調査までの広範な業務に関係し
たが、それまでの自分の研究がいかにもタコツボ的であ
ったかを思い知らされ、改めてさまざまな国の地質や資源
について勉強をし直した。その会社もやめて、若いとき
から抱き続けてきた地質の研究テーマに立ち戻り、何人
かの共同研究者とともにフィールドを歩き直し、2005年
に総括的な論文集を出版した。それには私が自由な時間
を持てたことが幸いしたと思っている。

5年ほど前からは地学史の研究に没頭している。明治
10~20年代に農商務省地質調査所から出版された縮尺40
万分の1「予察地質図」（全5葉）は、日本列島の地質構
造に対する認識をゼロの状態から一挙に引き上げた画期
的な出版物であるが、現在の研究者にはほとんど忘れ去
られている。このシリーズを読み直し、黎明期日本地質
学を担った人たちの足跡を掘り起こし、それを現在へと
つなげる仕事をしている。インターネットのおかげで、
個人の書斎でも多くの情報が得られ、また発信できる環
境になった。80代になっても研究（道楽！）は続けられ
そうである。（やまだ なおとし・地質学・地学史・
茨城県牛久市在住）

その42：個人会員ニュース No.84 2010.9.10 発行

上坪 陽さん

高齢者権利条約のこと

78歳の新人です。朝鮮ソウル生まれ、旧満州長春育ち
の引揚者。

あんまり貧乏だらけだったので、経済学部卒業後、福
祉事務所地区担当員、保護課・老人福祉課、山谷地区相
談員、児童相談所福祉司など、貧困と福祉・保障に従事。

1982年の国連第1回世界高齢化会議に「高齢者権利宣
言」を提起し、2002年の国連第2回世界高齢化会議では
高齢者権利条約策定を提案し、先行して開かれた世界高
齢者NGO会議でも確認。

核廃絶運動は、今年はNPT世界行動へ。そのついでに
国連高齢化プロジェクト責任者ローズマリー・レイン女
史に会うと、念願の「高齢者権利条約案」は今秋の国連
総会に提出するとの回答。

日本中の、そして世界中の、さらにこれからの高齢者
たちが納得する条約を、どうつくりあげるか。しかも加
盟国すべてが同意できる条約にするには、どう働きかけ
るのか。

なによりも、まるで「年よりは早く死んでくれ」とい
わんばかりの日本政府に、やる気を起こさせるには、ど
う取りくむのか。

会員のみなさまのお知恵、お力添えを、おねがい致し

ます。

（かみつぼ ひかり・日本高齢者NGO会議議長・
新宿区在住）

木本忠昭さん

NPOで科学史技術史研究所を設立

昨年定年退職になったのを機に、かねてより懸案だっ
た科学史・技術史関係の史資料を保存する方法に取り組
んでいます。皆さんは、歴史的に重要な史資料（蔵書）
はどうされますか？科学史技術史分野の人間は、比較的
多くの蔵書をもっていますが、これが難問です。かつて
のように大学図書館は引き受けてくれず、古本屋に売
っても、他人に渡ればいいですが、学問的価値評価は必
ずしも常に正当に評価されるとは限らず、売却を機に消
失するものも多いものです。

実は、科学史技術史関係では、故田中実、故山崎俊雄、
故飯田賢一元東工大教授らの蔵書は有志がこれまで別々
に管理していたのですが、個人の限界も見えていました。
そこで、これらに、元科学史学会会長菊池俊彦、現会長
道家達将氏の蔵書をまとめ、田中・山崎・飯田・菊池・
道家文庫として纏めて管理、市民・研究者に公開するこ
とにしたのです。スペースの許す限り、これら以外の蔵
書も引き受ける方向です。科学史技術史分野の若手は、
就職まで研究条件に恵まれず、また退職者も研究の場や
条件も日本ではまことに不便であることに鑑み、そうし
た問題にも一定の貢献ができないかと思案、結局、単な
る文庫（ミニ図書館）だけではなく、NPOの研究所組織
にした次第です。史資料保存をバックに、「老若」研究者
の交流の場になればという願いです。

正式には、特定非営利活動法人科学史技術史研究所で、
中野駅近くですが、ホームページ <http://ihst.jp/> をご覧下
さって、ご支援いただければありがたく思います。

（ホームページおよび URL は、近いうちに変更するか
もしれません。アクセス出来なくなったら、
nqg41451@nifty.com にお問い合わせ下さい。）

（きもと ただあき・技術史・元東工大、杉並区在住）

田代 真樹さん

自身が福祉労働に従事して、10年が経ちました。これ
まで利用者の立場に立ち、支援をすることを心がけてき
ました。しかし自身の身に降り懸かってきた事から労基
署のあっせん申請後の退職をすることになりました。こ
の経験から、福祉労働者の権利について考えるようにな
りました。

よく利用者の権利擁護が専門性だと言われていますが、
自身の労働者としての権利も守られないのに、どうやっ
て利用者の為に支援をすればいいのか。このアンビバレ
ントな状況に、ずいぶんと憤りを感じた時もありました。
1990年代の失われた10年と言われた中で、わが国の雇
用環境は激減しました。膨大な財政赤字の綻びは、社会
福祉にも様々な影響を与え、施設整備費は先細りや、非
正規雇用のさらなる拡大を招きました。これからの超高
齢化社会を担う福祉労働者の問題を、自身も福祉労働者
の視点で考察をしています。

11月の18総学（宮城）にてこの自身の経験を踏まえ
た発表をすることになり、自分の中では区切りをつける

か、研究として自身の課題とするかを考えたいと思います。被害者福祉学という学問分野は確立されていませんが、現場業務に従事する者として少しでも資するようになりたいと思います。

同じように感じている方がいらっしゃいましたら、仙台でお会いしましょう。

(たしろ まさき・社会福祉学・地域包括支援センター)

原 英二さん

生活協同組合で食の安全に関する仕事をしてきて、「科学」というものの役割について思うことがあります。少なくとも私たちの世代は、学校でテストの答は一つと教わりました。ところが、現実の社会では、科学の結論は一定ではありません。一定でないどころか、目的を持ってかかれば、自由自在という風にも見えます。このところ、食の安全の課題といえば、データが限られていることが少なくありません。遺伝子組み換え作物、照射食品など、動物実験による安全性の確認が困難なことに私たちは直面しています。消費者の立場からすると、何らかの懸念はあってもよくわからないことについては、より安全側にみて慎重な対応、今の時点で可能な対策を取るべきと考えます。しかし消費者のこうした懸念は、業界側からはよく「非科学的」と評されます。さまざまな推定を重ね、有害であるという証拠がないということで、安全だと判断してしまうことは、果たして科学的なのでしょうか。後から有害性がわかって誰も(本当の意味での)責任は取れません。皆さんは、どのようにお考えでしょうか。

(はら えいじ・東京支部食糧研究委員会・パルシステム生協連)

吉田 充夫さん

環境分野の開発途上国支援の仕事に従事しています。

昨今、地球規模の環境問題が言われて久しいですが、開発途上国に目を転じれば、今なお、世界で 50 億人以上、面積にして 60%以上を占める地域の人々は、「開発」の進行に比して、必ずしも適切な公害・環境汚染防止体制、廃棄物管理、環境管理を確立していません。それはまた、こうした国々の資源に依存し、経済関係を強める日本や先進工業国自身の問題でもあります。有限の資源、絶妙のバランスのもとに成立する自然環境のもとで、持続可能な開発を行うには、開発途上国、先進工業国を問わず、世界全体が力を合わせる事が不可欠です。

大学・大学院時代は、第四紀の地質学を学びました。現在の仕事はそれとはやや離れてはいますが、歴史的なコンテキストで見渡すこと、現象を自然と人間社会の相互連関の視点で把握することなど、開発途上国における今日の環境問題への支援の取り組みに生かせるのではないかと考えています。

(よしだ みつお・国際環境協力・(独) 国際協力機構・葛飾区在住)

その42b: 人会員ニュース No.85 2010.12.10 発行

小林 善亮さん

東京の多摩地域で弁護士をしています。法律の仕事をする上で事実の大切さを痛感しています。法廷で争われる事件の殆どは事実関係に争いがあります。基本的人権

に関わる事件では、人権侵害の事実を裁判官にいかにより提示するか心を砕きます。事実をどう捉えればよいのか、研究者の方に意見を聞くこともしばしばです。

私が弁護団として関わっている七生養護学校の裁判もそんな事件のひとつです。これは、都立七生養護学校で行われていた性教育について、2003 年、一部都議が「視察」と称して学校を訪れ、養護教諭を攻撃し、それまで同校の性教育を問題視していなかった東京都教育委員会がこれに同調し、教員を大量に厳重注意とした事件です。障がい児の発達段階に関する知見や性教育についての潮流、そもそも教育とはいかにあるべきか……。弁護団は障がい児教育・教育学などは門外漢ですので、多くの研究者の方にも意見を頂いています。弁護団から「素朴すぎる」質問や疑問をぶつけられて、戸惑った研究者の方もいたのではないかと思います。しかし、こういう共同作業で弁護士は勉強し、事実の見方に確信を持ち裁判所を説得することが可能になります。今後とも研鑽に励みたいと思います。

(こばやし よしあき・弁護士・三多摩法律事務所・所沢市在住)

土屋 十園さん

還暦の記念にチェコのカルロヴィ・ヴァリの国際学会に妻とともに参加した。ちょうどモーツァルト生誕 250 年記念の年でもあり、隣のウィーンではコンサートが連続していた。この温泉町はドイツ語ではカールスバッドと言い、社会主義時代には中欧の保養地として知られていたところで、モーツァルトは幼少の頃から父と訪れ、カール・マルクスもこの地に滞在している。彼らのブロンズ像が象徴的だ。湧水や温泉が豊富で森林に囲まれた谷間を流れる小さなテプラー川沿いを土産物屋、ホテルが建ち並ぶ楽園である。なぜこの土地で学会が開催されたか、西欧は生活の水を地下水にほとんど依存しているので象徴的なまちだからであり、河川や地下水のことを議論するために相応しいまちである。このときは院生 2 人も一緒に参加し、中世にタイムスリップしたような楽しいイベントにも触れた。オランダの環境省事務局の Karel Kovar さんから「日本はユネスコに沢山出費しているが国際会議へはあまり参加してくれない」と言われた。これ以降、妻は私の研究分野に徐々に理解を示してくれるようになり、海外に行くことの正当性を確保したようである。

(つちや みつくに・環境水理・水文学・大田区在住)

浜林 正夫さん

大学の危機的状況が心配です

大学を辞めてもう 10 年以上経つので、最近の詳しい様子は分かりませんが、新聞報道などによると大学はきわめて危機的な状況に置かれているように思います。

そのひとつは経常経費の削減です。詳細なデータを持っておりませんが、国公私立を問わず、財政危機が深刻化しているようです。分野によって違いはあると思いますが、とくに文系や基礎科学の研究は行き詰ってきているのではないのでしょうか。また、このことと関係しますが、旧国立系では研究計画の提出を強制され、計画作りに追われて肝心の研究の余裕がないという話を聞きます。

もうひとつはいわゆる「就活」です。このために、大学2年生のころから勉強が手に付かなくなり、3年の授業はほとんど成り立たないと言われます（もちろん大学によって差はあると思いますが）。大学が就職の窓口になっているといっても過言ではないでしょう。これでは大学がその存在意義を失うだけでなく、日本の未来も暗いという気がしてなりません。

いずれも簡単に解決できる問題ではありませんが、基本は現状を危機的として認識し、その打開のために国大協、私大協、教職員、院生、学生が協力して世論にアピールし、文科省や財界に働きかけることだと思います。

（はまばやし まさお・イギリス経済史）

日高 三郎さん

「原子の湖」の追及

私たちは、1992年、崩壊後間もない旧ソ連の核被害調査に出かけました。石本真団長（当時、日本ユーラシア協会副会長、東京家政学院大学教授）を先頭に科学者、医者など10人でウラル・カザフ核被害調査団を結成し、地図にも載っていない都市の核被害調査にせまりました。

旧ソ連最大の核実験場であるセミパラチンスクでの出来事でした。ジャガイモの形をした四国ほどの面積のところ、地上、地下、空中合せて四百数十回もの核爆発実験が行われたのです。現地で「原子の湖」があると聞いて、カザフ軍のヘリコプターででかけました。水深約数十m？差渡し約数百mの見事な「湖」でした。湖岸の放射能は自然界の1,000倍近くを記録しました。一体どういう爆弾を破裂させたのか、すでに数十年は経過しているのに物凄い放射能だ、土壌100gほどを拝借して帰国して分析を行いました。何とコバルト60が検出されたのです。時期は、1965年1月15日。ウプサラ大学で地震波をキャッチ、1月20日頃から新潟大学の研究者たちが異常な放射能を測定し、抗議の声をあげました。63年の部分核停止条約違反ではないかと、しかし、アメリカの追及もソ連の返事も、また日本の政府の動きも互いに鈍いものでした。ときあたかもアメリカのベトナムへの開戦前夜でした。コバルト爆弾を部分核停止条約に違反して爆発させた、このことを今なお追及しつつけています。

（ひだか さぶろう・原子力・杉並区在住）

森田 靖子さん

「私からひと言」欄に寄せて

修士時代の恩師よりご紹介いただき数年前に入会しました。在住の長野県の支部に入ることも考えたのですが、恩師のいるところのほうが心強く、東京に行ける機会が増えるかと思い東京支部の末席に在籍させていただいています。ところがというべきか、やはりというべきか、思うようには東京に出て行けないものです。

仕事では社会福祉士の養成校に勤務し、資格付与に必須の実習のお手伝いをしています。力量不足から研究が進まないことや仕事への不全感や閉塞感があり、4月からあらためて関西の大学院に行きはじめました。仕事関係の法改正や職場の仲間が退職したことなどの影響もあり仕事はますます忙しくなっています。二足のわらじの両立と研究時間の確保ができないのが目下の悩みです（研究に必要なスキルアップはそれ以前の課題です・・・）。

そして、ますますこの会への参加時間が少なくなっています。

しかし、大学院に行きはじめて、新たな仲間との出会いがあり、研究への刺激がたくさんあります。仕事だけをしているときには見えなかった学びも多くありました。大学院にあらためて行く事を決意したことは間違っていない、学ぶ姿勢を持ち続けようとするのが大切なのだとあらためて感じています。

（もりた やすこ・社会福祉学・長野県上田市在住）

その43: 個人会員ニュース No.86 2011.3.10 発行

鈴木信男さん

小中一貫校教育と学校統廃合

今、杉並でも「小中一貫教育」の名のもと、トップダウンで強引な、学校統廃合を進めているのです。

問題の第1は、子どもたちにとって、どんな影響があるのか、十分な検証がされていないことです。私の議会での質問に、教育委員会は、「先行自治体はある。ただ、9年間通しての、9年分の成果はまだ出ておりません」「そういう意味ではこれから検証」しながら図っていく必要がある」と答え、認めたのです。その後「全国どこでも検証されていない」と言い切り、強引に進めているのです。本来十分な検証が先行されるべきです。

第2は、先行自治体（施設隣接型）の教職員はアンケート「子どもにとって意義のあることと思いますか。」で、80～85%が否定的に答えている。と研究者の報告があります。

第3は、子どもたちと父母はどう受けとめているか。施設一体型の品川区モデルでは、この5年間で136人から66人に半減。杉並区でも先行の和泉地域では、3年間で30人が3人という入学者で、父母・子どもたちからも、既に見放されている証拠ではないのか。

2010年11月の本会議で質し、学校現場での父母・地域住民への情報提供で、杉並の高円寺地域では状況が一変しています。「まとまりつつあった」状況から「反対」に転じたのです。今後も引き続き頑張ります。

（すずき のぶお・区議会議員・杉並区在住）

堤 九十生さん

無縁社会の根源

IT社会の今、誰もが情報を容易に収集共有し活用出来るようになった。急速な携帯端末の普及は、それを更に日常的にさせるが、この現情報システムに重大な危険性が潜在していることを指摘したい。これには情報内容の判断機能が無く、虚偽や悪意の情報も大量に実社会に容易に汲み出され、それが社会との縁を希薄化させている。更に、それは秩序や道徳意識の低下の要因となり、社会人としての判断力の形成を阻害し、社会の他の要素とも絡んで負の連鎖「いじめ、ひきこもり、孤独死、家庭崩壊、無差別殺人」など「破滅的無縁社会」の、異様社会を生んでいる。私は、この現システムの改善を急がねばならないと思う。それは、判断力が未熟な子供たちも含めて、全ての利用者が安心して受容可能な新システムへの改善だ。その改善のポイントは情報が実社会を混乱させ、マネー誘導が君臨する現システムでなく、実社会が

情報を「従」とする情報選択システムへの改善だ。ネットの健全な発展を願い、実社会に根ざす多様なメディアが健全に発展し、生活や産業、文化、福祉、環境など、多分野に貢献することを理念とする人間性「主」の改善に急がなければならない。

(つつみ つくお・環境カウンセラー・環境社会新聞社主・兵庫県在住)

本間 慎さん

大学問題に取り組もう

文科省その他の資料によれば、日本には大学が 756 校あって、そこに学ぶ学生は約 283 万人である。そのうち、私立大学が 2/3 を占め、学生も約 2/3 の 207 万人が通っている。

しかし、その私立大学 527 校のうち帰属収入で消費支出を賄えない法人は 182 校で 35%を占めている。また、両親年収と進学率の関係は、4 年制大学へは 400 万円以下では 31%、就職などが 30%であるが、両親の収入が高くなるほど 4 年制大学への進学率は高くなり、1000 万円以上は 62%で、就職などは約 7%と低くなる。

日本の高等教育の財政状況をみると、国立大学法人においては、運営費交付金が次年度機械的に 8%削減されると一学部の廃止に相当する大学もある。また、私立大学への補助金は 10%台で、50%を目処に up を検討すべきである。高等教育に対する公財政支出が GDP の 0.5%で、OECD 各国の最低である。少なくとも 1.0%は確保すべきである。JSA としては大学問題は重要な課題であり、個人会員としてどのような取り組みが可能なのか検討してみようではないか。

(ほんま しん・環境科学・東京と佐渡在住)

武藤 徹さん

昨年は縁があって、東京堂から『算数・数学用語辞典』を上梓することができました。少年時代から、『岩波』『講談社』『三省堂』『東京堂』などの名前は知っていたのですが、創立 120 年に向けて作ったリーフで、はじめて、幸徳秋水の『社会主義神髄』を出版していたことを知りました。日露戦争前夜で、参戦反対論もかなり強かったようですが、弾圧の心配もあったのでしょう、「文武堂」というダミー社名になっています。何千冊かの出版書籍リストの中から、わざわざ、ダミー社名で出したこの 1 冊も、忘れずに選んだのには、出版界の先駆者としての心意気がこめられていると、強く感じました。おりしも、幸徳秋水処刑 100 年ということで、色いろの行事が催されていますが、東京堂のことも、記録にとどめてほしいと、筆を執りました。

拙著も、日本科学者会議の一員として、人類発展史の中の数学という視点でまとめましたが、発売 3 ヶ月で 2 刷りが決まり、驚いています。

(むとう とおる・数学・新宿区在住)

森永茂生さん

私立大学で化学関連の講義と学生実験を担当し卒業研究などの指導も行っている。職場では、弱小私学の典型で毎年の募集に一喜一憂する状況が続き会議などの多忙さに疲労する毎日である。しかし、その中での唯一の活

力源となるのが講義や研究室での学生との付き合いである。有難いことに、私学でありながら研究室の学生数は 5 名以下の場合が多くかなり学生との密着度も高い。

最近の学生の様子は一変している。この社会状況の中、就職活動で自信を失い、将来の展望も見えそうにない学生の立場は深刻である。そんな中、卒業研究を通して少しでも自分のやったことが結実するように、自信が持てるようにと学生と共に頑張っているつもりである。

現在のような日本の状況を作りだした自公政権および民主党政権の罪は大きく深い。現政権は前政権と大きな政策上の違いがなく期待薄であったが、社会情勢は前政権下よりさらに悪化しあまりにも酷い現状である。国民の期待を平気で裏切るような政権が、いつまでも続くことはないことを信じたい。

(もりなが しげお・化学・稲城市在住)

その 44: 個人会員ニュース No.87 2011.6.10 発行

北村 実さん

2004 年に 70 歳で定年退職してから、はや 7 年経ちました。この間、「大学に定年はあっても、学問に定年はない」との心意気で、できるだけ時間の確保に努め、研究に打ち込んできました。

幸い、私の場合、本さえあれば研究に支障はないので、現職時代よりじっくりと研究に打ち込める幸運に恵まれています。ただし、本代には、不自由しています。現職時代は、研究費があり、収入もそれなりにあったので、年間相当数の文献購入が可能だったのですが、今はそういかず、海外の出版社から送られてくるカタログを見る度に、あれも欲しい、これも欲しい、と悩みに悩んでいる昨今です。

各種の研究会にも、なるべく顔を出すように努めていますが、どこでも数少ない最年長組になり、淋しい限りです。でも、老化防止・若返りの絶好の機会と思って、若い諸君と議論し合うのを楽しんでいます。若い人からの刺激が何より魅力です。

今私が大事にしている一つに、「異文化との対話と共生」をテーマに掲げる共同研究があります。これは、私が理事を務めている財団法人・政治経済研究所のプロジェクト研究で、隔月に研究会をもっています。 昨年は「異文化に不寛容なフランス共和主義——スカーフ問題とライシテ」と題して報告をし、それを論文にしました(『政経研究』第 94 号、2010 年 6 月)。私に代る後継者の育成が私に残された仕事と思って、最後の奉公に励んでいます。

(きたむら みのる・哲学・社会思想・狭山市在住)

小池 盛明さん

薬害イレッサ訴訟は今年の 1 月に和解勧告がでて以来、急速に国民の関心が広がりました。

和解拒否後、大阪、東京で判決が出され、『致命的な副作用である間質性肺炎について添付文書の警告欄で情報提供をすることを怠ったアストラゼネカ社と、国が万全な行政指導を怠ったために引き起こされた「薬害」である事を認める』画期的なものでした。

国の和解拒否の直前、日本医学会をはじめとする各学

会が和解所見を批判する声明を出し、新聞各紙も報道しています。厚労省の役人が、批判的声明を出すよう「下書き」を送るなど働きかけていたことがわかりました。

イレッサは、承認条件である V1532 試験も含めて、承認後の臨床試験で延命効果の証明に失敗しています。EU では昨年ようやく承認されましたが、適用は EGFR 遺伝子変異の無い患者に限定されています。ア社は米国市場からの撤退を発表しています。

事件は高等裁判所に移りましたが、被害者への謝罪と償いをふまえた解決に向け、早期全面解決をめざし、支援の輪を広げて行きたいと考えています。

(こいけ もりあき・薬剤師・薬害イレッサ東京支援連絡会事務局長)

坂元 忠芳さん

教育学における「危機の作法」を明らかにする

この 10 年、地域民主教育全国交流研究会（交流研）の世話人代表をさせてもらっている。この会はまだ 35 年にもなるが、その全国集會を会員のいる県のイニシアティブで毎年おこなう。今年は発生の地でもある岐阜県恵那でおこなわれる。交流研では「地域に根ざし、子どもをつかむ」という課題を深めてきた。このところずっと現代の子ども・若者の「生きにくさ」をどう「突破する」かについて考えてきた。わたしは、機関誌『現代と教育』（83 号）に、去年の高知大会の総括として「新しい教育学の創造のために」を書き、教育実践とはある意味で「精神分析」であるといったパウロ・フレイレのことばを引きながら、事態を社会的・政治的・歴史的に分析しなければならないと強調した。東日本大震災にたいしても、この「危機の作法」を具体化しなければならない。「人に親切にする」という子どもの「原始的心性」（アンリ・ワロン）さえも、けっして自然に発達するものではない。船橋市に避難してきた兄弟が、公園で「どこからきたの」ときかれて「フクシマ」と答えたら、「放射能こわい!」とみんな逃げていった事実をどう掴むか。子どもの生活実感と経験を深めるために、大人自身の「経験」の質が問われているのではないか。40 年もまえに読んだ森有正の「経験と思想」についての思索を深めねばと思う。

(さかもと ただよし・教育学・町田市在住)

兵藤 友博さん

科学者會議に入会して 30 数年が経つ。科学者會議に入った時期は私が研究者の道を志した頃で、高校の教員を勤めるかたわら研究活動をしていた。そうした折、所属の整理方針が示されて、私は東京支部の個人会員になった。やがて私も大学に職を得た。

大学では経営学部の専門科目である産業技術論関連の講義と全学教養教育科目の科学技術史関連の講義を担当している。大規模私学のために講義規模のみならず演習の規模も大きい。理事会はこの程わずかではあったが ST 比（教員一人当たり学生数）の改善案を示したが、教育の質を高めることは容易ではない。21 世紀の社会を担う青年の育成には抜本的な改善策が不可欠で、私学補助をはじめ公的資金のアップが望まれよう。

研究面もきびしい状況にある。たしかに科研費をはじめとする競争的資金は増えてはいるが、大型化し特定の

大学に配分される傾向が一層強まり、採択率は漸減している。そうしたあおりを受けて学内の学術助成も同様の傾向にあり、研究基盤を総体的に弱体化させる方向にある。現場の現状にもとづいた科学技術政策の策定化が求められている。

以上、最近強く思うこと。

(ひょうどう ともひろ・科学技術史・立命館大学)

吉松 正秀さん

東京の都会に青年会が育つ

高度経済成長の中で、昔の青年組織は姿を消して久しくなくなります。今は学校ごとに年齢で輪切りにされ、青年組織があっても自主的民主的な運営がされる所は稀な存在です。でも沖縄は違っていました。「エイサー」を柱に新たな青年会をも作り出しています。大綱引きなどの伝統的な行事を掘り起こした所など、地域に無くてはならない存在として活動しています。

私の前職の和光小学校は 25 年前に総合学習・沖縄を始め、子ども達は様々な学びをしてきました。その中で、「卒業後も命どう宝を忘れず、エイサーを踊りつづけたい」と結成したのが、「和光青年会」でした。今年 10 年を迎えるこの青年会は、13 歳から 24 歳までの構成で、100 名程の集団になりました。結成時の決め事があります。①自主的民主的な運営を。②学校のことを優先。③親の組織を作り援助を受ける。始めの数年中・高生でしたから、親の力が必要でしたが、10 年経った今は青年の自主的運営です。年 15 回程度の公演もこなし、地域商店街や平和活動を支援しています。青年達は、学習や進路、恋愛、自分の生き方について悩みを持ちます。縦のつながりは、今まで同年代では解決できなかったもので、光を灯し始めています。彼らが踊るエイサーは進化し、比例するように集団が成長してきています。都会の中でこの青年会がどうなっていくのかを楽しみに関わっていきたいと思っています。

(よしまつ まさひで・平和・沖縄研究・町田市在住)

その 4 5: 個人会員ニュース No.88 2011.11.10 発行

江指 隆年さん

栄養学の発展を

昨年 3 月に 2 度目の定年を迎え、現在、3 度目の職場で管理栄養士養成の教員をしています。これまで、40 年間を栄養関係の仕事に従事したことになります。わが国を世界最長寿国とし、それを 30 年間以上維持し続けていることは栄養関係者のささやかな誇りですが、21 世紀にはさらに大きな役割が課せられているとその責任を感じています。現在おかれている研究・教育環境を最大限に生かして、その役割を果たすために機能させなければならないと考えます。約 10 年前、韓国の大学院生に講義をした時のこと、たどたどしい英語で一生懸命たくさんの質問が出されました。韓国の大手書店に行くと、関連する英文の書籍が多数陳列されており、韓国の大学では准教授以下の教員は欧米への留学経験がなければ採用されないため、英文の書籍がよく購入されるという背景があることを聞きました。あと 20 年したら日本の栄養学は韓国に追い抜かれるな、という印象をその時に強く

持ちました。日本の関係者がより一層励まし合い、これまでの成果と新しい情報を、国民と世界へ発信したいと願っています。栄養が、体の健康だけでなく、心の健康と社会の健康を高める大きな働きがあるという情報です。

「がんばれ日本」というすてきな言葉は、いま、みんなに必要な励ましです。（えさし たかとし・栄養学）

笹野 武則さん

解明と克服が急がれる課題、雑感

一昨年の秋に民主党政権の誕生は、国民生活にはそれなりのプラス材料を与えてくれるのではないかと私もそれなりの期待をしたものである。

しかし、その後の展開はあまりにも酷い。目を覆うばかり、といっても過言ではない。特に菅内閣以降は TPP 問題を始め、危うさを増していたが、東日本大震災以後は、与党内部も、それに悪乗りする自民・公明両党の対応も、国民生活無視の姿勢があまりにも露骨だ。復興に名を借りて消費税の増税や巨大開発の推進が画策されている。被災者の生活支援や「まちの再生」「コミュニティの再興」といった視点は一顧だにされていない。それに異を唱える声をマスコミは取り上げようとしない。そうしたなかで、私が緊急に解明しなければならない課題だと考えているのは、以下の点だ。

①地域から変質しつつある地方自治の現状と課題の解明。名古屋、大阪などの地域政党の跳梁は、民主党への期待への反動という面を含めて、ファシズムとの関係でより緻密な解明と対応策を早急に作り上げなくてはならないと思う。

②核関連廃棄物処理に関わる技術的な開発。福島第 1 原発事故による放射能汚染への対応技術の開発は、核廃棄物処理の問題も含めて、待ったなしの課題である。

（ささの たけのり・食糧問題・消費者問題・日本福祉サービス評価機構）

繁野 義雄さん

福島原発事故被害現地調査訪問を行いました

私たち「公害・地球環境問題懇談会」も原発ゼロを目指す運動を進めています。地域では、自治体等に放射線測定実施体制の強化を求めています。被害拡大防止対策（除染）も進めなくてはなりません。健康被害の調査も重要です。7 月 17 日～19 日に石巻市、福島市、南相馬市等を訪問しました。震災復興に取り組む現地の方々の奮闘を目の前にして、思いの丈を受け止めてきました。原発事故を一刻も早く収束し、放射能被害の拡大を食い止めなければなりません。汚染水は大量に流出し続けています。収束の目途は全く見えません。作業員に配管工事の技術が乏しいのです。なんと第 20 次下請けとなっている状況です。手間賃はかなり高額ですが、作業員には僅かしか渡らず、その多くはピンはねされています。正にヤクザの世界です。南相馬市の桜井市長と面談しました。その隣で特別委員会が開催されており、沢山の傍聴者が詰めかけていました。「義援金が出ないところがあるのではないか」の心配をしてとのこと。市民は自分が金を貰えるかどうかだけが問題で、他人の心を思いやる余裕はないといひます。日本のマスコミの批判もありました。外国のマスメディアは毎日 4 社くらいが現場に

来て取材してゆくが、日本のマスコミは引き揚げて、50 キロ圏外からの電話取材だそうです。汚染された稲わらを与えられた肉牛問題では、逃げ出したマスコミに「ベコ」を非難されることはない。一畜産農家にマスコミ 30 人位が押し寄せて犯罪者扱い。農民は犯罪者でなく被害者だ。東電が犯罪者ではないか。これも東電はマスコミの大スポンサーだからだと語っていました。

学んだ多くを語り、これからの活動に生かしてゆきたいと思います。

（しげの よしお・公害被害者救済・練馬区在住）

田村 佳子さん

東京品川区の小学校で児童指導員をしています。長年ピアノ講師として子供と接していた事と子育てもあり、子供にとって悪い事、良くない物にアンテナがいておりました。5 年前に今の仕事を始めて、障害児と接し、学生時代に聴講した音楽療法を思い出し、現在勉強中です。

この会に入会したのは、築地の移転問題です。科学者の目から見てどうなのか？安全性は？原発も同じですが、これからの社会を生きていく為には、賢い消費者にならねばならないと思っています。子供達にはそういう人間に育ってほしいと願いつつ、日々接しています。

夏休みはお楽しみ会という企画をしますが、去年は素人ですが、実験教室を行いました。一番興味を持つ良い時に、学べるきっかけがないのは不幸な事です。学校ではできない事をやれて楽しかったと妹から聞いたらしく、不参加だった姉が次の日に来て妹と同じ事を再度してほしいと言われました。

原発問題も色々な所で話題に上り、HP 等参考にさせて頂きました。生協活動にも顔を出していますが、食品や添加物や汚染問題等この会の紹介もしつつ、若い方々と意見交換の場を持つようにしています。是非、皆様の研究などを広く一般に知らせて頂き、賢い人類育成の為の手助けをお願いしたいと思っております。子供の頃科学部で楽しかった事を思い出し、子供達にも楽しい事を沢山知ってほしいと思います。

今後色々な情報を頂きながら勉強しつつ色々活動していこうと思っております。

（たむら よしこ・音楽教育・三鷹市在住）

吉田 傑俊さん

私立大学には定年延長の制度がある。私が勤務していた大学も一応六五才定年だが、通常ほとんどの人が七〇才まで延長を行なう。平均年齢の向上などから七〇才定年制も当然だろうが、私は五年少し前に延長を申請せず定年どおりに退職した。

それは、主につぎの二つの理由からだ。まず、一般に大学教員は研究・教育・自治の三分野に携わる。だが、近年の大学をめぐる状況は周知の文教政策などによってきわめてきびしく、上記の三分野を調和的行なうことを実際上不可能としている（とくにマスプロ大学の私学の場合は、研究分野へのしわ寄せがとくに大きい）。また七〇才定年制は、反面で若い優秀な研究者を大学へ迎えることを現状では困難にしている。周りには賛否は

あったが、種々検討のうえ私は自分なりの判断として定年退職を決めた。後継者の問題は、自分が関わることはなかったが結果として意を満たすものであった。研究の問題は、退職後の目標と設定した「近代日本思想研究」を進めつつある。この分野の結果も、主観的にではなく客観的に下されるべきことはむろん承知している。

(よしだ まさとし・哲学)

その46: 個人会員ニュース No.89 2012.1.10 発行

有馬 泰紘さん

命の糧としての食料、商品としての食料

私の専門領域は植物栄養学であり、近接領域として土壌肥科学がある。植物研究には様々なアプローチがあるが、私は食料生産に関わる植物研究の道を選んだ。

食料は、言うまでもなく命の糧でありその摂取が健康の基礎となる。命と命の平等を尊重することは倫理的正当性の基礎であろう。そのような立場からは、食料は全ての人々に行き届くべき物資である。しかし、食料には他の物資と同様に商品としての側面がある。商品は利潤追求の原理に従って流通する。市場原理に従えば、商品が存在したとしても購買力のない者には届かない。FAOの推計に依れば、2006年10月から2008年2月にかけての急激な国際食料価格上昇によって新たに7500万人の饑餓的栄養失調人口が増加し、2007年の世界の飢餓人口は9億2300万人に達したとされる。饑餓は貧困や格差の問題と直結しており、饑餓は先ず貧困に直面する人々と国々を襲う。世界の食糧需給関係は長期的な逼迫傾向に入りつつある。我が国の食料生産力を崩壊に導き食料自給率を低下させるような政策決定は、非倫理的であり且つ「食料・農業・農村基本法」に明確に違背する。

(ありま やすひろ・農学・昭島市在住)

今宮 謙二さん

『資本論』の講師をして15年

東京学習会議『資本論講座』の講師を引き受けて今年で15年になる。私が担当するのは第3部の第4篇商業資本、第5篇利子生み資本のところ、1日4時間、年に5回講義と質問、討論の形をとっている。この第3部は周知のように、マルクスのメモをエンゲルスが苦心してまとめたもので、そのなかでもとくに第5篇はメモがメチャクチャでエンゲルスですらも編集不能と言うところがある。その代表的なのが第30章から32章の「貨幣資本と現実資本」であり、エンゲルスは第3部の学び方について若い人への手紙のなかで、これらの章はあなたに不要と書いている。

したがって、この章についての解説は比較的簡単に記述してあるのがおおい。しかし私は講義をしてゆくなかでこの章が架空資本や銀行資本の支配力などについて重要な論点を示しているのが、だんだんと分かってきた。

これについては「資本主義的信用構造の基本的特徴」(『経済』03年2月号)などの論文で明らかにした。

この『資本論講座』の聴講生は水準が高く、鋭い質問がおおく、私自身の研究の刺激となっている。ドイツ語を独学して『資本論』を独自に訳し、ほぼ完成した人も毎年顔を出している。昨年は長野で有名な企業の社長も欠かさず出席し、ユニークな思いもかけない問題提起や質問を出され、議論も活発化している。私も85歳までは講師をしようと言っているが、いよいよ後任を探さなくてはと思っている。

(いみみや けんじ・金融論・八王子市在住)

小沢 隆一さん

この場を借りて日本科学者会議の皆さんにお願いがあります。

私は、日本科学者会議の会員でもあります。民主主義科学者協会法律部会の事務局から「平和と民主主義のための研究団体連絡会議」(平民研連)の幹事会に出ています。さる12月11日には「日本の教育;現状と課題をさぐる」と題したシリーズシンポジウムの第二弾「地域主権・政治主導は教育をどこに導くか」を開催しました。

大阪における「教育基本条例」制定など「地域」を磁場とする教育に対する政治介入の動き、いわゆる「守る会」系の歴史・公民教科書が大きくシェアを広げた2011年度の中学教科書採択、東京都立七生養護学校における性教育(こころとからだの教育)への政治介入に対する裁判でのたたかいなど、現在の教育をめぐる状況について深く、広く学ぶことができた有意義な会でした。

平民研連は、そこに集う研究団体が、時々「平和と民主主義」をめぐる状況について「持ちネタ」を出し合って論じ、交流し、共同して取り組む貴重な組織だと思います。20年以上にわたって日本科学者会議を事務局団体として営々と続けてきたこの平民研連の活動に、会員の皆さんが積極的に参加されることを切にお願いいたします。

(おざわ りゅういち・憲法学・東京慈恵会医科大学)

北村 浩さん

3・11の震災と、それに引き続く原発の事故で、日本の社会のあり方も大きく変容したと思うが、個人的にも、いろいろなことを経験することとなった。震災の影響で、多くの人が首都圏に避難してきたが、さいたまスパーアリーナも被災者であふれ、最大規模の避難所となった。ここにやってきたほとんどが、福島原発の事故による人たちで、彼ら/彼女らへの支援活動で、開設されていた3月中のほとんどの時間をそこで過ごすことになった。事故に対する政府の無策に困惑しながら、生活の基盤そのものをなくし、着の身着のまま避難を余儀なくされた避難者と向き合い、将来、未来をも奪う原発事故の重大さに、改めて制御できないほどの巨大技術の持つ問題

性について考えさせられた。

目下、各地の住宅へと分散した被災者への継続的な支援が課題となるとともに、損害賠償請求が焦点となっている。政府と東電がきちんと責任を果たし、十分な賠償を勝ち取るためには、長い闘いになりそうである。被害についての正確な科学的知見をもとに、責任を明確にし、被害者の権利を確立することが求められる。そのための科学的知見、権利論をはじめ、理論的根拠を提供するための、科学者の役割は決定的に重要である。

(きたむら ひろし・政治学・現代社会論・埼玉県狭山市在住)

塩田 公子さん

私は、仕事で家政学と社会福祉学に今まで関わってきた。仕事の内容の関係で、必要と思われることを少しずつ学び続けてきた。

天然染料による緑味についての研究の文章を発表してから15年以上たったであろうか。

そして、障がいをもつ人達の就労支援について調査して、文章を発表してから、10年になるだろう。

時代や社会の流れとともに、求められる仕事、研究の内容はかわってくると思っている。ただ、どんなに社会がかわろうとも、「真実を見きわめ、いかに今後を考えていくのか」という姿勢は、ずっとかわらずに持ち続けていきたいと思っている。

相手にいかに話をすれば、話の内容を理解してもらえるのか、相手とのやりとりから学ぶ時がある。これから、きっと毎日考え続けていくことだろう。最近、「今のとりくみが明日に生かせる」「人生にはムダなどない」「ゆとりの時間も大切なのだ」と思うこの頃である。

(しおた きみこ・家政学・社会福祉学・さいたま市在住)

その47: 個人会員ニュース No.90 2012.3.10 発行

岩佐 茂さん

反原発は反科学主義か

反原発は反科学主義もしくは反技術主義であるという考え方がJSA内部に一部ある。このような見方がなぜ生じてきたのだろうかということに疑問をもち、多少調べてみた。その結果、2つの理由があるのではないかと感じた。チェルノブイリの原発事故後原発批判が強まるなかで、一つは、「原子力は人類と共存できない」という主張を「反科学論」として批判したことである。もう一つは、広瀬隆氏の『危険な話』の出版で起こった「ヒロセタカシ現象」がきっかけになっているのではないかということだった。JSAは、1988年5月にシンポジウム「原子力をめぐる最近の諸問題」を開いて、『危険な話』の間違いや誇張、一面性を批判した。「反原発は反科学主義である」という言説がJSAの内部で主張されるようになったのは、この2つのことがきっかけになったと思われる(もし誤っていれば、ご教示願いたい)。だが、本当に、反原発は反科学主義もしくは反技術主義なのであろうか。わたく

しは、そうはおもわない。反原発は、エネルギーとして原発を利用することに反対ということであって、核エネルギーや人工放射性核種にかかわる科学研究や技術的利用を全面的に否定することを意味しないからである。

(いわさ しげる・社会哲学)

浦田 賢治さん

日本科学者会議の東京支部は、有倉遼吉先生(当時・早稲田大学教授)を初代の代表幹事に迎えた。わたしが学部学生だったころから師事した先生である。ということが唯一の理由ではないけれども、わたしもすぐに会員になった。

だが科学者会議の活動は早稲田大学レベルにとどまった。雑誌『日本の科学者』は分会ごとに配送されてきたので、それを学内郵便で各会員にとどける係を長年つとめた。こうして40年が過ぎた。

70歳で定年退職になり自由人の境地を愉しめるかと感じていたところ、乞われて3年間また専任教員になった。それも3年前に終わったが、「非核の政府を求める会」の活動と並んで「国際反核法律家協会」(IALANA)の役員職は持続することになった。こうした実践活動を持続するなかで、3.11のフクシマという事態に直面した。

いま痛切に思うのは、原爆と原発は別だという2分法の思考態度を根本的に改める課題のことである。昨年6月、ポーランドのシュシェチン大学で採択されたIALANA総会宣言は、このことを強調している。IALANAは今年5月、ウィーンで、国際原子力機関(IAEA)の2重の役割を検証して、これを再構築する方向で議論する。さて憲法研究に集中したいと思っていたのだが、なかなか願いはかないそうもない。(うらた けんじ・憲法・新宿区在住)

友寄 英隆さん

このごろ、学食で思うこと

退職してから、近くの一橋大学の図書館に通って仕事をする日が多くなった。昼食は学生食堂ですますのだが、なによりも安いのがありがたい。学食に座っていて思うのは、とにかく昔と比べて雰囲気さがま変わりしたことだ。若い女性のカラフルな服装で明るくなった。私が入学した1960年には、全学部あわせて約500名の入学者のうち、女性はわずかに2~3名しかいなかった。ところが、調べてみると、現在の学生数(4学年合計)は、男子3,342名、女子1,102となっている。実に3対1である。ところがである。企業における女性幹部の比重は、まったく変わっていない。内閣府の資料では、女性取締役の割合は、ノルウェー44.2%、米国15.2%、英国12.2%、フランス10.5%、ドイツ7.8%なのになら、日本は1.4%。トルコ8.0%、中国7.2%、インド5.1%に比べても、はるかに低い。日本経済が行き詰った原因も、案外、この辺にあるのかもしれない。女性の力を生かせない国が、21世紀に発展するわけがないからだ。しかし、そのうちに、いま大学で学んでいる若い女性たちが、この遅れた日本社会を、根底から変えるに違いない。学食で、もう娘よりも若い、孫に近い学生たちの、とりとめもないおしゃべりを耳にしながら、そんなことを考えている今日このごろである。

(ともより ひでたか・経済学・国立市在住)

平塚 眞樹さん

3.11 直後から始まった 2011 年度、私は自分の担当ゼミナールで、学生たちと話し合い、今年度のテーマを、福島の子ども・若者のいまから学ぶ、ということに定めた。福島の知己たちの援助を得て、夏休みには飯舘村の（避難先の）小中高校などを希望者参加で訪問し、とくに相馬農業高校飯舘校では、70 名近い生徒さん全員と懇談する機会もいただいた。

この高校で、去り際に、「東京に帰る私たちに何かメッセージはありますか？」と尋ねたとき、ある女子高校生が「自分たちがこれから県外就職したときに、風評被害に遭うことのないような東京であってほしい」と話してくれた。

この言葉に、私たちは「支援する」「される」という関係を根本から問い直させられた。人が「支援される」立場におかれたとき、本当に求めるのは、「支援してくれる他者」ではなく、自分たちが不当に生きづらくさせられることのない社会なのではないか。そして、人が「支援する」側に回ったとき、本当に必要なのは、他者に何かを与えることよりも、自分たち自身がいかにして他者の生きづらさにつながっているのかを考え、知ることではないか。そしてそのために、「支援される」側の人たちに助けて（＝支援して）もらうことでしか、生きる「支援」にはたどり着けないのではないか。それこそが、今の福島と私たちの関係だと気づけたことが、今年度のゼミナール最大の学びとなった。

（ひらつか まき・教育学・法政大学）

三上 満さん

福島県広野町、温暖でみかんの採れる北限の地、人の優しさあふれるこの町も、福島第一原発被災の地になった。あの事故のあと、この町に住む教え子に「だめもと」と思って手紙を出してみた。住民のほとんどは避難している。ひと月ほどたって、やっぱり届かなかったかと、半ばあきらめていた頃、その教え子から電話がかかってきた。今埼玉県三郷の公民館で避難生活をしているという。「先生からの手紙もらって嬉しかった」と涙声になった。手紙は郵政労働者の努力で、回り回って避難先に届けられたのだ。労働者とはこういうものだと、労働運動に身をおいてきたものとして誇らしくなった。

その後その教え子から「避難所を出て埼玉の東松山市の公営住宅に移った。今職探しをしている」との便りがあった。今どうしているかなと案じつつ、その住所あてに年賀状を出した。一月の二〇日もすぎて、おそまきの賀状が私に届いた。そこには「今年の年賀状は、先生の一通だけでした。それだけに貴重な先生の年賀状でした」と書いてあった。思わず涙が出てしまった。転々とした避難生活の中で、いろいろな絆が切れ、たった一通の年賀状しか届かなかった一家の新年。じつくりと、それぞれにさまざまに、優しさを出し合って、被災者との絆をこれからもつないでいかなければならない。

（みかみ みつる・全国革新懇代表世話人・豊島区在住）

菊地 隆男さん

最後の勤務先であった立正大学を定年退職して 3 年が過ぎた。結婚後武蔵野市に移り住んで 40 年、この 3 月には亡妻の十三回忌を済ませ、3 人の子の最後に残っていた次男も 4 月に結婚して別居し、今は一人住まいである。月に 1～2 回は研究グループ等の集まりで都心に出かけ、刺激を得ている。若干の蓄えと年金の生活で、他人には優雅に見えるかも知れないが、無精な性格が現われ、食卓はたちまちノート PC や資料、書籍で埋もれてしまう。

ところで、武蔵野市には「武蔵野健康づくり事業団」という公益法人があり、老人に対する種々の健康指導がなされている。筆者が受けている指導は運動と食生活改善で、特に運動では 1 日に 8,000 から 10,000 歩のウォーキングを実施、毎日記録をとり、次の集会に報告することとなっている。実際、この 5 ヶ月間で筆者の体重は 61kg から 58kg に、胴周りも 83cm から 80cm に減少し、階段の昇降も苦にならなくなった。もう暫らくの間は、健康を保っていたいものである。

（きくち たかお・地質学・武蔵野市在住）

中島 良一さん

私は 1960 年生まれですが、小学校時代よく読んだ学雑誌の口絵に「未来社会の予図」が飾られ、その真ん中には、原子力発電所が鎮座していたと記憶しています。福島原発事故は、かつて描かれた未来社会と科学の係に、根本的な問い直しを迫っています。その課題は、人々の日常生活の中で、科学の社会的役割、リテラシーとしての科学・教養を育むことにかかっているのではないのか、と思ったりします。今、日本科学者会議が地域で、科学者の社会的責任を広げていく活動を重視しているのもつながってくるでしょう。より幅広く、生活の根幹を問い直すような対話、議論ができるような場をつくってくれることを心より期待しています。

（なかじま よしかず・新日本出版社『経済』編集部・さいたま市在住）

西村 一郎さん

東北の被災地から考える

100 年とも 1000 年に 1 回とも言われている東日本大震災で、いったい何が起り、どう対応すればいいのだろうか。単に我が国の防災計画やエネルギー政策だけでなく、社会のあり方や一人ひとりの暮らし方や生き方まで問われている。その答えを考えるため私は、毎月のように被災地へ足を運び、被災者の立場から観たり聴いたりしている。政府やマスコミの情報があまり当てにならないので、時間がかかっても自分の足を使って考えた方が近道である。同じ東北でも地域によって被害や文化なども大きく異なり、各地で創意工夫した取り組みが進みつつある。震災以前から深化していた社会病理が、たまたま 3・11 で浮き彫りになったことで、その解決には被災者の主体性を育む共助が一つのキーワードとなる。そうした私の 1 年間の足取りは、『悲しみを乗り越えて共に歩もう一協同の力で宮城の復興を』（合同出版）で 1 周年目に出させてもらった。

我が国における反公害運動の第一号となった足尾鉍毒

事件で、全人生を注いだ田中正造は、谷中（やなか）学として最前線で闘う農民から多くを学んだ。問題の発生している現場から学ぶ大切な姿勢は、水俣学や東北学などとなって今日も生きている。震災地に暮らす人々から学ぶ三陸学に、同じ時代を生きる日本科学者会議の一人として切り込みたい。

（にしむら いちろう ・ 食生活・生協 ・ 取手市在住）

濱口 晴彦さん

これからの「老いる権利」の話をしよう

どこかで見かけたタイトルだなとお思いでしょう。白熱教室のM. サンデル『これからの正義の話をしよう』（ハヤカワ文庫）と一語違い。一語違うだけでなんだか危険思想を大声で主張しているみたいではないか。だからこそいま正義の話をする必要はある。

「5匹のサルが対岸のリンゴの木からリンゴを採ろうと、1匹目のサルは此岸の木に掴まり、2匹目のサルはその猿の手を握り川に入り・・・、4匹目のサルは対岸の木に掴まってできたサルの肩橋上を5匹目のサルが渡り、リンゴを採った。このリンゴははたして5匹目のサルのものか否か」と安倍磯雄 — 明治社会主義者で日本学生野球の父 — が問うたのは、分配の正義のことである。

ところで、老いる権利はことばとして認知されていないが、5匹目のサルに喩えて高齢者の老いる権利の主張は、いまどき正義にかなっているのか否か。（上掲文庫版をテキストに早稲田大学国際会議場4階第7共同研究室で月1回研究会を開催。お問い合わせはシニア社会学会事務局（電話：03-5778-4728）の島村まで）

（はまぐち はるひこ・人間科学論）

真嶋 麻子さん

この4月に助教になりました。学部を卒業してから8年、初めての「正社員」です。ただし2年間の任期付きで、3年後の自分がどう生計を立てているのか、想像もつきません。若手研究者をとりまく苛酷な社会的環境に我が身もおかれているわけですが、ともあれこの与えられた任期はゼミ教育と博士論文執筆とに有効活用しなければなりません。

第二次世界大戦後、旧植民地諸国が次々に独立する過程と並んで、国際社会は開発援助を組織化し、発展途上国の抱える貧困に取り組んでいます。1980年代に顕著に実施されたコンディショナリティを伴う構造調整政策から、1990年代後半になると途上国の「オーナーシップ」が尊重される援助への転換がみられます。私の関心は、そうした途上国の主体性が強調される国際協力のあり方を積極的に捉えながらも、その底流には「途上国の自己責任」論や成果偏重の援助戦略が勢いづいているゆえに、開発援助は真にローカルな人びとに行き届かずにいるのではないかということ、理論および実践を把握しながら検討することにあります。ゼミの学生とは、国連ミレニアム開発目標の歴史的意義および問題点を考察することから取りかかっています。

（ましあ あさこ・国際関係学・津田塾大学・杉並区在住）

赤壁 毅彦さん

夏の宿題

この原稿を書いている今は8月14日、締切の前日だ。かなりあせっている。朝日新聞の天声人語にも、小学生が夏休みの宿題をこなすのに、8月上旬に済ます子、8月下旬になってあわてて始める子がいる----と書いてある。私は明らかに後者。

さて、暑い夏とあわてる話と言え、地球温暖化を忘れてはいけない。原発事故以来とかく忘れられがちな地球温暖化であるが、今少々気がかりなことがある。それは小氷期突入の話である。江戸時代には、太陽活動の低下による小氷期が2回あり、大飢饉がおき、隅田川も凍ったという。

ここで気がかりなのが、小氷期を理由にして温暖化対策をおこたる動きが出かねないことである。なるほど、寒冷化するなら温暖化対策は必要ないと思えそう。しかし小氷期は数10年で終わる。その時に対策をおこたったツケが襲ってくることになる。ちょうど、宿題が終わらぬうちに9月1日の始業式を迎える小学生のように。

原発に頼らずに低炭素社会を作るための取り組み・技術開発が求められる。

（あかかべ たけひこ・潤滑学・目黒区在住）

岡田 原史さん

農山村のチカラを信じて

22年間生まれ育った都市（千葉県市川市）を離れ、単身で宮崎県の日之影町という山村地域で暮らすことになって3年が経ちました。集落支援員という立場で、高齢化が進んだ山間地の限界集落の対策を日々考えています。

木材、農産物価格の低迷により後継者（若者）がいなくなった山間地集落。「もう、10年後にはこの集落も無くなっているだろうな」と住民も半ばあきらめの雰囲気。それでも、山間地に人が住むことにより私たちが得られるモノは多いと思います。木材、薪、シイタケなどのキノコ類、タケノコ、タラの芽などの山菜、野草、昼夜の温度差によりおいしくなる米や野菜、ヤマメ、あゆ、ウナギなど川魚、そして暮らしている人たちの心の暖かさ。人が住まなくなってしまうと、私たちがこれらの「山の幸」を得ることは難しくなってしまいます。温暖化やエネルギー問題を考えるうえでも、山間地域の生活や資源を見直すことはとても重要ではないでしょうか。

山間地域に新たな価値を見だし活性化させることは、現在の冷えきった日本社会を救うことに繋がると信じて活動しています。

（おかだ もとし・宮崎県日之影町集落支援員）

島田 陽子さん（旧姓栗原さん）

東洋大学博士課程で研究をしておりましたが、プライベートや仕事でいろいろ変化があり、一旦区切りをつけることにしました。7年間、夜勤をしながら大学に通っていたので、少々物足りないのですが、論文に追い詰められることもなく、体もお財布も楽になって少しリフレッシュしています。環境が整ったらまた再び研究をして

いきたいと思います。それまで、現場で情報収集に励もうと思います。

日本は学ぼうと思ったときに自由に学び、関心があることに対して研究を進めていく環境が整っていません。全体的に大学の学費は高いし、社会人で学ぼうと思うと仕事のやりくりをつけ、生活費を稼ぎながら両立していかなければならず、結構ハードルが高いと思います。憲法 25 条に「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」とありますが、健康で文化的な最低限度の生活の中には、学びたいと思ったときに学べる環境がととのっていることも入ってくると思います。なぜ、大人になって〇〇を学びたいと思ったときに簡単にできないのか。どういう社会の仕組みでそうなっているのか、よく考えて行きたいと思う昨今です。

(しまだ ようこ・看護師・中野区在住)

本間 一郎さん

「おもしろ実験」なる行事を企画し、自宅近くの児童館で、主に小学生を対象にして、一年に一度開いています。今年で 15 年になります。半ば趣味、半ばボランティア、というところですか。きっかけは「物理学会誌」に載った「青少年のための科学の祭典」にかかわる記事を読んだことでした。夏に行われるこの祭典の全国大会に、足を運んでみました。楽しい実験を見て、小規模でも地元でこのような実験をしてみよう、と思ったのです。人まねだけではいけない、と思いつつも、ここからは多くのアイデアを借用しています。また、以前「日本の科学者」の＜談話室＞に載った、厚紙で作るブーメランの記事も参考になりました。先人の知恵を借りた、やじろべえ、あぶり出しなど、伝統遊びや、豆腐作りも行ってきました。今後の出し物候補のひとつは太陽熱で調理してみよう、という企画です。使うのは、段ボールにアルミ箔を貼った反射板を、近似放物面状に貼り合わせたものですが、よく晴れるとゆで卵くらいは作れるまでに、出番を待っています。

(ほんま いちろう・元ソフトウェア技術者・中野区在住)

吉田 昭治さん

1957 年農学部卒業すぐに鶴岡市の山形大農学部の新設の農業工学科助手に研究の左右も分かれぬまま採用され、その二三年後尊敬する先進的な先輩助教授らによる設立の学科枠を超えた研究談話会「きこり会」に参入する幸運に恵まれ、科学研究の意味や方法論を学ぶことができた。この「きこり会」は「65 年全国の日本科学者会議創立と共に山形大農学部の同支部となり、学部の民主化や組合活動に重要な役割を荷うこととなった。その後これ又偶然「67 年新潟大に新設の農業工学科に転任、それまでの土中の浸透流の基礎的研究を武器に水田や地すべり地の土中水の動的調査・解析をやってきた。‘99 年定年退職、東京移住後は“地表の人工的構造物の重量によって地下深くにある厚い粘土層の圧縮脱水による長期の沈下現象（例：ピサの斜塔や関西空港の沈下）”の沈下の時間的変化の圧密理論的予測法について、新しく土粒子とその間隙水それぞれに二種の実体的存在様式を仮定する方法により思いがけぬ良い成果を得て論文を発表してきたが、これらを更に発展させ来年の傘寿までには地

盤工学界に広く認知されるべく纏めの作業に努力している所です。

(よしだ しょうじ・土壌物理・土質工学・足立区在住)

その 50: 個人会員ニュース No.93 2012.12.10 発行

喜多 功さん

個人会員世話人の一人で、「個人会員ニュース」の「私からひと言」を担当しています。

12 年前に岐阜大学を定年退職しました。以後、高齢の母親が独り暮らしをする東京と妻が働いている岐阜との間を行ったり来たりする二重生活になりました。母は、初めは家事支援だけで済みましたが、だんだん認知症が進み、介護必要度も増しました。そして、家族だけでは支えられなくなり、1 年余りの入院の後、この夏、98 歳で世を去りました。

退職後 JSA 岐阜支部から東京支部に移籍し、「私からひと言」の担当者になってから 10 年が過ぎました。毎月 5 人ずつ書いていただいて、執筆者の数は 200 人を超えました。よく続いたなという感慨がありますが、私を支えてくれたのはこの活動による出会いの喜びでした。介護の 12 年はさまざまな個人会員の生きざまにふれる歳月でもありました。今は感謝の気持ちでいっぱいです。

老齢引退された会員や亡くなった会員がある一方、新たな会員が増えています。担当を近く退きますが、この欄を長生きさせたいものだと思っています。

(きた いさお・獣医学・野生動物医学・新宿区在住)

中島 園恵さん

ムカデの足

ここ数年は、大学と看護専門学校での非常勤講師、リハビリテーションソフトを開発する会社でのパートタイム勤務をしながら生計を立てている。大学では「介護サービス計画」、看護専門学校では「社会保障と制度」「社会福祉活動」を講義している。今年の 3 月に大学院の博士課程を満期退学し、4 月からは社会福祉士養成通信課程の受講生でもある。すべては、今と将来の生活のためである。

研究と教育に心血を注いで来年喜寿を迎えられる恩師からは、「二足の草鞋を履くな！！」「二兎を追う者は一兎をも得ず！！」と、ついこの間まで言われていたように思う。しかし、最近はやれなくなった。体調のことばかりを気にしてくださるが、この変化は、恩師の年齢によるものであろうか、それとも時勢であろうか。

何足の草鞋を履いていても、ムカデのように前進していききたい。多少のアクシデントがあっても、ムカデのように再生しながら前進していききたい。ムカデの苦手な私ですが、ムカデを見てそう思う。

(なかじま そのえ・社会福祉学・練馬区在住)

中村 邦光さん

最後の勤務先であった日本大学生物資源科学部を定年退職し、あつという間に 8 年が過ぎました。しかしその間、2008 年の『日本の科学者』9 月号の「本」欄に、南有哲氏によって拙著『江戸科学史話』創風社(2007 年)の紹介記事を掲載して頂いたことがきっかけとなり、2010

年の『日本の科学者』1月号の「レビュー」欄には「江戸の禁書：17～18世紀の漢文科学書の場合」を、そして7月号には「自然との共生のための提案：自然、科学、技術の概念の変遷を巡って」と題して寄稿させて頂きました。しかし、この拙文は3・11災害（天災と人災）の後にはすば良かったと後悔しています。ご一読くだされば幸いです。

そして、その後2011年2月号に「江戸時代における円周率の値の逆行現象と数学的な〈証明〉概念の萌芽と挫折」を、2012年2月号には「江戸時代における〈密度〉の概念」を、そして10月号には「江戸末期の東日本における畑作。養蚕地域の農民の特性と和算文化」と題して「レビュー」欄に寄稿させて頂きました。科学史研究は、私の生涯の「趣味」ですので、趣味を通して楽しい日々を過ごしており、日本科学者会議編『日本の科学者』の編集委員会には感謝しています。以上、拙著の紹介記事となりました。失礼します。

（なかむら くにみつ・科学史・物理教育・文京区在住）

方違 重治さん

仕事をつうじて思うこと

私は、九州の薩摩半島のほぼ中央付近に位置する鹿児島県川辺町で生まれました。特攻隊基地で有名な知覧町の西側に位置します。故郷を離れ40年余りになります。今は、埼玉県白岡市に住んでいます。

仕事は地質コンサルタントで、専門は応用地質です。今年の10月から単身で福島県郡山市の地質コンサルタントの会社に勤め、週末には白岡へ帰宅するという生活をしています。今までの主な仕事は、高速道路、新幹線、リニア新幹線、個人宅の建設のための地質調査を行ってきました。

2011年3月11日に東日本大震災が起こり津波と原発事故が発生し、大変な事態が現在も続いています。今までの仕事で原発調査に直接関わったことはありません。54基の原発ができていたとは知りませんでした。活断層のことや原発の廃棄物の地層処分のことを聞くたびに、日本のような変動帯の地質構造のところでは安全なところがあるのだろうか。いや、そんな所はないのでは、と考えています。それと、今の科学では原発がひとたび事故を発生すると制御できないし、とんでもない環境破壊と人類の破滅につながります。ですから、原発はいらないと強く訴えたいのです。

（ほうちがい しげはる・応用地質・埼玉県白岡市在住）

山岡 暁さん

原発運動に主体的に関わりながら

私の専門は経済学・経営学で、現在の研究テーマは「企業の社会的責任論の転換」です。

2006年3月に京都大学大学院で博士（経済学）の学位を取得し、同時に博士課程を修了したものの、就職できず「高学歴ワーキングプア」となり、09年の3月に関東へ戻りました。今は栃木から八王子の中央大学へ週1回の非常勤講師、労働組合・労働学校の学習会の講師などをしながら、フリーの編集者として働いています。研究が進まないことや就職問題で悶々とする日も多いですが、今年に入り毎週金曜日の官邸前行動や原発デモに警備

スタッフとして参加し、また実家のある千葉県船橋市で「脱原発船橋（仮）」という運動の立ち上げ、野田首相の選挙区で「野田退治デモ」を4回行いました。福島原発事故直後でも、今年の脱原発デモ参加中でも、2012年にここまで運動が盛り上がるとは予想すらしていませんでしたので、正直驚きながら「これは60年安保闘争以上の社会運動だ、日本社会運動史においても未知の領域である」と思いながら一科学者として参加しています。社会は変わるときは一気に変わるものだと認識を改めた1年になりました。

（やまおか あきら・経済学・経営学・栃木県下野市在住）

その51：個人会員ニュース No.94 2013.3.10 発行

瀬戸 昌之さん

「日本の科学者」は環境論議にもっと参加を

「容器包装の3Rを進める全国ネットワーク」の討論会に参加した。これはごみの減量、再利用、リサイクルをめざす全国の市民団体が、EPR（拡大生産者責任）の国内での制度化をめざす会であった。EPRはOECD（経済協力開発機構）が「公正な」経済活動をめざした国際的な指針である。この指針は、ごみ処理費は価格に含め、処理は生産者が責任を持つこと、ただし、公正さを確保する範囲で、制度は各国の実情に応じてカスタマイズしてよいことを明確に謳っている。

それにもかかわらず、とりわけ行政の不適切な発言が気になった。たとえば、パネラーである関西の市長の「処理費を生産者に支払わせるなら、誰もEPRに賛成しませんよ」や環境省の室長の「EPRは各国でカスタマイズしてよいことは知らなかった」などである。いっぽう、傾聴すべきは「容リ法改正市民案」であった。EPRが目指す指針を的確に把握し、この制度化がごみ減量などにきわめて有意義であることを訴えていたのである。

「日本の科学者」は、行政のこのような不適切を指摘し、見識ある市民の環境論議が発展するように応援することが、今まで以上に問われているのではなからうか。

（せと まさゆき・環境科学・立川市在住）

滝澤 昭義さん

水面下で進行するTPP

現政権与党が、選挙戦中ひた隠しにしてきたこともあって、一般マスコミではTPPはほとんど問題にされていない。それどころか与党の中で反対勢力が勢いを得つつあるかのごとき報道さえある。首相が「例外なき関税化が前提の場合は参加しない」と言ったという報道もある。しかし実際は、水面下で着々と準備が進められているのである。

私JSA東京支部の学習会で、TPPについて「この背景にはMAI（多国間投資協定）がある」と話したことがある。アメリカのねらいは、すべてを自由化した上で投資企業に投資先国の内国民待遇を与え、自企業に不利と判断した場合には、相手国に賠償を求めて国際機関に提訴することが出来るという仕組みである。それは「ISD条項」として現実性を持ちつつある。これが通ればすべて投資国の言いなりにならざるを得なくなる。

とにかく TPP は、経済のみならず、相手国を根こそぎアメリカナイズしてしまおうとする仕組みである。竹中、伊藤（元）氏ら、なうての推進論者を揃えた「有識者」の会議がどういう方向を打ち出すか、食料問題研究者として監視の眼をそらすことは出来ない。

（たきざわ あきよし・農業経済学・NPO 法人食農研センター・埼玉県坂戸市在住）

永井 博さん

《スポーツの分野で》

「指導の名の下に、または指導とは程遠い形で、園田前監督によって行なわれた暴力行為やハラスメントにより、私たちは心身ともに深く傷つきました。人としての誇りを汚されたことに対し、ある者は涙し、ある者は疲れ果て、またチームメートが苦しむ姿を見せつけられることで、監督の存在におびえながら試合や練習をする自分の存在に気づきました。」柔道女子ナショナルチーム国際強化選手 15 名の声明文の一節です。心が痛みます。今、スポーツ分野の体罰・暴力が、大きな社会問題になっています。

「スポーツは権利」と宣言して船出した新日本スポーツ連盟の構成員として、この声明が最後に云っている「真のスポーツ文化が根付いた日本に」するために、スポーツの内外を問わず多くの関係者との協力共同を広げ、活動を進めたいと考えているところです。

《家で》

わが家には、8 本の柚子の木があります。園芸書によりますと、柚子の剪定は 3 月までに終えないといけないうことです。時間を見つけてはやっているのですが、針の棘との格闘は大変です。何とかやり遂げねば。苦闘が続きます。

（ながい ひろし・スポーツ科学・新日本スポーツ連盟・青梅市在住）

廣嶋 清志さん

雇用情勢悪化と出生率の反転上昇

定年退職して 3 年になる。今取り組んでいる一つの仕事は現代日本の出生率の動向分析。

女性一人当たりの子どもの数にあたる合計出生率は 2005 年 1.29 まで低下を続けてきたが、その後、やや目立つ上昇に転じて 2011 年 1.39。この反転上昇をどう説明するかは、わりに難問で、研究はまだほとんどない。雇用情勢は依然悪化が進行し、出生率低下の影響を与えている。同時にその雇用情勢のもとで、最近、世論調査の結果として話題になったように、「夫は外、妻は家庭」に賛成という性別分業意識の増大など、家族や結婚に関する意識がやや伝統復帰の方向に転じている。このことが、結婚率、出生率の反転上昇に働いていると考えられる。同時に、雇用不安定の常態化は男性経済力優位の結婚を目指す意識を弱化し、従来、結婚に不利と考えられてきた経済力のある女性（高学歴、年上など）も不利でなくなり、配偶者候補の範囲が拡大して結婚が増加し、それにとまって出生率が上昇している面もある。あとの二つの現象は矛盾するようにも見えるが、ともに進んでいるようだ。こうした 3 つの力で現在の出生率の動きがもたらされていると考えている。

（ひろしま きよし・人口学・多摩市在住）

本庄 十喜さん

この 3 月をもって、博士課程を何とか修了する見込みとなりました。

修士課程進学から 10 年目、あっという間の「入院生活」がようやく終わろうとしています。振り返ればさまざまな出会いに恵まれた学生時代でしたが、大学院生活最後の年の、JSA に所属する友人たちとの出会いは格別なものとなりました。博論執筆の合間に参加した金曜日の官邸前抗議行動やデモ、12 月の衆議院議員総選挙・東京都知事選挙の際のささやかな応援活動などをとおして、志を同じくする仲間たちとの、触れ合いの尊さに気付くことができました。某所で行った夏の博論合宿では、彼らの研究に対する真摯な姿勢とたくさんの貴重な意見から多くを学び、それらが博論提出への足掛かりとなりました。合宿場所を快く提供して下さいました O さんお手製のカレーもとてもおいしかったです！

これからは本格的に就職活動をはじめることとなり、いわばようやくスタート地点に立つこととなります。ふとした時に漠然とした不安を感じることはあるものの、今までどおり何とかマイペースでやっていきたいものです。このかけがえのない仲間たちと支え合いながら、一歩一歩踏みしめて行きたいと思っています。

（ほんじょう とき・現代史・板橋区在住）

その 5 2: 個人会員ニュース No.95 2013.6.10 発行

池上 保子さん

私の今頃

多忙な仕事や家事、子育てから解放されてやっと自分の自由な時間も持てるようになり現在連載中の料理の仕事も、18 年間続いている企業のアドバイザーの仕事も楽しんでできるようになりました。ゆっくり空を見上げたり、道端に咲く小さな花を見つけたり、本を読んでも新たな発見があり、若い頃よりも豊かな気持ちでものを見られるようになりました。

今年の 3 月下旬から 16 日間ほど、夫と私と娘と 3 人でフランスを中心に旅をしました。安いチケットを手配し、キッチン付きのホテルを取り、マルシェやスーパーなどで食材を買って作り、時々街でおいしい料理やワインを楽しみ、移動は汽車やバスという安あがりでのんびりとした旅を味わいました。私も娘も料理の仕事をしているので、マルシェで食材を見つけ、いろいろな国のものと比較したり、料理法を考えたりするのも勉強になり、新しい味の発見もあったりで楽しい毎日でした。

日本はすぐれた食材の宝庫です。手軽に美味しく健康に役立つ料理を考え、小さなわが家のキッチンから、情報を発信していけたらと思っています。

（いけがみ やすこ・料理研究家、管理栄養士・世田谷区在住）

内田 恵子さん

東京をエリアとする週刊新聞の記者になって 6 年になる。改憲を巡り、戦後最大の危機が進行している一方で、

希望を感じる取材も少なくない。

その一つがピジョンハーツ株が運営する中野区立保育園でひどいパワハラを受け、裁判をたたかう荒木壮旗さんのことだ。長くノンポリだったという荒木さんは自身の裁判が始まると、事実を一切認めず、ねつ造だと言う同社の不誠実な態度をみて奮起した。加盟する労働組合とともに、子どもと保育士を大切にしてほしいと伝えるビラを、中野区を中心にこつこつと4万枚をこえて撒いた。そのビラが、今年保育園に入れなかった親たちの手に渡り、ブラック保育園はいらない、基準がある認可保育園を増やしてほしいと求める運動へとつながっていったことを私は聞いた。荒木さんのたたかいが、新たな運動の中に生きたのだ。話は続く。実は荒木さんは、フィリピンで大統領のいる宮殿を市民100万人が包囲した革命の渦中に立った体験があるという。「あのときから自分も何かしなくてはと思っていた」と荒木さん。20年以上前の体験が人を変えていく。人も社会も互いに連鎖し合って変わる。そう伝える記事を、書きたいと思う。

(うちだ けいこ・メディア論・葛飾区在住)

梶原 渉さん

はじめまして。日本原水協事務局で働いている梶原と申します。2年前、被爆者であり、素粒子物理を専門にされている澤田昭二先生に誘われて入会しました。

私は、自らを“科学者”と呼びうるのかどうかは甚だ疑問に思っていますが、科学のあり方には強い関心を持っています。歴史にifは禁物ですが、核兵器廃絶という課題は、核分裂を軍事転用しようなどという考えが、当時の科学者の中に起こらなければ必要がなかったかもしれません。3.11後、科学はその社会的役割を鋭く問われており、みなさんと議論し考えていけるのを楽しみにしています。

さて、平和をめぐって、私はいまのアカデミズムに強い不満を抱いています。平和を真正面から取り扱うべき国際政治学や外交論が、いまの日米安保体制や新自由主義的な世界秩序などを真正面から批判的に把握できているとはとても思えません。岩波書店からシリーズ『日本の外交』が刊行中ですが、保守政治の対外政策のイデオログが主要な論文を書いており、落胆しています。

では、JSAに、これらの専門家の分厚い層があるかと問われると、上に述べた状況を反映してか、残念ながらようです。運動の力で、こうした学問状況を変えていくことを本気になって考えないと、と感じる今日この頃です。(かじわら わたる・平和運動論・荒川区在住)

神谷 敬さん

最近の考えたこととして

最近博士課程の授業で「イノベーション推進特別講義」というものを受けました。内容としては就活生が受けるようなcommunicationに関する講習でした。何よりこの講義を受けて感じることは、社会における大学の役割を

企業の役割と混同しているということです。むしろ混同と言うよりは大学はあたかも企業のためにある、企業活動を通してのみ社会貢献できるという見方が垣間見えしました。研究に関する意義も社会＝顧客のneedsとの間のbenefitのみを問題にしています。まさに今の企業論理そのままの講義だという印象を受けました。しかし、大学にはまず企業と根本的に異なる役割があり、研究機関であるとともに教育機関であるということ。そして大学における研究には純粋な真理探究のための基礎研究が含まれています。この真理探究は短期的な利益につながる保障があるものばかりではないでしょうし、それが評価されることは数十年後かもしれません。またそれ自体が企業の尺度に属さないものもあるでしょう。詩や文学、人間、真理はいつbenefitになるのでしょうか？大学はそれ自体としてすでに真理探究や教育を通じて、人々と人類的な豊かさを創生するという仕方で社会に還元をしているのです。だから学費は本来無償であったのではなかったでしょうか？

(かみや じん・複雑系化学物理・東京農工大学博士課程)

鮫島 俊昭さん

私は日本航空を、約8年前に定年退職した元客室乗務員です。

航空労働者の健康や労働条件は、航空安全の維持向上に直結する問題という立場で、1970年代より職場に多発し続けている客室乗務員の腰痛や頸肩腕障害対策をはじめとする航空労働者の健康破壊の撲滅のため、また健康を障害された仲間たちへの援助を、35年以上続けています。この間に、活動の範囲は広がる一方で、現在は航空産業に限らず、労働安全衛生全般や過労死裁判まで関わっています。

このような活動の中で、米田先生の講演を拝聴する機会に恵まれ、特に原発事故を契機に「日本の科学者たちは何をしているんだ！」という漠然と持っていた負の思いが、「良心的で頼もしい科学者が沢山いるんだなあ」と、一気に払拭されました。米田先生とは事後の懇親会でも意気投合し、入会の約束をして今日、新入会員となっている次第です。

日本航空の経営破綻と不当解雇の強行、労働条件の極端な悪化は看過できないもので、現在進行中の5争議への支援にも、日々奮闘中です。同時に、安倍自民党政権の目指す日本は、孫や後輩たちの幸福を踏みにじるものです。皆さんと共に国民が幸福になる日本作りにも貢献したいと考えています。

(さめじま としあき・労働安全衛生論・千葉県八街市在住)

その53: 個人会員ニュース No.96 2013.9.10 発行

浦野 さとみさん

一人一人の命と健康が大事にされる世の中へ

私は、東京都中野区内でリハビリの作業療法士として8

年間、医療・介護現場で働いてきました。お金の切れ目が命の切れ目と言わんばかりに、国保料の毎年の値上げをはじめ、医療・介護の切り捨てや、リハビリの日数制限導入など、受ける権利が次々と奪われてきました。そうした医療・介護の現場の声を届け、一人一人の命や健康があたり前に大事にされる世の中へと願いを原点として、日々、地域をまわっています。

日本科学者会議の皆さんとは、放射能問題での学習会の講師を池上幸江さんをお願いしたことがきっかけでつながることができました。いつも、皆さんからは勉強をさせていただいております。

医療や介護だけにとどまらない、深刻な生活実態の話が毎日のように寄せられています。この地域で、少しでも地域のお役にたてるよう、これからも取り組んでいきます。Twitter や facebook などでも、皆さんとつながることができたら嬉しいです。

(うらの さとみ・中野区議会議員・作業療法士・中野区在住)

小川 潔さん

2012 年 3 月に東京学芸大学を定年退職し、個人会員にかかりました。タンポポの生態と外来種問題、環境教育とりわけ地域の自然と生活文化的素材を継承することの二つをライフワークとしてきました。二刀流ということで、日ハムの大谷選手を応援しています。

学生時代から反公害・自然保護の運動をしてきましたが、東京支部の公害・環境問題委員会委員や、日本の科学者の編集委員をした経験が、自然科学と人文社会科学分野の統合的見方を育ててくれたと思っています。ここ 1 年は、反原発や地域の市民活動に重心を移し、東北の被災地での環境教育にも首を突っ込んでいます。

専門とは別ですが、戊辰戦争を戦った彰義隊士の子孫であるため、関係資料の整理が定年後の仕事に加わっています。くずし字を読めない弱みがあり、専門家の支援に頼っています。遺族などからは「靖国神社に彰義隊士が祀られていないのはけしからん」という声をよく聞きます。勝者による歴史づくりが明治 150 年にもなろうとする現在も生きていて、またまた声高に叫ばれているのが気がかりです。(おがわ きよし・台東区在住)

佐々木 隆爾さん

1999 年(平成 11) 3 月末に東京都立大学(現:首都大学東京)を定年退職し、日大に移りましたが、この年の 6 月、先輩や友人たちと「世田谷自治問題研究所」を立ちあげ、小生が筆頭代表理事(代表)に推され、運営に当たって来ました。それから 14 年、月一回の理事会を続け、渡会事務局長によれば、「うちの研究所がつぶれないのは、佐々木さんが理事会を絶対にサボらないから」となっています。私たちは、ほぼ隔月で研究所報『世田谷のまちとくらし』を発行し、「区政の診療所」としての役割を果

たすようになりました。

2011 年新年号の巻頭言では、徳富蘆花が、幸徳秋水らが処刑された「大逆事件」を痛烈に批判する「謀反論」を講演して 100 年になることを指摘、「百年の公論はその事を惜しんで、その志を悲しむであろう」と結んだことを述べ、蘆花が終の棲家とした世田谷の区民こそ「その志」を生かす原動力になるべきだと結びました。これが機縁となり、同年 5 月 3 日「2011 年憲法記念日 in 烏山」で、私が「蘆花『謀反論』と日本国憲法」という題で講演を行いました。自分でも納得の講演となった次第です。

(ささき りゅうじ・近現代史・世田谷自治問題研究所筆頭代表理事)

森 陽子さん

JAL 不当解雇撤回裁判原告のひとりとして、昨年ご縁があり、入会させていただきました。1975 年の JAL 入社より 3 年後程の時期から解雇後の現在に至るまで、入社当時の客室乗務員の健康障害(腰痛・頸肩腕障害など)の多さと自分自身の労災被災とがきっかけで、労働安全衛生関連の運動を続けてまいりました。

JAL が破綻を利用して行った 2010 年大晦日の整理解雇=81 名のパイロットと 84 名の客室乗務員、合計 165 名を特定期間中の病気欠勤歴および高齢を理由に解雇=から 2 年半が経過し、現在、141 名の乗務員が、控訴審を闘っています。9 月には東京高裁での証人調べが予定(12 日客室乗務員、26 日パイロット)されており、年内結審、年度内判決という見通しが出て来ています。当解雇は、組合役員や活動家を狙い撃ちした不当不要な指名解雇だったことが一層明らかになっていますし、「解雇が自由」な日本にさせないためにも負けられません。

(もり ようこ・JAL 不当解雇撤回裁判原告団事務局次長・日航労災職業病患者会会長)

渡邊 章さん

環境アセス制度の改定は待ったなしの課題!

東日本大震災の復興事業ということで、砂浜や磯を、巨大なコンクリート堤防で踏み潰す「再建計画」が、東北から房総半島までの太平洋岸で始まろうとしています。高度経済政策によって、「経済成長」のための掛け声で、日本の美しい自然海岸は、無残に破壊され、現在では 7 %を残すのみと言われています。

今度は、国土強靱化の名のもとに、再び浅海域での生物の殺戮が進もうとしています。NPO 法人「森は海の恋人」副理事長畠山信さんは、「漁業者にとって海が見えることは、そのやる気にとって何より重要なことです。みなさんだってコンクリートの巨大な堤防よりも、豊かな自然の方が良いのではないのでしょうか」と、ムダな公共事業を告発する集会で発言していました。この事業は、日本のアセス制度では、対象事業でないことから、ステークホルダーの何のチェックを受けることなく進むことになります。

「国土強靱化」の看板で、新たな自然破壊止めろ！ 環境アセス制度は、除外リスト方式に変えろ！ の声をいまこそ広げることが、日本科学者会議の使命ではないかと考えます。

(わたなべ あきら・環境アセスメント問題都民連絡事務局長)

その54: 個人会員ニュース No.97 2013.12.10 発行

長内 史子 さん

私とJSA

私とJSAの出会いが学生時代に環境問題を学ぶサークルを立ち上げた時でした。当時はIPCC（気候変動に関する政府間パネル）から第4次報告書がだされ、温暖化の原因はCO₂の影響が大きいと報告されていましたが、日本国内では温暖化懐疑論の本が次々出版された時でした。学生のあいだでも温暖化や環境問題への関心が高まっていたが、温暖化が本当に起こっているか分からないという議論もでていました。そんな中サークルで企画した講演会にJSAを通じて講師をお願いし立命館大学の和田武さんにおこしいただきました。講演会は環境問題の原因を学び、被害の実態、解決の展望と世界の最新の知見を学ぶ機会をつくり学生たちと環境問題を解決していくとりくみが待たれていると実感でき、その後の活動の力になりました。

いま、日本は福島原発事故を経験し、エネルギー問題の解決が求められています。また、大型化した台風や竜巻などの自然災害には、気候変動の影響があると気象庁も発表しました。学生時代につくったサークルは、原発をなくして温暖化解決する道があることをひろげ、2009年から国連の気候変動枠組条約締約国会議（COP）に毎年代表を派遣し、日本の学生の声と福島の被害実態を伝えるに参加しています。多くの人を幸せにする「科学」がより発展していくよう、JSAの発展を願っています。（おさない ふみこ・青年と環境問題・国立市在住）

田中 均 さん

非正規労働者の急増は企業帰属意識を分裂させつつある

金融・労働研究ネットワークの田中です。30数年前、大学院で理論経済を勉強しているときに、行き詰ってしまいました。もっと運動の現場に近いところで活動したいと思っていたときに、銀行労働研究会（銀労研）に出会いました。銀労研に飛び込み、賃金差別是正や労災問題にのめりこみました。そこそこに勉強して、銀労研刊行物に雑文を書きまくる私を当時の野田正穂理事長は「鴨が葱背負ってやってきた」とほめてくれました。専門研究と現実の運動を結びつけるネットワークの構築。この目標は銀労研を解散した後も、金融・労働研究ネットワークとして掲げ続けています。

今、金融労働運動の第一線で、日本の労働運動が確実に転機にさしかかっていることを実感します。非正規労働者の急増は企業社会の中核であるメガバンクに働く労働者の企業意識をも急速に二分しています。関心のある方はこちらの研究会にもご参加ください。金融・労働研究ネットワークのホームページにアップしてあるニュー

スレター（PDFファイル）の各号の奥付に住所、メールアドレスなどを表示しています。

(たなか ひとし・金融・労働研究ネットワーク事務局長)

根木山 幸夫 さん

フェイスブックの活用で新たな世界

昨年2月末に月刊雑誌の編集の仕事を終え定年退職。その後、フリーの出版企画編集者として＜科学と人間シリーズ＞（東洋書店刊）をコーディネート。12月までに8点を刊行した（原発・放射能・地震、風力、宇宙、鉄鋼、環境微生物など）。

学術会議や国立研究所、大学、科学者会議の公開講座・シンポ、講演会、研究会、集会にせっせと参加し、問題意識を鋭くしてきた。そのなかで、全国の研究者や住民運動に関わる人々、議員など多くの方々とフェイスブック（FB）で交流・情報交換を行ってきた。

FBを毎日の生活に位置づけ、積極的に公開講座や研究会・集会、ウェブ・メディアなどから得た情報で「これは！」と感じたことをウォール投稿し発信してきた。同時に、全国の方々の投稿で「FB友達」が求めているようなことを「シェア」し拡散してきた。毎日、朝、昼、晩と合わせ1～2時間程度、FBに集中するようになってきた。

このことは、日々、新たな問題に自分としてどう考え判断するか、既存メディアの報道の仕方はどうかなど、非常にためになった。仕事のうえでも関心のある研究者がFB上でどのように発信しておられるかを知るうえでも役立った。その結果、1年半前には30人ほどだった「友達」が日に日に増えて現在429人になった。

(ねぎやま ゆきお・量子化学・出版企画編集・日野市在住)

平野 忠 さん

近況

私は、中学校の教員で、今は退職しています。理科を教えていました。地学を専攻していました。中学校では、物理、化学、生物、地学の4分野全てをオールラウンドで教えるのに苦労しました。

現在、所属している団体は、松戸市立博物館の「友の会」に入会しています。植物観察、昆虫ウォッチング、ホテル観賞などに参加しています。

貴会議に入会したばかりですが、その姿勢が、すばらしいと思います。明治大学での講座に参加しました。講師の先生方や質問の先生方の内容が少しずつわかるようになってきました。これからは、月刊の『日本の科学者』をよく読み、行事に参加していきたいです。

(ひらの ただし・松戸市在住)

比留川 洋 さん

南関東直下型巨大地震にどう備えるか

はじめに、出版人として「特定秘密保護法案」については、生涯をかけて反対しつづけることを表明します。とくに、この度「スパイ冤罪——宮澤—レーン事件」（山野井孝有・山本玉樹代表）拝読して、このような「冤罪事件」を絶対に許してはならないと思います。

さて、PRになりますが、この度、『日本の科学者』編集長のお骨折りで「南海トラフの巨大地震にどう備えるか」のブックレットを上梓することができました。市民

の方々にも「わかりやすい」と好評です。そんな折、フィリピンの巨大台風は950万人もの被害をもたらし、3・11の被災を想起させるものでした。いま、私たちはこの度重なる大災害からしっかりと教訓を学び、これから予想される自然災害への備えをあらゆる面で強めることが求められていると思います。

そこで、大変僣越ながら東京支部として、「南関東直下型巨大地震にどうそなえるか」のテーマで、シンポジウムの開催をお願いしたいのです。地震津波学者の故山下文男さんは、3・11の1年前3月12日に「津波に備えよ」と新聞コラムで警鐘を鳴らしていたのです。この警鐘を無駄にしたくないです。

(ひるかわ ひろし・本の泉社)

その55: 個人会員ニュース No.98 2014.3.10 発行

池田 有三 さん

靖国神社・ブラック企業に想う

私はクリスチャン・ホームで生まれ育ち、現在も教会に通っています。戦前、隣組（となりぐみ）という地域末端組織があって、そこから“八幡さま”でおこなわれる戦勝祈願や掃除の動員要請がありました。父親は宗教的な立場からそれらを拒否し、“非国民”などとののしられ、家族でいやな思いをしました。現在、私たちの教会では憲法九条改悪や靖国神社の反対運動をおこなっています。思想信条を国家で統制することは二度とあってはなりません。

野村証券では入口の門をくぐると憲法は通用しない、別名“ノルマ証券”と云われ、ブラック企業の元祖的存在でした。“数字が人格”と云われ、過大なノルマやセブン・イレブンと呼ばれる長時間労働で多くの若者が去っていきました。その後、暴力団、総会屋に利益提供した証券大スキャンダルにつながりました。最近でも、名古屋のある支店長が“ノルマが達成できなければ自家用車を売れ”と強要したことで、昨年12月13日東京地裁が野村に賠償判決を出したことが報じられています（東京新聞12月14日）。改めて怒りを覚えるものです。

(いけだ ゆうぞう・野村証券労働組合初代委員長・杉並区在住)

中嶋 久人 さん

3.11によって問い直されるべきもの

ー 日本近現代史の観点から ー

『日本の科学者』551号（2013年12月）の「談話室」欄に「晩年における田中正造の思想の現代的意義—田中正造没後100周年において」という文章を執筆しました中嶋久人です。私自身は、田中正造も参加した自由民権運動や近代初頭の東京の都市史などを研究していましたが、3.11の衝撃を受けて、福島第一原発の歴史を勉強するようになりました。3.11をどうみるか、これはなかなか難しい問題ですが、自分の専門の観点からいえば、リターンを前提に原発のリスクを地域社会が「合意」のも

とで引き受けさせられていくもので、日本の近現代の政治システム総体が問われているのではないかと考えるようになりました。このような関係は、日本の公害問題の先駆である足尾鉍毒事件において、すでに表出しています。なお、ここで「政治システム」のことだけを取り上げましたが、これは、近代資本主義の問題であり、近代的科学技術の問題でもあり、総じていえば、日本の「近現代」総体が問い直さなくてはなりません。皆様とともに、そのような知見を深めていきたいと祈念しています。

(なかじま ひさと・館林市史編さん専門委員・日本近現代史)

松村 比奈子 さん

科学者が死の商人にならないために

昨年末、秘密保護法制定が注目されたように、政府の人権侵害が急速に進んでいる。この権力の暴走によって、実はもう一つの秘密保護法が密かに制定されたのを科学者諸君はご存じだろうか。正確には研究開発力強化法の改定である。「有期雇用を何度でも繰り返しできるような方向に変えていきたいということで議論してきた(国家戦略特区有識者WG6月議事録より)」結果として、主目的は有期雇用研究者・技術者を奴隷化するものだが、軍事研究への研究費の傾斜配分も盛り込まれていた。この改定で、JAXA 法以来の防衛研究が具体化し、関連研究者は秘密保護法によって学問の自由を奪われる。

政府はさらに今後、集団的自衛権も容認する。これは先制攻撃権であるから、攻撃相手には個別的自衛権が発生し日本が「正当に」反撃される。既に安倍総理は靖国参拝を繰り返して近隣諸国を挑発し、米中対立を煽ろうとしている。

現代の戦争は、勝敗や終結を目的としていない。戦争そのものが利潤を生むからである。安倍政権は全ての科学者を国策の名の下に隷属させようとしている。真珠湾攻撃を繰り返さない決意と行動が、今や私たち科学者の社会的責任ではないだろうか。

(まつむら ひなこ・憲法学・拓殖大学非常勤講師)

三笠 俊哉 さん

JSAのインターネット利用

現在、日本科学者会議のウェブサイトではJSA e マガジンが不定期で発行されています（URL：<http://www.jsa.gr.jp/04pub/booklet/>）。現在までにNo.17まで発行されており、さまざまなバックグラウンドを持つ会員の方が執筆されています。私は、公開ページの作成を担当された前任者から引き継ぐ形で、e マガジンの公開用ウェブサイトの管理をお手伝いしています。

JSA はe マガジンに限らず、このようなウェブを通じて情報発信に比較的熱心に取り組んでいます。各々専門分野を持つ人々からなる団体であるJSAのこうした活動は、情報の質が一定でないインターネットの世界におい

て大変貴重なものになる可能性を持っています。今後も、更新頻度は多くなくても正確で良質な情報を発信するメディアとして科学者会議のウェブサイトが機能してほしいと思いますし、そのためのお手伝いをしていきたいと思います。(みかさ としや・哲学)

山本 尊仁 さん

私の近況と生き方

「地球のお医者さん」を自認する地質家のハシクレです。大学院を修了してから、日本の国土建設を担う「土木地質」の世界で、ほぼ 40 年間仕事をやってきました(前半は主に高速道路建設に伴う地質調査、後半は、高層建物を含む建築の耐震地盤調査など)。今はほぼ現役を退いて週に 2~3 日間は、応用理学部門の技術士(地質)として、多少土木地質に関わっています。

最近の安倍自民党政権は、戦前の暗黒時代を想起させる『秘密保護法』を強引に国会で通し、「福島原発事故」を放置したまま、原発再稼働の動きがあり、私自身危機感を感じるこのごろです。我々地質技術者にとっては、全国にある原子力発電所の「活断層」と疑われる断層、また、高レベル廃棄物(原発のゴミ)の地層処分については、候補地探しが行われ、日本原子力研究開発機構の「幌延深地層研究センター」と「東濃地科学瑞浪超深地層研究所」では、実際に深い震度に大きな地下壕を掘って試験・実験を行っています。

地球科学に関わる研究者・技術者は、今、まさに原発をなくすために何ができるのかが問われているときにあると思います。生き方の問題を含めて、大いに考えていきたいと思うこのごろです。

(やまもと たかひと・土木地質学・さいたま市在住)

その 56: 個人会員ニュース No.99 2014.6.10 発行

北川 和彦 さん

「ぶら下がり志向」の転換に向けて

「自由な競争」「規制緩和」を叫ぶ同じ政治家が、「自由」を確保するためには、《軍事力が必要であり、人権の制限が必要である》ことを主張している。《ここで主張されている「自由」とは「庶民の自由」ではなく、「大資本の自由」なのではないのか?》この問いに対してこれらの政治家は《大資本の国際競争力をアップさせることが国民の生活を豊かにする道なのだ》という答えを用意している。しかしこの間の歴史的事実は、この答えとは、正反対である(大資本の内部留保は増大一方だが勤労所得者の所得水準は低下し所得格差も開いている)ことを示している。

にもかかわらず、とりわけ若い人達の間には「ぶら下がり志向」が根強くあり、これが上記の主張を支える基盤になっている。大資本にぶら下がることなく、私たち庶民の生活を豊かにしていく具体策は提示されているが、必ずしもこの「志向」を転換させるに至っているとは言えない。大資本に対しての規制や産業構造の転換のあり

方を含め、庶民の命を守り、暮らしを豊かにする政策内容の具体化を一層進めることが現時点での課題であり、JSA のこの点での貢献を期待したい。

(きたがわ かずひこ・経済理論・東松山市在住)

小池 信太郎 さん

防災名目の道路建設 ... 街壊しと、防災それ自体に逆行

「日本の破産への道は公共事業によって舗装されている」。これは、97 年 3 月 1 日付けニューヨークタイムズの記事で、日本の公共事業のひどさを指摘しています。「巨大道路をどんどんつくり、自動車をどんどん走らせる。これが経済繁栄の原動力だ」——などと。かつてのこうした「亡霊」が、いままた頭をもたげてきています。

安倍首相は就任早々の施政方針演説で、「力強い日本経済を立て直すため、『3本の矢』を力強く打ち込みます」と強調。そのうちの 1 本が公共事業でした。

暴走をつづける安倍内閣のもとで東京都は、これに便乗し、敗戦の翌年に戦災復興計画として策定された、都区内全域に 208 本に及ぶ道路建設計画を持ち出してきました。今から 68 年も前の計画ですから、ほとんどの都民は、そんな計画があること自体も知らず、また、これまで建設が浮上すると反対が強く、事実上その多くは凍結されてきたものでした。東京都は、208 本中 28 路線を“延焼防止帯”として、2020 年のオリンピックまでにつくると説明。これに対し私たちは、「防災対策としての道路建設は問題だ」「公園・緑地づくりなど多面的に考えるべきだ」と、この計画の撤回・見直しを要求し運動をすすめています。

(こいけ しんたろう・公害・地球環境問題懇談会代表幹事
武蔵小山の環境を考える会会長)

土田 稔 さん

石神井公園・三宝寺池でボランティア

退職して 1 年あまり。今は介護と石神井公園でのボランティア三昧です。介護もボランティアもうっかりすると疲れ果てます。ボランティアは少なくとも週に一度、石神井公園の一部である三宝寺池の水辺観察園保全活動を行います。三宝寺池は昭和 10 年コウホネ、ミツガシワなどの植物群落が国の天然記念物に指定され、練馬区内では屈指の緑が残っていて、トンボで知られ渡り鳥も良く見られます。

ところが、突然外環反対に係る事態が起きました。外環は 1966 年に都市計画決定され 1999 年まで凍結されていました。石原知事が凍結を解除して以降急に事態が進んでいます。三宝寺池をかすめるように外環(地下 41m、径 16m のトンネルが 2 本)及び外環ノ 2(地上、幅員 22m)が計画され、生物や住環境への影響が懸念されるため、ボランティア団体として東京都や練馬区に中止するよう要請しました。関係者が必要性・環境影響を検討し判断できる根拠を明らかにしないまま、50 年以上前の計画に沿って進めているように思えます。

(つちだ みのる・練馬区在住)

平野 義尚 さん

第 17 回東京科学シンポジウムに参加させていただいて

東京農工大学農学部を 2008 年に卒業した際、お世話

になった多羅尾光徳先生に誘われてJSAに参加させていただきましたが、いままで会員らしいことは何もできず・・・。

先日、大学の後輩から名物教授・牛木秀治先生がパネリストとして参加されると聞き、中央大学で開催された東京科学シンポジウムに初めて参加させていただきました。牛木先生が「弁証法」を駆使して科学の世界を縦横に語る姿と、これまた縦横に大学院生と討論する姿を見て、胸が熱くなりました。もうちょっと真剣に先生の授業を聞いておくべきだったと反省ですが、唯物弁証法で自然と社会の全体像を捉える営みにチャレンジし続けねばと、思いを新たにしました。

なかなか自分の任務が忙しく、JSAに主体的に関わることは当分できなさそうなのは残念ですが、熱い思いを持った大学院生を一人でも多くJSAに送り出すという形で、貢献していきたいです。今回はこのような機会を与えていただき、ありがとうございます。

(ひらの よしたか・環境資源科学・豊島区在住)

山本 厚生 さん

「建築運動の未来」

近代の建築デザイン運動は1920年代をピークに衰退し、新たな興隆がないと言われています。確かに建築家達の作品群と主張が一方的にリードするような運動は、もはやあり得ないだろうと私も思います。未来の素晴らしい建築群は、けだし、次のような要件を満たして登場するのだと私は考えています。

- ・そこに住む人びとが生きる喜びを満たす環境づくりに強い関心を持ち、判断力と合意を高めていく。
- ・作り手たちがそれぞれの蓄積した力を活かして協働し、人びとの共感を得る豊かな創造活動を展開する。
- ・自然を尊重して守り、地域の特性を大事にしてきた「里山」の生き方を受け継いで「まち」をつくる。
- ・ものづくりと暮らしぶりの一体感を強めながら、ゆっくりと時をかけて既存の生活環境を改善し続ける。

そうやって、人びとが大らかな愛着と誇りを持って享受するような建築とまちづくりの運動が、各地でむづむづと動き出しているのだと私は感じています。

(やまもと こうせい・建築家(住宅設計)・
新建築家技術者集団常任幹事)

その57 個人会員ニュース No.100 2014.9.10 発行

荒井 成彦さん

一生の集大成としてのコンサートに向けて

私は一生続けられる仕事を含めて二つの仕事を考えてきた。それは私の場合、職業としての食植生昆虫の食性であり、もう一つは人間学である。そして人間学の実践の場として、五つのコーラスサークルを創ってきた。それらの出発点は、職場のマンドリンアンサンブルの、日本フィル争議支援(1973年)である。

このようにして、長期のサークルでは50年近くになった。今や私も病身と年齢(82歳)なのを含めて(後述)限界を感じている。そこで下記の通り自作の集大成のコ

ンサートを開催することにした。出来るだけ多数の方に聴いてもらいたいと願っている。

私の病気は、肝ガンとそこから転移したリンパ節と大静脈のガンである。これは輸血(1986年)に原因がある。今は、気力で生きているようなものである。このことも、コンサートを企画した大きな要因である。

コンサートの概略・・・2014年11月23日、13時30分から、西荻窪勤労福祉会館、友情出演「日本フィル卒業生と仲間たち」(希望の方はチラシをお送りします。)

(あらい なりひこ・昆虫生理学・国分寺市在住)

菊地 重秋さん

重大な研究不正の事例リスト

「技術者倫理」の授業ネタ準備のつもりで、約10年前から私は、研究不正やアカハラなどの事例(報道記事)も地道に集めておりますが、最近になって、捏造・偽造・盗用などの重大な研究不正の事例が目立ってきています。単に報道件数が増えているだけでなく、規模や影響が大きい大型事例が増えています(バルサルタン臨床研究不正「事件」、理研STAP問題、等)。私は2012年の報道事例が17件と多かったので内心驚きました。そこで私は、2013年春に最近の重大な研究不正の事例をリストアップして、特徴・傾向・対策などについて検討してみました。

関連する拙稿のうち、(1)「我が国における重大な研究不正の傾向・特徴を探る」と(2)「バルサルタン臨床研究不正疑惑などについてー重大な研究不正の事例リストの部分的改定ー」の二つは、JSA・科学者の権利問題委員会のホームページに参考資料として、PDF版が掲載されています。また、埼玉学園大学の紀要として、(3)「我が国における研究不正(ミスコンダクト)等の概観」(その1～5、但し「その5」はPDF版＝掲載準備中)も大学ホームページに掲載中です。ついでながら、拙稿「日本化学会・会員行動規範の制定過程」も同大学ホームページに掲載中です。

以上の拙稿は、論文タイトルでネット検索すれば、ご覧いただけます。これら拙稿がJSAの倫理綱領策定や研究倫理シンポジウム開催などに寄与できれば幸いです。

(きくち しげあき・科学技術史・技術者倫理)

小西 祐司さん

医食同源

暑い八月が続くかと思うと、下旬に入るとめっきり冷えてきました。暑さでまいって、つつい食事がかッパ麺や牛丼ばかりと適当になっていたところ、急な冷え込みで体調を崩してしまいました。これはまずいと思い、リンゴやバナナ、モモ、トマトなど、1日ひとつは果物を食べるようにしたところ、体調も回復してきました。食事出来るだけ野菜を多くとるようにしています。

自分のこれまでを振り返ってみると、仕事や様々な活動が忙しくなると、精神面でも財布面でも食事を後回しにしがちな生活を送ってきました。しかし、ちゃんとしたものを食べないと、身体も頭も上手く働きません。病気になるれば出費もかさみます。

食事を意識すると、生活に彩りがつくように思います。自炊をすれば、悩みから離れて調理手順を考えられて気分転換にもなるし、食材を買うときや外食で食べるときも、秋刀魚やモモをよく見るからもう秋だなと季節も感じられる。これからは、食事の大切さを見直して、元気よく活動していきたいと決意した夏でした。

(こにし ゆうじ・法学)

櫻井 良堅さん

電機情報産業の成長・発展に向けて

私の所属する電機業界では、この間大規模なリストラ・人減らしが継続して行われています。電機情報産業を対象とした産業別労働組合である電機・情報ユニオンの調査によれば、この2年間ほどで、全国で20万人を超える人が電機情報産業の職場を去りました。これは、業界に努める168万人の1割を超える規模であり、異常なまでの人減らしが行われていることがわかります。

特に、半導体産業では、日本を代表する大企業が経営破たんを含む事業の危機的状況が生じています。半導体産業は、家庭生活を始めあらゆる産業にいたる幅広い分野に製品を供給し、社会の基盤を支える役割を果たしています。そうした産業の危機は、一企業・産業の問題にとどまらず、社会基盤を揺るがしかねない深刻な問題に発展する危険性をはらんでいます。

社会の中で今後ますます重要な位置を占める電機情報産業を育成し、成長・発展の方向性を見出せるよう支援するための産業政策の確立が求められているのではないのでしょうか。

(さくらい よしたか・物理学・ソフトウェア工学・電子工学)

田中克範さん

がんを患って

昨年の定期健診で大腸がんの内視鏡検査を受けるように指示され、検査を受けたところががんが見つかり、紹介された大学病院でさらに検査を受けたところ、肝臓に転移していることがわかりました。転移があると、がんのステージは自動的に最高の4に上昇します。がん細胞が血液に乗ってほかの臓器まで達していると考え、最初に大腸がんが発見されたという宣告よりも、転移があったと聞いたときのほうがショックは大きなものでした。

今年2月、大雪の日に手術で両方のがんを切除して、今は3ヶ月に1回の検査を受けながら、抗がん剤を使うこともなく普通に生活し、仕事もできています。支えてくださった方々には本当に感謝しています。

私よりももっと深刻ながん患者の方、その他の疾病を抱えておられる方は大勢いらっしゃると思います。心からお見舞いを申し上げ、何かできることはないかと思っています。

私もいつ転移・再発が見つかるかわからないので、一応の安心は手術後5年経過してなにもない「寛解(かんかい)」の時にはなると思われます。いろいろな方々にご心

配をおかけしましたが、これからもがんばって生きていきます。

(たなか かつのり・技術史)

その58 個人会員ニュース No.101 2014.12.10 発行

奥村 義治さん

科学者が会議する場を

企業を定年退職後、企業ニーズに基づき大学との研究のコーディネーションや技術調査を行っている化学屋です。長年化学に関わってきたので、環境問題などで少し専門的に社会に恩返しできればと思い、JSAに最近入会しました。そのためには、専門的な議論の場が必要なのですが、見当たらないようです。原発問題を見ても、反対運動に取り組んでおられて、それは重要に違いありませんが、反対運動の前に科学者がなすべきことが足りないように感じます。とくに、私は、地球温暖化問題について自分なりに2年間、問題を解明してきたのですが、シンポジウムくらいしかその議論の場が見当たりません。JSAはIPCCの主張にしたがって「温暖化」の原因はCO₂の増加だとする説に異論がないとしているようですが、頭から温暖化への疑問を封殺するようではカルトのようにも感じます。温暖化問題に限らず、化粧品白斑問題、工場の爆発事故なども、自分なりに検討したことがあります。科学者として現状や原因について科学的に議論、交流する(会議する)場を求めています。

(おくむら よしはる・化学・新宿区在住)

島崎 隆さん

退職後の老年の生活について

大学を退職して2年半ほどたちますが、退職後の生活は、いろいろと予想していたよりも思いがけず、変わったものでした。ほぼ毎日職場・研究室に行き、規則正しい生活をしていたほうが自分には合っていたようで、毎日、基本的に在宅していると、自由になったようで、自分の場合、かえって自由がなくなった感じです。ともあれ、体力も知力もかなり落ちてきています。能力の衰退はやむをえないものですが、老年にはいるということは、マイナス面ばかりなののでしょうか。「老人力」ということばもありましたが、たしかに昔は、老人の知恵というものを尊重してきたと思います。社会的に活躍していた人たちは、社会へ向けて発信しなくなったときに、どういう方向に意識が向くものなののでしょうか。死生学、老年学という分野もあります。仏教でいう「林住期」にはいったとき、何が望ましい生活、生きかたなのか、自問自答しています。そこでは、外面的・社会的な生活よりも内面的な生活が重要となるのでしょうか。

(しまざき たかし・哲学・杉並区在住)

西田 滋さん

教師を励ます看護学生

現在、看護学生に生化学を教えている。学生は現役生と社会人経験者がほぼ半々。「高校の化学はいつもギリギリか赤点」「化学は苦手、生化学はムリ」「高卒後10年ほど経つため悪戦苦闘」という学生が多い。授業が始まると、「片仮名が覚えられない」「見えない物質は理解が困難」などの感想がでてくる。

講義が終わる頃には自分の能力の高さが実感できると励ましつつ、お菓子の成分表を読ませたり、ゴロ合わせや体内での代謝を覚える替え歌を作ったりしている。しかし学生の視線を浴びて教壇で歌うのは小心者の私には何ともきつく、心臓用の育毛剤が欲しい。元歌を知らない学生も増え、世代ギャップの大きさを感じる。

こんな八方破れ講義でもやがて「課題プリントの先生の解説には、理解させようとする必死さが伝わって来ます」「コメントに励まされます」「サクサク答案を書いている自分に驚いています」「生化学で高校の化学のカタキを討てました」「私の体内でみごとな代謝が起こっているんですね」などの感想を見ると、人の能力の豊かな可能性に逆に励まされる。みんなすばらしい看護をするだろうな、よし私も頑張ろう。（にしだ しげる・生化学）

吉田 万里さん

かなり以前からですが、「見直す」という言葉の使われ方が変わってきたように思えて、気になっていました。私の理解では、この言葉は、もともとあまり評価の高くなかった人や物に対してその評価を好転させること、なのです。が、今ではこの逆に近く、けっして評価が低くなかった人や物に対して欠陥が疑われその評価を再検討すること、のようです。そこで古い国語辞典で調べてみました。手許にあった37年前のもので角川国語辞典 久松潜一／佐藤謙三 昭和52年1月20日172版によると以下の通り。自動詞①病気や景気などが良くなる。他動詞①改めて見る。②見て思い直す。③改めて価値を認める。(自)①や(他)③は、明らかに私が以前から理解していた意味。(他)①や②は今の使われ方に近いようです。でも①の文例を見ると、「答案をよく見直せ」。これは答案という評価の定まらないものに対する評価の確認作業。②の文例は「なりゆきを見直して決心した」。これだけでは見直しの対象となった「なりゆき」が、もともと良かったのか悪かったのか分かりません。以上を総合的に見て、以前は今日のような使われ方はあまり無かったのではと思います。専門家のご意見を伺いたいものです。

（よしだ まさと・電子工学）

米田 梢さん

見て、聴いて、感じた「沖縄」

勤務校では、6年生の総合学習で『沖縄』について学びます。1学期から学んできた集大成として、10月の末には3泊4日で沖縄学習旅行に行きます。まず、宮森小学校ジェット機墜落事故の話を630会の方々から聞きました。また、佐喜真美術館の屋上ではオスプレイが、「安保の見える丘」ではタッチ・アンド・ゴーの戦闘機が爆音を立てて、子どもたちの頭上を飛んでいきました。二日目には、ひめゆり学徒隊のたどった道を一日かけて回りました。糸数壕では暗闇体験をし、第一外科壕前では、解散命令後に多くのひめゆり学徒隊が亡くなっていったことを知り、鎮魂のエイサーを心を込めて踊りました。また三日目には渡嘉敷に渡り、「集団強制死」について、お母さんの勇気ある一言で助かった方とお母さんを手にかけた方、真逆の運命をたどった証言者の方々から話を聞きました。子どもたちは「人が人でなくなるのが戦争」「軍隊は住民を守ってくれなかった」と大切なことに気

付くことができました。

そして11月17日の朝。「翁長さん当選したね!」と嬉しそうに報告しにきた子どもたち。沖縄の学びをくぐり、沖縄のことも、平和のことも一緒に考えていく立派な主体者として育っています。

（よねだ こずえ・私立小学校教員）

その59 個人会員ニュース No.102 2015.3.10 発行

青水 司さん

被曝労働に想う

福島原発事故がなかったかのように、再稼働が目論まれ、一部は日程に上りつつある。被災者の被曝をはじめ、事故がなくても核のゴミ問題など、原発は安全ではありえない。とりわけ、あまり強調されていないが、原発労働者は日々被曝してきた。特に、定期点検時には、数千人の労働者が60～90日間、検査補修、改良工事等を行うが、放射線量が高い圧力容器内の洗浄作業が多いという。公的な統計でも、2009年度20ミリシーベルト(mSv)（限度とされる5年間100mSvに相当）以上の被曝が7人だった。福島事故後は、年間限度250mSvとされ、20mSv以上が3、806人、250mSv以上が6人もいた。しかし、放射線管理手帳（雇用主が管理）の改ざんが多く、実際はもっと多い。1970年～2009年のがん死亡が1,300人以上という推定もある。しかし、労災認定されたのは11人（うち10人死亡）だけである（1981～2011年）。

原発が許されない最大の理由は、被曝労働が「労働対象性を持ちえない」奴隷労働以下の労働といってもよいからである。しかも、重層的な下請け構造による無権利状態の下で、病に倒れ死亡しても、闇に葬られてきたのである。（拙著『原発と倫理問題』晃洋書房、2014年 をご覧いただければ幸いです）（あおみ つかさ・技術論）

秋津 貴城さん

ゼミ案「グリーン・ケミストリーへの戦略」

学術体制を巡る社会情勢や大学の状況といった現実の「枠」の中でも、批判や運動でなく、戦略的な運用によって様々な問題を回避して、思うことを実現したい。

卒研究生・院生対象の研究室セミナー（基礎・文献紹介・中間報告）と合同のゼミ形式で、特定のテーマ（キラル金属錯体を用いた有機-無機複合機能材料、とくに環境・エネルギー分野への応用）について、前半で文献紹介、後半で中間研究報告（下線部）を行う。

● 世の中からみた研究段階の階層 ※政策や経済も影響
基礎研究 → 応用研究 → 社会的要請の解決

● 卒業研究・大学院研究の流れ
研究計画（予算）→ 実験 → プレゼンテーション → 投稿論文→修士・博士論文

・文献紹介 プレゼンテーション← 投稿論文

※ 最新の研究論文の購読

・中間研究報告 実験→プレゼンテーション

※ 学会発表等も含まれる

★ 卒研究生・院生には、「実験 → プレゼンテーション」の実験遂行を期待、ゼミ生には、「基礎研究←社会的要請の解決」の研究戦略の提案を期待

この時期、来年度ゼミの案を練っている。「基礎科学研究と社会的要請」の適切な共存関係は、重要な関心事である。

さらに例えば、大学研究者個人だけでなくシンクタンク（JSA 等の学会組織）が対象の地域活性化等の公的事業公募も目にするので、異分野融合やチーム連携で取り組めることがあれば、ぜひお声がけ頂きたい。

（あきつ たかし・化学・東京理科大学）

亀井 伸治 さん

日々の雑感

シャーロック・ホームズは、小さな悪意と誤解の連鎖が悲劇的結末へと至るある事件を解決した後、次のように語る「この悲惨と暴力と恐怖の循環は何の役目を果たすのか。そこには何らかの目的がなくてはならない。さもなくばこの世は偶然によって支配されていることになる」。だが、この問いはそれ以上追及されることはない。なぜなら、古典的な探偵小説は、ただ犯罪という始動装置に基づく小宇宙を創出し、その限定された事象の論理的関係を明らかにしたところで自足するからである。ホームズは続けて言う「この問いは、人間の理性がその答えに達し得ない永続的な問題だ」と。19世紀末に限らず、社会全体が断片へと解体される時、そうしてそれまで自身の存在根拠としていた秩序と原理を失った人間が世界への懐疑にとらわれる時、上記のような問いかけは繰り返し浮上してくるだろう。

昨今、巷では陰謀論が大流行であるらしい。確かに陰謀論も、ホームズの問いやその背景にある不安へのひとつの回答ではあるに違いない。しかし、勿論それは通俗的で、あまりに皮相だ。われわれは、もっと強く、もっと深く考え続けねばならない。たとえそれが「永遠の問題」であるとしても。

（かめい のぶはる・ドイツ文学・中央大学）

川田 奈々絵 さん

再エネ導入・普及・促進の為の一大学習集会を

「イスラム」国の人質事件が連日報じられ、これ自体極めて大事。しかし今回私は報道の影で進行する「再エネ普及」に関し一言申し述べたい。実はこの間、経産省有識者会議「長期エネルギーの需給見通し小委員会」の初会合が 2030 年時点のエネルギー比率を話し合っている。原発を「重要なベースロード電源」とした政権。案の定、原発の「リブレース（建て替え）」や「国際競争力」から推進発言が目立った。しかし報道は不十分。一方日弁連主催「再エネの普及促進を考える」学習会も国会内であつたらしいが詳細は伝わらない。思うに、脱原発の先、「再エネ導入」の如何なるロードマップを描くか？国民の側の積極的政策提言が今必要とされていると考える。有識者を交えた一大学習集会こそ全国津々浦々で持たれてほしい。でなければ 3.11 とは何だったのか。昨秋大手電力会社が「固定価格買い取り制度」運用を見直し、「出力抑制」の新ルール（＝逆コース）ばかりが早々と始まった。再エネに志し就職した若者が逆風の中で苦戦を強いられてもいる。知るにつけ、やる気を失わせるこの国の無方針さ。翻弄される方はたまらない。それどころかこの国の未来は危うい。戦後 70 年。全ての面で今年は正念場かもしれない。

（かわた ななえ・前高等学校社会科教員・杉並区在住）

張替 泰子さん

昨年 1 月、文京区民センターにおいて、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議代表の立川涼氏の講演会「ネオニコチノイドの害と私たちの暮らし」を聴きに行ったことをきっかけに、会員になりました。

普段は、大学の非常勤講師と雑誌「食べもの通信」の編集のお手伝いをしており、食の安全性や、食物アレルギー、内部被曝の問題に関心を持っています。

先日（2 月 7 日）食糧問題研究会で「飲食物の放射能汚染と新基準値の問題点」について生井兵治氏の報告がありましたが、このような事実が一般の方に行き渡らない現状、若い学生の関心が薄れている状況について、非常に虚しさを感じるこの頃です。

しかし、研究会で勉強し皆様のお話を伺っていると、あきらめないで身近なところからでも何とか伝える努力をしていきたい、自分にできる事をやっていきたいと、いつも気持ちを新たにすることができます。

また、主婦という立場からは、日本の知の最後の砦、JSA の活動を支えている研究者の先生方を心から尊敬し、応援していきたいと思います！

（はりかえ やすこ・調理学）

その 60 個人会員ニュース No.103 2015.6.10 発行

斉木 隆 さん

農林漁業の振興と TPP について

長年にわたり工業用アルコール産業と燃料用アルコールの工業化をめざす技術開発の分野で仕事をしてきました。退職して 70 才を越してから幾つかの病気にかかり、幾つかの持病と付き合いながらの生活をしております。工業用及び燃料用アルコールの原料は農林産廃棄物由来のバイオマスや余剰農産物です。また、化石資源の枯渇する将来（今世紀中のことです）は、マテリアル原料としてのバイオマスの生産と利活用も重要になります。従って農林漁業は食料、バイオ燃料、マテリアルの生産という観点から、今世紀の最も重要な産業です。私は 5 才の時に敗戦を迎えましたが、縁故疎開で宮城県農村で生活していました。農家の主人の兄弟親戚が中国大陸などから復員帰国して、農作業をしながら暫く同居滞在し、やがて落ち着き先が決まるとそれぞれ去って行きました。当時の食料は質素でしたが少なくともこの村では餓死者は出ませんでした。振り返ってみると「国破れて山河あり」という実感でした。現在はどうか？日本の農林漁業は疲弊している状況なのに、TPP の導入は致命的な影響をもたらす、将来何か（天変地異、石油の高騰など）起きれば多数の餓死者がでるでしょう。「国破れて山河なし」となることを憂えています。

（さいき たかし・応用微生物学・東久留米市在住）

高根 勝啓 さん

全国一律最賃制の法制化を一日も早く実現しよう

商業・流通・サービス分野の中小・零細企業の労働者で組織された全労連・全国一般東京地本一般合同労組に

所属しています。商業・流通・サービス分野に働く人々は、千二百万人とも千六百万人とも言われていますが、その九割以上が未組織で、非正規の労働者です。大手流通資本に牛耳られたこの分野は、ブラック企業「ワタミ」の過労自殺に象徴される長時間・過密労働が常態化しています。

私たちは、こうした圧倒的に未組織・非正規で賃上げの対象外となっている労働者に対し、社会的賃上げでありすべての国民の生活改善につながる全国一律最低賃金制度の法制化を最重要の課題として運動を展開しています。（たかね まさひら・全労連・全国一般東京地本一般合同労組・北区在住）

鍋田 亮一 さん

昔は本当はどうだった？

「『昔はよかった』というけれど」というタイトルの本がある。1年以上前に刊行されていたようだが、最近読んでとても共感し、あちこちで薦めている。

私は、職業柄、予備校や大学で、日頃から多くの学生に触れ合う機会があるため、マスメディアなどでセンセーショナルに取り上げられるような「若者像」にいつも強いいら立ちを感じている。教育に携わる者はよくわかっているように、彼らの多くは、私たちの世代と変わらず、正義感にあふれ、理不尽なことには憤る純粋な青年たちである。一部少年による悲劇的な事件が針小棒大に報道され、無限ループのように同じ事件が繰り返し報道される中で、「昔はもっと良かった」と思いたい人々によって増幅され、あたかも、近年、少年犯罪が増加し、凶悪化しているかのような虚像が作り上げられていく。統計数値上、そのようなことを根拠づけるものはなく、殺人は1940年代後半から1960年代の初頭の8分の1、強姦に至っては1960年代の前後の30分の1に過ぎない。

道徳の教科化が始まる前に、目の前の若者に真摯に向き合い、事実を確かめることから始めたほうがよさそうだ。案外、今より「昔はよくない」ものだ。

（ときた りょういち・憲法）

真野 茂郷 さん

最近の活動について

昨年、JSAに数学研究会ができて以来それに参加しています。私は長い間、引きこもったような生活で（今でも時々引きこもり？）自分が珍しく活動的であるな、と思えたのは過去も含めて、例えば、大学卒業後の海外留学、暇な時にしばしば出かけるハイキング、最近あるきっかけから参加することになった教会合唱団（聖歌隊）、そしてJSAのこの数学研究会などのお陰かと思っています。これらは、楽しいことばかりでなく、困難なこともいろいろありました。その一つはコミュニケーションの問題だと思います。旧約聖書の中に出てくるバベルの塔の話もありますが、例えば、突然飛び込んだ世界で言葉

を交わす相手がいなかったり、言葉そのものが全く通じなかったりという状況を想像してみてください。共通の問題関心があっても前に進めなくなってしまいます。こうした問題を克服していくことも大事なことであり、上記の体験から学ばされました。

現在の社会・教育における競争・格差の進行は学問などの活動もますます困難にしているように思われますが、その方面の改善も今切実に求められているのではないのでしょうか。（まの しげさと・数理論理学・三鷹市在住）

吉森 弘子 さん

金曜夕方久米川駅前行動

「金曜夕方久米川駅前行動（略称キンクメ）」または「希望のエリア東村山」は、週に一回、西武新宿線久米川駅南口（東京都東村山市）で行われているアピール行動です。震災と原発事故以降、官邸前に始まり、全国に広がった脱原発アクションのひとつです。きっかけは、2013年夏の福島訪問でした。同じ年の春、京都大学の小出先生の講演会を地元で開催しました。その時、原発事故避難者からもお話をと来ていただいた方からの「ぜひ実際に足を運んで、フクシマの現実を見てください」との声に、夏に、大熊町、浪江町、福島市などを数人で訪問しました。持参した線量計が測定不能になる場所が複数ありました。

何かしなくてはと気持ちが落ち着かなくなった私たちは、まずは、9月に報告会。次に継続的な行動をと、全国の金曜行動に地域で連帯していくことにしました。

それから1年半。「キンクメ」も6月には第80回を迎えます。「原発ゼロ社会」の実現をめざして、全国津々浦々から声を挙げ続けることは、再稼働を許さない市民力の形成に力を添えていくと考えています。お近くの方は遠慮なくご参加ください。お待ちしております。

（よしもり ひろこ・生活協同組合パルシステム東京顧問）

その6 1 個人会員ニュース No.104 2015.9.10 発行

河上 茂 さん

10年間の遠距離介護が教えるもの

94歳の母は、秋田県南のグループホーム（認知症対応型老人共同生活施設）で暮らしています。2005年、84歳の時に症状が露わになり、私の遠距離介護が始まりました。介護保険制度施行からわずか5年、最初の改悪を自公民が強行した年です。介護用具「貸しはがし」や訪問介護の「取り上げ」が横行しました。今年4月の要支援者切り捨てと介護報酬の引き下げまで、私の個人的介護生活の10年は、介護制度の破壊の歴史と重なります。

制度が改悪されようが、「保険あって、介護なし」であろうが、介護の現場では、本人はもちろん、家族、介護施設、医療機関などの当事者の日々の努力は続きます。母と私の10年の経緯もひと言では語れません。制度面、経済面、施設経営面、人間関係など数多くの複雑な制約

の中でも、その現場で最善を尽くし、将来の展望も拓かなければなりません。

現場で重要なことは、なによりも本人の健全な面を大切に、すなわち人格を尊重することです。母は、ベッドと車椅子が住まいのようなものでまなならず、心理的には私の存在も定かでないかもしれません。認知症状に加え老耄も急です。しかし、人として不完全な部分はごくわずかです。たくさん残っている健全な部分は、私や家族とも、介護スタッフとも共通なのです。ここに介護生活の喜びの源があります。共に分かり合える場と時をなるべく多くすること、これが10年間の遠距離介護が私に教え続けているものです。

(かわかみ しげる・制御工学・横浜市鶴見区在住)

衣川 清子 さん

『アメリカの息子』と『アメリカの悲劇』

夏休み、研究発表の司会をする関係で、アメリカの黒人作家リチャード・ライトの『アメリカの息子』(Native Son, 1940)を読み直した。

1930年代の実在の殺人事件に材をとった作品で、シカゴに住む20歳の貧しい黒人青年ビガー・トマスが、住み込みで運転手を務める裕福な白人家庭の一人娘をひよんなことから窒息死させてしまい、逃亡の足手まといになるからと黒人のガールフレンドを殺害する。露見し、逮捕されて裁判にかけられ、死刑の評決を受ける。作品の白眉はユダヤ人の共産党員の弁護士マックスが法廷でビガーの弁護の論陣を張るところだ。ビガーの生い立ち、黒人たちがどんな境遇にあるか、彼一人を殺しても問題は解決しない、と力説する。

白人作家のセオドア・ドライサーの『アメリカの悲劇』(An American Tragedy, 1925)を思い出した。こちらは貧しい白人青年クライド・グリフィスが出世と上流階級への足掛かりのために、妊娠させた恋人を殺し、最終的に死刑になる話だ。こちらも長大な裁判場面が重要な部分だ。

気になるのは、どちらもありていに言えば、計画的または無計画的な殺人者の話なのに、「アメリカの」息子であり(nativeはアメリカ生まれということだ)、「アメリカの」悲劇だという点だ。後者は、これがはたして「悲劇」たりうるのか? という議論もある。今後追求してみたいテーマができた。やっぱり文学は面白い。

(きぬかわ きよこ・東京支部・個人会員・アメリカ文学)

久野 勝治 さん

今、安倍内閣の安保法制強行による戦争の危機が高まっている。憲法は第9条でこの国の「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久に放棄することを放棄する。」としているし「陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」従ってあれこれの国際的な動きを理由にして戦力を保持する事も、ま

た、集団的自衛を理由に交戦権を主張する事も明らかに憲法で否定されているのである。安倍政権は多くの法学者や裁判関係者による憲法違反の指摘に対して基地訴訟など関連事案に関する最高裁判決を理由にしているが、最高裁は地裁などで出された憲法違反判決などの指摘に対して、可否の判断を示さないで現実に行われている不法な事実は黙認するという姑息な態度をとっている。それでも憲法判断として合憲とした例は一例もない。従ってどの最高裁判決もその内容の如何にかかわらず合憲を証明するエビデンスにはならない。

戦後、私たちはどのような国々の人々に対して一発の銃口を向けなかった事がPKOで派遣された自衛隊員の安全をも守っている。逆に、銃社会に頼ったアメリカでは、市民は理由のわからない恐怖に怯え、痛ましい大量虐殺も時々起きて銃社会の病徴が指摘されている。武器に頼った安全や平和は幻想に過ぎず何の積極性もないことを今一度指摘しておきたい。

(くの かつじ・元東京農工大学)

高橋 利昌 さん

日々子どもたちに思いを馳せながら

現在、私が勤めている所は東京都の西に位置する緑豊かな青梅市にある保育園です。この保育園は、1970年当初の「子どもが生まれても働きたい」というお母さん方の切実な願いをかなえるために、「0歳児産休明けの子どもの保育を担う保育園を」という住民運動のもとに青梅初の0歳児産休明け、特例保育所として開設されました。以来、40年余、「子どもたちが育ち合う関係を大切に。みんなの願いを叶える保育園」をテーマに今日まで歩んできました。日本民族の伝承である「わらべうた」による音楽教育にも取り組んでいます。今日も、事務室に隣接する保育室から、美しいハーモニーの園児たちによる「わらべうた」が心地良い雰囲気をもたらしめています。

ところが、今年4月から『子ども・子育て支援新制度』が導入され、日本中の保育園・幼稚園のあり方が大きく変えられました。この支援新制度は、戦後はじめて保育所と幼稚園の制度を変える大改悪です。この新制度は、高齢者福祉の分野で、介護保険化を機に営利企業の参入が一気にすすんだと同様に、保育分野への営利企業参入を促進させるなど、保育の市場化をめざすものです。反対運動を展開しています。戦争法案反対の運動でも、保育士・父母たちが立ち上がっています。子ども達が幸せになってほしいと思って、今、私達大人がやらなければいけないことをしっかりやっと思いっているところです。(たかはし としまさ・保育園経営・青梅市在住)

(No.105は、増刊号「私からひと言」の掲載なし)

秋保 親成さん

「私からひと言」欄に寄せて

修士時代からの恩師よりご紹介いただき昨年入会しました。現在の赴任先では専門科目のほか学生の学習支援やキャリア教育に関する役職を務めている関係で、特に「学生のために大学は何ができるか」について日々考えさせられます。まず現在の学生は、経済的な面でハンデを抱え、学生生活の当初から困難を強いられていることが少なくありません。学費や家計のために長時間のアルバイトを余儀なくされる学生も多く、こうした状況が「ブラックバイト」をはびこらせる一要因となっていると言えます。この問題に対しては、公的な責任として奨学金等の経済的支援を拡充することが何より求められるものと思われま

す。また、大学に求められる教育的役割もますます大きくなっています。特に、修学上の困難を抱えている学生に対する支援のあり方については昨今の大学や他の教育機関で共通する問題になりつつありますが、具体的な対応については大学ごとの個別的なものに留まりがちであるのが現状ではないかと思ひます。今後はこうした問題について関心のある方々と情報を共有し、学生が生き生きと過ごせる大学作りをともに考えていきたいと考えています。(あきほ ちかなり・経済理論・日本経済論)

須藤 恵美さん

心の休暇中

神奈川在住ですが、縁あって東京支部に所属しています。2015年1月にうつ病になり、活動はお休み中です。心療内科の先生に相談する中で、非常勤講師の仕事はリフレッシュになっているようだから続けても大丈夫との言葉に勇気もらって、大学と看護学校で非常勤講師を続けています。

うつ病になって、一か月は寝て過ごしました。全く体に力が入らず、起きていられないというのが本当のところ。とにかく今は休む時期だと自分に言い聞かせました。

子供が生まれてから走り続けてきた7年間でした。うつになり、ふと立ち止まってやっとのんびり子どもたちと向き合う時間ができたように思ひます。病状がひどいときは、何も食べられずどんどん痩せていきました。そんな私を見て、子どもたちはママが洪水で流されちゃう夢ばかりみるんだよ、ママが死んじゃうんじゃないかって...と毎日のように泣いたときもありました。

今は休養と薬でだいぶ回復しています。うつは二度といやだけど、得るものも大きいと感じました。

(すどう めぐみ・分子物性論・横浜市在住)

所 康弘さん

メキシコから日本を、NAFTA から TPP を、視る。

「太陽の国」。そう形容されることも多いメキシコは古代メソアメリカ文明の揺籃の地で、数多くの世界遺産や古代遺跡を有しています。なんの気なしにこの地に初めて足を踏み入れたのが約20年前。大学生の頃でした。その後、縁あって研究の道にすすみ、これまで足かけ3年半ほど同国に滞在してきました。そして北米自由貿易協定(NAFTA)がその加盟国のメキシコ経済社会に及ぼした影響に関する研究を進めてきました。2015年10月に「大筋合意」に至ったTPPもNAFTAといくつか類似点が見られます。両者とも単に経済上の連携強化を目指すのではなく、安全保障上の同盟強化に直結するという点です。NAFTAは2005年、「北米の安全と繁栄のためのパートナーシップ(SPP)」にバージョンアップされました。NAFTAを契機にその後、劇的に「軍事化」されたメキシコ市民社会の現実から、TPP加盟および日米同盟強化という方向へ一直線に進む日本社会はどのような教訓を引き出すことができるのか。目下の研究課題です。

(ところ やすひろ・貿易論)

その63 個人会員ニュース No.107 2016.3.10 発行

佐藤 克春さん

伊江島に行ってみて

研究者にとっては待ちに待った春休み・調査シーズンがやってきました。そんな中、2月に沖縄の基地問題の調査出張に行ってきました。南部の戦跡を回り、辺野古・高江と行く中、今回のハイライトは伊江島でした。伊江島はかつての戦争で、住民の2人に1人が亡くなった激戦地です。また戦後は、米軍基地による土地接収への反対運動が、粘り強く行われた島であり、かつての「島ぐるみ闘争」の発祥の地でもあります。かつての運動によって、米軍基地扱いの土地でありながら、「黙認耕作地」という形で、実質的にかなりの面積の土地の返還を勝ち取っています。実質的に返還はされているが、米軍基地扱の土地のため、軍用地代が住民に入ってきます。結局現在、伊江島は基地依存経済になっています。多い人では年間1,000万円の収入です。離島であり高校がないため、高校生になると本島に下宿しますが、これら教育資金のねん出のためにも、住民にとって軍用地代は欠かせないものとなっています。現在では、基地経済のモデルケースとして、他市町村が伊江島に見学に訪れます。「反基地闘争の島から、基地依存の島へ」、その経緯についてもう少し勉強してみようと思ひます。

(さとう かつはる・環境経済学)

白神 優理子さん

「憲法の希望を届けたい」

私は弁護士になりこの2年間で100回以上の講演活動を行ってきましたが、実は小中学校時代は、進学塾で競争の階段から落ちないため暗記勉強をすることに必死で、「私には何も力がない」「歴史は過ちを繰り返す」と諦めていました。

そんな私が変わったのは、高校時代に仲間と戦争の真実を学び、憲法を知ったからです。“科学”に反し、“民主主義”を壊し侵略戦争を進めた愚かさや残酷さ、この後悔から個人の尊厳を最も大切なものとし（憲法 13 条）、国家権力の手足を縛る立憲主義を徹底し、平和を誓ったのが憲法なのだと理解し、初めて「人間は素晴らしい」「歴史は前に進んでいる」と希望を持つことができました。弁護士という夢も見つけることができました。

この「希望」を粉々に破壊する、戦争法や特定秘密保護法などの安倍自公政権の企みは絶対に許せません。科学者の皆さんと共に反対の声を上げて来ました。野党共闘まで生み出す運動となり感動しています。

「真実を知ること」(科学)、「自由に議論をすること」(民主主義)こそ、これから生きる人々にとっての確かな希望なのだと思います。皆さんと一緒に希望を広げ続けていきたいです。（しらが ゆりこ・弁護士）

兵頭 淳史さん

消費と労働—ヤヌスの顔をもつ社会で

公共交通機関の運行時刻は世界一正確。宅配便は年末年始も含めいつでもフル稼働、発送の遅くとも翌々日には、国内ならばどこでも到着、現在の日本社会ではこうしたことが「当たり前」のサービスとして享受される。こうしたサービスや商品の生産・流通が、大規模自然災害以外の要因で、例えばストライキによって長期間ストップする、といったことは、この国では「想定外」だ。

しかし、この国で「消費者」として享受できる利便性や快適さの氾濫の裏には、過剰なまでの顧客サービスを徹底的に求められるがゆえの過剰な働き方が存在している。さらに、消費者というポジションに立つためには貨幣を所有していることが必要であることは言うまでもない。消費者としてふるまうときと働く者という立場に立ったときの落差が激しいということは、それだけ「貨幣をもつ者ともたない者」との格差が激しい社会であることを意味するものでもある。

あふれんばかりに享受できる消費者としての便利さ快適さと、働く場における悲惨、私たちの社会がこのように極端な二つの顔をもつことを、働き方に根源をもつ社会の病理としてはっきり捉え直すことが、今あらためて必要になっていると思われる。

（ひょうどう あつし・社会政策・労働問題）

古城 利明さん

辺野古訪問余話

今年 1 月 5 日、私は妻とともに、妻の友人 B さんとその御主人 A さんのお宅を沖縄県名護市に訪ねた。ある論稿に載せる普天間基地の辺野古移転に対する「あるウチナーの想い」をお聴きするためであった。その翌日、辺野古の反基地闘争の現場を案内してもらった。辺野古のゲート前では座り込みの人びとを前にかわるがわるスピーチが行われていた。しばらく道路をはさんで、ゲートの反対側でそれに耳を傾けていたが、やがてゲート側に移り、周りをみていると、丁度スピーチを終えた安次富浩さんが前を通りかかった。はたと気付いて、話しかけ、「10 数年前、海岸にテント小屋を建て、基地建設への動きを監視されていた金城祐治さんはどうされましたか」

と聞いた。返事は「7 年前に亡くなりました。私どもはその遺志を継いで闘っています」との答えであった。感動した。またしばらく佇んでいると、B さんの友人、阿波根さんという女性が「そのテント小屋」のあたりに車で案内してくれるというので、お言葉に甘えた。海岸の方に下っていくとそこには同様のテント小屋があった。が、それは現在使われている闘争小屋で、そこで闘争の現状をお聞きした後、基地とのフェンスに近い、昔、テント小屋があったと思しきところにでた。金城さんに想いを巡らし、闘争の発展を祈願し、辺野古の集落を抜け、もとに戻った。（ふるき としあき・社会学）

渡邊 伸一さん

日々になたなり

定年退職後も研究に関わっていましたが、その最中に東日本大震災を経験しました。岩手の親戚が津波で、福島親戚が原発事故で被災したことは私の人生観を大きく変えました。原発事故を報じる新聞の切り抜きを続け、原発事故学習会の講師も積極的に引き受けました。しかしその年の暮れに家内が急逝、生活が大きく変わりました。政権は民主党から自公に代わりましたが、原発事故の收拾おぼつかない中でのオリンピック誘致に困惑しました。

現場を遠のいた今ではネットから吸収する知識の比重が大きくなりましたが、総合的な科学の知識も必要と感じて日本科学者会議に入れさせていただきました。今は孫の面倒を見る機会も多くなり、子育ての本も読むようになりました。地域では平和団体に所属し、2015 年 9 月 19 日は国会前で戦争法反対のこぶしを上げました。つい最近、地元で小森陽一氏講演会を開催したときは裏方を引き受けました。また、安倍政権による改憲を許さない 2000 万署名を集めるお手伝いをしています。Facebook で日々の生活や地域情報を発信しておりますのでよろしく。（わたなべ しんいち・加速器学）

その 6 4 個人会員ニュース No.108 2015.6.10 発行

上野 哲さん

研究基金横領への JSA の対応について

最近の三菱自動車の燃費データ改ざんや東京都知事の公金流用疑惑を例に挙げるまでもなく、不祥事が起こった場合「隠蔽」と誤解されるような行動を取れば、さらに信用を失うことになるのは明らかです。しかし、この度の JSA の研究基金横領という前代未聞の「事件」について、誠実に迅速な対応が行われたと言えるでしょうか。

「悪事千里を走る」の格言通り、私はこの「事件」について、すでに昨秋時点で噂として耳にしていました。今回第 51 期常任幹事会による 4 月 5 日付けの「「財政問題」についてのご報告と陳謝ならびに組織改革への決意」という B4 版 1 枚の紙が届きましたが、事実報告としては極めて不十分ではないでしょうか。

なぜこの時期になってからの「陳謝」なのでしょう。横領された額は一体正確にはいくらなのでしょう。今使える研究基金の残額はどのくらいあるのでしょうか。「徹底的な資金回収をする」とのことですが、具体的な目処はあるのでしょうか。

今回の文面を拝読しても、東京都知事の会見後に感じたような強い不信感を拭い去れないのは私だけではないと思います。

(うえの てつ・倫理学・栃木県小山市在住)

木村 宣夫さん

科学者会議と私

現在 62 歳で、あまり戦闘的ではない生活を過ごしています。

20 代後半から 35 歳ころまで日本科学者会議に入っていました。結婚してから自然に辞めてしまいました。60 歳を前に、何かやり残したものがあつた感じがして再度個人会員として入会しました。日本科学者会議に入つたのは長崎大学の助手の時です。その後民間企業に転職し東京にやってきました。当時は、小さな民間企業には分会も無く、理学電機(リガク)の分会に出席させていただいた記憶があります。

現在は趣味で合唱をやっています。ロシア民謡などを歌う、合唱団「白樺」のテノールとして参加しています。日本科学者会議も「白樺」も高齢化が進み、世代交代がうまく進んでいないのが課題としてあります。しかし、有効な解決策を見出せていません。当然傍観しているだけでは解決策は出てこないと思っていますので、日本科学者会議でも何らかの発信者としての活動をしていきたいと考えています。

(きむら のぶお・自動化機械・千葉県市川市在住)

白波瀬 輝夫さん

いざという時のために

現在居住しているマンション(約 400 戸)の管理組合の理事を務めている。自治会はないが、自治体(市)からの勧めもあって「自主防災組織」を創ることになり、昨年末に立ち上げることが出来、市からの防災資機材購入のための補助金も予算化の目途がついた。折から、熊本の震災の発生に伴って、メディアから毎日被害状況や避難生活の情報が入ってくる。勢い防災会議(理事とは別に輪番で役員を依頼する)の議論が盛り上がってくる。先日開かれた管理組合の総会では、議場からの質問があったマンションの基礎の工法については、予め私が事務局に説明を求めておいたのが役に立って、適切な説明がなされた。防災会議で活動を想定して議論している間に、住民同士のコミュニケーションが非常に少ないことに気が付いた。防災組織を円滑に運営していくために、これを支援するボランティア・グループを作ろうと、理事の間で相談しているところである。私も地質学が専門であることを生かして、広報活動で説明をしなければと思っている。(しらはせ てるお・地質学・東村山市在住)

田井 勝さん

私の独り言

「無気力な若者が増えている」といつの頃から言われているのかわかりませんが、どのように生きたらよいの

かと悩んでいる若者が多くいるように感じます。さとり世代と呼ばれるような若者までいるようで、恋愛にまで興味をもてないものもいるそうです。

私の後輩や友人にもそのような人が少なからずおり、相談されても良い答えが見つかりません。いろいろな本を読んでみて、人生を暇つぶしとして楽しく生きる生き方、「いま・ここ」を生きるコンサマトリイな生き方、愛を与える生き方、社会的使命を持つという生き方、逆に人生からどう生きるのかという態度を問われているのだとする考え方などさまざまなものを知りました。けれども、どれも彼らにはしっくりこないようです。

現在、非正規雇用やブラック企業の増大が労働問題として議論されています。賃金や自由時間の問題を解消するのは優先課題です。一方で、目的喪失に関する議論も現代人が生きていく上で大きな問題です。しかし、よい処方箋はあるのでしょうか。最近はこのようなことを思いながら、仕事に研究と目の前のことに埋没する毎日を送っております。(たい まさる・文化経済学)

中嶋 雅登さん

研究環境の重要性

現在、千葉大の修士 2 年で、セクシュアルマイノリティに関する研究を行っています。去年は、いかに研究環境が研究意欲や研究の質に影響を与えるのかを痛感した年でした。残念ながら、千葉大には社会学の同期がおらず、専門の基礎が学べる教育体制や多様性に配慮した環境づくりが不十分です。今まで、神奈川に住んでいたため、特に友人もおらず、とても孤独な 1 年でした。結果、予定していた研究計画を十分に実行できず、様々な理不尽さから大学をやめようとも考えました。けれども、JSA の方にお世話になったり、東京科学シンポで発表の機会をいただいたり、修論を 3 年計画に変更するなどのことをして、少しずつ研究に取り組んでいます。

ダブルマイノリティー(トランスジェンダーとうつ病)であると、双方の問題が影響し合い、さらに大きな負担が生じるように感じます。片方のコミュニティに行っても、もう一方のことが考えられていない、というようなこともあります。今、JSA 内に有志で「人権と多様性研究会」を作り、様々なマイノリティの問題を共有できる場を作ろうと行動しています。今年は、もう少し余裕を持って研究できる年にできればと思います。

(なかじま まさと・社会学・ジェンダー論・千葉市在住)
(No.109 は、増刊号「私からひと言」の掲載なし)

その 65 個人会員ニュース No.110 2016.9.10 発行

赤壁 毅彦さん

熱中症のうわごと

私は暑さに弱い。駅から会社に着く前に、すでにバテている。だから夏は苦手だ。大都市では地球温暖化(気候狂暴化?)に加え、ヒートアイランド効果も深刻であ

る。こんな東京の 8 月で、4 年後には五輪が開催されようとしている。リオでは治安が問われたが、東京では「ようこそ灼熱地獄」である。

そんな東京に新都知事が登場した。自民党都議団と大喧嘩したとはいえ、所詮は自民、期待し過ぎは禁物だが、公約の一つである「満員電車ゼロ」には期待している。既存の鉄道の輸送力増強や LRT 新設を考えているようである。鉄道は輸送力あたりの CO₂ 排出が極めて少ないので、その効果には期待したいものである。しかし、これだけでは不十分である。鉄道の充実で一時的にはクルマが減っても、潜在需要が顕在化したら、元の木阿弥である。同時にクルマ規制も必要である。石原元都知事でも不可能だったロードプライシングにもトライしてもらいたい。選挙戦で石原氏を撃沈した小池氏なら可能かもしれない。

ともあれ、私としては、地球温暖化とヒートアイランド化にブレーキをかけてくれるように期待している。

(あかかべ たけひこ ・ 材料学・潤滑学・交通工学)

坂本 宏 さん

高エネルギー物理学の今

私の専門分野は「高エネルギー物理学」です。物理学会の領域では「素粒子実験」となるのですが、歴史的に高エネルギー最前線での物理を目指してきた分野の特徴を表して、この呼称を好んで使っています。私自身は欧州合同原子核研究機関にある大型加速器を使った実験に従事しています。38 カ国から 3,000 人近い研究者が共同して進める巨大な国際共同プロジェクトです。ちょっとかけ離れた規模の研究ですが、それだけの面白さもあります。それほど的人数がないと実現できない研究でもあるのです。世界各国がそれぞれ苦労して予算を獲得し、このプロジェクトに貢献しています。プロジェクト開始からすでに 20 年以上経っています。さらに今後 20 年は実験を続ける予定です。我々日本のグループも困難に直面しながらも頑張っています。このような長期のプロジェクトの場合、人材育成が非常に重要です。ところが大学の定員は削減されつづけ、任期付きのポジションでしか若手研究者を確保できない。5 年 10 年最先端の研究に従事し大きな成果を上げながら任期切れで分野を去って行かざるを得ない若手を見るたびに悔しい思いをしています。この国の研究体制のあり方はもう少しどうにかならないかと。

(さかもと ひろし・高エネルギー物理学)

深澤 満 さん

2016 年 8 月 雑感

8 月上旬のオリンピック開幕前後のテレビは、いつも楽しみにしている「日本の話芸」(土曜日早朝;再放送)や「ダーヴィンが来た」(日曜夜)などは放送されず、また高校野球も、イチローの 3000 本安打も霞んで、オリンピック一色の感がありました。

その頃、「駆けつけ警護」の訓練の検討に入ったというニュースも、テレビではちょこっと早朝に報道したり、

新聞では片隅記事にと、全く霞んでいました。ところが、オリンピックが終わりまだその余韻が残るところで、「駆けつけ警護」を含む「戦争法」に基づく新任務の訓練に入るとのこと。

さらに、沖縄での工事の強行や経産省前の反原発テント撤去などなど。地球の裏側のオリンピックでも、この騒ぎとその影での強行策。これでは東京オリンピックの時はどうなることやら・・・。

いやいやその前に、9 月のパラリンピック中の動きにも注視したいものです。(ふかさわ みつる・所沢市在住)

藤谷 正太 さん

「と」としての私

今秋より、母校の大学に非常勤講師として舞い戻ることとなった。私が受け持つ初めての授業に与えられたテーマは「個人と集団」である。個人と集団、言葉にしてみれば何と当たり前な言葉であろうか。しかしこの両者は実に相対的で曖昧かつ複雑な関係を持ち、そして私自身、まだまだ個としての自己を確立したとも言えなければ、個人として集団とうまく折り合うこともできてはいないようである。

だが、そんな私だからこそ語ることのできる内容もあるのではないかという考えに今は至っている次第である。個人と集団とは常に一方が他方の前提をなすような相互的な前景と背景であり、一方を捨象しつつ他方のみを取り上げて論じることが不可能である。畢竟両者はそのつどの相互作用的な関係のあり方、つまり「個人と集団」の「と」の部分についてしか語ることができない。

私自身が個人的でも集団的な存在にもなりきれず、この「と」の部分に留まり続けてきたという実感を持てばこそ、「個人と集団」に対して抱いてきた私見をふまえつつこの両者の関わりを受講生たちに伝えることができるのではないか。そんな一縷の望みを抱きつつ講義の準備にいそしむ毎日である。

(ふじたに しょうた・社会学・思想史)

吉田 満 さん

「技術論」を剰余価値生産の中に位置づけて発展させ活用する

原発、情報通信、バイオ部門などで技術の軍事化への動きが 2004 年頃から財界と米国の意向をバックに自公政権下で推進されている。少数の大資産家の利益は増え、世界では富豪 62 人の資産 207 兆円は最貧層 36 億人分と同額という。格差が拡大する一方、日本の実質 GDP はここ 20 年間長期横ばいで、勤労者の実質賃金は低下し、非正規雇用等による身分の不安定化、特に食農、福祉分野での労働条件は悪化している。福島原発事故で自然環境は破壊され、更には海外で戦争できる国に向かって憲法改悪が画策されている。

このような情勢下で科学者・技術者は何を為すべきか？ 筆者は情報通信業の民間会社で 30 数年間技術開発労働に従事した後、現在は異分野の有用微生物発酵技術を利用して、食農健康と環境の向上を目指して 10 年ほど小さな工房を主宰している。そこから考えたローカルな思いが掲題であり『資本論』第 1 巻第 IV 篇を読む中で筆者に湧いた、ひと言である。

戦前 1930 年代、日本には戸坂潤らの輝かしいに諸先輩が「技術論」に接近している。現在の原発や軍事技術の地獄状態から脱し、生産者達の食農医環境と福祉に役立つ科学技術を。（よしだ みつる・有用微生物技術）

その 6 6 個人会員ニュース No.111 2016.12.10 発行

木本 忠昭 さん

科学者・技術者と軍事研究—科学・技術と研究者倫理にかかわる諸問題の科学史的検討シンポジウム—日本学術会議第一部史学委員会「科学・技術の歴史的理論的社会的検討分会」

日本学術会議は、周知のように、「近年、軍事と学術とが各方面で接近を見せている」こと（軍民技術の両用性・デュアルユース）を理由に、戦後堅持してきた「戦争目的の研究には従わない」という基本姿勢を検討するために大西隆会長の下に「安全保障と学術に関する検討委員会」を設置、検討をしています。そして来年の学術会議総会では、結論を出すとも伝えられています。

軍事研究容認派は、「自衛のためなら良い」、「先端研究は両用性をもつので制限できない」というような議論を論拠にしようとしています。科学史、技術史からは、両方ともに、悲惨な結果をもたらしたことは明白なのですが、歴史を踏まえたうえで現代の科学・技術の存在形態の分析と、それに基づいた多くの研究者の発言が求められています。

また、学術会議の検討方法としては、「安全保障と学術」検討委員会が、総合的な学術団体として理性ある結論を出すためには、「特別検討委員会→総会決定」という短絡的道筋ではなく、分野関連の専門研究者や多くの研究者の声を反映する必要があるかと思われます。科学史・技術史研連の、私たちの上記分会も表記シンポ開催などで検討し、意見を提出したいと考えています。ぜひ皆さん方もいろいろな形で意見を集約し、外部表明をされるよう訴える次第です。（きもと ただあき・技術史）

小塚 恒夫 さん

映画と国民性

私は映画が好きな定年退職者です。少し料金が安くなるので人より多く映画館に足を運んでいます。最近の洋画には歴史に絡んだ内容のものが観ごたえがあります。

ナチス時代の犯罪はヒトラーだけではなく、一国民も親衛隊として犯罪者になってしまった「顔のないヒトラーたち」。強制収容所の中では殺されるユダヤ人もナチの手伝いをさせられたことを描いた「サウルの息子」。ナチス・ヒトラーの人種差別がベルリンオリンピックにまで持ちこまれた「栄光のランナー」。狂気なナチドイツ時代を早く終わらせようと、ヒトラー暗殺を企てた一人の市民の行動を描いた「ヒトラー暗殺 13 分の誤算」など、ドイツ、ハンガリー、米国も含めて創られています。

父親や祖父の時代の近現代史を冷静な目と史実に基づいている脚本の良さが目立ちます。

戦後 70 年たつとその時代を知らない世代は日独ともに同じ割合だと思うのですが、こういった教訓的な映画が創られる国と、そうでない国の国民性の違いはどこから来るのでしょうか。

日本の政治は料亭に行く時間があるなら映画館に足を運んでもらいたいものです。

（こづか つねお・元航空会社整備士）

小西 一雄 さん

不気味な政権

かつてヒトラーは経済政策の成功で国民的支持を広げ、そこからワイマール憲法の「合法的」破壊へと進みました。安倍首相も同じ路線を狙っています。実際、アベノミクスの幻影のなかで戦争法の強行までは進みました。しかし、「幸いなことに」という言い方は微妙ですが、経済は長期停滞を脱することができず、彼らの思惑は少し足踏みをしています。しかしこの路線の不気味さに加えて、安倍政権には歴代政権にはない不気味さがあります。それは平然と繰り返し嘘をつくことです。安倍本人、稲田防衛大臣、首相補佐官、内閣法制局長官、日銀総裁、数え上げればきりがありません。なぜこんなことが許されているのでしょうか。それには様々な要因がありますが、ひとつ確実なのはマスコミの萎縮です。先の嘘つき人脈のなかに NHK 会長を上げるのを忘れました。日本会議人脈をはじめとする強引な人事は、いまやほぼ公然とマスコミの人事にまで及んでいるようです。安倍を本物の日本のヒトラーにしないために、出来ることをやりたいと思います。

（こにし かずお・経済理論・金融論）

田宮 兵衛 さん

近況

最近は裏を取る気力が低下したので、専門外の出来事に好奇心を向け、Internet や Wikipedia に頼ってお茶を濁す生活を送っている。たとえば・・・、

MIKADO という英国のコミック・オペラがある。舞台は日本 TITIFU であり、死刑を好む MIKADO が出てくる話である。初演は 1885 年、その後欧米諸国で上演が続く。猪瀬直樹(1986)「ミカドの肖像」には「1886 年のある日には米国 170 か所で演ぜられた」との引用がある（同書は氏の後の世渡りの巧拙を彷彿とさせ、「文は人なり」が実感できることもあり、一読しても大損はない）。

このオペラが秩父困民党・秩父事件とどのくらい関係があるかは、様々な推測が可能であるが、自由民権運動激化の前段には松方正義によるデフレ財政があった。松方正義の三男、後に松方コレクションとなる美術品蒐集行った松方幸次郎は 1886 年米国エール大学に留学中であった。MIKADO を観た可能性は高い。そこで彼は何を

感じたのであろうか。秩父事件と松方財政の関連に如何なる想いを懐いたか、懐かなかったか。あるいは、MIKADO を観なかったとしたら、その理由は何であったか。この疑問を解くことは、「困民」党が「コミュニケーション」の良くてきた当て字であることを裏付ける史料を探すよりは難しそうである。（たみや ひょうえ・自然地理学）

森田 満夫 さん

最近思うこと

今秋以降、大幅な教員免許法「改正」が予定されている。「改正」の底流には、教育問題（いじめ、不登校、学力向上、少年・教師の不祥事等々）の発生→犯人探し→カリキュラム・教師の質／それに責任を負う教育課程・大学における教員養成教育システム＝制度の「改正」へ、との発想もあるように思う。

こうした発想に対し、最近思うことがある。一つ目は、これまでずっといわれてきたことであるが、「学テ体制」の競争主義／ゼロトレランス生徒指導の管理主義／教員・学校評価の成果主義／財政政策重視の「学校統廃合」等々の、「教育改革」の名で進める＜教育における人間疎外＞こそ、真の改正課題ではないかということである。問題は憲法が政府に約束させたはずの〈人権としての教育〉に矛盾するからである。

しかし、二つ目は、我々大学関係者自身の課題である。受験生に教員免許取得を魅力として掲げながら、形式的資格取得に終始し、結果的に社会的信用を失う大学教育の実態はなかったのか、という我々自身の問題である。これから大学は自らの教員養成をどうするのかを真摯に考える必要がある、と思うこの頃である。

（もりた みつお・教育学）

その67 個人会員ニュース No.112 2017.3.10 発行

朝岡 晶子さん

沖縄をめぐる報道で思うこと

1月2日に東京MXテレビ「ニュース女子」が放送した特集「沖縄基地反対派はいま」の虚偽報道に対する怒りと哀しみがおさまらない。この問題については各メディアがとりあげているためここでその詳細は述べないが、沖縄・高江のヘリパッド建設に反対し、連日座り込みなど非暴力のたたかいを続けている市民を侮辱・愚弄するその内容は、観ているのが息苦しくなるほどひどいものだった。

私は学生のときに沖縄戦・米軍基地問題について学んで以降ほぼ毎年のように沖縄を訪れ、ここ数年は短時間でも必ず辺野古・高江を訪ねてきた。昨年11月末に沖縄を訪ねた際には、ほぼ1日高江の座り込みに参加した。その日座り込みをする人の数は30人程度だった一方、機動隊と民間の警備員はその倍以上の人数がいて、数十台の大型トラックがものすごい粉塵と排気ガスをまき散らしながら通って行った。

座り込みをしながら話をした埼玉の老夫婦、大阪から仲間数人で来ていた方たちはみな、私同様「居てもたっても居られなくて」来た方たちであり、「ニュース女子」内で言われた日当をもらって来ている活動家などいないのは当然である。

「ポスト真実」「反知性主義」が跋扈する今日、問われるのは私たちの知性と発信力、そして行動力である。

（あさおか あきこ・教育学）

安孫子 誠也さん

75歳の修士論文

私は今年75歳になりましたが、ここ2年ばかり武蔵野音楽大学大学院（声楽専攻）に在学していました。既に修了演奏（Schumann《Dichterliebe》）は無事に終え、2月に修士論文「シューマンとリストの歌曲の比較—違いをもたらした社会的・思想的背景—」の提出も済ませました。

シューマンは書店主の子息として商工業階級に属し、マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」に良く合致する生活を送った。これに対し、リストはハンガリー貴族エステルハージ家に仕えたドイツ系ハンガリー人の子息として生まれ、貴族たちからの支援に支えられてヴィルトゥオーゾ・ピアニストとして活躍した。しかし一方で、彼はカトリックの信仰が篤く、成人して後、実際に神父の資格を得ている。このような背景が、シューマンの内面性を重んじる歌曲、リストの劇場型で雄弁な歌曲という違いをもたらしたと論じた。

また、音楽と自然科学はともにヨーロッパ・キリスト教社会でのみ十全な発達を遂げることができたが、それは両者共に「宇宙のありようを探る」という共通の試みに起源があったからだ、とも論じた。

（あびこ せいや・物理学史・西東京市在住）

唐澤 英行さん

私の“点”・“線”・“面”について

定年退職後サラリーマン時代に出来なかった趣味や道楽をしようと考えていた矢先、町内会の役員となり、今は町会長でかなりの時間をそれに費やしています。

個人的な趣味や道楽などの時間を、“点”と考えると、労働運動や平和運動など方向がハッキリしていて多数の人々と協力し合って行うことは“線”だと思います。ところが町内会活動などは、同じ地域に住んでいるという共通点がありますが、年齢・嗜好・住宅条件・主義・等々さまざまです。約1,300世帯2,400人を越える人々が安心・安全で仲良く、災害が起きた時にはお互いに助け合えるように日々町内をまわり、年間諸行事を行っている多くの時間を使います。このような町内会活動を“面”と考えています。毎日の生活のなかで、“線”や“点”にあたることが多くあります。科学者会議の方々との交流は、“線”となりますが、切らないように気をつけています。時間がありませんでしたら、インターネットで「唐澤英行」を検索して下さい。（からさわ ひでゆき・情報・映像）

工藤 昌宏さん

フィデル・カストロの死を悼む

昨年 11 月 25 日に、キューバ革命を主導し続けたフィデル・カストロ前国家評議会議長が 90 歳でこの世を去りました。人道主義、国際主義を掲げ貧困との闘い、医療、教育の充実に生涯をささげた一人の革命家の死は、世界中に衝撃を与えました。他方、それに先立ち同じ 11 月 8 日には半世紀以上にわたってキューバ革命を妨害し続けた米国では、人道主義、国際主義とは対極の政策をとろうとする人物が大統領に決定しました。しかし、世界の人々は米国の新大統領の誕生を祝うどころか、不信感を強めいたところで就任反対運動が起きています。

他方、カストロ前議長之死については世界中から哀悼の気持ちが寄せられました。米国の新大統領とはあまりに対照的です。しかも、世界中から尊敬され、愛され、その死が惜しまれる革命家は他に知りません。それはなぜなのか。世界の人々は、キューバ革命の意義とカストロ前議長の誠実さ知っているからではないかと思えます。ともかく、今年は米国の新大統領がどのような行動をとるのか注意深く見つめ、暴走するようなことがあれば声を上げる必要があると感じています。

(くどう まさひろ・経済学)

吉田 裕さん

研究者の世代交代は危機的状況に

定年を来年にひかえて一番頭が痛いのは研究者の世代交代、端的に言えば再生産がうまくいっていないことだ。私の勤務校では大学院に進学する学生はごく少数で、ほとんどの学生は企業に就職する。そのため修士課程の定員充足もかなり苦しい。それだけでなく就職への不安から博士課程に進学する学生が減少している。私の研究分野でも、博士課程にまとまった数の学生が在籍し若手研究者集団を形成している大学がはたして全国に何校あるだろう。その影響はすでに現われている。どこの学会も若手委員を確保することが困難になり、会の運営や会誌の発行に支障を来している。ベテラン教員の多忙化もあって特に月刊誌では掲載論文がなかなか集まらない状況すら生まれている。ある教員が冗談交りに学会の合併を考えないといけないねと言っていたが、そういう時代がすぐそこまで来ているような気がする。どうしたものか、皆で智慧を出しあうしかない。

(よしだ ゆたか・日本近現代史)

その 68 個人会員ニュース No.113 2017.6.10 発行

五十子 満大さん

いま、かかわっていること

年も年で、いろいろなことから少しずつ離れていますが、地元、日野市でごみ焼却場の問題に関わっています。革新都政時代に提起され、革新市政時代に確立された、自区内処理を原則に、環境への負荷を減らそうとの市民の努力と相俟って、日野市ではごみ量を 30 年で半減してきました。保守市政になっても、この原

則は維持され、焼却炉の耐用年数 30 年と言われる更新時期を迎え、規模を半減する更新計画を国に出していました。

ところが、2012 年、東京都と市境を越えた国分寺、小金井の両市の要請を受け、規模を 30 年前に戻すという広域化計画の暴挙を突然、打ち出しました。市民は当然反対です。行政が法を無視するという問題が起きました。三市が自ら交わした“覚え書き”の完全な無視、本来あり得ない総合都市公園内に“ごみ搬入車両専用路”を作るという問題も起きています。

市民は厳しいチェックのある事務監査請求（有権者の 2% 以上の署名が要件）を成功させ、着工を前に、現在、3 回目の公判を迎える、住民訴訟を弁護士さんはじめ地域のみなさんと話し合いと学習を重ね一緒にたたかっています。

(いらこ みつひろ・物理学)

浦田 一郎さん

自衛隊の合・違憲とは

自衛隊が合憲か違憲か議論されてきた。しかし、これは何を議論しているのであろうか。自衛隊に与えられる任務と無関係に、自衛隊自体あるいはその存在の合・違憲が問題になりうるかのような印象を与えている。しかし組織の合・違憲はその任務の合・違憲とセットなのではないであろうか。

私は個別的自衛権を理由とする武力行使を違憲と考えているので、自衛隊は 1954 年の発足以来違憲である。安保法制論議の中で、個別的自衛権は合憲でも、集団的自衛権は違憲だという議論も出された。この立場では、安保法制の成立によって自衛隊に集団的自衛権が認められた以上、自衛隊は違憲になったのではないであろうか。憲法研究者の中では、集団的自衛権合憲のごく少数者を除けば、ほぼ全員が自衛隊違憲論になったはずである。そのことが憲法研究者にも意識されていないように思われる。自衛隊の合・違憲論は自衛隊の任務問題を曖昧にしている可能性がある。

自衛隊合憲化のための憲法 9 条 3 項加憲論登場のもとで、この問題をさらに考えてみたい。

(うらた いちろう・憲法学)

尾崎 恭一さん

道徳の教育内容について

定年後も、病院や大学の倫理委員会、医療倫理教育、関連学会誌編集に関わっています。他方、驚くことがあり、小中学校の道徳教育の議論に加えて頂きました。

『人間と教育』誌上の指摘でした。指導要領の約 20 徳目、4 群は＜自分・他人・自然や崇高なもの・社会や国家＞への道徳の順だという指摘。つまり、国家等への道徳は自他の人権からでなく、崇高なものへの畏敬や自然に形成された伝統倫理から理解させるという指摘。当局審議会は、道徳的価値には学術的定説がないといひます。結果、当局は道徳的価値の選択を学問的根拠なしに道徳外の思惑から、人権抜き徳目群を

指導要領に記しています。人権は社会科で、道徳という主体的な良心でなく、国家に強制される法として教えられます。欧米や、民主化後の歴史が短い韓国でさえ、道徳として人権を教えるのに、異常です。再来年度から教科となり成績までつけられます。最近知りましたが、倫理学会の関連部会は、高校倫理で自由な思考が育たないのは教える学者数が多すぎるせいだと批判するだけで、思想信条の自由という人権を歴史上の一学説としてしか教えないことは批判しません。これらの問題を追求していきたいと思います。

(おさき きょういち・生命倫理・哲学)

疋田 哲也さん

♪君も今日からテロリスト (こどもの歌「きのこ」)

by ジョニーH

https://www.youtube.com/watch?v=f1Lv1_4wL68

youtube でどうぞ 2017.04.20「森友疑惑糾明 国会議員会館前行動」(芸人九条の会)

♪きききのこ きききのこ のこのこのこのこ テロなんか
かしない ♪きききのこ きききのこ のこのこ テロ
なんかしないけれど

♪金田が答える度に 範囲が拡がり ズルズルズルズル共謀罪!
えっ? ♪いつから いつから いつから いつから

♪君は今日からテロリスト ぼんぼらぼん!

♪きききのこ によきによきによきによき テロなんか
かしない ♪きききのこ きききのこ によきによき
テロなんかしないけれど

♪金田が答える度に 傘が拡がり ドンドンドンドン共謀罪!
えっ? ♪いつから いつから いつから いつから
君は今日からテロリスト ぼんぼらぼん!

♪きききのこ きききのこ たけのこたけのこ テロな
んか知らない ♪きききのこ きききのこ たけのこ
テロなんか知らないけれど

♪たけのこ売ったらば 資金源だと言われて グルグルグル共謀罪!
えっ? ♪いつから いつから いつから いつから
♪君は今日からテロリスト ぼんぼらぼん!

♪今だよ 今だよ 今だよ 今だよ 共謀罪は今すぐ潰
せ! ぼんぼらぼん!

(ひきだ てつや・新座市在住)

松井 安俊さん

東京には自然史博物館が必要だ

いま、東京には自然史系博物館がない。近ごろ人気が高い高尾山の入り口にあった「東京都高尾自然科学博物館」は、全国に率先して公設の試験研究機関を地方独立行政法人へと設置運営形態を変えた石原都政下で2004年に閉鎖され、八王子市観光課所管施設「高尾599ミュージアム」に姿を変えてしまった。他方、関東六県すべてには県立の自然史系博物館がつくられ、千葉や神奈川のそれは学芸員の配置が国立科学博物館並みになされている。

このことに関わって、ある自然史系専門学芸員の話では、東京では、大学が集まり、自然史科学の研究者

も多数いるにもかかわらず、生物多様性戦略やレッドデータの基礎となる動植物インベントリーづくりがなかなか進まないのだという。奥多摩から小笠原諸島までを含む多様な生態系を持つ東京に、系統的な調査研究のセンターとして自然史博物館がないのはどう考えても納得がいかない。

昨今の大学では、自然史系の学科や講座がめっきり減ってしまったのだが、その分野の若手の就職先が環境アセス会社ぐらいしかないような現状からも、東京にこそ自然史博物館が必要である。

(まつい やすとし・環境科学)

その69 個人会員ニュース No.114 2017.9.10 発行

小沢 隆一さん

科学者としての運動について

私は、憲法学を専門にしていることもあり、市民主催の学習会に呼ばれたり、市民とともに集会を開催したりする機会が多い。そうした中で何としても克服すべき課題がある。それは、「憲法は身近でない」、「憲法は生活から遠い」と感じている人たちにどう働きかけるか、ということである。

こうした人々の意識の克服には、2つの方向からの接近が必要だろう。一つは、憲法学自体が、できる限り「社会の中での憲法の意義」を探究し、人々が得心できるよう語ることである。しかし、それだけでは足りない。もう一つの接近、「生活」についての学問的探究がぜひとも必要であると思う。

「憲法から遠い」と人々が感じている「生活」とは一体どのようなものか? 本当に「遠い」のか? それとも「そう見える」だけか? これらの問いは、人文・社会・自然の諸科学が、それこそ総がかりで取り組むに値するテーマであろう。その知見が、憲法運動にもたらされれば、この運動はどれほど実り多いものになるだろうか。

そんな運動のなかでの学問的交流を切望して、平和と民主主義のための研究団体連絡会議(略称・平民研連)の活動に参画している。

(おざわ・りゅういち・憲法学)

宗倉 哲さん

リストラ経験譚

民間企業に勤務してきたが、何度かリストラを経験した。最初は米系の液晶ディスプレイ製造装置メーカーだった。急に経営難で人事が雇った請負人からリストラ通知を受けた。米国の上司は既に辞めていた。人事から借り上げ社宅の契約は既に打ち切ったとのこと。家族に迷惑をかけた。娘は幼稚園中退。

次にフィンランドの携帯通信機メーカーに日本の技術導入の職を得た。やがて会社の景気が悪くなりリストラだ。組織を全面改組し、上から順に社内公募していく。ポジションの総数は現数より少ない。経営者にとっては合理的なやり方だ。応募には履歴書とともに社内から推薦者を得たのち電話面接である。2年生き延びたが3年目には希望退職に応じた。

次は米系化学会社に入社した1か月後に、次年に買収されるという案内。買収までは留まる条件で引留料をもらい、買収後、半年は留まるとして引留料をもらった。都合2回もらうことになった。その1年後にリストラで退社した。人事と財務が主導したもので、上司にはなぜ退社を呑んだのかと怒られた。その上司も半年後にリストラで退社した。

先鋭化する資本主義を実体験したと思っている。
(むねくら さとる・応用物理)

中島 良一さん

九条の会と公民館

さいたま市緑区で、「九条の会おまぎ」の活動はじめて10年になります。会は活動場所として公民館をよく利用することもあり、これまで「公民館と日本国憲法」をテーマに学習会や展示を行いました。市内の公民館長も務めた、片野親義さんの学習会では、「公民館は、戦後、教育基本法、社会教育法によって、日本国憲法を地域社会に普及するために設置されたもの。九条の会は、その公民館の趣旨にふさわしい活動です」という話に、大変はげまされました。毎年秋、公民館の文化祭では、会員でつくった「平和カルタ」、年表「戦後70年の憲法と社会」などの展示をして、地域の人たち向けに会の活動ぶりとともに、公民館と憲法の関係を考える機会にしています。

さいたま市内でも、「九条俳句」の公民館報の掲載拒否など、変質攻撃が起こっていますが、平和憲法を普及、実践する場としての公民館を活用し、守ることが大事になっていると痛感しています。

(なかじま よしかず・さいたま市在住)

室井 清さん

自民党が歴史的な大敗を喫した都議選で思うこと

7月に行われた都議選で自民党は歴史的な大敗を喫した。都議選の争点は、築地市場移転問題、平和憲法を守り戦争できる国づくりに歯止めをかけるのか、大企業の利益優先か都民の暮らし優先か、であった。憲法改正の明言や共謀罪を強行採決したこと、などへの安倍政権に対する都民の審判は明確に選挙結果に現れたものと思う。反自民党の受け皿になったと思われる都民ファーストの会が、第1になったが、その後の小池都知事や都民ファーストの会の対応をみていると自民党の補完勢力にしかならないと感じるのは私だけだろうか。私は労働組合運動との係わりで、築地市場移転に強い関心を持っているが、小池都知事の「豊洲の無害化はできないが移転する」方向を明確にしたことへ強い怒りを禁じ得ない。ある意味で都民や市場関係者への裏切りともいえる。いずれにしても、都政も国政も、都民・国民の生活最優先に政策転換させていくためには、総選挙で安倍政権を早期退陣に追い込むしかない。

(むろい きよし・労働運動)

荒井育恵さん

タンザニアの女子教育の

支援

アフリカ最高峰のキリマンジャロで知られるタンザニア。この国の第二の都市アルーシャの近郊に「さくら女子中学校」がある。この学校の応援に関わって4年が過ぎた。

タンザニアの義務教育はスワヒリ語で行われる7年間の小学校のみ。以後は英語で授業が行われる4年間の中学校、2年間の高等学校、さらに大学という制度だが、中学校への進学率は約20%、その上に進むのは1%程度。女性の進学率はさらに低い。

こんな状況下で、「タンザニア発展のために理系女子の育成を」と考えた地元の有識者と、それに賛同する日本の支援団体との共同作業で学校設立が構想された。国際協力機構(JICA)のプロジェクトにも組み込まれ、2015年に私立の全寮制「さくら女子中学校」として開校、現在の在校生は78人だ。

経済的に恵まれない女子を応援する個人／団体に支えられた生徒もいる。自身の将来に対する意識は高い。多くの生徒は自分の意見を持っているが、休憩時間などにじゃれあっている姿はまさしく“女の子”である。

教材は常に不足気味。交流のある日本の学校や企業の協力もあるが、消耗品類の補充やパソコンの定期的更新など中・長期的にどう対応するかが目下の課題だ。

(あらい いくえ・学校保健)

井原 聡さん

すばらしい新聞記者さん

数年前にお付き合いが始まった新聞記者がいました。いろいろ話がはずんだ折に、かつて勤務していた東北大学の戦前の戦争協力が話題になりました。東北大学百年史編纂委員のときに目にした資料、1944年に総長が教員にアンケート調査をした話をしました。時局について、学徒動員について、研究について、どう考えるのかを問うたアンケートで、無記名で回答するもので、へたをすろと思調査にもなりかねないアンケートでした。事務方によって実名が付されていました。当時法文学部長であった夏目漱石門下生の阿部次郎が、人文社会や基礎科学の大事なことを述べていたことを、その記者に話しました。「阿部次郎って誰?」、今の若い人には知らない人が多くなりました。東北大学史料館の先生を紹介しました。その後、東京新聞の一面トップに仙台での取材をもとにこの話が掲載されました。話のあいまに、時計を気にしながら、もう時間なので、あるいはちょっと子供を迎えにいかないといけないので、という若い母親の記者さんでした。「エッ、それってあり」と思ったこともありましたが、この秋、『新聞記者』(角川新書)という本をいただきました。それで、行動力と内に秘めた記者魂の源をはじめて理解しました。すばらしい記者さん、それが望月衣塑子さんでした。

(いはら さとし・科学史・技術史・学術研究体制論)

土井 誠さん

防衛装備庁「技術シンポジウム」に参加して

防衛装備庁が11月15日に市ヶ谷で開いた「技術シンポジウム」に参加した。同庁の林美都子国際装備課長が「アジア諸国との防衛装備・技術協力」と題して講演し、軍事企業を引き連れてアジア諸国を駆け巡り武器輸出に躍起になっている実態を語った。これを「しんぶん赤旗」が翌日付1面で報道した。話を聞いていて、躍起になっても、そう簡単ではないなと思った。会場一杯に集まった300人超の軍需産業の社員たちに目をやると、居眠りしている者が結構いた。

未来工学研究所の西山淳一研究参与は、「我が国の防衛産業と今後の課題」と題する講演で日本の軍需産業はGDP比で0.7%に過ぎず、パチンコ産業の10分の1だと嘆き、武器輸出三原則の解禁を強調して、誇りをもって軍需産業に励もうと呼びかけた。イノベーションの話では、大学との共同研究を強調するかと思いきや、それには全く触れず、中小企業が持つ技術の発掘を強調した。憲法9条と軍事研究禁止の方針を継承するとした日本学術会議の新決議が歯止めになっているなど実感した。しかし、油断は禁物。今年度、防衛装備庁の安全保障技術研究推進制度に研究代表として採択された大学はなかったが、分担研究機関として4大学が参加。大学名は未公表だ。このままでは軍産学共同の隠れ蓑になりかねない。安倍政権を倒し、憲法9条を守り抜き、研究推進制度を廃止しなければならない。

(どい まこと ・ 高等教育行政 ・ 科学・技術政策)

前川 雄司さん

エレベーター死亡事件 東京地裁で和解成立

2006年に16歳の高校生がシンドラ社製エレベーターに挟まれて死亡した事件の損害賠償請求訴訟について11月24日東京地方裁判所で和解が成立しました。

和解の概要は、被告である製造業者、保守管理業者、所有者、管理者が、①何の落ち度もなく、わずか16歳でこの世を去ることになった被害者とその遺族である原告の無念の思いを重く受け止め、深く遺憾の意を表する、②戸開走行事故はひとたび発生すると利用者が挟まれ生命身体に危険を及ぼす重大事故につながるおそれがあることに改めて思いを致すとともに、その社会的・道義的責任を果たすべく、互いに協力し合って、不断の意思をもってエレベーター事故の再発防止のために全力を挙げて取り組んでいくことを確約する、③原告に相当額の和解金を支払う（その一部で基金を構成し再発防止の取り組みを継続していく）というもので、和解に付随して所有者港区が原告に詳細な再発防止対策等を確約する覚書に調印しました。原告の市川正子さんは、エレベーターの安全・再発防止のために16歳の息子の命を生かすための一歩と話しました。

(まえかわ ゆうじ・弁護士)

森脇 靖子さん

アルミニウム・イオン

アルツハイマーなど認知症が増加し、その発症メカニズムにアルミニウム・イオンが関係していることを明示した黒田洋一郎「アルツハイマー病などの認知症増加の原因と発症メカニズム研究の転換」(上) (『科学』11月

号, 2017) を読んだ。かつて私はあるNPOで子供の知能を下げると言われる有害金属(Pb、Hg、Cd、As、Al)の毛髪含有濃度を測定し母子で比較した。アルミについて言えば、水に溶けてイオン化したアルミは強い脳神経毒性を持つ。学習障害、自閉症、アスペルガー、注意欠陥多動障害など(増加の一途をたどる障害児の合計は全体の1割に達する)に関する原因のヒントを探るためであった。検体数は少なかったが母子78組のうち特に0~3歳児30人のアルミ毛髪濃度は平均で母親の4倍以上、20倍以上の乳児もいた。アルミは妊娠中の母親の胎盤を通過しさらに母乳を通して乳児へ移行する事をデータは示していた。ダイナミックに発達している胎児や乳幼児・子供たちの脳神経系では、アルツハイマー病のように何らかの重篤な変化が起こっていると考えても不思議はない。今、改めて子供たちの脳神経系に影響を及ぼす金属や環境化学物質の詳細で透明な調査・研究を願わずにいられない。

(もりわき やすこ・生物学史)

日本科学者会議東京支部個人会員フィールドワーク一覧

フィールドワークのテーママップ

テーマ	場所	地域	博物館など	歴史史跡	建物・建造物	研究所など	計
自然・科学・技術を知る		7	12		3	4	26
環境を守る		8	1		1	1	11
歴史と文化を知る		6	3	6	5		20
戦争と平和を考える		3	4	3	5	1	16
人々の闘いを知る		5	2	4	2		13
計		29	22	13	16	6	86

第1回 (1992年8月) 長瀬の自然探訪

第66回 (2017年10月) 鎌倉「今、井上ひさしに学ぶ」

注：数字は回数（場所・テーマは1回で複数の場合あり。）

第66回(2017年10月 鎌倉) ← 第1回(1992年8月 長瀬) 最新から降順に

	実施日	場所	テーマ・内容	人	トピックス
66	2017年秋 10月8日	北鎌倉 東慶寺 鎌倉市生涯学習 センター	今、井上ひさしに学ぶ 市民、文学東慶寺を訪ね、井上ユリさん・小森陽一さんのお話を ・初めての鎌倉FW「井上ひさしに学ぶ」人気で過去最多の倍近い参加	60	・江戸期から明治への女性の受難の変遷 ・井上ひさしの綿密な知的生産が名作を生む人と仕事ぶりを語るユリ夫人 ・『東慶寺花だより』を語る小森陽一講演
65	2017年春	上野公園 御徒町の会議室	まるごと上野公園を学ぶ 一校のもとで市民のための都市公園について考えよう ・安倍政権の上野公園改変計画も知る	22	・上野公園とともに生きてこられた、歴史、文化、生物の第一人者の小川潔さんのご案内と講義
64	2017年新春 1月15日	築地市場	築地市場の豊洲移転問題を正しく理解する ・中央卸売市場の役割と働く人々の観点から ・15年以上の異常な移転計画の実態を学ぶ	35	・仲卸で働く東中労委員長のご案内説明 →築地市場こそ本物のレガシー ・築地場外すし店での新春食事交流会
63	2016年秋 10月23日	佐倉の歴史史跡 国立歴史民俗博物館 (歴博)	佐倉の地で江戸期から日本の近代史を考える ・佐倉順天堂と旧堀田邸で医学と文化を学ぶ ・歴博を展示企画者(新井勝紘氏)の説明と 第5室(近代)関連の学習	22	・長崎鳴滝塾と並び立つ佐倉順天堂の先進的蘭方の実態を知る ・五日市憲法草案研究の新井氏による他では聞けない近代史講義
62	2016年春 4月 2日・3日	伊豆大島	自然と災害、歴史と文化をまるごと学ぶ ・調査Ⅰ：土砂災害・復興状況 三原山火山 ・学習Ⅰ：土砂災害と復興状況の講義と討論 ・調査Ⅱ：大島の自然・大島ジオパーク ・学習Ⅱ：大島憲章と民主的伝統の講義と討論	24	・川島前町長の全面的サポートと講義 ・第一人者による案内説明と講義 ・大島椿と大島桜の両方を楽しむ ・大島ならではの 島料理 を味わう
61	2016年新春 2月7日	wam 女たちと戦争の 平和資料館	戦時性暴力を学び、問題の根源を考える ・wamの展示と特別展(インドネシアでの戦時性暴力)で学ぶ ・池田館長講義： 『慰安婦』問題の解決と日本のメディア	16	・女性研究者「はづきの会」と共催 ・戦争は世界中で女性を蹂躪する ・メディアの変貌に対抗するために ・早稲田の老舗蕎麦屋での新年食事交流会
60	2015年秋 10月11日	明治大学 平和教育登戸 研究所 資料館	旧陸軍の秘密研究から軍事研究と科学・技術を考える ・大学が平和教育の場として活かすことの意味	21	・実物のリアルさ 風船爆弾、生物・毒物兵器、スパイ機材、偽札、など ・山田館長の講義「現代日本の軍事力と安保体制」

59	2015 年初夏 5月10日	あきる野市 五日市	五日市憲法の跡を訪ね、憲法とは何か を 学ぶ ・自由民権運動の地域素封家支援の成果を 考える	32	・五日市憲法草案の先進性 ・地方の教育・教養のレベルの豊かさ ・林業と絹糸などの地場産業の維持の ための自立・自律
58	2014 年暮 12月28日	東京 文京区 湯島・駿河台	JSA 事務所膝元の寺社・教会と歴史を学ぶ ・神田明神 湯島聖堂 ニコライ堂 日本における 仏教・神道/儒教/正教 三 施設	32	・JSA 事務所の膝元だけとなかなか 行けない3施設 ・井本三夫氏「米騒動から考える 民主主義」の講義
57	2014 年秋 9月28日	我孫子 手賀沼 山階鳥類研究所	・我孫子の大正デモクラシーの文化人の活 躍を ・手賀沼の自然環境と古代からの歴史を考 える	20	・自然主義文学者の我孫子での活躍 ・加納治五郎は柔道というより広い 視野を持った学者・教育者 ・東京支部会員の得意分野の新発見
56	2014 年初夏 5月31日 -6月1日	足尾・渡良瀬	足尾 ・渡良瀬川上流域・渡良瀬川中流域(毛里田) ・渡良瀬遊水地と足尾鉍毒をまるごと学ぶ 田中正造と被害者の闘いから運動を学ぶ	29	・それぞれの地区の専門家・研究者の ならでは案内と説明 ・足尾鉍毒事件が示す日本近代の構造 ・渡良瀬渓谷の自然と温泉を楽しむ
55	2014 年新春 2月2日	谷中・ 根津・ 千駄木 (谷根千)	地域の歴史と江戸・東京の街並みと文化を 考える 東京五輪に向けた都市環境の保全を考 える	21	・谷根千工房の伝え手、守り手の案内・説 明 ・谷中・根津・千駄木の名所を楽しむ
54	2013 年秋 11月10日	横田基地	知っているようで知らない東京の基地問 題を学ぶ 在日米軍と自衛隊共同オペレーションを 知る	20	・横田基地撤去を求める西多摩の会の案内 ・オスプレイの実体と実態の学習
53	2013 年初夏 5月6日	空襲に学ぶ その2 東京大空襲の浅 草	浅草寺・墨田川を中心に東京大空襲の跡を 学ぶ あらためて浅草の地域を知る	20	・台東九条の会の方による迫真の説明 ・アサビール直営レストランでの交流会
52	2012 年暮 12月16日	空襲を学ぶ その1 城北大空襲	池袋から北区の城北大空襲を小森香子の 語りと詩で学ぶ	28	・これからの平和についての意見交流 ・王子飛鳥山での中華忘年会 2012
51	2012 年秋 10月5日-7日	佐渡市 50回記念大FW	佐渡の自然と歴史と文化を学ぶ 佐渡市民とともに環境とエネルギーを考 える	26	・2泊3日で佐渡まるごと学習 ・佐渡市市民環境大学でのシンポジウム
50	2012 年初夏 5月12日	三浦半島・城ヶ 島	三浦半島の誕生と地学的歴史を学ぶ 初夏の城ヶ島の新緑と自然を楽しむ	17	・3.11 以後、あらためて活断層を学習 ・三崎のおいしい魚料理で懇談
49	2011 年暮 12月18日	両国 江戸東京博物館	江戸から東京の歴史と文化を復讐する 両国と本所界隈の史跡を訪ねる	18	・都立の施設あり方を議論 ・相撲の文化とお昼ちゃんこの忘年会
48	2011 年秋 11月13日	甲府市 山梨大学工学部	山梨大学のバイオディーゼル燃料実用化 研究の学習と精製実験(エコ石鹸づくり も)	17	【山梨支部共催・首都圏交流会】 ・武田神社と甲府環状道路予定地見学
47	2011 年初夏 6月	豊洲移転予定地 から築地市場	築地市場の移転問題の総合学習会 豊洲の移転予定地の現地調査見学会	25	・坂巻幸雄さんの専門・総合解説 ・3.11 大地震での移転予定地液状化調査
46	2010 年暮 12月5日	浜離宮 キューバ料理店	キューバのまるごと学習 映画「キューバの恋人」、 キューバ音楽演奏会、 キューバなんでも質問会)	28	・2010 年忘年交流会 ・キューバ料理と飲み物を楽しむ
45	2010 年秋 9月 11・12日	下仁田町 妙義山	下仁田町と妙義山で地質と地学を学ぶ ジオパーク登録をめざす地域の活動にふ れる	29	・下仁田町教育委員会、同自然学校の支援 ・地団研、妙義山研究団体の専門家の説明
44	2010 年春 4月3日	小石川植物園 本郷丸山・菊坂 界隈	桜の花のもと、植物を学び、本郷の文学者 の跡を訪ねる。	36	・筑波実験植物園の研究者による説明 ・勉強の続きもあった賑やかな交流懇親会
43	2009 年暮 12月20日	第五福竜丸展示 館 東京大空襲・戦 災資料センター	第五福竜丸と東京大空襲資料センターで 学ぶ ・江東区南砂の戦災の跡めぐり	26	・2009 年忘年交流会 ・福竜丸乗組員大石又七さんご本人の説明 ・地元にお住まいの読者の方の案内
42	2009 年秋 10月11・12日	高尾山 圏央道建設現場	高尾山の今を研究する ・高尾山の自然環境を圏央道から守る ・1泊交流会「高尾山を見て考える」	23	・高尾山の自然を守る会との交流会「高尾 山を見て考える」

41	2009 年春 3 月 29 日	平和資料館 こども動物自然 公園 丸木美術館 吉見百穴・	東松山と吉見百穴を歩く ・東松山の平和・自然・絵画・遺跡の総合 研究 ・埼玉支部丹生事務局長の専門的ご説明	20	【埼玉支部との交流】 ・一日でまわる東松山界隈のみどころ満載 で、参加者大満足 ・東松山名物やきとん二次会
40	2008 年暮 12 月 23 日	多摩動物公園	多摩動物公園昆虫館で蝶の魅力にせまる ・蝶の研究家の説明つき勉強会 ・多摩地区での 2009 年への望年会	30	・多摩動物公園開園 50 周年記念展示を見 る ・東京支部レベルに大交流会
39	2008 年秋 10 月 11 日 10 月 12 日	忍野村山中湖村 北富士演習場	忍野村・山中湖村針柵純林・交流会 ・針柵純林と溶岩樹形の保護運動の調査 ・富士山麓、南極、温暖化阻止交流会	27	【山梨支部との交流】 ・1 泊での東京支部・山梨支部交流会 ・勢龍茶屋での昼食
38	2008 年夏 7 月 13 日	横須賀市 ヴェルニー公園	横須賀を見て“7.13 全国大集会”参加 ・ヴェルニー記念館のスチームハンマー 見学 ・米軍基地の再編・強化反対全国大集会	14	【神奈川支部との交流】 ・FWI はじめての集会・デモ体験 ・横須賀の現状を神奈川支部と見る
37	2008 年春 3 月 23 日	秩父郡吉田町	秩父事件・困民党の跡の春を訪ねて ・棕神社、秩父事件資料館（井上伝蔵邸復 元）などで学習館	19	【埼玉支部との交流】 ・秩父事件専門家の説明案内 ・勢龍茶屋での昼食
36	2007 年暮 12 月 23 日	六義園	暮の六義園散策とモンゴル料理を楽しむ ・国指定特別名勝の回遊式築山庭園 ・本格モンゴル料理と馬頭琴演奏	20	・モンゴルの大学での経験談 ・2007 忘年会
35	2007 年秋 10 月 7 日	甘楽町 富岡製糸場	富岡製糸場見学と甘楽町を歩く ・織田宗家の城下町小幡の見学 ・富岡製糸場と世界遺産への考察	22	【群馬支部との交流】 ・上州の歴史専門家の説明案内
34	2007 年春 4 月 7 日	国立科学 博物館	華麗なる花の色の世界に遊びましょう ・「花の色」研究者特別講演 ・太古から青いバラまでの展示見学	10	・特別展「花-FLOWER」 ・植物色素学の研究者説明
33	2006 年暮 12 月 10 日	稲城市南山	断崖山林の開発と保存を考える ・山林と住宅開発のバランス ・自然を守る市民運動のあり方	10	・南山の自然と史跡を守る会の説明 ・2006 忘年会
32	2006 年秋 11 月 12 日	早稲田大学 高麗博物館	2006 年戦争と平和シリーズ 3 ・平和博物館市民ネットワークとの共催 ・日朝交流史と日本の侵略・蔑視	7	・大久保コリアタウンを歩く ・韓国料理懇談
31	2006 年夏 7 月 2 日	靖国神社 （遊就館）	2006 年戦争と平和シリーズ 2 ・靖国神社全域に見る戦争の影 ・遊就館のねらいと演出	20	・会員外若手、松本市からの参加者 ・九段会館（旧軍人会館）講評会
30	2006 年春 3 月 21 日	市ヶ谷から早稲 田の都心の戦争 遺跡	2006 年戦争と平和シリーズ 1 ・防衛庁の前史を勉強する ・尾張徳川家屋敷跡と陸軍施設	8	・歴史教育者協議会の専門家説明 ・戸山陸軍軍医学校と人骨の謎
29	2005 年暮 12 月 23 日	川越の街並みと 歴史的建造物	小江戸川越の歴史を歩く ・蔵造りの街川越の歴史と今 ・歴史を活かした地方都市のあり方	17	【埼玉支部との交流】 ・こどもから幅広い年令層 ・2005 忘年会
28	2005 年夏 7 月 17 日	佐原市 伊能忠敬記念館	伊能忠敬の業績と佐原の風土 ・全国測量と地図作りの偉業の全容 ・佐原時代 一家業・地域のために	10	【千葉支部との交流】 ・佐原夏祭り ・明治期の銀行跡での講評食事会
27	2005 年春 3 月 27 日	国立科学博物館	新しい科博を批判的に見る ・自然史博物館と科学技術博物館 ・研究成果に基づく科学的展示のあり方	9	・上野の花見 ・池之端の老舗 「蓮玉」蕎麦会食
26	2004 年暮 12 月 18 日	麒麟ビール横 浜工場	ビールづくりに見る科学技術 ・シュメール人から現在まで ・おいしいビールは科学者のおかげ	8	・生麦事件の現場を見る ・2004 忘年会
25	2004 年夏 7 月 18 日	横浜開港資料館 シルク博物館	交易の歴史を訪ねて ・横浜海港と貿易・港町の発達の歴史 ・絹の産業史と世界の衣装の展示	8	・真夏の猛暑 ・横浜港花火大会の混雑
24	2004 年春 4 月 1 日	筑波実験植物園	植物の不思議を発見する ・研究の場としての植物園とは ・適応して生きる植物（熱帯三大形態）	8	・春の氷雨 ・独法化による厳しい環境での努力
23	2003 年暮 12 月 27 日	北区の各種 博物館	個性ある博物館を訪ねて ・北区防災センター ・紙の博物館 ・北区飛鳥博物館 ・渋沢資料館	10	・地震体験 ・暮の東十条商店街散策 ・2003 忘年会

22	2003 年夏 7 月 20 日	神奈川県水産総合研究所	水産を勉強し、三崎の美味寿司を ・飼育開発から生物工学まで ・城ヶ島散策	—	—
21	2003 年暮 10 月 25 日	陸軍登戸研究所	明大生田校舎に残る軍事実験場跡 ・日本軍の残虐実験（毒物、細菌、紙幣偽造、など、など）を想う	—	—
20	2002 年暮 12 月 22 日	新宿のデパート・ホテル	新宿近辺の化石探検 ・マイシティ、小田急百貨店、ホテルセンリーハイアット、新宿三越、伊勢丹	25	・古生物学研究者の説明案内 ・2002 忘年会
19	2002 年秋 10 月 13 日	東京大空襲・戦災資料センター	展示と体験談から空襲を想う ・東京空襲犠牲者遺族会・事務局長説明 ・親水公園散策	7	・空襲の激しかった進開橋を渡る帰路
18	2002 年夏 7 月 28 日	慶応大学 日吉キャンパス	学舎に見る海軍最高司令部の跡 ・日吉台地下壕保存会に合流 ・海軍司令部の地下壕全容見学	11	・全体が戦争遺跡の慶応日吉
17	2002 年春 4 月 7 日	多摩六都科学館 江戸東京たてもの園	武蔵野の春、博物館を訪ねて ・多摩六都科学館の「宇宙」展示 ・武蔵野新田開発と玉川上水	10	・葉桜の春 ・高橋是清邸庭園での休息
16	2001 年暮	千駄木-根津-東大-菊坂	鷗外ゆかりの史跡を訪ねて ・文学者（作家）の住んだ地域の文学散歩 ・本格モンゴル料理を楽しむ	25	・鷗外の研究者金子先生の説明案内 ・2001 忘年会
15	2001 年新年 1 月 14 日	国会議事堂	「石材博物館」の国会議事堂を見る ・地球をあるく会、地団研東京支部との合同 ・日本の代表的石材の見学体験	14	・寒風の中、21 世紀を迎えての新年会
14	2000 年夏 7 月 23 日	考古博物館 東大宇宙線研究所	山梨で科学技術とワインを楽しむ ・山梨の縄文時代を勉強する ・宇宙を解明する装置を体感する	9	【山梨支部との交流】 ・ワイナリーと温泉を楽しむ
13	2000 年春 3 月 26 日	横須賀港	横須賀軍港で平和を考える ・船での横須賀軍港内調査 ・「三笠」記念艦見学	—	【神奈川支部との交流】
12	1999 年暮 12 月 26 日	南麻布・恵比寿	都心を歩き中華とビールを楽しむ ・麻布→筈（こうがい）町→恵比寿 ・「麦酒記念館」	—	・ランチから夕方ビールまで ・1999 忘年会「香港ガーデン」
11	1999 年夏 7 月 20 日	宇宙科学研究所	日本の宇宙科学を考える ・小杉健郎氏講演「人工飛翔体からの天文学—新しい宇宙像」	16	・宇宙科学研究の総合展示 ・科学研究と宇宙開発が分離している日本
10	1998 年夏 6 月 14 日	国立歴史民俗博物館	日本の民族文化の歴史を考える ・原始・古代から近代まで総合展示	—	・情報資料研究部専門家の説明案内
9	1997 年暮 12 月 28 日	三溪園 横浜中華街	冬の三溪園から薬膳料理でリフレッシュ ・溪谷遊歩道・重要文化財の庭園 ・横浜中華街薬膳料理店 満珍食房	—	—

第1回（1992 年 8 月）から 第8回（1997 年 6 月）までの初期のフィールドワーク一覧

（1997 年発行の東京支部 30 周年誌の個人会員のページの記録より）

（実施記録が少ないので、実施年月とテーマタイトルのみの掲載）

8	1997 年 6 月	高尾山ハイキング
7	1996 年 12 月	お茶と文化・武蔵野、小江戸蔵の町・川越を訪ねて
6	1996 年 6 月	温泉地質学研究所と生命の星・地球博物館を訪ねて
5	1995 年 6 月	第五福竜丸展示館と熱帯植物館見学
4	1994 年 7 月	あの足尾が再びあふない！
3	1993 年 12 月	深川江戸資料館と江東の文化を訪ねる歴史散歩
2	1993 年 4 月	秩父事件史跡めぐり
1	1992 年 8 月	埼玉県長瀬の自然史探訪

日本科学者会議東京支部

創立50周年記念

JSA Tokyo 50

価値ある知の連鎖を

1966 - 2016

日本科学者会議東京支部

個人会員活動資料集

～ 28年間の活動のすべてがわかる ～

第1版（電子版）2017.12.9 発行

東京支部のホームページ <http://jsa-tokyo.jp/>

東京支部個人会員世話人会編

©日本科学者会議東京支部世話人会（2017）
転載・引用のご相談は下記までご連絡下さい。

個人会員世話人 河上 茂

E-mail: skawakami@kmail.plala.or.jp

電話：080-8828-7732 FAX：045-585-4157

〒230-0063 横浜市鶴見区鶴見 1-6-28-101

紙刷り版をご希望の方には、印刷製本協力募金 500円 をお願い